

栗田遺跡発掘調査報告書

1991年3月

社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会

栗田遺跡発掘調査報告書

社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会



調査区と野々市・金沢市街（南から）



調査区と手取扇状地・辰白丘陵（北から）



調査区と扇状地・日本海（東から）



調査区と富樫山地（西から）



C調査区の全景（北から）



C調査区の全景（南から）



調査区の全景（西から）



A区1・2・4号掘穴（西から）



C区石斧出土状態



C区石斧素材製作跡（北から）



C区道路遺構 (SD65・69・75) (南から)



C区道路遺構の調査風景 (北から)



S D68出土の土器



S D68出土の土器



A—2号整穴 2



C—2号整穴 5



C—2号整穴 7



C—2号整穴 6



S D68出土



S D68出土



梁付咀见达 (第12图 7)



梁付咀高台 (第12图 7)

例 言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町粟田地内の粟田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、旧農業試験場跡地の工場用地造成事業にかかる粟田遺跡の緊急発掘調査報告で、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が石川県立埋蔵文化財センターの依頼を受けて1989年度に調査を実施したものである。
- 3 粟田遺跡の発掘調査は、以下の日程で実施した。

外周水路調査：1989年2月15日～3月13日（県立埋蔵文化財センターが実施）
[担当：平田天秋・栃木英道・藤田邦雄・岡本恭一・伊藤雅文]
工場用地調査：1989年5月8日～12月19日（石川県埋蔵文化財保存協会が実施）
[担当：小嶋芳孝・岡本恭一・宮本真哉（以上埋文協会職員）
田村昌宏（野々市町教育委員会職員）]
- 4 粟田遺跡の報告に当たって、石器の石質鑑定を金沢大学教育学部教授藤則雄先生、鉄器と鉄滓の分析を新日本製鉄の大澤正巳先生のお手を煩わした。
- 5 本書の執筆は、以下の分担で行なった。

宮本直哉（協会調査員）：「調査日誌」・「位置と環境」
伊藤雅文（埋文センター主事）：「用地外周の水路関係調査」
小嶋芳孝（協会調査第2係長）：「調査の記録」・「調査の概要」・「古代以降の遺構と遺物」・
「粟田遺跡の諸問題」・「まとめ（古代以降の粟田遺跡）」
岡本恭一（協会主任調査員）：「石製品」・「まとめ（石製品）」
久田正弘（協会主任調査員）：「縄文・弥生の土器」
藤 則雄（金沢大学教授）：「粟田遺跡出土石器類の石質」
大澤正巳（新日本製鉄）：「粟田遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」
- 6 調査の実施に当たっては、石川県商工労働部商工課・石川県教育委員会文化課・石川県立埋蔵文化財センターの協力や指導を得た。
- 7 1989年度の粟田遺跡発掘調査にあたっては、野々市町教育委員会社会教育課が作業員募集の事務を行ない、田村昌宏主事を全期間にわたって調査に派遣していただいた。町当局の全面的な支援と協力に感謝します。

目 次

第一章 調査の経緯（小嶋）	1
第二章 調査日誌（抄）（宮本）	2
第三章 栗田遺跡の位置と環境（宮本）	6
第1節 位置と地理的環境	6
第2節 歴史的環境	9
第四章 調査の概要（小嶋）	23
第1節 A調査区	23
第2節 B調査区	23
第3節 C調査区	27
第4節 用地外周の水路関係調査（伊藤）	38
第五章 縄文・弥生の土器（久田）	46
第六章 石製品（岡本）	50
第七章 古代以降の遺構と遺物（小嶋）	149
第1節 竪穴式建物	149
A調査区	149
C調査区	155
第2節 掘立柱式建物	170
第3節 道路状遺構と溝状遺構	185
第八章 栗田遺跡出土石器類の石質（藤）	199
第九章 栗田遺跡出土銀治関連遺物の金属学的調査（大澤）	208
第十章 栗田遺跡の諸問題（小嶋）	229
第1節 建物の年代観	229
第2節 遺構の変遷	231
第3節 古代以降の栗田遺跡の評価	234
第十一章 まとめ	235
1 石製品（岡本）	235
2 古代以降の栗田遺跡	235
あとがき	236

第一章 調査の経緯

石川県石川郡野々市町粟田5丁目地内は、石川県農業試験場の施設が広がる田園地帯であった。県農業試験場が金沢市八田地内に移転したのにもない、跡地が工業用地として造成され、民間企業に売却される計画が1988年度に具体的になった。

1988年10月12日付商発第413号で、石川県商工労働部商工課長から石川県立埋蔵文化財センター所長にあてて、野々市町粟田5丁目地内の旧農業試験場跡地（農用地）の造成整備事業にかかる埋蔵文化財分布調査の依頼があった。

県立埋蔵文化財センターでは、所長から商工課長へ10月13日付で分調実施の回答をして、10月31日から11月2日の間に分布調査を行っている。用地内の南半分を中心に古代の遺物や包含層を確認し、その範囲を11月14日付埋文収第239号で商工課長あてに回答している。

分布調査

1989年に入って、工業用地造成に伴う工事の中で水路の付替工事が必要となり、これにかかる埋蔵文化財調査が問題となる。1989年1月19日付商発第6号で、商工課長から県立埋蔵文化財センター所長に水路工事にかかる遺跡の発掘調査依頼が提出され、その取扱について協議が行われた。この結果を受けて1月25日付商発第42号で、石川県知事から文化庁長官あてに文化財保護法57条の3第1項の発掘通知が提出された。同日、石川県教育長は知事に対し工事立合いで調査を行なう旨を指示している。

1989年度からはじまる4月1日を目前にして、県立埋蔵文化財センターの組織が突然に変更され、受託事業を行なうために社団法人石川県埋蔵文化財保存協会（以下、埋文協会と略す）が設立され、旧農業試験場敷地に所在する粟田遺跡の調査は埋文協会が担当することになった。

4月1日付けで、商発第164号で商工課長から所長あての発掘調査依頼と、商発第165号で知事から文化庁長官あての発掘通知が提出された。これを受けて、4月1日付けで石川県立埋蔵文化財センターでは埋文収第87号で教育長から埋文協会理事長あてに調査を依頼し、同日、石埋文保存協収第1号で埋文協会理事長から教育長あてに調査計画書が提出されている。また、同日、県立埋蔵文化センターから埋文収第88号で教育長から商工課長あてに調査実施の回答を行い、費用の転配当を依頼している。一連の文書を受けて、4月1日付けで埋文協会と石川県教育委員会との間に契約書が締結されている。

発掘調査

4月1日付けの文化財保護法57条の3の通知を受けて、4月28日付けで教育長から知事に発掘調査が必要な旨を通知し、5月1日付けで98条の2の発掘通知が教育長から文化庁長官あてに提出されている。

7月に入って、工事予定地の北側に3,300㎡の追加工事が見込まれることになり、商工課から協議が申入れられた。7月18日に分布調査を実施したところ、ほぼ全面に遺跡があることがわかり、協議の結果、野々市町教育委員会が次年度の出来るだけ早い段階で調査に入ることで合意した。

9月22日には、今回の造成用地の南側を走る県道の歩道工事が行なわれることになり、商工課から調査の依頼があった。10月18日に報道記者発表を行い、10月22日には現地説明会を開いた。12月19日には、現地調査を完了している。1990年3月30日に、埋文協会理事長から県教育長あてに事業の完了報告をし、4月2日に県立埋蔵文化財センター所長から商工課長に完了報告をおこなって、1989年度の調査事業は完了した。

第二章 調査日誌(抄)

5月8日(月) 晴 仮水路建設区(A地区)、道路建設区(B地区)、工場用地造成区(C地区)を設定し、重機による表土除去作業を開始する。同日プレハブ1棟建て上げ。



表土除去作業

5月15日(月) 晴 C地区北方部分は耕土直下よりレキ層がぶ厚く続く。

5月18日(木) 曇のち晴 本日に表土除去作業がほぼ終了する。担当者一同あらためて調査区域の広大さに息をのむ。

5月22日(月) 晴 現場プレハブ小屋2棟建て上げ。搬土上に建てたため、基礎が不安定。

5月23日(火) 曇 発掘機材の搬入。本日より作業員を入れる。発掘調査への参加ははじめてという人が多く、調査の進め方についてプリントを配布して簡単な説明を行う。なお、当初作業員の確保が難しいとのことであったが、野々市町教育委員会社会教育課のご協力により、この日を迎えることができた。感謝々々。

5月24日(水) 晴 本日ベルトコンベアー・発電機等の機材搬入。遺構検出作業では、多数のビット・草溝状のものを見いだす。



A地区調査風景

5月31日(水) 晴 A地区は北部の掘削をほぼ終える。C地区では1号整穴の掘り下げ開始。

6月2日(金) 晴 A地区の掘削はほぼ終了。C地区は南側のある程度の面積が掘り上がったの

で、写真撮影を行い、遺構保全のためのシートを貼る。

この日坪井清足・高根勝喜の両氏来訪。

6月5日(月) 曇時々雨 本日よりA地区の実測作業開始。

6月6日(火) 雨のち曇 表土除去時点以来かなり出土していた打製石斧であるが、E-2区鞍部の層より4枚重なって出土する。

6月8日(木) 曇 6月6日の打製石斧は5枚重ねであることが判明。この日出土状況の写真撮影を行う。

6月13日(火) 晴 現場において、調査の進め方等について県経済振興室・金沢土木事務所との打ち合せ。

6月14日(水) 晴 本日にてA地区の調査終了。
6月16日(金) 雨 ようやく水道工事。これで水に不自由しなくなる。

6月17日(土) 雨 既に出土した打製石斧を公共座標の数値・レベルを入れて取り上げる。

6月26日(月) 曇のち時々晴 C地区ではE・F-2-3区の遺構掘削を行う。P-4Iでは首の欠けた須恵器の小壺出土。この日は形のはっきりした土器がかなり出土したため作業員の人たちがはりきった。

6月29日(木) 曇のち時々晴 C地区1号整穴床面覆土を50cmメッシュでサンプル土として取り上げ。なお、この日同整穴内で刀子出土。



C地区1号整穴調査風景

6月30日(金) 曇 B地区内へグリッド測量の杭を基準に杭を打つ。

7月3日(月) 雨のち曇 仮水路への通水が行われたため、重機を入れてB地区の拡張を行う。

7月6日(木) 晴 本日よりB地区の調査を本格的に開始する。

7月7日(金) 晴 C地区2号整穴掘り下げ開始。

7月17日(月) 晴 C地区北の分布調査実施。C地区の遺構がそのまま延びていく見込み。

7月19日(水) 晴 本日金沢地方気象台が梅雨明けを発表。

7月24日(月) 晴 C地区2号整穴北東隅より平版が2点並んでほぼ完成で出土。

7月25日(火) 晴 石川県立埋蔵文化財センター運営委員一行現場視察。

7月27日(木) 晴 学校が夏休みに入り、親子連れの見学者あり。夏休み明けの中に身近な遺跡について調べるといった項目があるようだ。(これ以後も同様の見学者が何度か見られた。)

7月28日(金) 晴 県総務部財政課職員視察。

7月31日(月) 晴 本日よりB地区にはほとんどの人員を集中させて調査を行う。

8月9日(火) 曇のち晴 B地区1・2号整穴掘り下げ開始。

8月18日(金) 晴 小嶋・岡本両名は調査打ち合せ会議に参加のため、県立埋蔵文化財センターに向かう。

8月21日(月) 晴 C地区12号土坑掘り下げ開始。

8月24日(木) 曇時々晴 B地区5号整穴掘り下げ開始。

8月28日(月) 曇のち晴 第1回の航空写真測量に備えB地区の清掃作業を開始する。

8月29日(火) 晴 B地区3・4号整穴掘り下げ開始。



B地区作業風景

9月2日(土) 曇のち雨 第1回の航空写真測量予定日であったが午前9時過ぎより風雨ともに強くなり、ヘリコプターが大阪を飛びたてないということであったので、延期となった。

9月4日(月) 晴 9月2日来の雨のためB地区およびC地区鞍部が水に浸かる。排水作業を中心に行う。

9月5日(火) 曇のち雨 B地区排水および清掃作業。午前中に航空写真測量を行い、無事終了。

9月11日(月) 曇時々晴 中世より近世以降まで使用されていたと思われる溝(67-68号溝)掘り下げ開始。

9月18日(月) 曇のち晴 道路遺構(65号溝等)の掘り下げ開始。

9月22日(金) 雨 現場にて県経済振興室・県立



航空写真測量ヘリコプター

埋蔵文化財センター等との調査予定について打ち合せ。特に調査区南の県道沿いの歩道を拡張したいとのことであったので、その調査に伴う作業日程の見込みについて調整を行う。

9月25日(月) 曇のち晴 B地区の調査は今日では終了する。C地区は、道路遺構の延長ラインを検出するため、石室内を少しずつ掘り下げる。

9月26日(火) 晴 G-4-5区遺構検出作業を行う。整穴1棟、掘立柱建物2棟を確認する。

10月2日(月) 曇のち晴 C地区3号整穴掘り下げ開始。

10月3日(火) 曇のち雨 追加調査区域である歩道敷の表土除去作業を行う。

10月4日(水) 雨のち曇夕方より雨 天気予報によって午後は回復に向うとのことであったが、午後4時頃より大雨が降り、鞍部が約1時間で冠水してしまった。なお、この日の午後3時～9時の降水確率は20%であった(正午発表)。



C地区鞍部冠水状況

10月5日(木) 晴のち曇 本日より歩道敷の調査開始。

10月6日(金) 曇時々雨 68号溝より更水通貫出土。

10月9日(月) 晴 C地区北側全景写真撮影。

10月11日(水) 雨 国立歴史民俗博物館教授吉岡康輔氏来跡。

10月12日(木) 曇 前日の雨で鞍部冠水。急いで排水・清掃作業を行い、午後第2回の航空写真測量を実施。

10月18日(水) 晴 C地区4号整穴掘り下げ開始

始。この日午後1時30分より現場にて調査概要に関する記者発表を行う。

10月19日(木) 曇のち晴 野々市町立富陽小学校の1クラスが担任に引率されて見学。C地区14号穴掘り下げ開始。

10月21日(土) 晴 C地区5・6号型穴掘り下げ開始。

10月22日(日) 晴 本日現地説明会を実施。事前の記者発表・野々市町広報への掲載を行ったことに加え、天候にも恵まれたため120人を越える見学者があり、盛況であった。



現地説明会風景

10月24日(火) 晴 本日より航空写真測量済みの石器製作跡より石器の取り上げ作業を開始する。

10月25日(水) 晴 名古屋大学文学部教授渡辺誠氏来跡。

10月30日(月) 晴 C地区11号型掘り下げ開始。

10月31日(火) 道路遺構がほぼ掘り上がったので、その全景の写真撮影を行う。



C地区道路遺構

11月1日(水) 雨時々曇 現場において、県経済振興室・金沢土木事務所・県立埋蔵文化財セン

ター・野々市町教育委員会社会教育課を交えて、調査上の問題等に関する打ち合わせを行う。

11月2日(木) 曇のち晴 当協会演習理事長以下遺物整理担当職員26名見学。

11月6日(月) 曇時々晴 C地区北方の航空写真測量実施済みの区域を工事側へ引き渡す。

11月10日(金) 曇のち晴 C地区、E-4・5区8~13号穴掘り部でかなり大きな掘立柱建物数棟を検出する。

11月14日(火) 曇 C地区12号型穴掘り下げ開始。

11月15日(水) 晴時々曇 C地区8号型穴掘り下げ開始。この日の午後、地元野々市町粟田の人達を対象にした現地説明会を行う。約20名の参加があった。

11月21日(火) 曇 C地区13号型掘り下げ開始。

11月22日(水) 晴のち夕方より雨 C地区10号型穴掘り下げ開始。

11月24日(金) 曇 ベルトコンベアー返却。第3回目の航空写真測量に備えて本格的に清掃作業に取りかかる。

11月27日(月) 晴 数日の航空写真測量も無事終了し、全景写真の撮影を行う。

12月2日(土) 晴のち曇夕方より雨 C地区E-4・5区型穴住居群の個別写真を撮影する。

12月4日(月) 晴 本日より遺物の取り上げ作業を行う。なかでも石器はかなりの量になる。

12月6日(水) 曇時々雨 C地区13号穴で竈の基盤のきれいな石組を検出する。

12月12日(火) 曇 残りの補足調査に必要なものを除き、調査機材を協会本部へ搬出。

12月13日(水) 曇時々晴 遺物を協会金沢事務所へ搬出。

12月18日(月) 曇のち時々雨 C地区内に重機を入れて、調査区東西方向のたわみ調査を行う。

12月19日(火) 雪 残余の機材を整理して7ヶ月におよぶ現地調査を終える。思えば、水がたまりやすく排水作業に明け暮れた日々であった。久しぶりの冬らしい天候に感慨を抱きながら現場をあとにした。

<調査参加者(敬称略・五十音順)>

【野々市町】

相木秀雄 秋元たみ子 石沢トシ 石附君代 磯山真一 井手和郎 伊藤忠行 猪又邦子 今井佐一 牛村恵美子 浦野勝人 蝦名繁雄 遠藤一豊 大島初次 大知時子 大西千恵子 岡本みよ 河合伊都子 河村三千枝 小林昭子 小柳幹男 小山周作 栗山花代子 佐藤美代子 高口久夫 高橋利幸 竹内貞子 田中馨 谷口初代 寺西文子 寺本昭夫 仲静江 中小田博子 西幸次 中野敏枝 西田愛子 西永正雄 西村春枝 西村政明 西村芳子 西本タキ 野村しづ江 野村マサ江 野村美知子 橋爪富美子 東猛 備後浪子 佛田克子 細川外志子 松原京子 水谷千代栄 南外志雄 宮川美津子 宮崎数子 宮野渡 村井利朔 村本土佐枝 安田昌代 山形恵子 山口花子 山本房枝 山本いつ子 山森万里子 横山美弥子

【金沢市】

池上芳江 越田洋子 近藤顕子 佐原好江 高山英明 多賀久松 谷本悦子 中村イサ子 塗師岡志寿 早崎長三 彦田洋子 藤田夏枝 星合ひろ子 宮下トヨ子 宮崎勇孝

【鶴来町】

田中よね子 中川知栄子

【松任市】

西本法子

第三章 栗田遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

栗田遺跡は、石川県石川郡野々市町栗田5丁目地内に所在する。ただし、その一部は同町中林地内に延びる。今回発掘調査を行った地点は「サカシマダ」・「^{ノボリ}新保町」・「^{ノボリ}穴開」・「^{ノボリ}重宿」という小字で呼ばれている。

野々市町は金沢市の中心部から南西約8kmに位置し、白山を源流としている手取川によって形成された手取川扇状地東部の平坦地上にある。町の西南部を国道8号線・JR北陸本線が走り、中央部を旧国道8号線(現305号線)が横断する。また東部を、金沢市と白山麓の町村を結ぶ国道157号線・北陸鉄道石川総線が縦断している。町の面積は13.56km²、人口は約38,000人を数え、金沢市のベッドタウンとして市街地が現在も膨らみ続けている。2,859.14(人/km²)という石川県内一の人口密度を有するもの、そのあらわれであろう。しかし一方では、扇状地という、立地上土壌環境や農業用水の確保

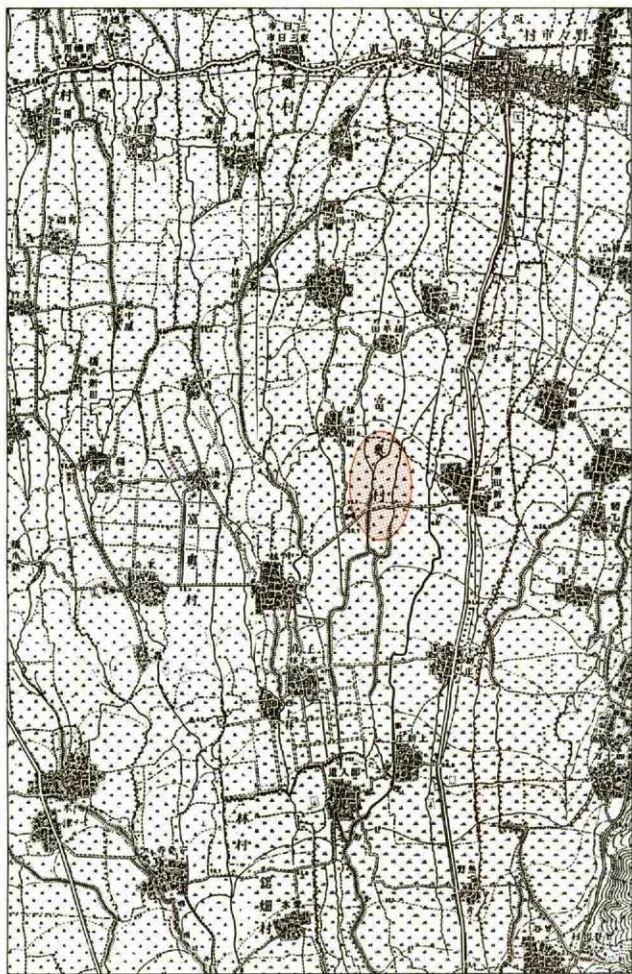


第1図 栗田遺跡の位置

に多大の困難が伴うという農業開発には不利な条件下、我々の先祖が行ってきた古来より近代に至る努力の賜物、すなわち良質な穀倉地帯としての農業基盤は、急速に失われつつある。また、このような開発によってもたらされる利益は十分認められるものの、周辺景観の大きすぎる変貌ぶりを見るに、なにか割切れなさを感じてしまう。

本遺跡の所在する栗田は野々市町東南部に位置し、手取川の旧河道を利用したといわれる七ヶ用水の一つ、富樫用水の分流木呂川が北流する。また、林口川の支流金武土川が中林との地境を流れる。その標高は30~40m前後で、北に緩やかに傾斜した平坦地である。明治時代に測図された地図を見ると、本遺跡より南方の標高40m以上の地点では各用水に挟まれた帯状の微高地が見出せるものの、本遺跡付近よりそれは不明確となって起伏は乏しくなる。しかし、本遺跡を含めた発掘調査などの所見によれば、規模は小さいものの、基本的には南北方向に尾根筋と谷筋とが延びる地形を検出できる。

栗田の歴史 現在の栗田は人口千人余を数え、旧集落は栗田2丁目に該当する。その旧集落は昭和30(1955)年までは栗田新保と呼ばれている。その地名由来について昭和2年に発行された『石川県石川郡誌』は「今より数百年前は栗田新保は栗田村・新保村の二ヶ村にして、現在の鎮守神社の西方一二町の所に栗田村あり。(中略)二ヶ村の間に栗田川ありて屢々洪水あり。汎濫して栗田村に



第2図 粟田遺跡周辺の地形

入り、住民常に安堵の念なかりしを以て、両村協議の上粟田村は挙って新保に移住することとなり(中略)其れより粟田新保と称せりと記している。このことから考えると、現在の粟田2丁目が旧新保村で、粟田川は木呂川にあたり、粟田2丁目の西南西約200mの地点に旧粟田村があったこととなる。寛文10(1670)年には粟田新保村として「村御印」を発給されており、前の記述内容はそれ以前の事を伝えたものであろう。江戸時代のこの村の様子について、前記の村御印では村高は863石を数え、「加州三郡高免付御給人帳」には家高15軒、百姓数26人と記している。江戸時代になると七ヶ用水は加賀藩の管理の下で各用水をその江下の村々の連合が維持管理を担当していた。その運営の中で様々な水利慣行が形成されていくが、特に夏期湯水期の番水は農民にとって死活問題であり、その様相は近代に至っても変りはなかった。また、この地域では明治から大正にかけてには農業開発の総仕上げとも言える耕地整理事業が盛んに実施されている。粟田では、明治44(1911)年に着手され、大正4(1915)年に完了している。今回の調査地点が、昭和37(1962)年から永く石川県立農業試験場実験園場として使用されていたのも、そうした先人の苦勞の結実といえよう。

農業試験場



第3図 手取川扇状地の用水系と島地形

本遺跡の形成に不可分の手取川は、その源を白山大汝峰に発して、途中、尾添・大日・直海谷等の水系の水を集めて北流し、石川郡鶴米町に至って西に流れを変えて同郡美川町にて日本海に注ぐ。その流程は約70kmを測り、石川県内最長の河川である。この手取川は平安時代初頭には「北菜河」として文献にあらわれ、「手取川はその水路を七度変えた」という伝承にあらわれるごとく、暴れ川として知られる。したがってその本流は河道の変遷が激しく、これまでのところ大略次の様と考えられている。すなわち、平安時代までは扇尖稜線(扇頂と松任市徳光を結ぶライン)付近を流れ、平安～鎌倉時代にかけて南下して大行事川(大慶寺川)が本流となる。南北朝・室町時代前期にかけて南へ分流し、北川(中島用水)も本流としての機能を持ち、下流では比良瀬川を分けていたようである。その後比良瀬川が本流となり、戦国時代には北川・今湊川が、そして江戸初期には南へ分流し始めて、南川(現在の手取川)も本流として機能した。そして17世紀後半には現在の流路に落ち着いたようである。ただこの見解は残存する文献の疎密に左右されるものであり、平安時代以前の流路もかなり変動があるものと思われる。この川の洪水の記録は数多あるが、その中で最も近年の大洪水は昭和9(1934)年に起こり、その被害は死者97・行方不明15・流失家屋457・流失耕地2,853haを数えている。また、次節で述べる遺跡分布もこの河道変遷に大きく左右されており、扇尖稜線以南現河道以北の遺跡分布は極めて少ない。

そうした手取川による長年の作用の結果が手取川扇状地である。この扇状地は、東を富樫山地、西を能美山地に挟まれ、標高約90mの鶴米町を扇頂にして北西方向に約110度・半径約12kmで展開し、扇端は日本海に接している。ここでの地形の容貌は、帆立貝の貝殻のような形になっていることで、その高い部分は細長い紡錘状を呈しており、低い部分には七ヶ用水、すなわち富樫・郷・中村・山島・大慶寺・中島・新砂川の各用水が流れている。微高地部分は「島」状を呈し、現在扇状地内にみられる「島」を付した地名は、そうした自然地形を反映したものと考えられる。また、七ヶ用水はこの扇状地内をあたかも毛細血管の様に流れており、その営みは穀倉地帯としての様相がかなり変わってしまった今も、変りなくこの地域を潤し続けている。

七ヶ用水

第2節 歴史的環境

手取川扇状地の扇尖部・扇端部は、これまでに県内有数の遺跡の存在が確認されている。その上近年都市化が急速に進行し、開発行為に伴った緊急発掘調査・分布調査が多数実施されており、新たな遺跡や範囲の拡大した遺跡が、特に扇端部に著しい。それはすでに数度の改定を経た「石川県遺跡地図」に記載された遺跡にとどまらず、かなりの質・量に及んでいる。このような状況は、奇しくも考古学研究には多大な資料を提供して、その発展に寄与する結果となっているが、現状保存が必要な遺跡までも消滅させる傾向が見られるのは残念なことである。

縄文時代

当地域周辺の考古学研究は、昭和20年代頃から縄文時代の遺跡を中心に多くの成果が提供されている。すなわち高畑勝喜・安村律義・沼田啓太郎らの業績である。これら先駆者による成果に導かれて以後の研究が進化したのである。

これまでの調査成果から、この地域への本格的進出が開始されたのは縄文時代後期中業～晩期頃と考えられている。この内扇端部では、御経塚遺跡・新保チカモリ遺跡・中屋遺跡などの大規模な集落が営まれていることが確認されている。これらの遺跡は標高が約10mの地下水自噴

地帯に位置し、いずれも北陸地方の縄文時代後晩期の標識遺跡として著名である。この他、米泉遺跡もまた基幹集落として評価できる重要な遺跡である。また、一塚イチノツカ遺跡や隣接する旭遺跡群においても縄文時代後晩期の良好な資料を提供している。なお、これらの遺跡の周辺には、宮永B遺跡・福増遺跡・横江A遺跡・ジョウガンジ遺跡・下福増遺跡・下安原遺跡・上荒屋遺跡・一塚遺跡・八田中ヒエモンド遺跡などの集落が点在している。

一方、扇状部では長竹遺跡が著名である。遺構としては土坑群が確認されているに過ぎないが、晩期後半の良好な資料がかなりまとまって出土している。この遺跡の出土土器は下野式のみである。このような短期間の遺跡であることから、手取川の氾濫を要因とする不安定な地域であったことが窺える。この点が扇端部の遺跡との大きな違いであろう。この長竹遺跡に隣接する乾遺跡では平成2(1990)年度発掘調査で長竹遺跡とほぼ同様の遺物が多量に出土している。この遺跡では住居跡に伴うと考えられる埋壘のほか、配石・集石を伴った墓域を検出している。これまでのところ当該期の扇状部集落と考えられるのは、この二遺跡のみである。同年度の長竹遺跡の発掘調査でも下層から下野式土器が出土して遺跡範囲が拡大しており、これらの成果の詳細な検討を行えば、この時期の扇状部の生活様相の一端が明らかになるものと思う。

打製石斧

この他扇状部では、末松遺跡や清金アगतウ遺跡などで縄文土器の薄片・打製石斧(打製土掘具)が散発的に出土している。山本直人はこの二遺跡に関し「扇端部遺跡の後背地として、打製石斧による生業生活の舞台」であり、これらの遺跡は食料資源(根茎・球根等)を採集する目的で営まれ、場所を点々と変えるような出作り小胆的な性格のものとして評価している。末松遺跡のような状況は扇状部の発掘調査では必ずと行ってよいほどあらわれる。しかし、このような遺跡は認知されたばかりであり、その評価はともかくも、遺物の出土状況が極めて希薄であることをして、軽視することなく扱い、少なくとも調査区の断ち割り等の確認調査が欠かせないものと言えるのではないかと。

本遺跡では縄文土器小片が少々、打製石斧がその母石・剥片等を含めて多量に出土しているが、扇状地開発のありようとともに、その道具の採集と製作技法等を考える上で興味深い。

弥生時代

扇状地の地下水自噴地帯では、畿内第II様式併行の橋樑文土器と条痕文土器が伴する矢木ジワリ遺跡が知られる。このほか横江A遺跡・横江E遺跡・上安原陸橋遺跡・御経塚遺跡で同時期の条痕文土器が出土している。また、同時期の橋樑文土器を出土しているのは、横江E遺跡・横江庄遺跡などである。これらの遺跡は、金沢市と松任市の境界に沿って横江周辺にまで入り込む浅い谷状の地形を取り囲むように立地する。

柴山出村式

この時期の扇状部の遺跡も少ない。その中で注目すべきは、石川県内での初期農耕の段階とされる柴山出村式土器を一定量出土している上林遺跡であろう。また、前述した乾遺跡でも柴山出村式土器のほかに遠賀川式土器がまとまって出土している。この調査は継続される予定なので、調査の進展によってはこの時期の扇状地開発の様相を明らかにしてくれるかもしれない。この二遺跡は、低湿地立地を中心とする当該期の遺跡の一般的様相とは異なり、特筆すべきものといえよう。なお、本遺跡でも僅かではあるが遠賀川式土器が出土している。

弥生時代後期～古墳時代

弥生時代後期となると、この地の集落の展開が活発となり、旭遺跡群の一塚遺跡・八田小新遺跡のほか、竹松C遺跡・宮水遺跡・宮永B遺跡・横江A遺跡・相川新A遺跡・御経塚遺跡・御経塚C遺跡などがあげられる。この内、一塚遺跡の平成元(1989)年度の松任市教育委員会による発掘調査では、山陰地方との強い結びつきを示す四隅突出型墳丘墓・前方後型周溝墓などが検出された。この遺跡は、弥生時代から古墳時代への以降を目の当りにすることができる数少ない遺跡の一つといえよう。また、八田小新遺跡・一塚遺跡などで玉生産が確認されている。このほか御経塚遺跡テト地区では弥生時代末の北陸で最大規模の竪穴住居が検出されている。弥生時代終末期に位置づけられる月影期になっても、前時期の遺跡の大半は存続し、古墳時代前期までその規模を維持している。

四隅突出墓

この時代の扇状地集落は、古墳時代に至っても僅かにしか確認できていない。上二口遺跡では前期の土器群が存在する。また後期では木津遺跡があげることができる。この遺跡は末松遺跡第1次調査として発掘されたが、竪穴住居が3棟検出されている。これまでのところ弥生時代末から古墳時代にかけての遺物散布地が急増しており、おそらく小規模な集落がかなり形成されていたものと考えられよう。ただ集落のありようは、木津遺跡調査での数度に及ぶ洪水に伴う砂礫被覆の様相から考えれば、安定したものとは到底言い難い。

この地域の古墳の存在は希薄であり、僅かに7世紀後半の河原石積み横穴式石室を内蔵した田地古墳(円墳)、末松古墳(詳細不明)の2基が知られるのみである。しかし、御経塚シンデン遺跡の昭和61(1986)・62(1987)年調査では、耕土直下に墳丘を削平された前方後方墳を含む12基の古墳が確認されている。そのほか北塚遺跡では削平された8基の古墳を検出し、一塚古墳・中相川古墳はその存在が伝えられるが、詳細は不明である。これらの事から、これまでの扇状地開発の過程でかなりの古墳が消滅してしまったものと思われる。

横穴式石室

浅香山木はこの時代の扇状地開発に就いて「大規模な人口灌漑手段による扇状地開発に必要な政治勢力は、古墳期を通して、手取川扇状地に十分な成長をもしくは浸透を達成することができず、石川平野の開発拠点が、依然として、扇状地から外れた末端の海岸砂丘後背地や、犀川・伏見川流域の低湿地ないしは扇状地東側縁辺の山麓部分にあって、自然灌漑に基づく澄田・半澄田の経営に止まっていたことは否定し難い。」と述べている。この論理はこれまでのところ大略覆されていない。ただ、近年の発掘調査事例の中で地域史を大きく転換させる成果も報告されつつあり、今後は、その成果を集積し十分な検討が行われることを期待したい。

奈良～平安時代

手取川扇状地の律令制下の行政区画は、当時の手取川の本流付近を境界として、越前国加賀郡と江沼郡とに当る。そして、加賀国の立国された同年、すなわち弘仁14(823)年の6月には石川郡と能美郡とがこの地域の管郡として成立する。

さて、律令制下の行政区画として「郷」が置かれていたことは衆知の事である。この扇状地およびその隣接地域で「和名類聚抄」に記されている郷名を列記すれば、扇状地では樟部・笠間、扇状地では中村・坪師・山下、扇状地縁辺部では富樫・三馬・山上・井手、扇状地から扇状地にかけては味知、犀川流域部に大桑・玉戈・大野、といったものが見出せる。この「郷」という行政単位は、大まかな領域は存在したであろうが、戸の集団として構成されたため、必ずしも地域に

和名抄郷

拠らないという特徴を有し、明確な境域が設定されていなかったものと考えられている。したがって、以下で述べる遺跡も郷名を特定できないものが多い。

7世紀後半の奈良時代直前期になると、本遺跡の西約1.7kmの末松地区ではかなりの密度で遺跡の集中を見ることとなる。そのうち末松グイカン遺跡は7世紀後半、末松遺跡は7世期末から9世紀にわたる集落遺跡であり、隣接する末松庵寺の成立と深く関連性のある集落と考えられている。その末松庵寺は法起寺式の伽藍配置を有し、その建立時期は奈良時代前期と考えられてきたが、現在では7世紀末～8世紀初頭の奈良時代直前の建立と考えられている。その発掘調査では金堂・塔などの遺構が確認されている。建立者は明確でないものの、在地有力者である道君との関わりが考えられる。また、清金アガトウ遺跡では8～9世紀の集落が、末松庵寺では建立以前の遺構として7世紀後半の竪穴住居が、それぞれ検出されている。

このほか扇状部では、本遺跡に隣接する栗田遺跡中林地区や本遺跡の南約1kmに位置する上新庄ニシウラ遺跡では奈良時代中・後期のかなり大型の掘立柱建物を有する集落が確認されている。この他にも上林新庄遺跡・上林テラダ遺跡で奈良時代後半を中心とした集落を検出している。本遺跡を含めこれらの調査から、野々市町新庄から栗田にかけての地形の様相は、細長い島状の微高地を形成していることが推定されるまでに至った。そしてその微高地上に奈良時代を中心とする集落が多く展開していたことが明らかとなった。さらに本遺跡の西約2.6kmの上二口遺跡は、8世紀前半をピークとする奈良時代から平安時代前期の集落跡である。

これらの遺跡で確認された集落のありようをみると、7世紀後半から8世紀前半に至る開発の一大面が見出せよう。そしてこれら古代の第1段階の集落は、9世紀前半を境に一旦は衰退する。この評価を国家的な

勸農政策に求めるか、或いは在地首長層・郡領層等による組織的な農業開発の進展かは、今後の考察にまたわばならないが、特に末松庵寺の評価にも大きく関わる重要な問題である。またこれらの遺跡の調査から、建物が8世紀の半ばごろに竪穴式から掘立柱式に移行するという傾向が確認されている。また、本遺跡にも見られるが、当時の村落が、数軒程度のグループが散在する散村形態をとっていたという、集落構造に関する良好な資料も提供している。文献史料からの古代村落史研究は、主として編戸制や班田制を中心に考察されているが、



第4図 手取川扇状地の古代遺跡と主要地名

これ以後は考古学成果との関連性を如何に持っていくかが課題となっていく。

平安時代をその画期とした遺跡としては、本遺跡南に位置する安養寺遺跡群があげられる。そこには安養寺遺跡・上林地区・安養寺遺跡・柴木A～C遺跡・柴木南遺跡があり、そのさらに南には荒屋集落遺跡・知気寺遺跡・道法寺遺跡がある。このうち安養寺遺跡・同(上林地区)・同(柴木地区)の調査から10世紀前半～11世紀前半を中心とした遺跡であったことが確認されている。また、道法寺遺跡では9世紀初頭の遺構のほか12世紀にその画期が見出された。このほか、末松廃寺でも寺院廃絶後の平安後期に入ると新たな集落が形成され、三浦遺跡では平安時代前期・中期を画期とする。

末松地区とその周辺以外のこの時代の代表的な遺跡としては、北安田北遺跡・法仏遺跡があげられよう。この両遺跡とも奈良時代の竪穴住居、平安時代を盛期とする獨立柱建物が多数検出されており、県内有数の集落遺跡である。一部未報告部分もあり全体像は不明であるが、集落構造・変遷等村落史研究には欠かせない遺跡と言えよう。また、源波遺跡では奈良～平安時代の、中村ゴウデン遺跡・道村遺跡では奈良時代の集落が確認されている。

手取川扇状地の郷のありようを見ると、その空白地帯が2ヶ所見える。それは、横江庄と幡生庄の所在地と幡生庄の所在推定地である。後者に関しては、天平勝宝7(755)年立庄されたこの庄園の比定地と考えられる辰口西部遺跡群の発掘調査によって、当該期の遺構・遺物が豊富に検出されている。

東大寺領

横江庄は桓武天皇の皇女朝原内親王の親王賜田として8世紀末に成立したもので、弘仁9(818)年東大寺に施入されて、東大寺領となる。しかし天曆4(950)年の東大寺封戸荘園並寺用帳にはその名がなく、長徳4(998)年の東大寺領諸園荘家田地目録には「加賀国横江庄田百八十六町六段二百歩已荒」と記されており、東大寺が遅くとも10世紀半ばにはその経営を放棄したものと考えられている。この横江庄立庄に関し浅香山木は「『空閑の荒地の国家的開発』の促進を目的に拡大したとされる勅旨田・賜田」であると指摘している。横江庄遺跡は昭和45(1970)年の発掘調査によって5×2間の母屋を中心に「コ」の字形に囲む4棟以上の獨立柱建物が確認されるとともに、奈良時代から平安時代初期の豊富な遺物が出土している。その中には「三宅」・「内」・「万」・「継」等の墨書土器や円面硯も含まれている。明らかになった建物やその遺物から、この遺跡は横江庄の庄所の実像を考古学的に明らかにした。現在、その一部が国指定史跡として遺跡公園になっている。横江庄に関してはその後も付近の開発による発掘調査のほか昭和62(1987)年度から平成元(1989)年度にかけてその範囲確認調査が行われ、大規模な倉庫群を含む獨立柱建物が多数検出されている。

横江庄

隣接する上荒屋遺跡では平成元・2(1989・1990)年度の調査で「東庄」・「西庄」・「南庄」・「北庄」という9世紀を主とする墨書土器、50点を越える木簡のほか人形・扉申等が出土している。遺構としては、幅10m・深さ2mのL字状に曲る河道跡が検出され、その河道の東側に大型の掘立柱建物が展開している。川岸に船付場の可能性を有する遺構も見えており、水運を利用した物資輸送が考えられる。現在、この遺跡の西にある安原川は北流して金沢市金石で日本海に注いでいるが、そのような状況から推測すれば、この遺跡で検出された内陸水運は、「延喜式」に見える大野湊あるいはその前身から日本海水運に乗ったことが充分想定できよう。

この上荒屋遺跡の評価は隣接する横江庄との関係を考えないわけにはいかないだろう。金沢市教育委員会の見解によれば、上荒屋遺跡は横江庄の一部の東庄の可能性が強く、広さ186町を

有する横江庄は倉庫群を中心に条里に則して 東西南北に庄家を配置していたことが予想され、庄家は大溝・小溝で区画された方一町内に建てられていたことが遺構ではじめて明らかにできた、としている。上穴屋遺跡の調査は次年度も継続して調査され、また遺物整理も未了であるので、多くはそれに待たねばならない。ただ、文献史料・絵図等に頼ってきた初期庄園に関し、これだけの調査を行った事例は少なく、庄園景観を復元できる希少な例として文献史研究者を含め学際的な研究が進められる必要性を強く感ずる。なお、この付近の同時期の遺跡としては、あさひ荘遺跡・福増東川遺跡・中屋へシタ遺跡・上安原遺跡・御経塚B遺跡などがあげられる。

ところで、条里制の施行については吉岡康輔の報告があり、古代から中世成立期にかけては鶴来町荒屋、松任市三浦などをはじめとして当時の扇状地北東部一帯で散見されるという。その条里施行の時期が、果たして扇状地開発のどの段階に該当するかの課題は今後に残るものと思う。本遺跡では奈良時代の南北に走る道路遺構が検出されている。末松遺跡では東西方向のそれが確認されている。これらの遺構と条里との関連性は興味深い問題であるが、古代交通制度を含め、今後の類似例の検出を待って検討せねばならない。

8世紀後半になるとさまざまな要因で農民の階層分化が進行し、富裕農民層が没落農民の労働力を吸収して墾田を拡大して、独立した農業経営を行い、諸王・中央貴族と結ぶものまで現れる。このことは班田制を基盤とした律令国家の運営に支障をきたすようになる。そのことにより、平安時代になると個々の国の実情にかなった「国例」と呼ばれる慣習法的な規則を尊重する方向に支配体制が変化し、国司は官物を中央政府へ進納することのみを請負う立場へと変貌した。そして、この時期になると一般に条里制をはじめとした国家的動農は終局を迎え、在地諸階層による比較的小規模な再開発へ移行する段階に入る。また、この時期には8世紀後半に成立した初期庄園も、国家機構に依存して開発経営を行っていたために、律令制が弛緩しはじめの9世紀にはその多くが衰退している。さらに、軍事面でも、軍団制が廃止され、地方軍事力の主体は郡司等の地方豪族によって担われていく。この上、9世紀以降、地方に国司として下向した皇族・中央貴族が、国司権能を基盤として生かし、あるいは地方豪族との婚姻を通して、在地に勢力を強めて、強力な力を持つようになっていく。いはば、武士団の形成がそれである。そして、特にこれらの階層が律令制の緩みに伴って荒廃した耕地を再開発する強力な担い手となる傾向が強い。浅香年木も手取川扇状地の再開発は、一旦荒廃した条里制施行地区内の水田を、国家的動農機能を継承した在庁・郡司層等が再開発し、私領化したケースだと考えている¹⁰。「芋粥」の説話で知られる鎮守府將軍藤原利仁の後裔と称する加賀斎藤氏の一族は、その再開発の有力な主体といえる。その一族は、石川郡押部郷を名字の地とする林氏と同郡富樫郷を名字の地とする富樫氏とに分流して発展を遂げる。また、道君の系譜を引くと伝える上道氏の一族もこの地の開発に重要な役割を果たす。そして、これらの庶流が各地に分布して中世を迎える事となる。

中世

平安後期から鎌倉初期にかけて有力であったのは、林氏である。林氏はその系譜に換れば、加賀国衙の在庁官人として勢力を持ち、その庶流が加賀・能登各地に分布して、緩やかな同族結合のもとでその惣領と見なされている。この林氏をはじめとして前記の再開発の主体となり得た一族が在地領主化していく。これら在地領主の館の伝承地としては横江館跡・倉部館跡・相川

館跡・押野館跡・顔谷城跡・倉光館跡・剣崎館跡などのほか、林氏館の伝承地として鶴来町日御子・同町知気寺・野々市町中林・松任市向島があげられるものの、その考古学的実態の多くは不明である。このうち倉光館跡にあたる倉光ゴキヤマ遺跡では五輪塔などが出土し、付近の三浦高麗野遺跡・西方寺跡も同様の遺物が出上している。また剣崎館跡の付近の剣崎遺跡では名主層の墓地が検出された。この他にも手取川扇状地での石塔遺物の出土は各地に点在し、「石川扇遺跡地図」で知り得るほかにも、出土した集落で大切に祀られていることが多い。

ところで、これらの領主にとってその成長を阻害するものが存在する。その一つは知行国主や受領が「国役」という名で取奪の強化したこと、いま一つは知行国主・受領のほか在地領主の取奪に対抗しようとする「村殿」などと呼ばれる村落上層農民の存在である。これら村殿層は、白山宮加賀馬場の衆徒・神人になるなどして、白山宮を背景にその生活基盤を保全しようと努めている。白山宮加賀馬場の影響力は強大であり、たとえば仁平4(1154)年にはその本寺である延暦寺の強訴を利用して白山宮と対立した在地領主林光家の処分を左右し、また、安元2・3(1176・1177)年にかけての安元事件では国司の解任にまで事を運んでいる。このような状況であったから、林・富樫氏も一族を出家させて白山宮内に入れて、関係を結ぶように努めており、白山宮は在地領主にとって極めて厄介な存在であったようである。ところで小川新遺跡・小川小白山神社跡の発掘調査では中世の良好な資料が検出されており、「医心方」紙背文書に見える「小川津」との関連はもとより白山宮関係の中世信仰・集落・交通の有様を考える上で注目される遺跡である。

承久3(1221)年の承久の乱において上道氏・林氏などは院方を支持して没落し、関東に本拠地

を置く外来地頭が優勢となる。この乱以後の加賀守護は、北条氏一族が補任されている。その中で富樫氏は守護使となるなどしてその地位を保全して南北朝を迎え、建武3(1336)年には加賀守護に補任される。しかし一時期斯波氏・赤松氏によりその地位を奪われ、また半国守護が設置などもあって、外様衆の富樫氏の勢力基盤は極めて脆弱であった。また加賀は室町將軍家直属の「奉公衆」が多く、幕府料所の数も畿内近国に匹敵するほど多い。したがって富樫氏は管内に支配の及ばない多くの人と土地を持つという弱点を抱えていくこととなる。守護大名や戦国大名と



第5図 中世における手取川扇状地

白山宮

富樫氏

なるには致命的とも言える悪条件を所持していたのである。

さて現在の野々市町中心部には、中世には「野市」、「布市」と呼ばれる市が形成されており、手取川扇状地内の物資の集積地であったことが想定される。富樫氏はこういった好条件を利用するべく守護所をここに定めている。この守護所の考古学的実態は明らかでないものの、推定地付近には「倉屋敷」、「山川館」、「御所」、「富樫」、「富樫館」、「長土居」等の関連地名がある。この付近は既に市街化が進行した地域であるが、小規模な開発に伴って発掘調査が行われており、中世の遺構・遺物を検出している。今後、中世の市場町や守護所といった広い範囲の実態を知るためには、これらの点の調査成果を都市計画図等へ書き込むなどを行い、全体像を掴むことも必要かと思う。なお、富樫氏の本拠地は中世初頭よりこの守護所推定地であったわけではなく、東南東の富樫山地山麓付近と考えられている。また高尾城跡は富樫政親が一向一揆のために最期をむかえた所として著名であるが、金沢市教育委員会の調査によってその範囲がかなり広大なものであったと確認された。

一向一揆 室町時代末になると富樫氏を打倒した一向一揆が歴史の表舞台に登場する。所謂「百姓の持ちたる国」がそれである。この織田信長による統一政権の形成によって崩壊するまで約百年間にわたって続いている。一向一揆に関連する遺跡としては、笠間兵衛家次館跡・三林館跡・上宮寺跡・若林長門館跡・聖興寺跡等があげられる。このうち聖興寺跡の付近での徳光一本松遺跡の調査では、中世の現状の遺構のほか井戸等を検出している。そのほかは考古学的実態は不明である。また冷泉為広の「越後下向日記」によれば、金沢市米泉に「洲崎慶覚」の館が、「野市」に大乗寺があったことが知られる¹³⁾。

ところで、この時代になると文献史料上、多くの庄園が軒余曲折を経ながら存続している様子が明らかとなる。その中で最も史料が豊富に残っているのは、天龍寺領大野庄である。そしてこの大野庄と密接な関わりを持つのが、中世の日本海海運に重要な役割を果たすとみられる大野湊である。その詳細の多くは不明であるが、普正寺遺跡がこの大野湊に関連すると考えられる集落遺跡である。また中世村落に関しては、古代と相違してその考古学的様相の究明は、これからの課題となろう。その中であって、平成2(1990)年度に調査が行われた長池キタバシ遺跡と宮永はじ川遺跡は注目に値する。前者は溝で区画された井戸・掘立柱建物を伴った方形の屋敷割を検出し、後者は13~14世紀にかけての豊富な遺構と遺物を有する¹⁴⁾。いずれも中世の村落をまとまった形で調査した希少な例であり、今後の作業に期待したい。この他には宮永坊の森遺跡があげられる。

近世

この地域の江戸時代の遺跡としては、前述した乾遺跡がある。この遺跡では17世紀を中心とした墓域を検出している。遺物は多岐にわたるが、今後その整理を進めていけば、当該期の農村部の生活実態が明らかになると思う。そのほか八田中遺跡では17世紀の遺物がかなりまとまって出土している。本遺跡では近世遺物が中世遺物と共にわずかに出土しているのみであるが、耕地整理前の水路等の位置が一部確認された。また江戸時代初頭に廃城された松任城址は、中世の縄張は不明であるが、近世では連郭式の平城であった。公園となっている本丸跡では、遺構はわずかにその面影を残すに止まる。この時代は文献史料が多く存在し、考古学調査に馴染まないとする傾向が強い。しかし、文献史料によって明らかにできることにも限界があ

り、考古資料に多くを頼ることもあり得ることが、近年東京都内で盛んに実施されている江戸時代遺跡の調査によっても明らかになりつつある。したがって、石川県内でもこの時代の遺構・遺物に今少し関心を持っていくことが必要ではなからうか。

手取川扇状地内に限らず、考古学の守備範囲は近世以降にまで広がりつつある。文献史料の多くはその史料の関係者がなんらかの理由で残す努力を行って現在に至ったものである。したがって、必要以外の史料は消滅した場合が多く明らかにできることは限界があって、人々の生活様相に関しては近年盛んになった絵図を読み込む努力のほかは考古的な遺構・遺物に頼ることが必要となっている。今後はこの傾向が進むことはあっても、後退することはないであろう。考古学・文献史学の垣根を越えて歴史事象を究明する時期に来ているのではないか。

註

- 1 高橋勝喜・安村律義「石川郡安原村下福地遺跡調査予報」(『石川考古学研究会々誌』5号、1953年)、高橋勝喜・安村律義「石川郡安原村下福地遺跡調査予報(続)」(『石川考古学研究会々誌』6号、1954年)、沼田舜太郎「旧石川郡安原村中屋遺跡調査略報」(『石川考古学研究会々誌』8号、1956年)、高橋勝喜「金沢市近郊八日市新保並びに御徒塚晩期遺跡の調査」(『石川県野村誌』、1964年)。
- 2 山本直人「縄文時代の地域社会論に関する一試論 ―手取川水系を中心に―」(『古代文化』42-12、1990年)。
- 3 浅香年木「古代における手取川扇状地の開発」(『古代地域史の研究』法政大学出版局、1978年)。
- 4 第4図では、獅推定地に関して、現在までの研究成果を参考にして一つ一応の目安として図示したものである。しかし、この図はあくまで古代の状況を示す概念図の類に属することをお断りしておく。したがって古代遺跡の位置と獅の推定範囲とは必ずしも一致しない。
- 5 野々市町教育委員会「富奥のふるさと再発見」(平成3(1991)年2月富奥公民館において実施された同町教育委員会主催行事の配布資料)。
- 6 『平安遺文』377号。
- 7 註3
- 8 金沢市教育委員会「上笠屋遺跡発掘調査中間報告」(石川考古学研究会平成2(1990)年9月例会配布資料)。
- 9 吉岡康輔「加賀における条里制をめぐる問題」(『北陸史学』8)。
- 10 註3
- 11 手取川扇状地の石塔遺物については、三浦純夫「剣崎遺跡」(石川県立埋蔵文化財センター、1986年)が詳しい。なお、『石川県中奥村誌』(中奥村誌編集委員会、1972年)などを見ると、各集落で石塔を安置している例が確認できる。耕地整理などでかなり出土しているものとみられる。
- 12 浅香年木『古代地域史の研究』など。
- 13 小栗田淳「冷泉為広卿「越後下向日記」と加賀の旅路」(『日本歴史』472、1987年)。この記録は延徳3(1491)年の状況を示し、旅程に少なからず錯綜はあるものの、加賀の中世交通を知り得る数少ない資料である。この他には聖徳院門辞通典が文明18(1486)年白山御定を行い能登へ旅し、「蓮田権記」(『群書類従』18)を記しているが、その記録には宿をとった「矢橋(失作)」のほか「野の市」の名が見える。
- 14 前者は野々市町教育委員会吉田淳氏、後者は藤田邦雄氏の御教示による。

参考文献

- 石川県教育委員会『石川県遺跡地区』1986年改訂
角川日本地名大辞典編集委員会『角川日本地名大辞典 17石川県』角川書店 1981年
手取川七ヶ用水誌編纂委員会『手取川七ヶ用水誌』上巻 手取川七ヶ用水土地改良区 1982年
野々市町教育委員会『のいち町田地俗跡地区』1988年
郷土史編纂委員会『富奥郷土史』富奥農業協同組合 1975年
石川県立埋蔵文化財センター『石川県立埋蔵文化財センター設立10年の記録』1990年
加能史料編纂委員会『加能史料』奈良・平安Ⅰ 石川史書刊行会 1982年
加能史料編纂委員会『加能史料』平安Ⅱ 石川史書刊行会 1985年
加能史料編纂委員会『加能史料』平安Ⅲ 石川史書刊行会 1987年

加能史料編纂委員会『加能史料』平安IV 石川史書刊行会 1989年
 浅香年木『古代地域史の研究』法政大学出版局 1978年
 浅香年木『信承・寿永の内乱論序説』法政大学出版局 1981年
 浅香年木『中世北陸の社会と信仰』法政大学出版局 1988年
 佐藤進一『鎌倉幕府守護制度の研究』東京大学出版会 1971年
 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』上 東京大学出版局 1976年

なお、このほかに多くの発掘調査報告書を参考にしたが、紙幅の関係でその書名を記すことができなかった。

第6図 東田遺跡周辺の遺跡地名一覧

野々市町

1東田遺跡(本報告書) 2清金アगतウ遺跡(奈良・平安～中世) 3末松信濃館跡(中世) 4末松A・C遺跡(縄文～平安) 5末松B遺跡(弥生) 6古元堂館跡(不詳) 7末松C遺跡(奈良) 8末松古墳(古墳) 9法福寺跡(中世) 10末松岩跡(奈良) 11人館館跡(平安～室町) 12末松飛寺跡(奈良) 13末松ダイカ遺跡(奈良～中世) 14末松福正寺遺跡(古墳・平安) 15三林館跡(安土桃山) 16高麗館跡(中世) 17安樂寺遺跡上林地区(弥生・平安後期) 18上新庄ニシウラ遺跡(古墳・奈良) 19押野館跡(室町) 20押野タチナカ遺跡(弥生～古墳) 21押野大塚遺跡(縄文後晩期・弥生) 22大塚古墳(古墳) 23上宮寺跡(室町) 24野代遺跡(縄文) 25御経塚B遺跡(古墳・平安) 26御経塚遺跡(縄文後晩期) 27御経塚C遺跡(古墳・平安) 28御経塚経塚(不詳) 29御経塚シンゲン遺跡(縄文後晩期・弥生・古墳) 30御経塚オッソ遺跡(弥生) 31御経塚ボンサンマイ遺跡(奈良～中世) 32御経塚ヤトノ遺跡(弥生) 33長池キタバシ遺跡(縄文後晩期・中世) 34長池ニシタンボ遺跡(弥生) 35二日市イシバシ遺跡(中世) 36爾ヶ丘ゴシヨ遺跡(弥生後期・奈良平安・中世) 37爾ヶ丘ハイゴク遺跡(縄文晩期・弥生後期～古墳後期・中世) 226下新庄アヲチタナカ遺跡 227上林新庄遺跡(奈良) 228上林テラダ遺跡(奈良)

鶴來町

38柴木A-C・安養寺遺跡(平安～中世) 39柴木遺跡(平安前期) 40柴木南遺跡(平安前期) 41道法寺遺跡(平安前期) 42熊屋集落遺跡(平安) 43鬼屋遺跡(縄文) 44知気寺遺跡(平安)

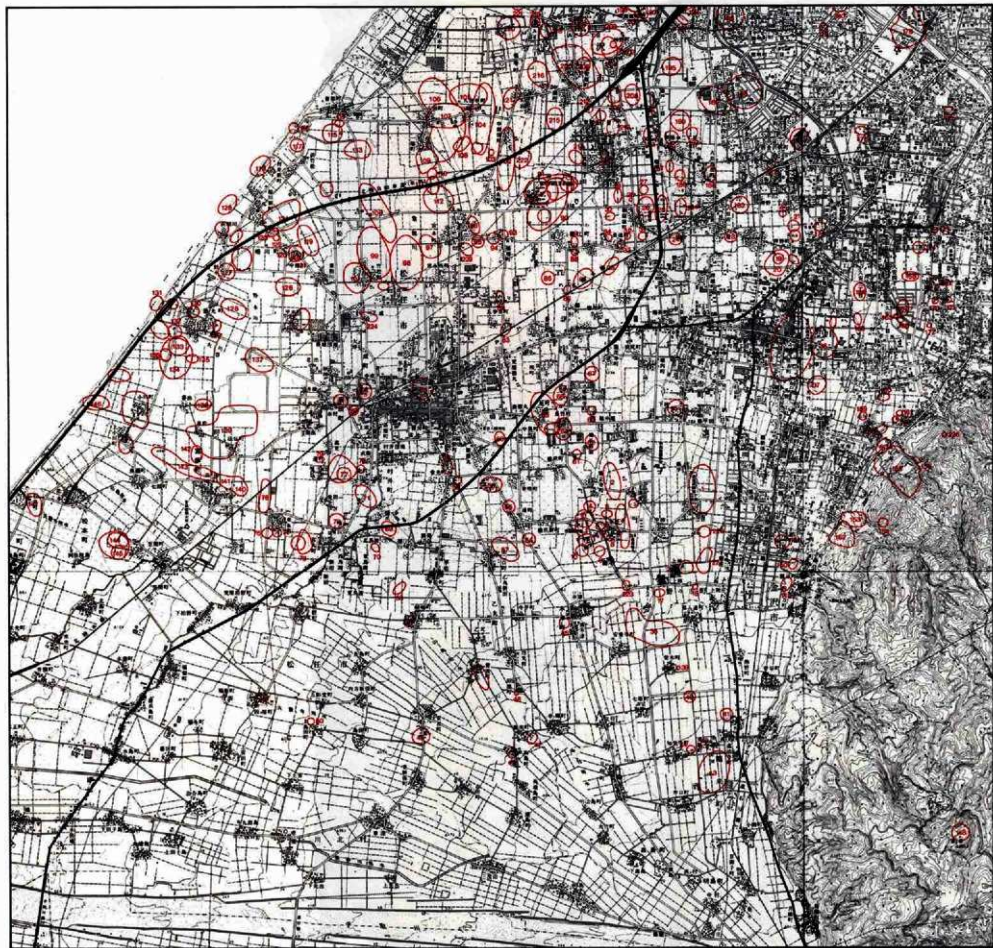
松上市

45法蓮寺跡(不詳) 46田地古墳(古墳) 47圃ノ道観館跡(不詳) 48林田郎左エ門館跡(不詳) 49安古城跡(不詳) 50照円寺跡(室町) 51斎藤摂津守館跡(室町) 52朝崎館跡(室町) 53朝崎遺跡(平安・中世) 54三浦高麗野遺跡(鎌倉) 55三浦常在光寺跡(鎌倉) 56三浦遺跡(古墳～中世) 57上二口遺跡(平安) 58若林長門館跡(室町・安土桃山) 59倉光館跡(鎌倉) 60寺明経塚(不詳)・西法寺跡(安土桃山) 61機爪松の木遺跡(中世) 62機爪遺跡(縄文・弥生・中世・近世) 63高田遺跡(縄文・平安) 64長竹遺跡(縄文・弥生・古墳・中世) 65乾遺跡(縄文晩期・弥生・平安～近世) 66専福寺跡(中世) 67田中ノダ遺跡(古墳) 68松任城跡(室町・安土桃山) 69村井遺跡(中世) 70延寿寺跡(中世) 71橋爪遺跡(不詳) 72高島紋左エ門孝久館跡(室町) 73丸九遺跡(平安)・岡本四位館跡(中世) 74古屋敷遺跡(古墳) 75高山遺跡(平安) 76北出遺跡(平安・中世) 77村井備中守館跡(室町) 78中村遺跡(平安) 79道村遺跡(弥生～奈良) 80成町遺跡(中世) 81安田三郎惟光館跡(不詳) 82出城城跡(室町) 83五歩寺遺跡(不詳) 84あさひ庄遺跡(奈良～平安) 85ゴクラク寺遺跡(縄文～中世) 86横江D遺跡(不詳) 87横江E遺跡(中世) 88横江B遺跡(平安) 89横江館跡(不詳) 90横江A遺跡(縄文・奈良・平安) 91横江庄遺跡(奈良・古墳) 92ジョウガン寺遺跡(奈良・平安) 93福増遺跡(縄文・弥生) 94泉上市左エ門館跡(室町) 95福増東川遺跡(奈良・平安) 96宮水C遺跡(不詳) 97坊ノ森遺跡(弥生・中世) 98宮水市遺跡(弥生後期・中世) 99竹松C遺跡(不詳) 100竹松遺跡(古墳) 101竹松遺跡 102中新保遺跡(不詳) 103八田中アレチ遺跡(縄文晩期～中世) 104八田中ヒエモンダ遺跡(縄文晩期～中世) 105八田中中林遺跡(近世) 106八田中遺跡(縄文～中世) 107八田中厩田川遺跡(縄文・古墳) 108八田・宮永新ハクサダ遺跡(弥生・古墳・中世) 109一塚遺跡・一塚古墳(縄文～古墳・中世) 110旭小学校遺跡(弥生・古墳) 111宮水遺跡(古墳) 112宮水B遺跡(縄文・古墳・中世) 113倉部B遺跡(弥生中～後期) 114倉部出戸遺跡(古墳) 115倉部館跡(室町) 116倉部川遺跡(中世) 117浜竹松遺跡(古墳・奈良) 118相川新雁田川遺跡(弥生・古墳) 119東相川遺跡(奈良・平安) 120相川遺跡(室町) 121中相川1・2号墳(古墳) 122御手洗川遺跡(古墳) 123浜相川B遺跡(不詳) 124相川新A・B遺跡(古墳) 125浜相川・相川新遺跡(弥生) 126中相川遺跡(弥生・平安・中世) 127浜相川遺跡(弥生・中世) 128徳光野本川遺跡(不詳) 129徳光ジョウチ遺跡(弥生) 130大和早人館跡(不詳) 131徳光遺跡(縄文) 132徳光遺跡(中世) 133アベノ願証寺跡(不詳) 134徳光一本松遺跡(中世) 135徳光フルヤキ遺跡(古墳) 136聖興寺跡(室町) 137北安田北遺跡(弥生～中世) 138番田・高松遺跡(平安～中世) 139法仏遺跡(弥生～中世) 140光明寺跡

(弥生・中世後期) 141赤松次郎宮保本陣跡(室町) 142鶴丸館跡(不詳) 143宮保遺跡(奈良・奈良・平安)
 144賢徳寺跡(不詳) 145空閑兵衛家次館跡(室町) 146小川新・小川白山神社遺跡(中世) 147狩野隈
 崎館跡(室町) 223木津遺跡(弥生中期～鎌倉) 224源流遺跡(奈良・平安) 229宮永はじ川遺跡(中世)

金沢市

148倉ヶ岳城跡(鎌倉) 149四十万B遺跡(平安・室町) 150四十万遺跡(縄文) 151三十万遺跡(奈良・平安)
 152額谷遺跡(古墳) 153額谷城跡(平安) 154御廟谷墳墓群(中世) 155高尾城跡(室町) 156狐
 背横穴(古墳) 157高尾遺跡(奈良・平安) 158高尾天神堂遺跡(平安) 159高尾公園遺跡(奈良) 160高
 尾シイナ塚古墳(古墳) 161高尾マトノバ遺跡(奈良・平安) 162高尾新町遺跡(奈良・平安) 163久安トノヤ
 シキ遺跡(古墳) 164久安サンマイ川遺跡(平安) 165円光寺向田遺跡(奈良・平安) 166寺地向田遺跡(奈
 良・平安) 167円光寺向田B・C遺跡(古墳前期・奈良・平安) 168有松C遺跡(縄文・弥生・古墳) 169有松
 A遺跡(縄文) 170寺地B遺跡(奈良・平安) 171寺地A遺跡(縄文・奈良・平安) 172円光寺B遺跡(平安)
 173有松B遺跡(縄文) 174有松D遺跡(古墳・平安・室町) 175米泉遺跡(縄文後晩期) 176増泉排水
 路遺跡(古墳前期) 177増泉遺跡(平安後期) 178犀川鉄橋遺跡(縄文) 179玉鉢遺跡(古墳) 180石鐘
 B遺跡(奈良・平安) 181金沢専売公社工場遺跡(奈良・平安) 182西金沢新町遺跡(古墳) 183押野西遺跡
 (弥生・古墳) 184八日市B遺跡(古墳) 185八日市ヤスマル遺跡(古墳) 186新保南遺跡(中世) 187新
 保本町ツカダ遺跡(弥生) 188黒田遺跡(古墳・平安) 189古府遺跡(縄文) 190新保本町チカモリ遺跡(縄
 文) 191新保東遺跡(古墳) 192新保西遺跡(古墳) 193森戸住宅遺跡(縄文) 194森戸本町遺跡(縄文)
 195松島ナカオサ遺跡(平安～中世) 196高島遺跡(古墳) 197古府B遺跡(不詳) 198古府クルビ遺
 跡(弥生～平安) 199北塚A遺跡(縄文・古墳・平安) 200おまる塚古墳(古墳) 201北塚B遺跡(縄文・古
 墳・平安) 202びわ塚古墳(古墳) 203南塚古墳(古墳) 204南塚B遺跡(古墳) 205上安原遺跡(奈良・
 平安) 206上安原カナワリ遺跡(古墳) 207上安原緑団地遺跡(弥生・古墳) 208森戸バイパス遺跡(古墳)
 209矢木ワリ遺跡(弥生中期・古墳) 210矢木マツノキタ遺跡(弥生中期) 211矢木本町遺跡(縄文)
 212上安原陸橋遺跡(弥生・古墳) 213上安原屋住宅遺跡(弥生) 214上安原遺跡(縄文・奈良・平安) 215中
 屋遺跡(縄文後晩期) 216中屋ヘシタ遺跡(奈良・平安) 217福増遺跡(不詳) 218緑出地後援遺跡(古墳・
 平安) 219緑出地下水処理場遺跡(弥生・室町) 220安原工業団地遺跡(平安) 220安原工業団地遺跡(平
 安) 221安原工業団地遺跡(弥生～平安) 222下福増遺跡(縄文～古墳) 225高尾ショウザプロウ1号横穴
 (古墳)



第6図 東田遺跡周辺の遺跡

第四章 調査の概要

栗田遺跡の調査区は、仮排水路建設にともなうA調査区・道路建設にともなう水路査区・工場建設にともなうC調査区と、1989年度に工場用地造成にさきがけておこなわれた街路拡幅工事にともなうB調査区の数箇所である。

第1節 A調査区

遺構(図8) A調査区は、金武士川の改良工事に伴って設けられる仮排水路建設にともなう調査区で、幅2m・延長約200mにわたって調査を実施した。仮排水工事が地表下90cmまでの掘削計画なので、掘削予定深度以上の調査は行わなかった。調査区の北部では、黄褐色砂質土に掘り込んだ畝溝や小穴を検出したが、調査区の中央部から南側では遺構面が予定深度よりも深かったために、遺構を検出しなかった。調査区の南部では北西方向に走る幅約5mの川状の遺構を検出している。中世の川跡の可能性があるが、西側に接して調査したB調査区ではA区に続く川跡遺構を検出できなかった。

川跡遺構

遺物(図12) 遺物は、第12区に掲載した瀬戸の印皿をはじめとして若干量を検出しているが、実測可能な資料は少ない。1は、瀬戸・美濃の印し皿で15世紀に比定できる資料である。

第2節 B調査区

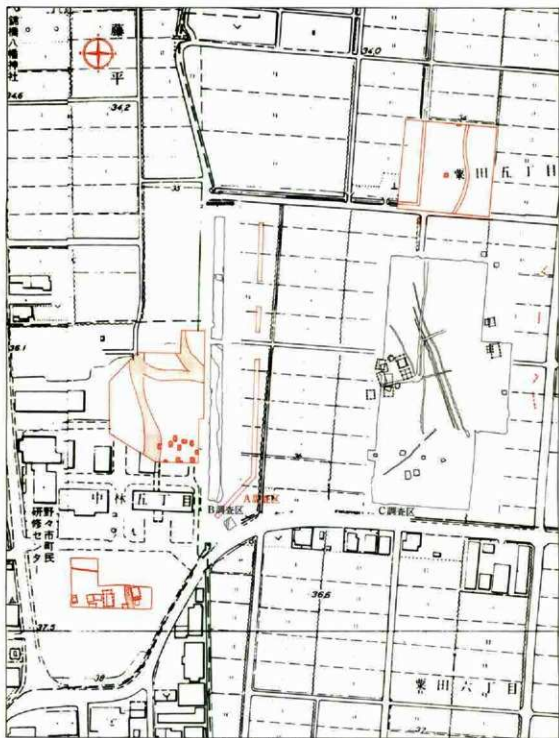
遺構(図9) 幅8m・延長約200mの調査区で、調査区中央の農道の南側は金武士川の旧河道が調査区の東南から西北に縦断して遺構の遺存状態が悪かったのにたいし、北側は比較的良好に遺構を検出できた。農道の南側を南調査区、北側を北調査区と呼ぶ。遺構検出面の標高は調査区の北端が約34m、南端が約35mで、南北の標高差は約1mである。

南調査区では仮排水路をはさんで、A1区に6×6mの調査区がある。ここでは、幅1.2mで深さ約45cmの溝が南北方向に走るのを検出している。この溝底の南端の標高は35.03mで、北端は35.06mを測り、南高北低の地形とは逆に北から南に傾斜している。地形に逆らう傾斜を持つこの溝は、少なくとも灌溉などの機能を持つ事は考えられず、何等かの施設を区画する溝と考えられる。溝の年代は、土器がほとんど出土していないので手懸りが無いが、古代ないし中世と考えられる。

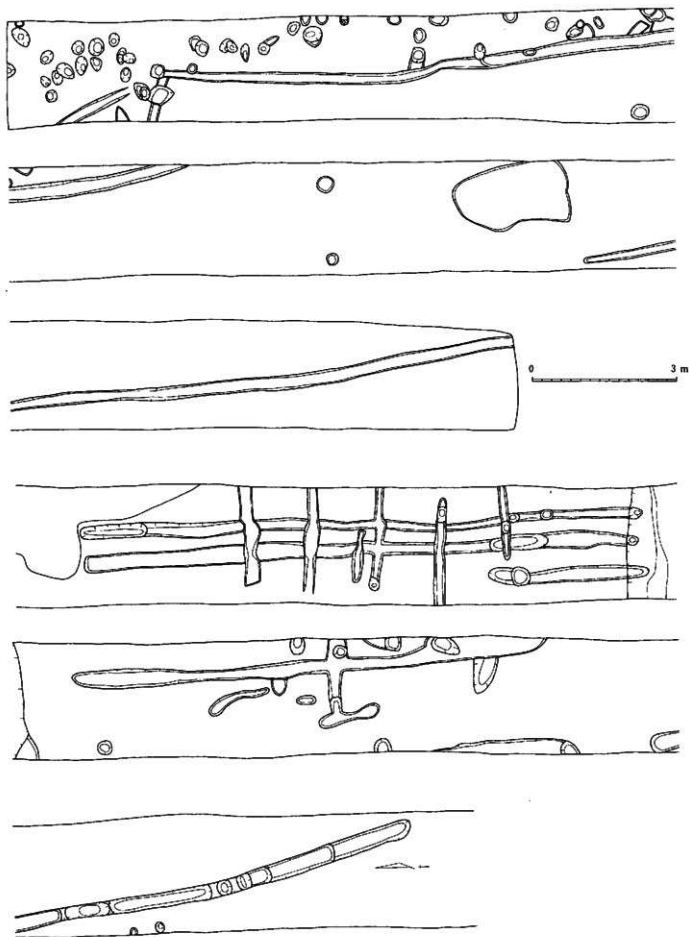
仮排水北側のA2区では、幅30cm・長さ6m前後・深さ5cm前後の溝がほぼ真北方向に約8mの範囲で5条平行して走るのを検出した。このグリッドの東側は、金武士川の旧河道が南北に走っている。

A3区では、径30cm・深さ20cm前後の小穴を無数に検出している。詳細は岡本と久田の報告にゆずるが、このグリッドでは、打製石斧と弥生前期の上器片を集中して検出している。A4区では、現代の金武士川の護岸工事などでほとんど原型をとどめていないが、第5号竪穴遺物を検出している。また、グリッドの東半分は金武士川の旧河道が流れている。A5区は、金武士川の旧河道が西に蛇行してグリッドの全体を占めている。仮排水路のA調査区で検出した中世の大溝状遺構の西側にあたり、本来ならこのグリッドで続きを検出できるはずであるが、金武士川旧河道が上を覆っていたために検出できなかった。A5区の北部は農道北側の北調査

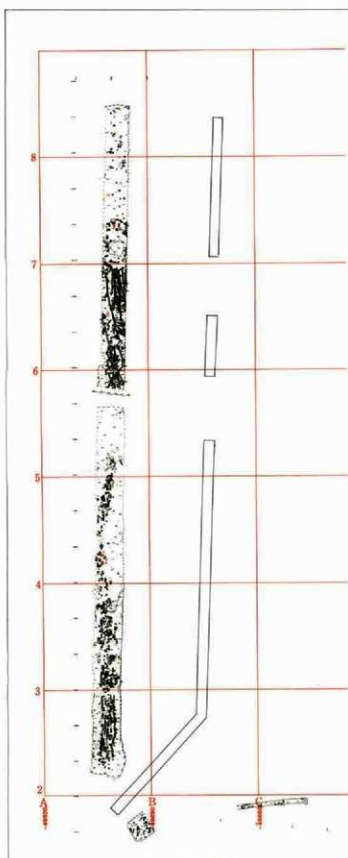
打製石斧



第7図 栗田道路調査区配置図



第8图 A调查区道路平面图



第9図 A調査区配置図

区にかかっている。北調査区では、A5区北側からA6区いっぱい幅約30cm・深さ約10cmの溝がN-12°-15°-Wの方位を持って4条走っている。この溝は、1.8~2.7mの間隔をおいて走っている。また、これらの溝とは別にA6区の北部では南北方向に走る同規模の溝も検出している。この南北溝は、北西に延びる溝に先行している。この溝の間隔は、90~120cmを測る。この溝群については畝の畝溝と考えており、溝の間の1~2mの空間地が畝の耕作面になっていた可能性がある。溝群からは、古代と弥生前期ないし縄文晩期の土期が出土して、中世以降の資料は検出しない。また、溝群はB区第1号竪穴式建物の手前約3mでとまっており、この様な状況から竪穴群と溝群は一体となって配置されていた可能性が強い。A7区とA8区では溝は全く検出されず、竪穴群の他には小穴をおずかに検出しているに過ぎず、また、地形も北西方向に傾斜を強めているもようである。

遺物(図12) 4~8が、B調査区で検出した資料である。A6区の土坑から、手捏ね坏を検出している。包含層からは、5の高坏脚が出土しており、遺構はあまり検出できなかったが古墳時代中期の遺跡が周辺に存在しているものと思われる。A3区の川跡から検出した染め付け大皿7は、やや不整形な断面三角形の径10cmの高台を持ち、図文はわからないが内面にかなり良質の染め付け文が描かれている。また、破断面には漆が附着しており、使用中に破損して漆で接着したものである。明染め付けの可能性もあるが、若干不整形な高台は肥前系であることを示している。

第3節 C調査区

工場建設予定地を対象に設定した調査区。主調査区が東西63m・南北164mで約10,300㎡、東側張り出し調査区が東西20m・南北60mで約1,200㎡、合計約11,500㎡が調査面積である。調査区の標高は南端が35.1mで北端は34.1mを測り、B調査区とはほぼ同じ様に南高北低で約1mの標高差をもっている。調査区の南西隅に北西方向に走る深い鞍部があり、また、東側には南北に延びる浅い鞍部を検出している。つまり、主調査区では南北に延びる微高地状の尾根筋と両側の鞍部を検出し、東側張り出し区では主調査区微高地の東隣の微高地の西側斜面を検出している。主調査区の南半では黄褐色土壌が発達して小穴・溝・建物遺構を検出し、北半では礫が一面に広がっており後述する道路状遺構・68号溝と石器製作跡を検出した。

調査面積

各グリッドの遺構の概要 (図11)

2列 E区の南西隅に、幅12m・深さ60cmの鞍部が西北方向に走っている。鞍部の落際から、打製石斧が5枚重なった状態で出土している。鞍部の肩付近で、17号土坑を検出している。この土坑から、26溝が東北方向にのびている。このグリッドでは、比較的溝群の検出が少ない。F区では、北西方向に走る溝群を検出している。また、F区東部では浅い鞍部になっている。G区は、鞍部からの立上がり部分で、遺構はあまり検出していない。

3列 E区では、3・4号竪穴式建物を検出している。3号竪穴の周辺では、西北方向に走る溝群を検出している。溝は幅が約30cm・深さ約10cmで、長さは約10m前後である。溝は、約1.6mの間隔を置いてN-15°-Wの方向に走っている。溝群は16m四方の範囲に集中しているようである。溝群は3号竪穴の覆土にも切込んでおり、竪穴群廃絶後に掘削されたことがわかる。E区の北半部西側では礫層が露出し、遺構は検出しなかった。

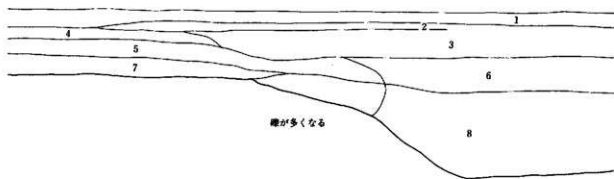
竪穴式建物

F区では、5・6号竪穴を検出している。4号竪穴の東側から、溝群が東に広がっている。溝の規模や走向は、3号竪穴周辺で検出した溝群と共通している。5号竪穴の東側の北直半部には、小穴群が集中して溝が延びていなかった。G区では、2Gから続く浅い鞍部と、隣接する微高地に続く西側斜面を検出している。鞍部東側の緩斜面では、不定形な小穴を多数検出している。

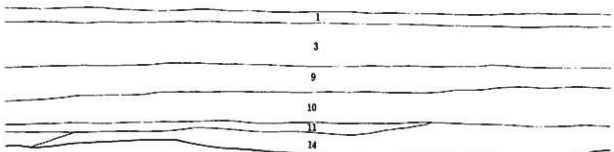
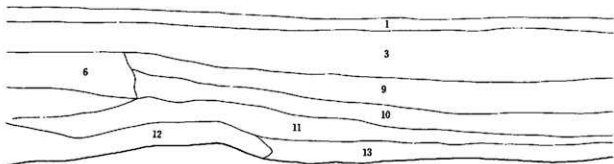
4列 E区では南半部に溝群があり、北半部では8・10号竪穴と68号溝を検出している。南半部の溝群は、N-15°-Wの走向を持ち、幅や深さは3号竪穴周辺で検出した溝群と共通している。北半部では、規格は共通しているが走向がN-25°-Wと異なる溝群を検出している。F区は中央微高地の東斜面にあたり、溝群は検出していない。近世の18号土坑や78・45号溝を検出している。西側では道路状遺構にともなう75・69・65号溝を検出している。G区では、鞍部と西側斜面を検出している。西側緩斜面では、14号竪穴を検出している。このグリッドの南東から北西にかけて浅い鞍部が走り、中央微高地東側の鞍部と合流している。北半部東側では、N-5°-Eに走る溝群を検出している。

5列 E区では、11・12・13竪穴と、1～6号掘立柱式建物を検出している。溝群も検出しているが、溝間が180cmで密度がやや粗い。柱穴状のpitを多数検出したが、掘立柱式建物を復元できたのは6棟だけであった。また、N-25°-Wに走る66溝を検出している。F区では、北に走る68号溝と道路遺構を検出している。68号溝は、グリッドの北部で東に分岐し67溝なって

道路状遺構

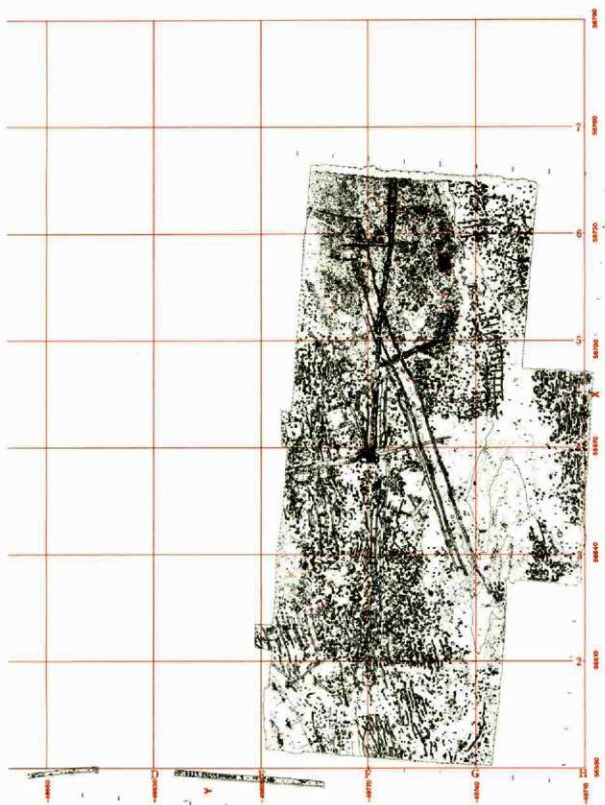


層が多くなる



- 1 耕作土
- 2 腐植層
- 3 灰色土層
- 4 黒灰色粘壤土層
- 5 黒色硬層
- 6 黒灰色粘上硬層
- 7 灰色硬層
- 8 黄色硬層
- 9 黄色シルト層
- 10 黄色砂層
- 11 黄灰色硬層
- 12 黄色粘砂層
- 13 漂白砂層
- 14 黄色砂層

第10図 C調査区北壁土層図



第11図 C調査区グリッド配置図

いる。中央微高地の東斜面では、径20cm前後の小穴群を多数検出している。G区斜面では、真北に走る三条の溝とそれに直交する十四条の溝を検出している。1.5m四方の方形区画を、二列に並んで検出している。

道路状遺構

6列 6列から北側では、中央微高地の全面に礫層が露出している。E区では、道路遺構をかくすかに検出している。F区では、道路遺構の一部と南北に走る68溝を検出している。このグリッドでは石斧剥片を多数検出している。G区は中央微高地東側の鞍部にあたり、緩く東に上がる斜面につながっている。この斜面で、12号整穴を検出している。また、多数のpitとN-100°-Wの東西方向に走る溝群を検出している。

7列 この列の中央微高地は、表土掘削時に深く下げすぎたためもあって遺構を全く検出できなかった。わずかにF区で68溝を検出している。G区の鞍部ではpit群を検出している。

各グリッドの遺物の概要 (図12)

E2・F2出土資料(図12) 9は、C調査区南西隅の鞍部覆土から検出した青磁碗である。口縁下に雷文を持つ碗で、15世紀に比定できる。10は、17号土坑から出土した須恵器長頸壺で、体部下半は手持ちへら削りで、底面はへら起こし後にナデている。17は、24号溝から検出した須恵器杯。12・13・18は、畝溝状遺構から検出している。その他の土器は、小穴から検出した資料である。

E3・F3・G3出土資料(図13) 1は41号pitで検出した長頸壺で、穴の底に埋置したものであると思われる。5は112号pitから出土した、須恵器大甕の底部付近の破片である。11は包層からの出土で、外面にコンニャク判で鶴丸文を描き、高台から体部の境に三条のくすんだ染め付けの沈線が描かれた碗である。壺付けは露胎で、胎土はくすんだ灰白色を呈する。19世紀初頭の肥前系の磁器である。14~16は、包含層の出土。他の資料は、いずれも畝溝と小穴からの出土資料である。

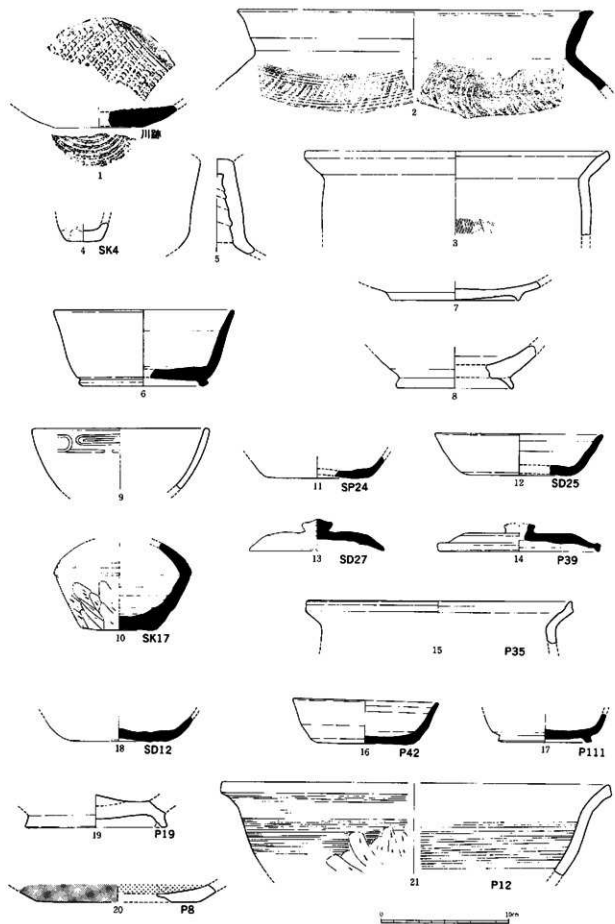
E4・F4区出土の資料(図14) 16~19が包含層出土資料の他は、pitや畝溝・土坑から検出した。5は戻口産と思われる有台杯で、6号掘立柱式建物の南側の177号pitから検出した。21と22は18号土坑から検出した資料である。21は内側底面に砂目がある内面に深い緑色の釉がかかった唐津の碗で、22は肥前系の碗である。

墨書土器

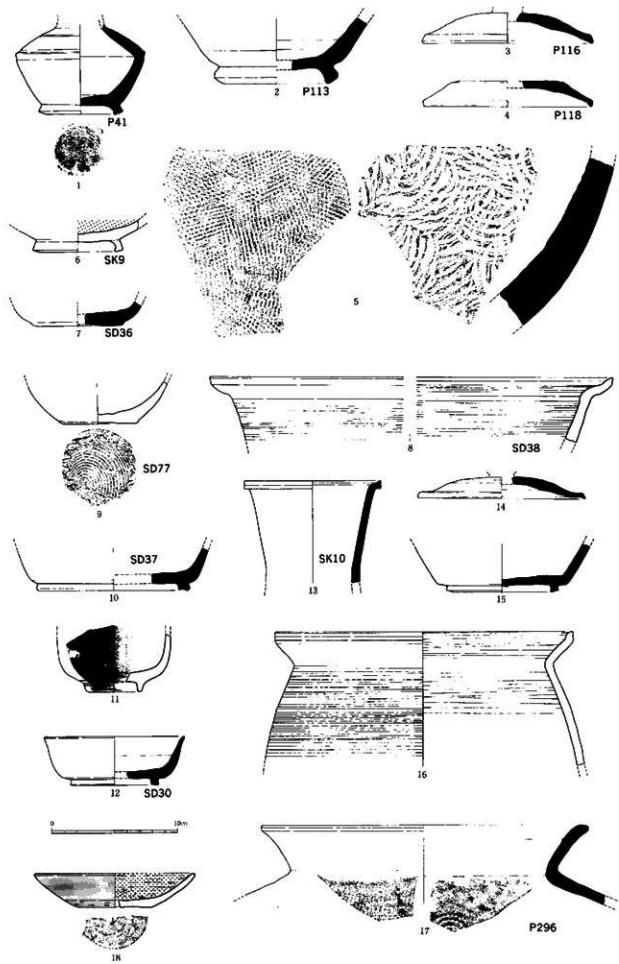
E5・G5区出土の資料(図17) 2・3は190号pitで検出した資料で、2の有台碗内面は剥落が激しくて黒色処理の有無は不明である。3は、内外面を磨いた上に赤色塗彩している。6は、3号掘立柱式建物の220号pitから出土した土師中甕である。上半部が遺存し、内外面をクロハケ調整している。15は、底部外面に判読不能の墨書のある杯である。

製塩土器

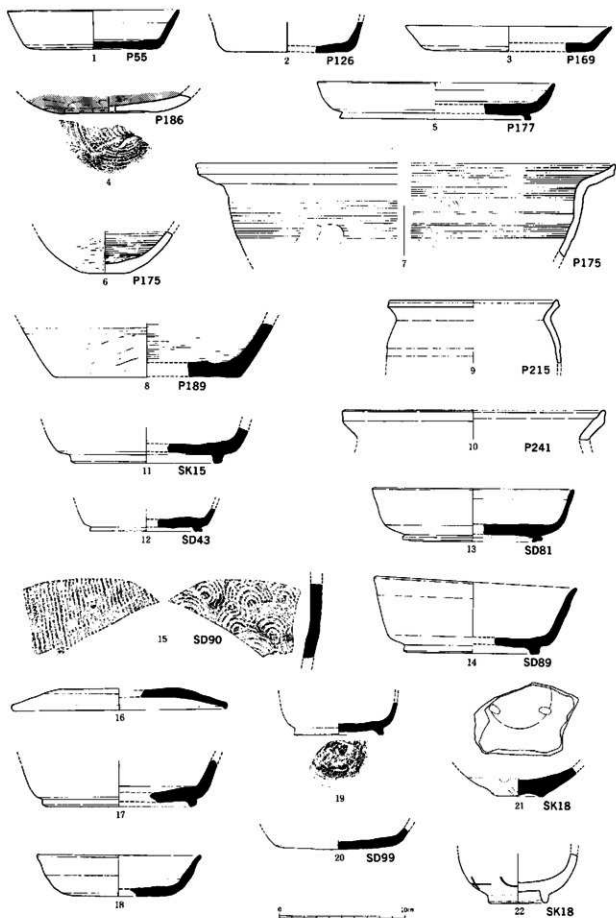
E5・G5区出土の資料(図18) 6~9は12号土坑から検出した資料。6は、底部外面に墨書を持つ杯。7は、口縁端部を上引あげた土師器の壺口縁部。8は口縁が直立する小甕。9はくすんだ字口縁の甕。5は6号土坑から出土した桐蓋。10はG6の包含層で検出した製塩土器の体部破片。



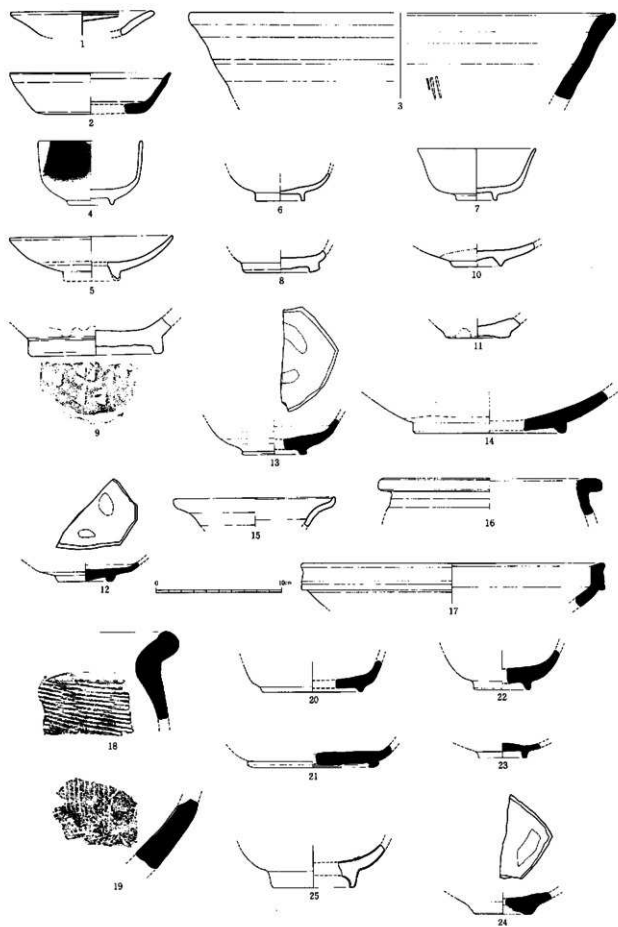
第12图 A·B·C地区、C-E 2·F 2 出土土器实测图



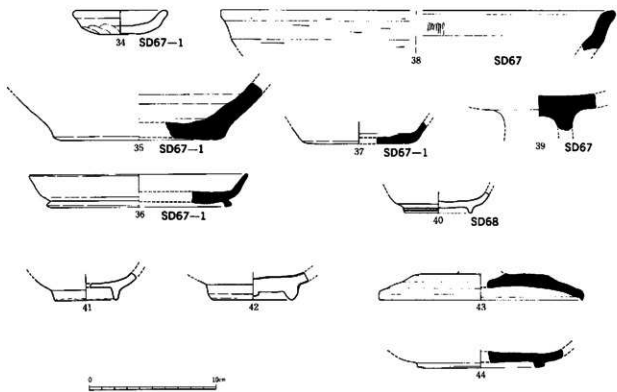
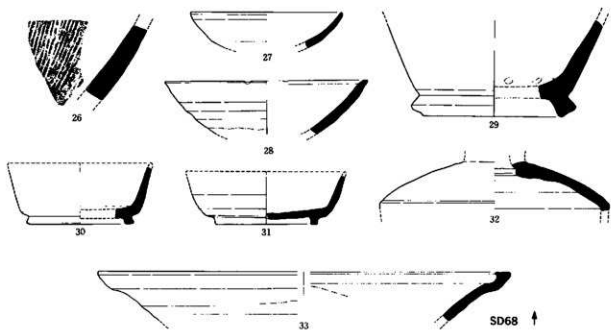
第13图 C地区、E3·F3·G3出土土器类图



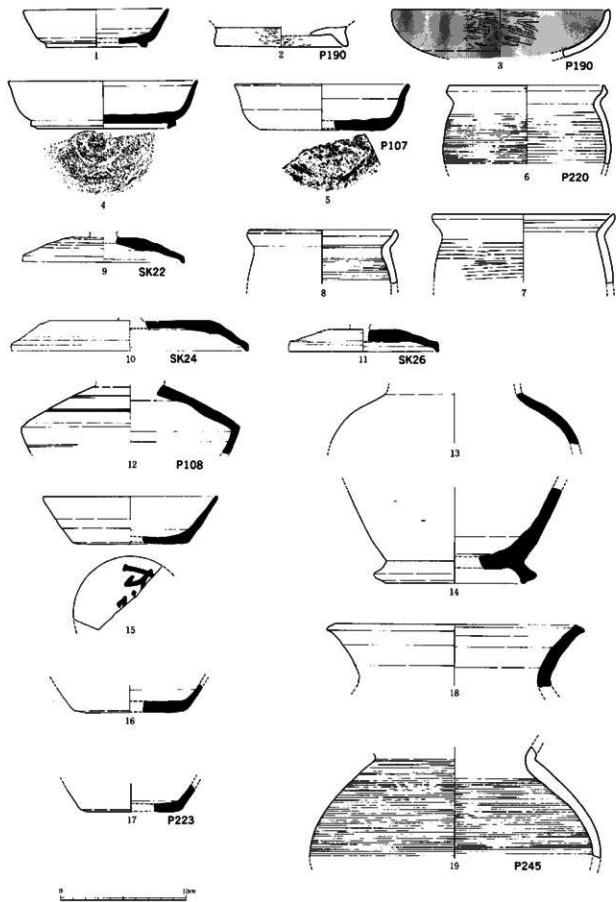
第14图 C地区、E4·F4出土土器実測図



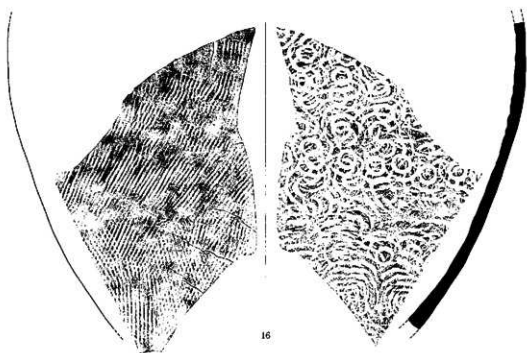
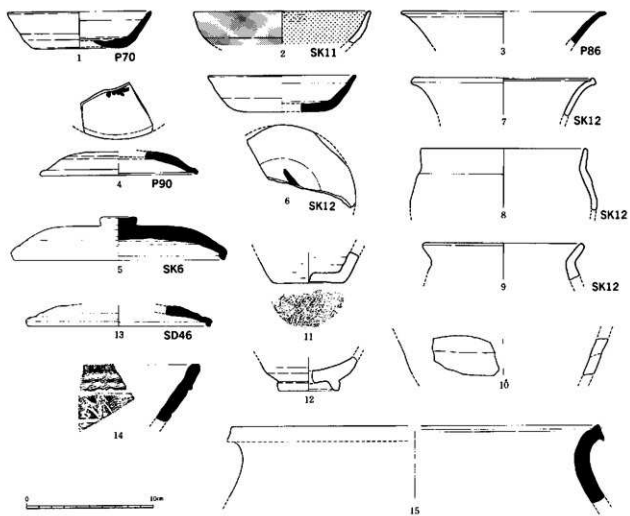
第15图 C地区、E 4 - F 6出土土器实测图 (68号清出土土器)



第16图 C地区、E 4 · F 5 · E 5 出土土器实测图 (26-33: 68号测)



第17图 C地区、E5·G5出土土器实例图



第18图 C地区、E·6·G 6出土器实例图

第4節 用地外周の水路関係調査

調査の経緯

津田駒株式会社への売却用地内の工場本体部分の発掘調査は1989年度に予定されていたが、用地内の既存水路は都市計画道路にあわせて付け替えし、そして春耕に際して使用されるものであった。そこで、商工課との打ち合せで遺跡の範囲内になることから工事に先立って発掘調査をおこなう必要を確認し、平成元年2月15日より調査に入った。当該部分は都市計画道路が通る予定となっているので、その設計に合わせて水路が敷設されトレンチを設定した。工期との関係から工事とは併行するように調査した。延長270mで調査面積は約470m²である。緊急を要する調査となったため、石川県立埋蔵文化財センター土木班の総力を挙げて調査した。担当は伊藤雅文で、平田天秋、橋本英道、藤田邦雄、岡本恭一の援助をうけた他、西谷昌司、真智敏郎の補助を得た。

調査日誌（1989年2月15日～3月13日）

2月15日（晴れ） 器材を搬入してプレハブを設置し本日より現地調査に入る。重機掘削をおこなう。

2月16日（雨） 1、2区の精査、写真、実測。礫原のため遺構はわかりにくい。

2月22日（晴れ時々雪） 3区の精査。

2月23日（晴れ） 4区の精査。3、4区の写真、実測。

2月27日（晴れ） 5、6区の精査。重機掘削は5～6区まで完了。

2月28日（晴れ） 5、6区の精査、写真、実測。

3月6日（晴れ） 11、12区の精査、実測、そして埋め戻し。

3月9日（晴れ） 7、8区の精査。

3月10日（晴れ） 7、8区実測、写真。9、10区の精査、写真。

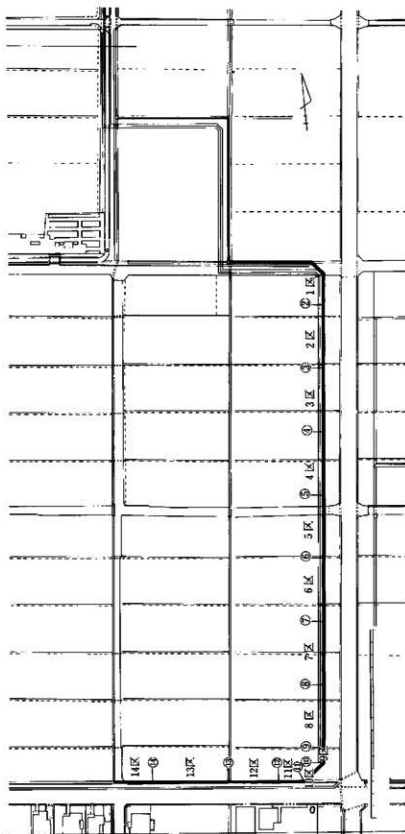
3月13日（曇） 9、10区実測。器材を撤収して現地調査を終了する。

調査区の設定と基本土層

発掘調査を実施したのは工事で2号水路といい、第 図で黒く塗り潰したところである。調査区は次年度の工場本体工事に伴う発掘調査との関係から独自のものを設けず、工事図面を基に設定した。つまり、工事の遣り方のメンバーを基にそれぞれ1区等命名し、遣り方に打たれた基準釘を実測ポイントとした。なお、水路は9区以降直角に東に折れているところでは、それぞれの遣りかたにナンバーをつけたために工事図面のナンバーと一致しない。

基本土層は極めて単純であるが、ナンバー10（第19図中で丸つき数字）までとそれ以降とは全く違う土層となっているので分けて記述する。

ナンバー10までは現耕土・床土の下には20～30cm強の淡灰色粘質土層がある。この層は部分的にシルト気味の部分もある。調査時には現耕作土の客土と考えたが、その後野々市町教育委員会の田村昌宏氏の御教示によると旧耕作土ではないかということである。その下には20～70cmの包含層がある。基本的に2層に分れるようであるがかなり不鮮明な部分も多く明確に難



第19回 栗田遺跡立会調査調査区位置図

い。つまり上層に黒褐色粘質で、遺構の埋土にも二者認められるようである。なお厚い包含層は長期にわたる表土の堆積の結果と考えられようか。ナンバー10付近は部分的に落込んでいるようで、灰色シルト土が包含層の間にある。

ナンバー11以降は急激に地山が上がり、包含層も黒色粘質土と共に褐色礫土となる。しかしナンバー13で地山の整地と思われる黄色粘質土が見られる他は耕土、床土、包含層となっている。なお、全体的に遺物の出土は皆無に近い。

遺 構

遺構の分布は3区から8区までピットが多く分布するものの、それ以外ではほとんど認めることができなかった。ただし、1・2区のベースは礫となっており、限られた時間内での作業であったため、見落した遺構がある可能性は大きい。また、下端で1m内外の狭い調査区であったので建物跡の検出は困難であった。9区以东はほとんど遺構がない。

ピットの多くは柱根を認めることが難しい。埋土はほとんど包含層1層のみであった。確実に柱穴となるピットは方形を呈するようで、柱の抜取りが行なわれたためか壁面が多少抉れているものが多くあった。なお、不定形あるいは円形のピットは木根のものと考えられるのが多くあった他、地山の大きなブロックを含んでいるものもあった。

掘立柱式建物

1号掘立柱式建物 3～4区にかけての柱列である。4間確認し、柱間が210～250cmを測る。ピットは長方形を呈するものが多い。ピットの切りあい関係から本遺跡で新しい方の遺構と考えられる。

2号掘立柱式建物 6区の柱列である。4間確認したものの1号建物のように柱列がトレンチ内で完結していないので横列の可能性もある。ピットは全て方形を呈し中央のピットには抜取りらしい斜にはしる落込みが見られる。なお、それより一つ南のピットには礫が見られ根石の可能性もある。なお北端で確認したピットは他のピットに切られている。

3号掘立柱式建物 2区の南端で確認した。建物のコーナーである。それぞれ1間づつで、190と270cmである。柱の間隔から南北方向の建物と考えられる。

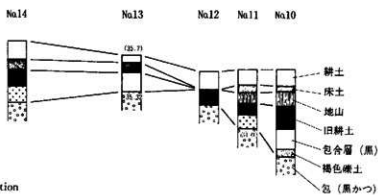
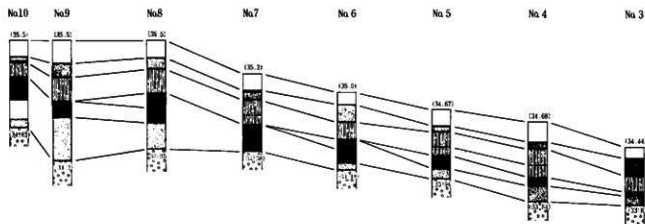
4号掘立柱式建物 4区で確認した。建物のコーナーを確認していないものの、南北方向の建物と考えられる。そうすると、梁の柱間が200cm(推定)で桁の柱間が250cmとなる。ピットはやや不定形である。

S X01 3号建物に隣接する。はば4.2mの溝状の落込みである。調査期間の関係から完掘していないので深さ等は不明である。埋土は包含層である。

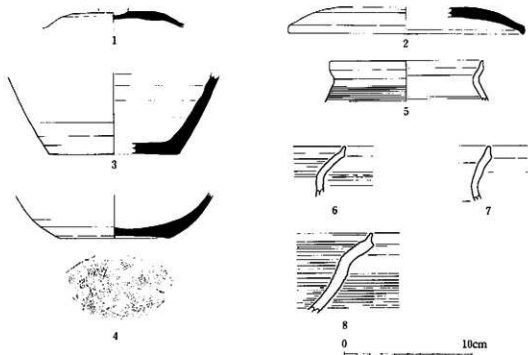
遺 物

環董(1, 2) 1は口径18.3cmを測る。天井部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデを施す。口縁端部は三角状に小さく下方に垂下する。胎土は微砂粒を含み焼成も良好である。外面は暗紫灰色、内面は灰色を呈する。2は天井部のみ遺存しているが、小型の部類に入り口径12cm程度のもので推定できる。鈕は剃落し、内外面回転ナデで仕上げられている。砂粒の混入は少ない。焼成は悪く生焼状態で、乳白色を呈する。

壺(3) 底部のみ遺存しているので、全体的な器形はわからない。底径10.4cmを測る。底面は平坦で屈曲して直線的に体部が伸びる。外面は回転ヘラケズリの後回転ナデ、内面は回転ナ



栗田土層 Section



第20図 外周水路調査区の土層と出土土器 (1989年度)

テを施す。砂粒の混入の少ない胎土で、焼成も良く淡青灰色から灰白色を呈する。

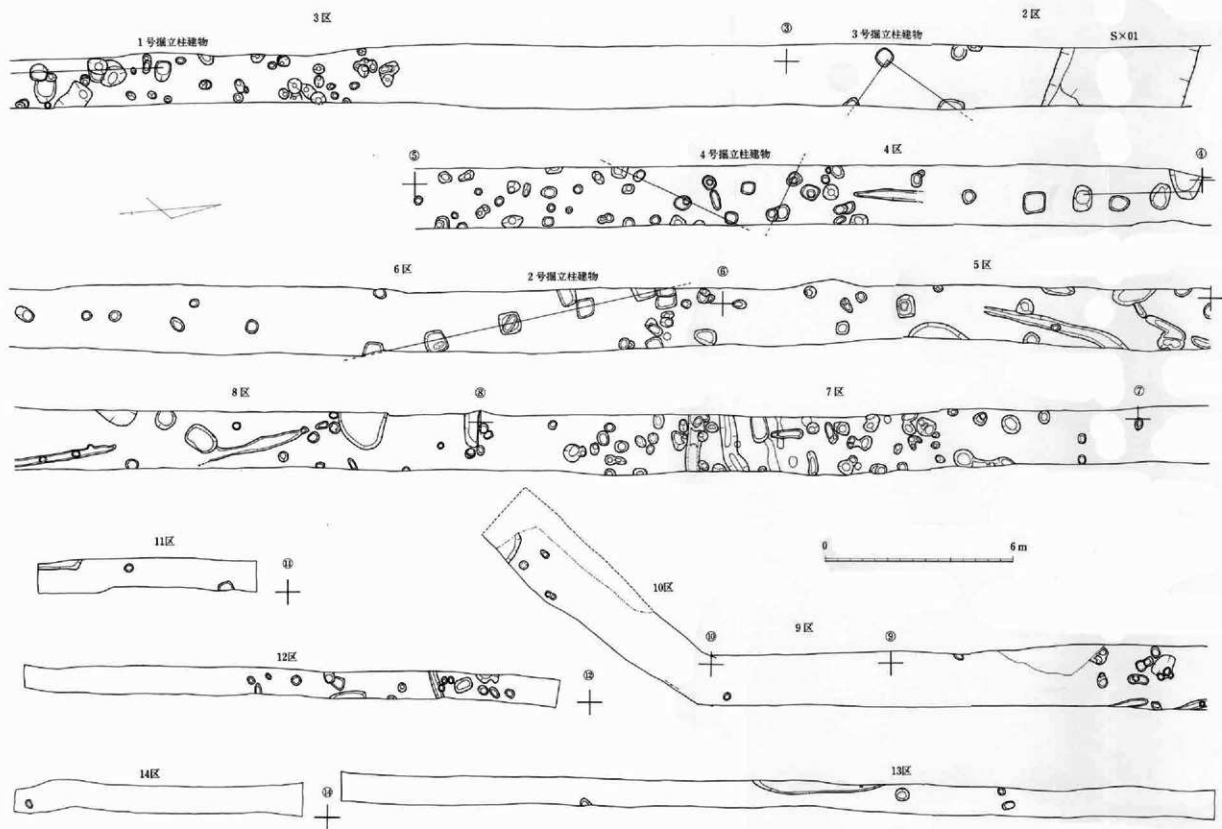
碗(4) 底径8.6cmを測り、底部のみ遺存しているが大型品である。底部は回転糸切りによっており、そして底部から1.5cm程口縁よりまで回転ヘラケズリが施されている。しかしこれは断続的に、つまり一気に施されるのではないようで、工具が複数回器面から離れるようである。内外面回転ナデが施されている。微砂粒を含み砂性の強い器面をしている。内外面暗灰色を呈し、焼成は良い。

甕(5~7) 5~7はロクロ成形の甕である。5は口径11.9cmを測る。口縁部は面をなし受け口状を呈する。内外面とも口縁部はナデ体部はカキメを施す。1mm前後の砂粒を少量含む。焼成は甘く黄橙色を呈する。なお口縁内面に有機物が附着している。6・7は小破片で器形も5とよく似ている。口縁端部は面をなくの字に屈曲して体部にいたる。7はその度合いが緩やかである。内外面ともカキメが施されている。ともに微砂粒を少量含む胎土で、焼成は良い。6が淡黄橙色、7が淡茶灰色を呈する。

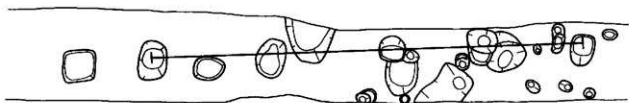
鍋(8) 小破片である。口縁端部は面をなし緩やかにくの字に屈曲して体部にいたる。内外面ともカキメが施されている。微砂粒を少量含む、焼成は良く橙灰色から暗灰褐色を呈する。

小 結

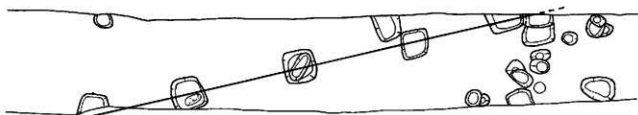
限られた調査区の割には多くの遺構を検出することができた。しかしながら作業員2人に2から3人の調査員という面々での急いだ発掘であったので、遺構を検討する余裕がなく、図面上でのピットの集中がそのまま遺構の集中を現しているとは言えまい。これらの遺構あるいは落込みの意味を把握するためには、本体工事のそしてその後の工事に伴う発掘調査の成果を援用しなければならないだろう。(伊藤雅文)



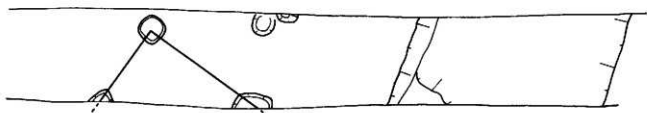
第21图 外周水控渠主区遺構平面图



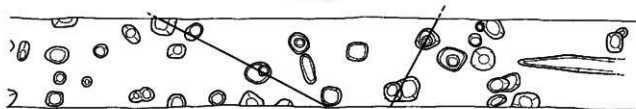
SB-01



SB-02



SB-03



SB-04



第22回 獨立柱建物平面図

第五章 縄文・弥生の土器

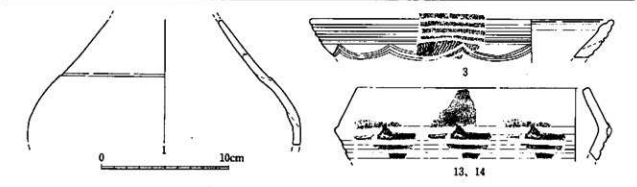
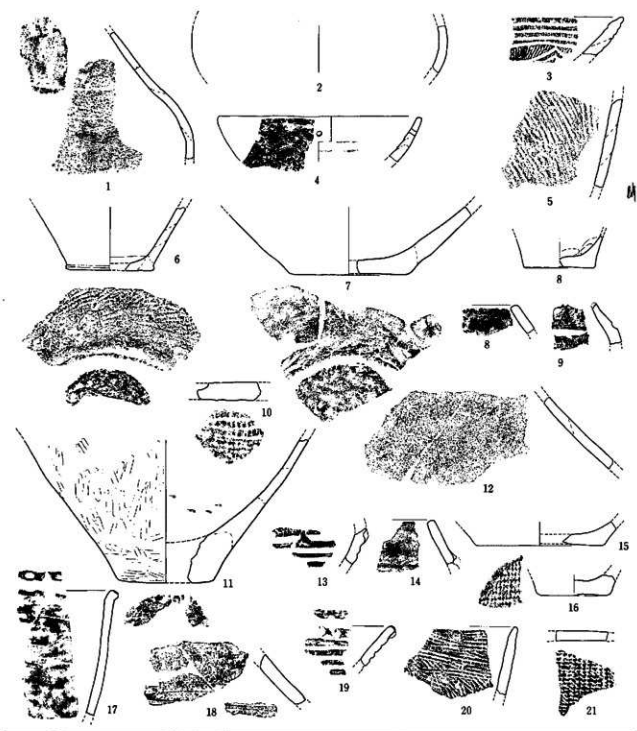
B調査区[第23回1～5]

縄文土器(2～5) 2はA3区包含層出土である。色調は外面橙色、内面ぶい黄褐色である。胎土には2mm前後の砂粒を多く含む、焼成は良好である。調整は外面不明、内面ナデである。3は表採であり、下野式前半(大洞C2式併行)の浅鉢である。外面は燃糸を地文に持ち、2条以上の連弧文を持つようである。内面には1条沈線と段を持つ。色調は内外とも橙色である。胎土には0.5～2mm大の石英・長石をやや多く含む。4はA3区包含層出土である。口径15.8cmを測る浅鉢で、補修穴を持つ。色調は外面ぶい黄褐色、内面灰黄褐色である。胎土には1mm大の砂粒を多く含む、焼成は良好である。調整はナデである。5はA3区近代溝出土である。色調は外面ぶい橙色、内面ぶい黄褐色である。胎土には1mm大の石英・長石と海綿骨針を多量に含む。焼成は良好であり、調整は外面条痕、内面ナデである。

弥生土器(1) 1の頸部はA3区包含層、胴部はA4区打製石斧一括土器No.3である。弥生時代前期の遠賀川式土器である。胴部最大径は推定21.6cmを測る。胴部と頸部の境に沈線を入れ、上を薄くして段を形成する(段のC類、井藤1981)。色調は浅褐色である。胎土には、1～2mm大の砂粒(流紋岩が主体、石英・長石が少々)が多量に入る。焼成は良好だが、表面は少し荒れている。調整は(ハケのち?)ミガキと思われる。成形は粘土板(帯)で行われあり、粘土板(帯)の接合は外傾接合(遠賀川式土器の特徴、佐原1986)である。

C調査区[第23回6～21]

縄文土器 6は底径7cmを測る。色調は外面橙色、内面浅黄褐色である。胎土には1mm大の(丸い)流紋岩をやや多く含む。焼成は良好であり、LR縄文を施したのち体部下半にミガキを入れる。内面はミガキ(ケズリ?)のちナデである。9は浅鉢の口縁部と思われる。色調はぶい黄褐色である。胎土には1mm大の砂粒を少々と多量の海綿骨針を含む。焼成は良好であり、調整はヘラナデである。10は眼鏡状突帯を持つ浅鉢で、下野式である。沈線だけで突帯を造り出している。色調は浅褐色である。胎土には1mm大の砂粒と海綿骨針をやや多く含む。焼成は良く、調整はヘラナデである。12はF4区包含層出土である。壺の胴部上半である。色調は黄褐色であり、胎土には1mm大の石英・長石、海綿骨針を多く含む。焼成は良好であり、調整はナデである。13～15はF4区99号溝出土である。13、14は同一個体であり、眼鏡状突帯を持つ浅鉢である。第23回下の図は概念図であり、口径は任意である。時期は下野式後半である。色調は外面黒褐色、内面は灰黄色である。外面はススが付着している。断面は表面が褐色、内側は灰色のサンドイッチ状になっている。胎土には1mm大の砂粒と海綿骨針をやや多く含む。焼成は良好であり、調整はヘラミガキである。15はスグレ状圧痕を持つ底部である。底径9.6cmを測る。色調は外面ぶい黄褐色、内面ぶい褐色である。胎土には1mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好であり、調整はナデである。17はF3区地山内出土である。深鉢であり、口縁部外面を肥大させ、外側にひねり出す。口唇部には爪による楕円形のキザミを入れる。色調は外面黒色～暗灰色、内面は黄褐色である。胎土には1mm大の砂粒をやや多く含む。焼成は良好であり、調整は外面ヘラミガキ(ナデ)、内面ナデである。18、19はF4区69号溝出土である。18は壺の頸部と思われ、1条の沈線を持つ。12と同一個体の可能性もある。外面には黒斑と赤彩痕



第23図 縄文・弥生の土器実測図

がある。色調は外面にふい黄褐色、内面にふい褐色である。19は浅鉢であり、外面を赤彩する。口縁部には、指で摘み上げたキザミを持つ。色調は内外とも灰黄褐色であり、胎土には1mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。20はF6区包含層出土である。深鉢であり、色調は外面暗黒色、内面灰白色である。胎土には1mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。21はF4区包含層出土である。15と同一個体の可能性もある。スダレ状圧痕を持ち、色調はにふい褐色である。胎土には1mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。22は拂土から出土した。スダレ状圧痕を持つ。色調は外面浅黄褐色、内面黄褐色である。胎土には1mm前後の砂粒を多く含む。焼成は良好であり、調整は内面ナデである。

弥生土器(7、8、11、16) 11は遺賢川式土器であり、E3区地山内出土である。壺の底部である。底径7.6cmを測る。色調は外面にふい黄褐色、内面灰黄色である。胎土には、1～3mm大の砂粒を多く含むが、石英・長石は少ない。また、(金)雲母も微量含む。調整は外面ミガキ、内面ケズリ(ミガキ?)のちナデである。体部内面には炭化物が付着する。

7はE2区4号土坑出土である。底径9.6cmを測る。色調は外面橙色、内面明黄褐色である。胎土には1～3mm大の石英・長石を多く含む、1mm程度のシャーロットを少々含む。焼成は良好であるが、全体に磨耗している。調整はミガキのちナデと思われる。8はE5区67-1号溝出土である。底径5.6cmを測る。色調は外面灰白色～黒褐色、内面灰白色である。胎土には、0.5mm以下の砂粒(石英・長石主体)を多く含む。焼成は良く、調整はナデと思われる。16はF4区78号溝出土である。底径5cmを測り、色調は内外ともににふい黄褐色である。胎土には0.5～2mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好であり、調整はナデと思われる。

まとめ 縄文土器では、時期の判断できるのは3(大洞C2式併行)、10、13・14(大洞A式併行)であり、下野式である。6、7はやや古い可能性(晩期中葉)も考えられる。

弥生土器では、1と11以外は時期は特定しにくい。1は遺賢川式土器であることは、器形・調整・成形技法からも明らかである。器形的には板付I、II式に近いと思われる。畿内地方では弥生時代前期の編年案が多くだされている(井藤1981、藤田1989ほか)が、北陸地方は資料が少なく、細分が行えないので、基本である佐原編年に対比したい。1は畿内第I様式古段階に相当する。古段階の資料は石川県内では類例がなく、次の中段階の資料が存在する。松任市八田中遺跡(久田1988)と松任市乾遺跡(1990年一部調査)に存在する。八田中遺跡は下野式後半から柴山出村式にかけての漸移的な土器群(柴山出村1式)に削出突帯第II種小条を持つ壺が共存した。乾遺跡では、上下を削り出した突帯内に2条沈線を持つ壺(削出突帯第II種小条)が名古屋市高蔵遺跡出土土器(重松1987、P.L01-2)に以ている大地型壺が共存した。2遺跡の例から畿内第I様式古段階は柴山出村式以前の下野式後半(大洞A式併行)に併行する可能性がある。栗田遺跡でも下野式後半の土器の出土が多い。

近畿地方での下野式土器の出土はどうであろうか。家根祥多氏から滋賀里遺跡(湖西線関係)に出土例があると教示を得たが公表されていない。長原遺跡では下野式後半の浅鉢(家根1982図版123-172)がある。これは長原式と共存した。また、長原式と古段階と浮線文土器前半(松尾ほか1983図版90-88)の共存が確認されている。よって、下野式後半は長原式と古段階と浮線文土器前半と併行すると思われる。また、唐古・鍵遺跡第20次SK-215の浅鉢がある(藤田ほか1986、第22図58)。SK-215は大和I-2様式(中段階、新段階の一部)の標式遺構(藤田1989)であり、下野式後半と畿内第I様式中段階が併行する可能性も考えられるが、下野式後半の浅

鉢は柴山出村式にも伴うことがあるので、今後の検証が必要である。

下野式後半の土器はどうであろうか。下野式後半(大洞A式併行)は高瀬勝喜氏により長竹式として分離が検討されている(高瀬1983)。長竹式は吉田淳氏によると野々市町御経塚遺跡ツカゲ地区の調査結果から2分できるという。前半は長竹遺跡の主体的土器群であり、後半には前半の要素が崩れた一群と浮線文土器が伴うという。また、野々市町押野タチナカ遺跡では柴山出村式に浮線文土器が伴うという。これらのことから下野式後半～柴山出村1式にかけては3段階の時間的変遷が想定される。これは工字文の変遷(石川1985)や浮線網状文と東海西部の五貫奏式・馬見塚式・櫻王式の変遷(中島・渡邊1989)とも符合する。

下野式

新潟地方での下野式土器の出土はどうであろうか。鳥屋遺跡(石川1988)が東端である。石川日出志氏は鳥屋式を1式、2 a b式を設定され、1式大洞A式古段階、2 a式は大洞A式後半、2 b式は大洞A'式と水式に伴うとされた。鳥屋1式は浅鉢は大洞C 2式新段階の特徴を持ちながら、体部文様に充縄縄文手法が欠落するとし、下野式変が共存するという。浅鉢の変化は長竹遺跡(中島1977)でも同様であり、鳥屋1式と長竹式前半は併行するものと思われる。

以上の関係をまとめたのが表1である。しかし、各地方との共存関係を検証するには資料不足は否めないのが現状である。今後の各地での類例の増加と研究の進展に期待したいし、また当地を含めた各地域からのご批判を頂きたい。なお、石川日出志、赤沢徳明、富山正明、浜崎悟司、藤田三郎、吉田 淳氏にお世話になった。記して感謝する。

表1 周辺地域との関係

近 畿	東海西部	石 川	新 潟	東 北
滋賀里IV	西之山	下野(前半)		大洞C2(古)
口酒井	五貫(前半)	下野(後半)	上野原	大洞C2(新)
船橋	馬見塚(後半)	長竹(前半)	鳥屋1	大洞A(古)
古長原	馬見塚	長竹(後半)	鳥屋2a	大洞A(新)
中(水走)	貝殻山	柴山出村1	鳥屋2b	大洞A'
新	西志賀	柴山出村2	権立	青木畑
	櫻王			
	水神平			

(注)太線は遠賀川式土器、細線は桑原式土器

参 考 文 献

- 石川日出志 1981 「三河・尾張における弥生文化の成立」『駿古史学』52 駿古史学会
 石川日出志 1985 「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』37-4 信濃史学会
 石川日出志 1988 「鳥屋1式・2式土器とその編年的位置」『豊栄市史』
 井藤暁子 1981 「弥生土器一近畿1」『考古学ジャーナル』159
 佐原 真、都出比呂志 1986 「弥生土器の製作技術」『弥生文化の研究3』 雄山閣
 重松和男ほか 1987 「高瀬遺跡発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
 高瀬勝喜ほか 1983 「野々市町御経塚遺跡」野々市町教育委員会
 中島栄一・渡邊朋和 1989 「浮線網状文系土器様式」『縄文土器大観4』小学館
 中島俊一 1977 「松任市長竹遺跡発掘調査報告」石川県教育委員会
 久田正弘 1988 「八田中遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
 藤田三郎ほか 1986 「唐古・鍵遺跡、黒田塚古墳」田原本町教育委員会
 藤田三郎 1989 「大和地域」『弥生土器の様式と編年近畿編1』木耳社
 松尾信裕ほか 1983 「長原遺跡発掘調査報告III」大阪市文化財協会
 家根祥多 1982 「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告II』大阪市文化財協会
 家根祥多 1984 「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所

第六章 石製品

調査区の中央が谷状地形にはさまれた尾根状地形になっているC調査区尾根筋北側には手取扇状地の堆積物である礫が露出している地帯がある。そこでは火山礫凝灰岩などの礫を利用して打製石斧の素材が製作されており、そこを中心に多量の母岩や剥片などの遺物が検出された。B調査区においても数点の母岩類を採集している。また、70点を越える打製石斧をB・A・C(西側からの順)の全調査区で検出しているが、遺構に伴ったものや時期を示す土器片などを伴ったものはほとんど無い。

遠賀川式 B調査区では数点の弥生時代の土器片(遠賀川式)が、打製石斧の周辺から検出されているが、共伴するものかは定かでない(第28図参照)。

ここに報告する石製品としたもののうち、大半が母岩類などの打製石斧の素材を作出した際の残り屑であり製品ではないが、一応、石製品という項目にしたことをお断りしておきたい。

出土した母岩類の分類は母岩(108点)、母岩砕(47点)、裂片(53点)、剥片(51点)、ハンマー(32点)、台石(9点)である。打製石斧は製品(31点)と破損品(46点)に分けた。その他、ドリル1点と、古代以降の砥石(第96図-309、310)が出土している。

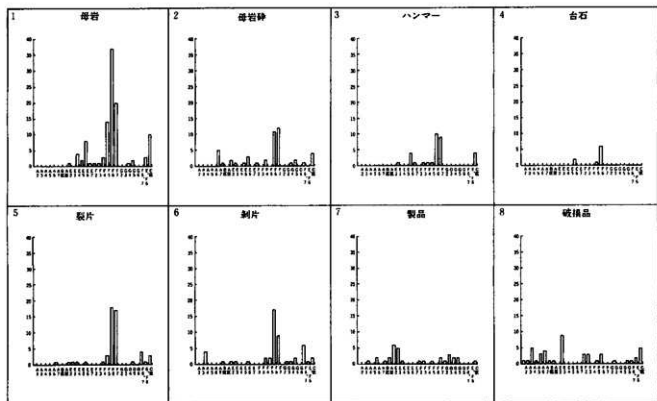
母岩と剥片 母岩類のなかの各類型の明確な定義はなく、例えば母岩としたものなかには、明瞭に打製石斧の素材を剥いだ剥離痕を残すものから、打ち倒ろうとして打撃を加えただけで剥離できなかったものまで含み、大きなものでは台石と、小さなものではハンマーと区別がつかないものもある。

また、母岩砕としたものは、本来、裂片や砕片と呼ぶべきものであろうと考えるが、母岩の原形がある程度推定できるものをあえて母岩砕(母岩の砕けたもの)とし、裂片としたものは、母岩砕に比べて厚みがなく、母岩の原形がほとんど判らないものや、剥片のなかの形の悪いものを加えたもので、非常に感覚的な分類である。

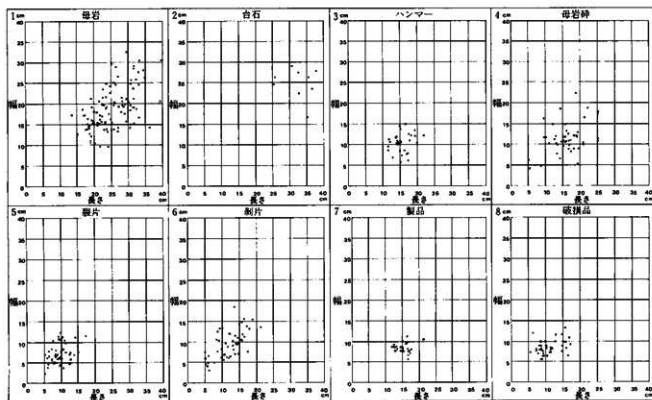
剥片についても同様で、この遺跡が、打製石斧の素材を採集した場所であるため、遺棄されたものは全て目的とした剥片の失敗品と考えられ、最も得たであろう剥片の形状を推定できるものを中心に、先行剥離面をもつものを加えて剥片としている。

第2表 母岩類・打製石斧の地区別出土数一覧

母岩類	ハンマー	台石	砥石	剥片	裂片	母岩砕	製品	破損品	小計
A2							1	1	2
A3							1	1	2
A4							4	1	5
A5							1	1	2
A6							2	1	3
A7	5						4	10	19
B1							1	1	2
B2	4						5	14	18
B3							2	1	3
B4							2	1	3
B5							1	1	2
B6							2	1	3
B7							2	1	3
B8							1	1	2
B9							1	1	2
B10							1	1	2
B11							1	1	2
B12							1	1	2
B13							1	1	2
B14							1	1	2
B15							1	1	2
B16							1	1	2
B17							1	1	2
B18							1	1	2
B19							1	1	2
B20							1	1	2
B21							1	1	2
B22							1	1	2
B23							1	1	2
B24							1	1	2
B25							1	1	2
B26							1	1	2
B27							1	1	2
B28							1	1	2
B29							1	1	2
B30							1	1	2
B31							1	1	2
B32							1	1	2
B33							1	1	2
B34							1	1	2
B35							1	1	2
B36							1	1	2
B37							1	1	2
B38							1	1	2
B39							1	1	2
B40							1	1	2
B41							1	1	2
B42							1	1	2
B43							1	1	2
B44							1	1	2
B45							1	1	2
B46							1	1	2
B47							1	1	2
B48							1	1	2
B49							1	1	2
B50							1	1	2
B51							1	1	2
B52							1	1	2
B53							1	1	2
B54							1	1	2
B55							1	1	2
B56							1	1	2
B57							1	1	2
B58							1	1	2
B59							1	1	2
B60							1	1	2
B61							1	1	2
B62							1	1	2
B63							1	1	2
B64							1	1	2
B65							1	1	2
B66							1	1	2
B67							1	1	2
B68							1	1	2
B69							1	1	2
B70							1	1	2
B71							1	1	2
B72							1	1	2
B73							1	1	2
B74							1	1	2
B75							1	1	2
B76							1	1	2
B77							1	1	2
B78							1	1	2
B79							1	1	2
B80							1	1	2
B81							1	1	2
B82							1	1	2
B83							1	1	2
B84							1	1	2
B85							1	1	2
B86							1	1	2
B87							1	1	2
B88							1	1	2
B89							1	1	2
B90							1	1	2
B91							1	1	2
B92							1	1	2
B93							1	1	2
B94							1	1	2
B95							1	1	2
B96							1	1	2
B97							1	1	2
B98							1	1	2
B99							1	1	2
B100							1	1	2
小計	108	47	32	9	53	51	31	46	347



第3表 母石類・打製石斧の地区別出土数



第4表 母石類・打製石斧法量分布図

母岩(第31図-1~第63図-79・図版92-1~図版105~79)

母岩としたものは108点であり、最大21,350g以上、最小1,174g、長軸39.5cm~15.0cm、短軸30.5cm~9.5cmの亜円、亜角礫で概して石の大きさや形状よりは、石の目を優先的に意識して選択しているようで、母岩の長さや幅の関係は、縦と横をどう見るかによって違ってくるが、剝離痕が長軸方向に沿う個片にあるものと短軸方向に沿う個片にあるものがあり、母岩として選択された原石の石の目が長軸に沿うか、短軸に沿うかで決っていると考えられる。

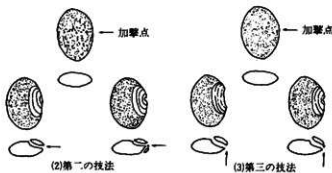
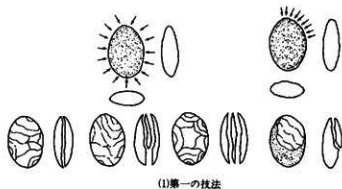
この母岩に残された剝離痕や加撃痕ならびに剥片、裂片との接合状態や出土状態から大別して三つの技法が存在していると推定されるが、一つ一つの技法が完全に独立したのではなく相互に補充あっていると考えられる。

・第一の技法

製作技法

まず、第一の技法として、模式図の(1)に示したように、選択した礫の縁辺の全周ないしは半周ちかくに幾度も打撃を加え、半截あるいは一部を剝離する方法で、剝離された剥片の剝離軸は多方向から見られるが、中央部では重なり合うためかほとんど不明瞭である。また、剝離の際には石の目を利用するものが多く、リングやフィッシャーもほとんど不明瞭である。資料としては、第31図-1と第79図-191の接合資料が代表例で、第31図-1~第41図-31までのものが挙げられる。

この技法によって剝離される剥片は大型のもので、両面に全く自然面を残さないものや、極一部しか自然面を残さない中落ちの板状の剥片が得られる場合もある(第80図-192、第82図-206)。この場合、その素材を用いた打製石斧は両面加工、あるいは全面加工状の石斧となる(第92図-271、第96図-307など)。



・第二、第三の技法

第二の技法は礫の側縁に対してほぼ平行方向の加撃を(模式図(2))、第三の技法は礫の側縁に対してほぼ垂直方向の加撃を(模式図(3))行うもので、剝離される剥片は加撃の力が均等に伝わればほぼ蛤状(第78図-170、171など)や鶴嘴状(第79図-181、182など)の剥片となるが、岩質が均でない場合や加撃の方向と石の目の方向が異なる場合は異形のものとなる。

この二と三の技法の区別は難しく、素材を剥いだ面の表面にも小さな剝離痕を

第24図 栗田遺跡における打製石斧素材剝離方法の模式図

残す32~37などを二とし、加撃点が周辺より内側にくる38~49などが三の代表例であるが、共に打点部分は抉れの著しいものから、ほとんど抉れないものまでである。また、各技法の組合ったものとしては51、65が一と二と三、53、54が一と二、64が一と三、52、55、56が二と三が組合わさったものと考えられるもので、他は組合せや技法の区別の付け難いものである。

素材となり得る剥片を剥離できたと考えられる剥離度を留める母岩は27点で、母岩として分類した108点の約25%であり、半載されたものや截断されたものの内何点のものから目的剥片が得られたかは不明であるが、仮に半載されたものの半数を加えてみても約33%にしかならない。また、この内素材が得られたと推定できる剥離度が1箇所だけのものが15点、2箇所のが10点、3箇所のが2点で、4箇所以上剥がされた痕跡を留めるものは無い。これらの素材を剥離できた母岩に対して、素材となり得ない小剥離面のみのものや加撃度を留めるだけのものまで、素材を剥離できなかったものが半数以上を占めている。

このように、母岩として選択した一つの石から巧く剥離できれば何点も剥ぐ場合もあれば、幾度も加撃を施しても素材が得られない場合には放棄しているため、規則性は無く、礫原で手当たり次第にその石の形や石の目、石質にあわせて、一〜三の技法で次々と加撃を施し、素材を剥ぎ取っていったものと考えられる。このような作業内容であれば一見無駄が多いと感じられるが、半面非常にのどかで牧歌的なものであり、自己消費分のみに入った形状の素材を採集しているものと考えられる。

それでは、何故一〜三の技法が存在しているのだろうか。一の技法であれば、母岩がバラバラに截断、分割されないかぎり、ある程度大きく厚い剥片が得られるであろう。その大型の剥片からは自分の目的とする形に整形することはできるが、二次加工の手間はかかる。つまり、目的を持った形のものを作るには適していると言えるが、難点として、素材を得る段階でも二、三の技法に比べて時間がかかるうえ、二、三の技法でえられた素材に比べて打製石斧への加工にも時間がかかると言える。

第二、三の技法については、一度か二度の加撃で素材を剥離しており、時間はかからない。しかし、余はどうまく力が全体に伝わらないかぎり、大きな剥片を得ることは難しい。そのうえ、蛤状あるいは鶴嘴状に剥離されるために、打製石斧へ二次加工する際に自ずと形が決ってしまうと言う難点がある。しかし、主剥離面と自然面の交わる側片は加撃点から離れるにつれて薄く鋭いものとなり、ほとんど二次加工を加えなくても刃部として使用できるものとなり、胴部に、着莖あるいは握りやすくするための加工及び厚さを整える(だいたい胴部中央の加撃点付近に最大厚がくる)ための加工を施すだけで製品となり得る利点がある。

剥片(第77図-160~第82図-207・図版111-160~図版114-206)

この遺跡での石器製作の工程としては、露出している原石の中から母岩(石核)となりそうな自然石を選択し、その選択された石に打撃を加え(加工)剥片を作り出し、その剥片類のなかから打製石斧の素材を採集(選択)すると言うもので、この場に残されたものは選択枝から外れたものが大部分であると考えられる。そのため、典型的な剥片は少ないが、母岩と接合するものや直接換合はしないが同一石であるため剥離方法の判るものが数点出土し、前述の三つの技法を裏付けている。

第78図-170、171は第二、三の技法によるものの例であるが、共にやや小型であることと170

はやや薄く、171はやや厚いために選択肢から外れたものと思われる。173～179も同じ技法による失敗品であろう。172、180はその出土状態(第29図参照)や接合状態から(第97図-①)第一の技法の際にできたものであり、190～207も同一技法によるもので192～194が最も典型例にちかいためであるが、何等かの理由により遺棄されたものである。191は第一の技法によるものの接合例であるが、その接合状態から(第98図-②)この場である程度の大きさ(形かもしれない)に截断しようとして失敗し廃棄されたものと考えられる。確実に第三の技法によるものと考えられる剥片は181～184で、181は母岩38と接合(第98図-③)するが、4点共に幅が狭いために素材として用いられなかったと考えられる。

第77図・161～169は先行剥離面を持つ小型の剥片で、始めは二次加工の際の調整剥片ではないかと考えていたものであるが、その出土数の少なさから各技法の加撃や大型の剥片の截断の際にできたものと考えられる。

これらの剥片類のなかには、193や199のように平均的な大きさの打製石斧の素材となり得るようなものや、小型品であればいくらかでも製作できるような剥片(170、171、202～205など)や縄文時代中期に見られるような石筥状の小型で薄いものの素材となり得る剥片(172～178、180)もある。これらが遺棄されていると言うことは、ある程度の大きさの素材を選択していると言うこととなるが、これは多分に製作された時期や用途を示しているものと考えている。

ハンマー(第82図-208～第84図-228・図版114-208～図版116-228)

製作の道具
ハンマーとしたものの内、214、219、220、222などは母岩とハンマーの両者の性格を合せもつようなもので、ハンマーとして使用しているうちに截断された剥片を素材としようとした可能性のあるもので、特に214はうまく截断できれば一度に二枚の素材が得られるようなものである。

この他、素材を剥いていた確原以外で打製石斧と共に検出された208などは、打製石斧が使用中に刃こぼれたような際に再調整を加えたものと考えられ、細かな調整が施しやすいような棒状を呈し、両端に加撃の際にできた細かな剥離痕を残すものである。

台石(第85図-229～第87図-233・図版117-229～図版118-233)

台石としたものは、母岩や剥片、裂片などが検出された面より半分以上埋れた状態で出土したものが多く、230などは2/3以上が埋った状態で剥離面や加撃痕を留めた部分だけが素材を剥いた作業面より上に出ており、確実に台石にされたものと考えられるものである。また、230(番号65)が出土した近辺(第29図参照)にはa～eの大型の台石(大きな自然石に打撃痕や剥離痕、傷が付いているもの)が出土したが、全て半分以上埋っており、到底人力では持上げられないために採集せずに現場に残した。

母岩砕・裂片(第64図-80～第73図-110・第74図-111～第77図-159・図版105-80～図版111-159)

この類型は、先に各類型の概要に述べた通り明確な概念のないもので、今後各類型の見直しと共に考えて行きたい。

打製石斧

この遺跡のA、B、Cの各調査区(約13,500㎡)から合計77点の製品、破損品が出土し、この内破損品の6点がそれぞれ2点ずつ接合でき、個体数として把握できる点数は74となる。

また、礫の露出地帯では、打製石斧の素材を製作したときの遺物が多量に検出されたが、打製石斧自体の出土は非常に少なく、淡黄褐色の砂質土である礫のないところを中心に礫原と鞍部を避けるように出土しており(第30図参照)、礫原ではほとんど使用されなかったと考えられる。

その他、C調査区南西隅の鞍部の落ち際の礫上に5点の打製石斧(第89図-241~245)が重ねられた状態で検出された。集落址以外での発見としては非常に珍しいものである。5点の内3点(241、243、245)が横長の剥片を素材としており、全ての頭部に調整を加えているが、242、244の2点の頭部は主剥離面側から打撃角の高い加撃で折りとるように調整を加えており、非常に特徴的で形状も素材の剥片の用い方も似かよっている。また、他の3点は正面観はやや違うが側面観の反り具合が近似しており、調整の方法から見ても同一の手によるものと考えられる。この他、5点全ての刃部に使用痕と考えられる擦痕や摩滅痕が認められ、使用されていたと考えられるものであるが、この出土状態から見て柄に着装された状態で置かれていたものとは考えられず、替え刃として作業場に持込まれたものが何等かの理由により遺棄されたものであり、埋納されたと考えられるようなものではない。



5枚重ねの打製石斧出土状況

製品(第88図-234~第91図-264・図版119~234~図版120-264)

31点の製品が出土し、打製石斧の形状としては全て短冊型、撥型の範疇に収まるもので、所謂分銅型のものはない。また、12点が横長剥片を素材としており、刃部の形状はU字形を呈する凸刃がほとんどで、ほぼ直刃であるものが数点ある他凹刃はなく、用いた素材の形状をそのまま利用したものが多いため一方に偏る偏刃が多い。

また、自然面を残すものがほとんどで、253は両面と頭部に自然面を残すもので、一石から作られた証拠を残す唯一のものであり、263は胴部上半に極めて少ない自然面を残すもので、第一の技法によって作出された中落ち状の素材が用いられていると考えられるものである。

その他、257、262、263は欠損した刃部に、258は頭部に再加工による調整が加えられたもので、本来の姿を失ったものである。

破損品(第92図-265~第96図-308・図版121-265~図版123-308)

46点の破損品が出土し、仮番号335と318、326と327が接合でき(265、266)完形となり、274と275も接合するが、頭部は欠失しており完形とはならない。これらの6点は全てB調査区からの出土である。

石斧の形状

打製石斧としての形状は製品と大差はなく、この内10点が横長剥片を素材としている。また、271のように頭部は欠失しているが、両面共に自然面を残さないものや、307のように側縁の一部に自然面を残すものがあり、中落ち状の剥片が用いられている。

この内、30点が胴部の括れ部付近で折れたもので、胴部上半を欠失するものと胴部下半を欠失するものは半々であり、刃部ならびに側片を欠失するもの6点、頭部ならびに側片を欠失するもの5点、側片のみ欠失するもの1点、頭部と刃部を欠失するもの1点、刃部片2点、頭部片1点である。

欠損部に対する力の加わりかたは、正面および裏面に対して並行方向からのもの(縦折れ)が13点(265、266、269、275～278、281、290、292、293、301、304)、垂直方向からのもの(横折れ)12点(270～274、282～284、294、295、298、303)で、274のように両方の痕跡を残すものもある。他のものの方向は不明確である。また、胴部の括れ部付近に最大厚がくるため厚さを整えるために多数の加撃が施されており、その調整の際の傷が原因で折れたと考えられるもの(265、294)もある。

特に265は完形状態では長さ、幅、厚さ、重量とも出土した打製石斧の中で最大のものであるが、調整が粗く自然面を残す表面胴部中央右側辺の調整剥離痕が折れ部で止り、頭部側辺に及んでいないためその加撃の際に折れた未製品である可能性がある。しかし、丁度折れ部を境に石質が異なっており、調整の際の力がその部分で跳ね上がり頭部側辺に及ばなかったとも考えられる。

使用痕

使用痕については、製品、破損品をとわずほとんどの刃部に見られるが、その痕跡は刃部の稜線や刃部近辺の剥離痕の稜線が摩滅し丸くなったもので、正面、裏面に明確な擦痕を残すものは少ない。また、252や278に見られるように擦痕の付く部位が偏るものや、255のように刃部の摩滅痕が偏るものが幾つか見られることは、偏刃が多いためかもしれないが欠損部の力の加わりかたを合せて考えると縦斧として使用されていたものもある可能性がある。

また、252のように頭部にも擦痕のあるものや、279、289のように胴部の一部に擦痕の見られるものがあり、前者は短斧型で頭部と刃部の形状や側面形が近似しており、上下両方の使用が考えられ、後者は着装の際のものとも考えておきたい。

素材について

打製石斧の素材となっている剥片の剥片剥離軸の分るものは、ほとんどが横長剥片であり、縦長状のものは数点しか無い。残りのものは剥離軸のほとんど分らないものや多方向からの剥離軸の見られるものである。この内、縦長の剥離軸に見えるものは大型の横長剥片の中央部分を使用している可能性がある。また、大型の横長剥片を截断して2点以上の石斧を作り出した場合にも、縦長剥片を利用したように見えることもあろう。

この遺跡から出土した打製石斧と、磯原で採集されていた打製石斧の素材剥片が全く同一時期のものと言う確証はないが、打製石斧の裏面である主剥離面の観察から見る限り、前述のように、母岩のところで述べた三つの技法の痕跡を残すものがほとんどを占めている。

打製石斧に利用されている剥片は74点中22点が、剥片剥離軸から見て確実に横長剥片である

と考えられる。この内第88図 234~236、第89図-245、第94図-285などが素材剥離方法における第二、第三の技法によるものと考えられる横長剥片であり、234、285などはその典型例で、加撃点から離れた薄く鋭い縁辺や刃部にはほとんど細部調整を施していない。

また、251や256は第一の技法で得られた大型の横長剥片を截断、或いはその一部を用いたと考えられるものである。そして、剥離軸の定かでないものや両面加工状のものほとんどが第一の技法による剥片を素材としていると考えられる。

しかし、第90図-253のように粘板岩ではあるが、転石となった自然面を両面に残し一石から作られた証拠を残すものが一点あり、両面加工状の打製石斧が全て第一の技法で作出された中落状の剥片を用いているとは言いきれない。だが、C調査区の礫原において、打製石斧素材となり得る偏平で手頃な石がほとんど見られないことから、当遺跡の打製石斧は基本的には剥片を素材とし、原石をそのまま利用することはほとんど無かったと考えている。

礫 原 の 状 況

C調査区礫原の内、北半部分は耕地整理の際に礫原を均して水田が造成されたために削平を受けており、ほとんど母岩類、打製石斧は出土せず、古代の遺構も検出されなかった。

そして、耕地整理による攪乱を受けていない礫原においても、打製石斧素材製作時の作業面が古代以降の遺構や攪乱により荒されてしまっており、母岩類の内、原位置を保ったままのものは、F-6区などの礫原と鞍部の境にあたるやや低くなって攪乱を逃れた箇所を中心に出土している。本来は、礫原全面において打製石斧の素材が採集されていたものと推定される。

第29図はF-6区の一部の出土状態であるが、礫原であり、細かな剥片や破片は原位置を保ったまま調査することは困難を極め、図に位置を落とさずに取り上げたものもあるが、概してその数は少ない。細かな剥片が少ない訳は、後述の事にも起因するが火山礫凝灰岩などの火山砕屑岩類を中心とした礫原の中で、自然に砕けたものと人工のものとの区別が難しく、見落した可能性もある。

また、大型のものであれば、先行剥離面の有無やその形状などから識別できるが、今回取り上げたものなかに全く自然物や後世の攪乱によるものが含まれていないとは言いきれない^①。母岩、台石の傷にしても打撃痕であるのか、風化による剥落などの自然にできた傷であるのかの区別は難しく、礫原以外にも含めて調査区全体で約500点余りのものを採集したが、洗浄後、人手が加わっていると説明できるものだけを取り挙げた。その他、台石となった大型の礫(人力で持上げられないもの)も現場に残した。

仮番号90、62、114、116、18、170は、直接接合はしないものの同一石(A)であり、仮番号194、361、51、485、229、236は接合でき(a)、仮番号17と20(b)、仮番号160(c)、のa、b、cは接合しないが同一石(B)である。このA、B2点のバラバラになった母岩の足りない部分は打製石斧の素材としてこの場から、持去られていると考えられる。

これらの母岩の接合状態や剥片、裂片の出土状況から、A、B共に第一の技法により原石の側縁を中心に加撃を加え、素材を作り出していると考えられる。加撃を施す際には、母岩となる原石を持ち上げ近辺の石に振り下ろしているため、仮番号65、49やa~eのような剥離痕、加撃痕を母岩や剥片、裂片が出土する作業面より上だけに留め下半部は埋れたままの石が見られ、これらが台石として分類したものである。また、仮番号83、127のような第三の技法により剥離

された痕跡を留める母岩が近辺に出土しており、特に127は素材を剥離した辺以外の側辺にも剥離には失敗しているが第一か二の技法よると考えられる小剥離面や加撃痕を留め、一〜三の技法が同時に存在し互に補充し合っていることを示すものである。

その他、ハンマー2点(仮番号35、411)も近辺から出土していることから、前述した母岩と剥片の接合例(第98区-⑧)に見られるような大型の剥片の截断や、持上げられないような大型の母岩からの素材の剥離にもハンマーが使用されていると考えられる。

石斧製作地

この礫原は、打製石斧の素材を採集した場であり、その素材を集落に持帰り加工を施していたのか、別の場所で加工し製品を持帰ったのかは定かでないが、F-6区の一部を約4m×4mの範囲で約140kgの土を採集して水洗したところ、十数点の裂片や破片しか得ることが出来ず、その量の少なさからここでは素材を得るだけで、その素材への二次加工は行っていないと考えられる。

素材から打製石斧に二次加工する場合には、石鏃などの小型剥片石器に比べて多量の調整剥片が作出されるはずであり、各遺跡での石器構成比で最も高率を占める打製石斧が集落内で調整、加工されていたとしたならば調整剥片を別の場所に捨てない限り、多量に出土するはずである。また、調整剥片が捨てられたとすれば、土器溜りなどのような剥片溜りが存在してもよいと考えられる。

県内においては、これまでに剥片溜りなどの報告例、あるいは剥片そのもの出土がほとんど報告されていないことからみて、集落外での調整加工であった可能性を否定できないが、調整剥片自体が人工遺物として認められず、取り挙げられていない可能性もある。

この調整剥片は、石鏃などの小型剥片石器の素材として用いられた黒曜石や瑪瑙、チャートなどと違い、集落内に自然に存在する安山岩や流紋岩類の表皮を残した剥片や先行剥離面を残すもので、これまであまり注目されておらず、自然に砕けたものと、人手によるものとの区別が細かなものになればなるほど識別が困難となり、他地域産の岩石のようにはいかないものである。

これらの調整剥片を検出することは整穴住居内の覆土であれば、近年ほとんどの調査で水洗選別が行われており、採集は可能であろうが、住居外で作成されていた場合、遺跡全面の水洗選別が行われない限り、困難であろう。また、遺構検出により多くの力を割く傾向があり、生活面が包含層としてとばされてしまっている場合には検出できないし、包含層の土を全て水洗することも無理であろう。

今後の調査では、集落址付近の礫原や集落の内外をとわず、礫や礫の細片にも注意を向ける必要があらう。

その他、未製品である可能性をもつものを含む6点の接合できる破損品が出土したB調査区においては、破損品の周囲から先行剥離面をもつ剥片が数点出土している。しかし、調査初期の段階であったために周辺の土を水洗選別しておらず調整剥片の有無が不明確であるが、素材から製品への加工が行われていた場所である可能性があることを付加しておきたい。

打製石斧の出土状況からの推測

当遺跡の石製品の出土状態を示した分布図(第30図参照)を見てみると、大きく別けて母岩類と打製石斧の二者に分れ、これはそれぞれの作業内容の違いを現しているものと考えられる。

つまり、礫原では打製石斧の素材を採集するための作業を行い、礫原と鞍部以外で打製石斧を用いた作業を行っているように見受けられる。また、打製石斧の出土状態だけを見てみると、散発的に出土している中にも数点がややまとまりを持ちながら出土しているようで、C調査区南西隅の鞍部の落ち際の礫上に重ねられた状態で出土した5点のように、始めはまとめられているものが後世の擾乱によって移動した可能性があり、5枚重ねのものは鞍部の落ち際にあつたために、やや低い位置からの出土であり、擾乱を逃れたものであろう。

この遺跡の調査面積と打製石斧の出土数を単純に比較するならば、約180㎡に1点の割合であり散発的に打製石斧が出土するようにも感じられるが、前述の通りまとまった部分だけを見るならば、狭い面積から多量(一番多量に出土したグリッドでは約64㎡に1点の割合)に出土しているとの見方もできよう。

これだけ多量の打製石斧が一度に使用されているとしたならば、何等かの作物を耕作していた可能性もある訳であるが、打製石斧以外の遺物が全く出土しておらず、粟、稗などの穀物類を作っていたとするならば、打製石斧に起耕具、除草具、収穫具の三つの機能があることとなる。

打製石斧には起作、除草具としての機能は認められるが、収穫具としての機能は認め難い。確かに使用しようと思えば使えるが、石包丁状の削器の方が断然優れている。削器としての機能を持つ器具が木製品であれば、朽ち果ててしまって検出されなかったと考えられる訳であるが、1点の石製品も無かったとは考えられない。ましてや削器と成り得るような剥片が、打製石斧素材製作地において採集されずに遺棄されていることから見ても削器のような器具は必要とされず、この地においては使用されていないと考えられる。このことから、摘み採ったり刈り取ったりする粟、稗、豆などの穀物類の耕作は考え難い。また、打製石斧だけで起耕から収穫まで行える作物としては芋類やカボチャ、ウリなどが挙げられるが、推定の域を出ない。

当遺跡の所在する手取扇状地では、ほとんど縄文土器が出土せず打製石斧だけが散発的に出土する遺跡が幾つかあり、近辺の末松遺跡や清金アグトウ遺跡などが挙げられる。このような遺跡は近年の調査によって認知され始めたが、すでに「これらの遺跡は食料資源としての根茎類や球根類を採集する目的で営まれ、場所を点々とかえるような出作り小屋のな性格」が指摘されており、打製石斧による生業活動の舞台であったことが推測されている。

粟田遺跡の打製石斧出土状態から見ると、一度に数点の打製石斧を携えてこの地において作業を行っていると考えられることから、出作り小屋そのものの存在を裏付ける直接的な証拠はなにも無いが、そのような性格自体を裏付ける間接的な証拠と成り得るのではなかろうかと考えている。また、母岩類、打製石斧共に明確に時期を決定する決め手はないし、ましてや両者共に同一時期のものであるとの確証も無いが、当遺跡から拾数点の縄文時代晩期の土器片と数点の弥生時代初頭の土器片が出土しており、一応、縄文時代晩期のものと考えておきたい。

今後、集落址以外で打製石斧が散発的成いは多量に出土する遺跡において、本当に打製石斧だけの出土なのか、削器状の剥片で使用痕のあるものが伴っていないか、見直すことと削器状の剥片の検出に努める必要がある。何故ならば、打製石斧と削器状の剥片が共存しても、様々な作業が行われていた集落内であれば、それを直接結びつけて起耕具と収穫具が共存したとは言えないが、集落以外であれば結びつく必然性が高くなるためである。

石斧の機能

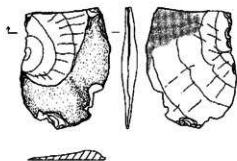
栗田遺跡の所在する手取扇状地扇中央部においては、縄文時代晩期の集落址としては長竹遺跡、乾遺跡が知られ、共に下野式後半の遺物が主体を占めている。この長竹遺跡に隣接する松任市橋爪遺跡から数点の下野式後半の土器片と打製石斧、母岩類が出土している。調査担当者によれば集落址とは考えられないもので、長竹遺跡の集落外にあたるものとのことである。

この橋爪遺跡から1点ではあるが、打製石斧に用いられた石材と同じ安山岩の横長剥片で、細部調整は行われていないが一方の側面と主刺離面の一部に使用の際にできたと考えられる著しい摩滅痕を留めるものがあり(第25図)、その形状や使用痕の部位から耨横具として用いられた可能性のあるものである。

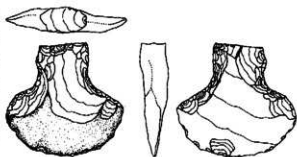
当例を以て穀類の耕作が行われていたとするものではないが、中国東北地方から沿海州にかけての初期農耕文化の石鋸で凸字型石斧、丁字型石斧と呼ばれるものと似た形状の打製石斧(第26、27図などのもの)が、県内においては長竹遺跡、乾遺跡などの下野式後半の段階になって始めて出現しており、これらのことを合せて考えるならば、この時期からの穀類の耕作の存在が推定できる。そして、削器や凸字型、丁字型石斧を含まない栗田遺跡の打製石斧はその前段階のものとも考えられる。

また、乾遺跡は、下野式後半～柴山出村式(弥生時代前期)の生活面が確認されており、今後の遺物整理と継続調査の進展によっては新知見が得られるものであり、期待したい。そして、栗田遺跡周辺の今後の調査の進展を持って改めて打製石斧の用途を考えてみたいが、花粉分析やプラントオーバーパルなどの自然科学の手を借りなければならないことを付加しておきたい。

尚、文末ではあるが、石質同定のために発掘現場と遺物整理事務所に通を運んで頂いた藤則雄氏と色々な助言を得た協会の各職員にお礼申し上げます。



第25図 橋爪遺跡出土削器状石器通 S=1/2



第26図 乾遺跡出土打製石斧通 S=1/2



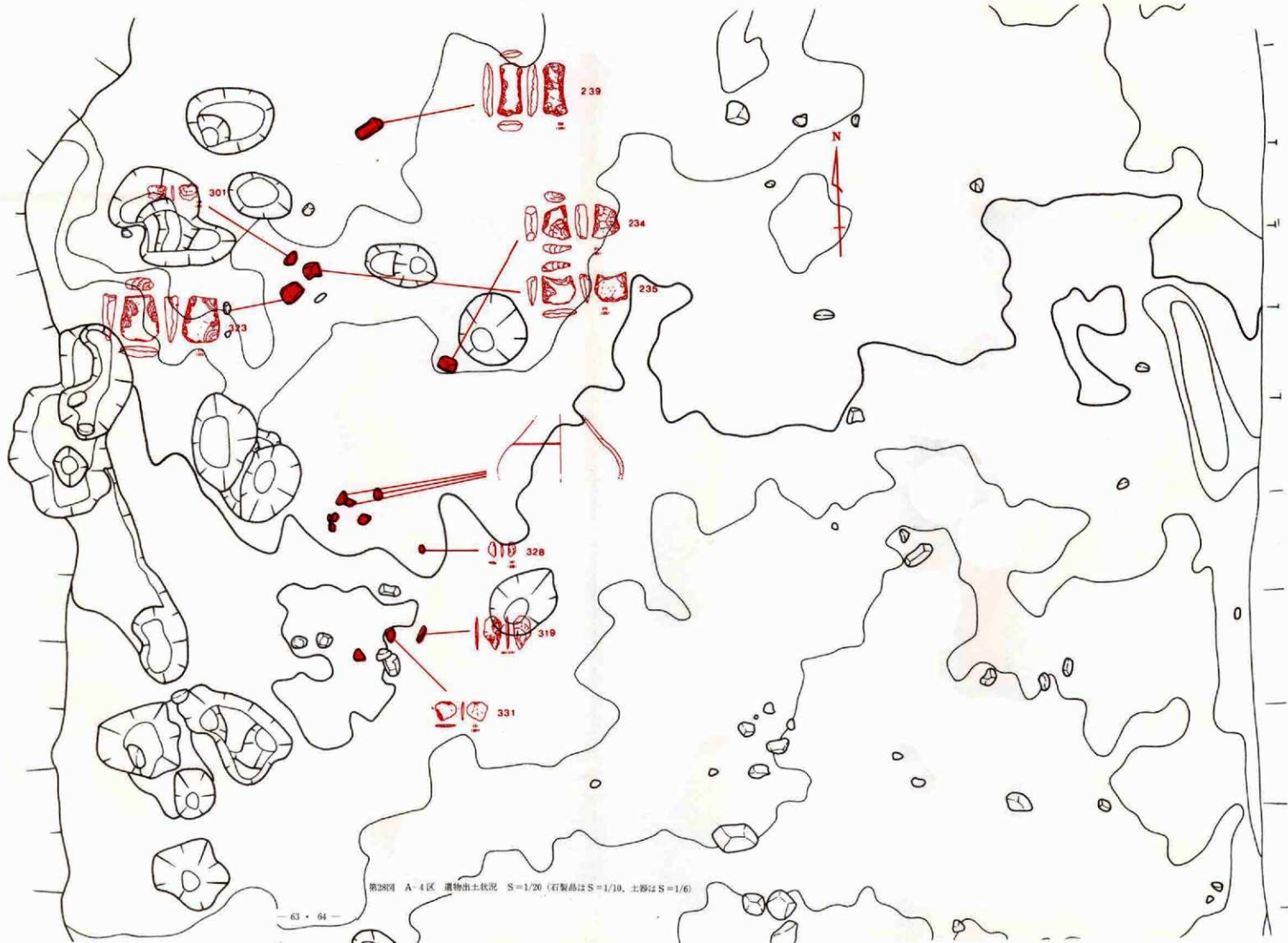
第27図 長竹遺跡出土打製石斧通 S=3/4

註

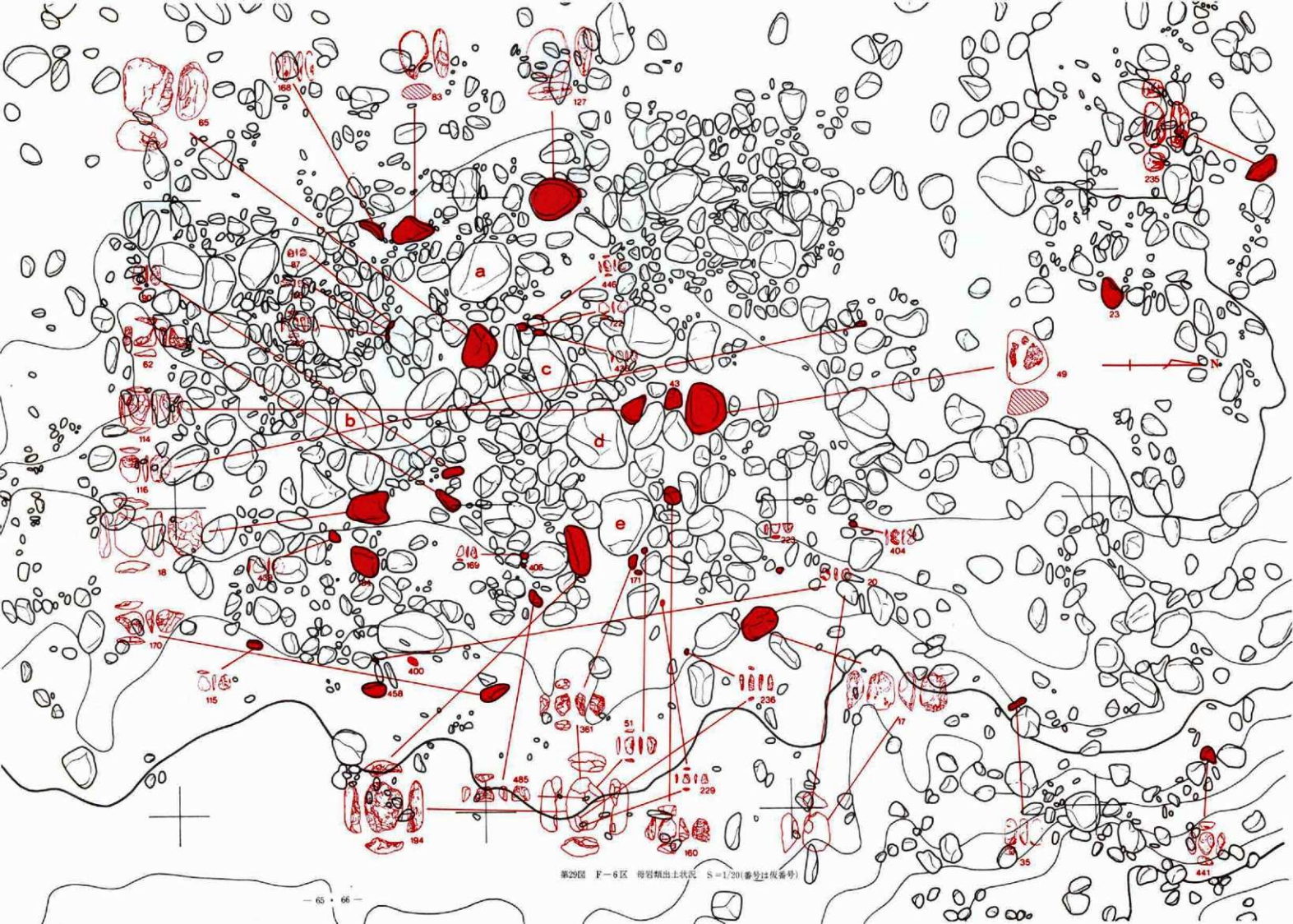
- 1 この選択の際に折取りや截断を伴う場合もある。
- 2 五枚重ね以外のものについては、頸部に調整を施すものと、素材の鋭い縁辺をそのままにしたものと、刃溝形状の調整を加えたものがある。
- 3 直立柱建物の柱の機がために用いるために砕いた石や、整穴式建物のカマドに使用され熱を受けて砕けたものなどが、後世の擾乱により調査区内に散らばったものを取上げている可能性もある。関東などでは熱を受けた剥片もあるようであるが、今調査で出土した母岩の内に熱を受けたものが存在しないため、熱を受けた剥片状のものは取り上げなかった。
- 4 磨製石斧の製作集落址と考えられている富山県朝日町環A遺跡では磨製石斧の製作に伴う極めて多量の剥片が出土している。
- 5 松任市長竹遺跡では「原石を含め打製石斧の未製品(失敗品?)及びフレークが多く出土しており、手取川によって運ばれた手取扇状地堆積の礫群を利用して盛んに製作されていた」と指摘されているが、調整剥片の有無は不明確である。
- 6 末松遺跡においては、打製石斧の母岩と共に製作にかかわる30点余りの剥片が出土しており、打製石斧を用いた作業を行った場において、同時製作された可能性が指摘されている(注8の文献)。
- 7 松村和男 1989「第V章 考察2 打製石斧について」『閉谷戸遺跡I——閉谷自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第27集——』群馬県教育委員会 513頁～525頁
- 8 北野博司 1989「末松遺跡 石川県農業短期大学附属農業資源研究所地変等工事に係る埋蔵文化財調査報告書」石川県埋蔵文化財センター
- 9 山本直人 1990「清金アグトウ遺跡」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報1』
- 10 山本直人 1990「縄文時代の地域社会論に関する一試論——手取川水系を中心にして——」『古代文化』第42巻第12号 51頁
- 11 松任市長竹遺跡内に所在する遺跡で、平成2年度に(社)石川県埋蔵文化財保存協会が発掘調査を実施した遺跡である。
- 12 松任市長竹遺跡内に所在する遺跡で、平成2年度に(社)石川県埋蔵文化財保存協会が発掘調査を実施し、平成3年度に継続調査予定の遺跡である。
- 13 久田正弘氏のご指示による。
- 14 平元真之・山崎純男 1984「第四章第四節 朝鮮の初期農耕文化」『弥生時代の知識』考古シリーズ5 72頁～76頁

引用・参考文献(註掲載は除く)

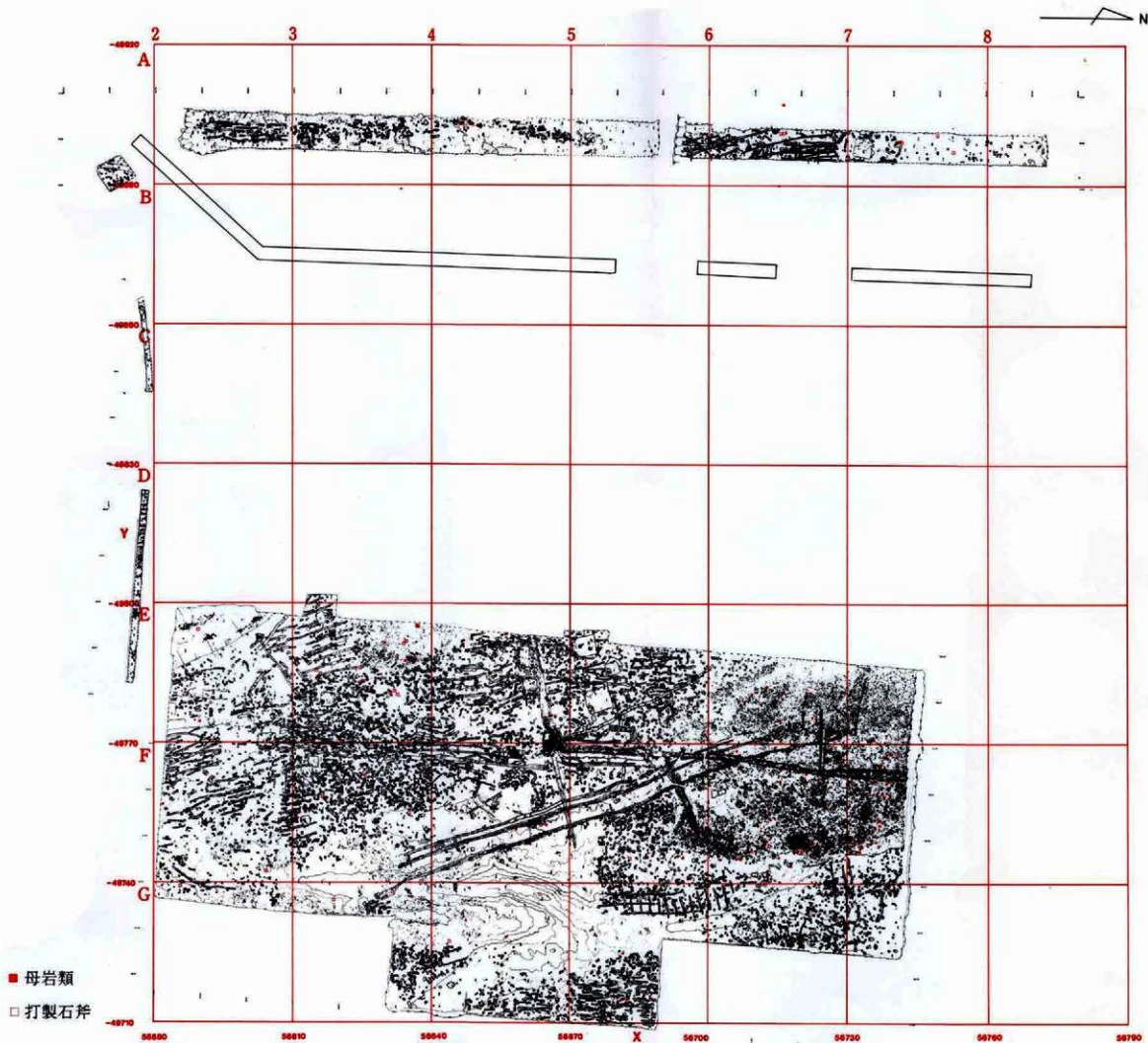
- 吉岡康暢 1971「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56巻第4号
- 小田静夫 1976「縄文中期の打製石斧」『どるめん』10
- 中島俊一 1977「松任市長竹遺跡発掘調査報告書 県道松任一矢作線道路改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書」石川県教育委員会
- 佐原 真 1977「石斧論」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会
- 広瀬昭弘・砂田伸弘・他 1982「東京都国分寺市恋ヶ窪遺跡調査報告書III」国分寺市教育委員会
- 鈴木次郎 1983「打製石斧」『縄文文化の研究』7
- 山本直人 1985「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会々誌』第28号 石川考古学研究会
- 北野博司・山本直人・他 1988「石川県能美郡朝日町長口西部遺跡群I」石川県立埋蔵文化財センター
- 竹岡俊樹 1989「石斧研究法」
- 山本正敏 1990「北陸自動車道遺跡調査報告書——朝日町編5——埋A遺跡石群編」富山県教育委員会

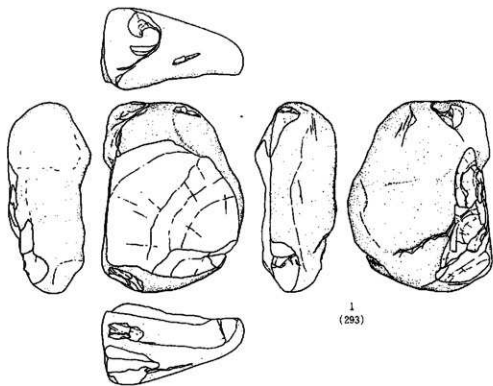


第28回 A-4区 遺物出土状況 S=1/20 (石製品はS=1/10, 土器はS=1/6)

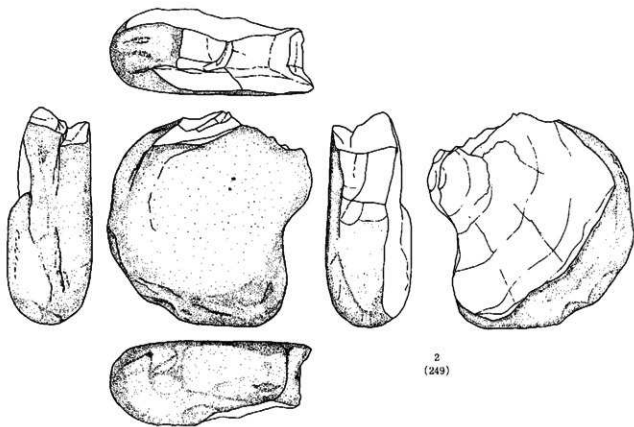


第29回 F-6区 得呂類出土状況 S-1/20(番号は仮番号)

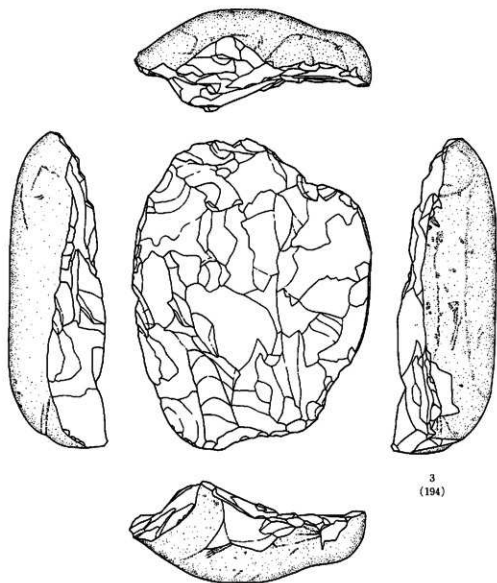




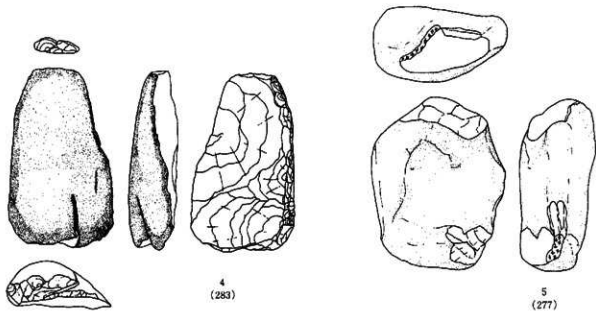
1
(293)



2
(249)

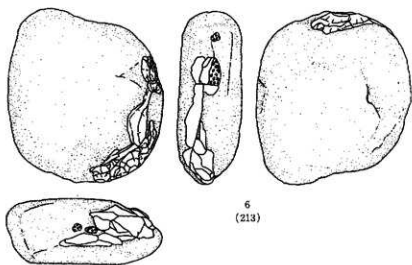


3
(194)

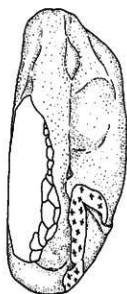
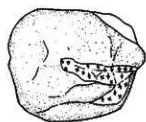
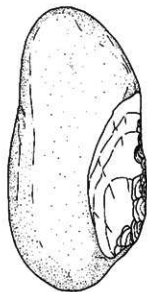


4
(283)

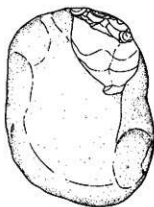
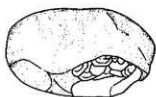
5
(277)



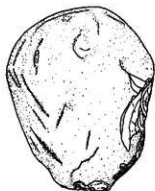
6
(213)



7
(235)

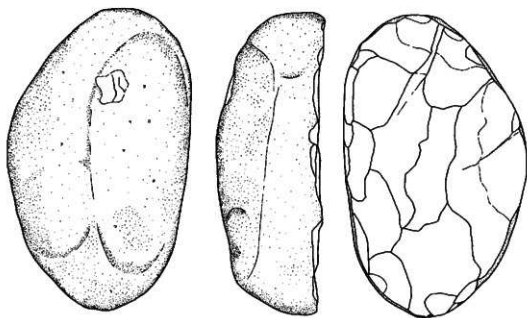
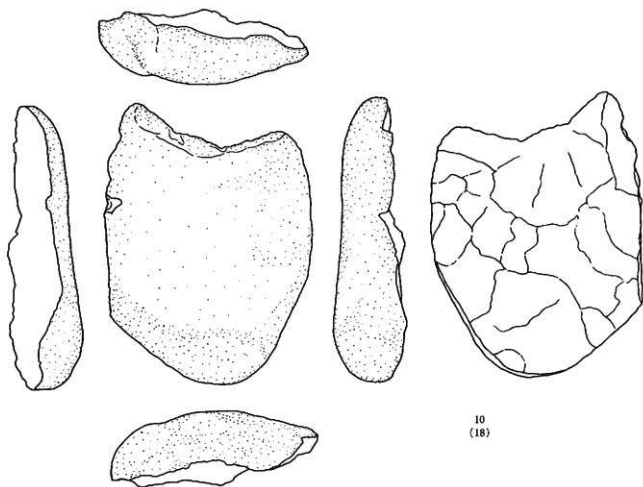


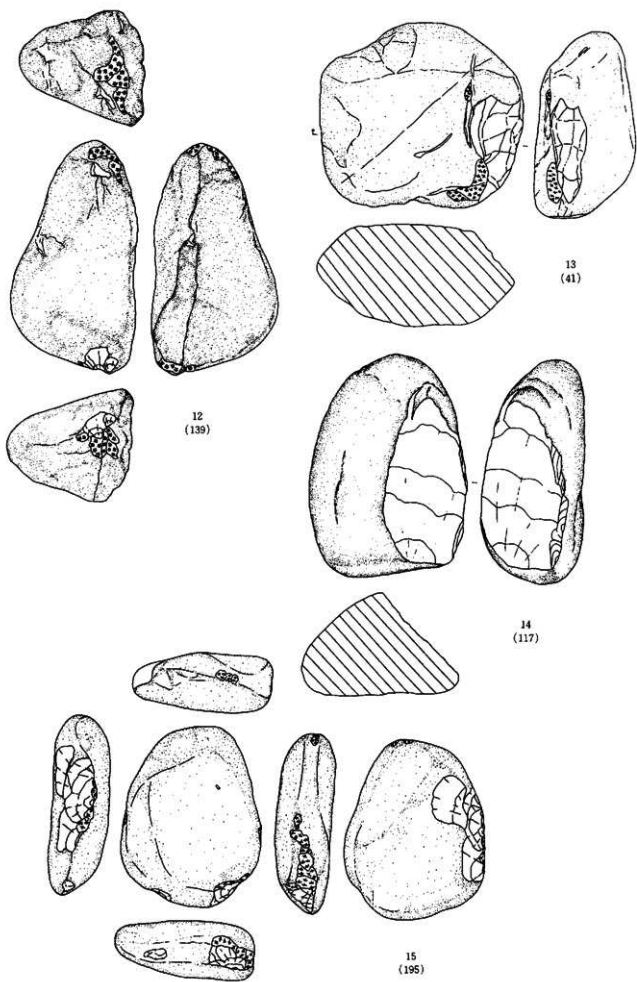
8 (217)



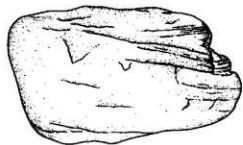
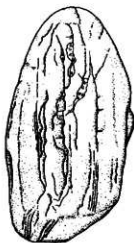
9
(2)



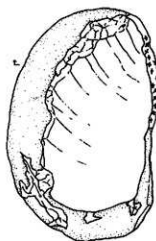




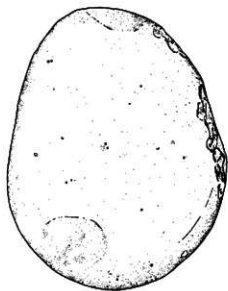
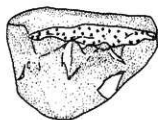
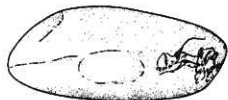
第35圖 石製品(母岩)実測図 S=1/4



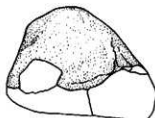
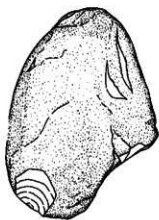
16
(193)



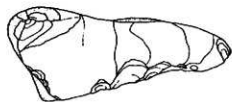
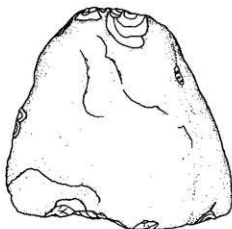
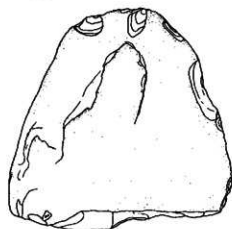
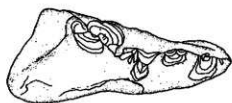
17
(31)



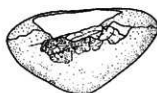
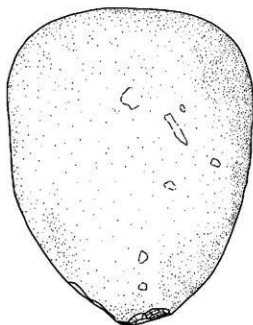
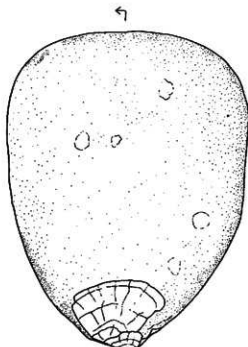
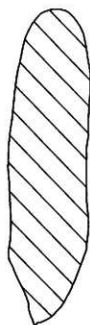
18
(181)



19
(105)

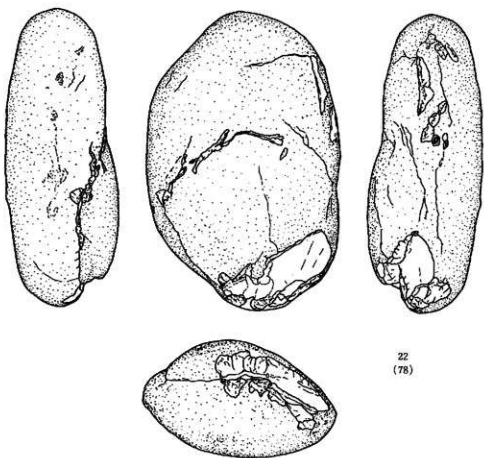


20
(100)

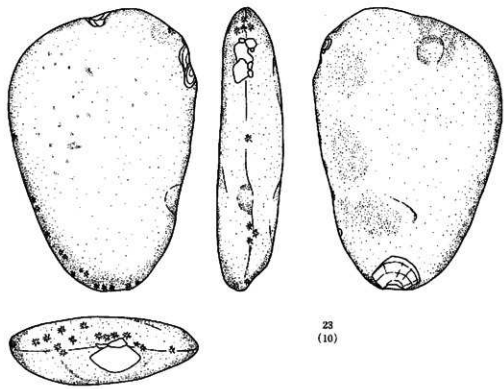


21
(64)

第 37 圖 石製品(母岩)実測図 S = 1 / 4

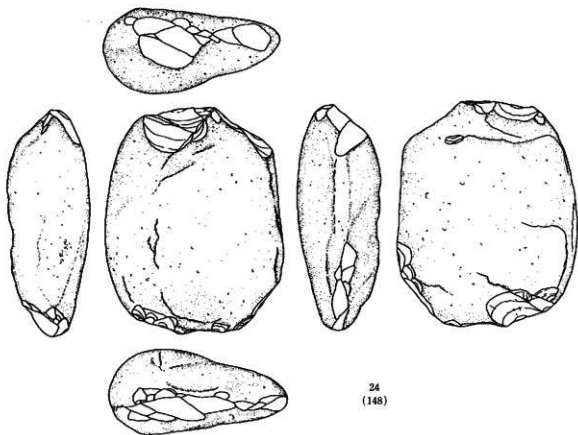


22
(78)

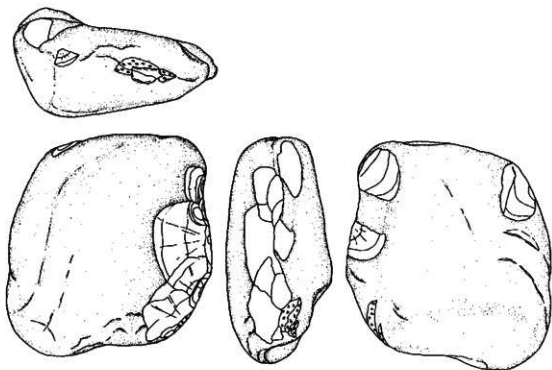


23
(10)

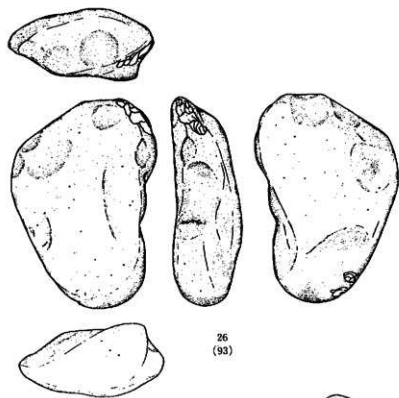
第 38 图 石製品(母岩)実測図 S = 1/4



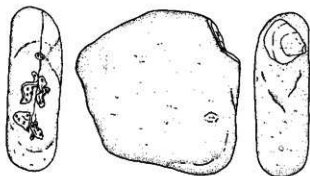
24
(148)



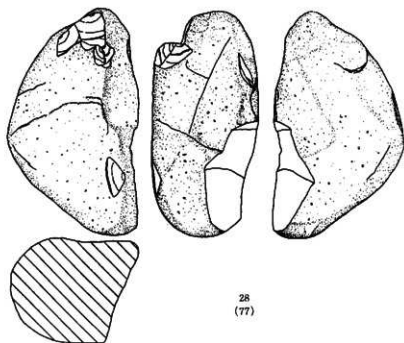
25
(189)



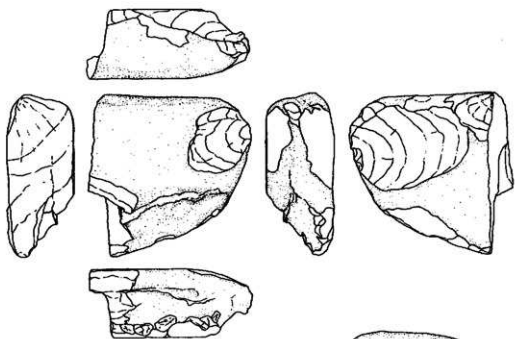
26
(93)



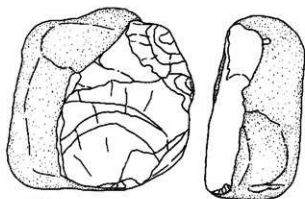
27
(155)



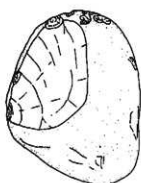
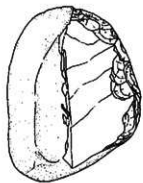
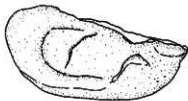
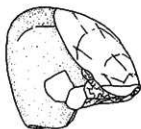
28
(77)



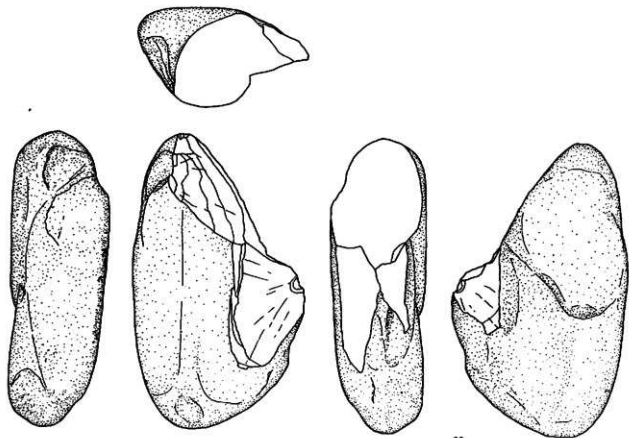
29
(281)



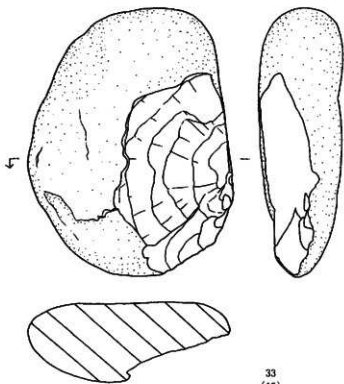
30
(143)



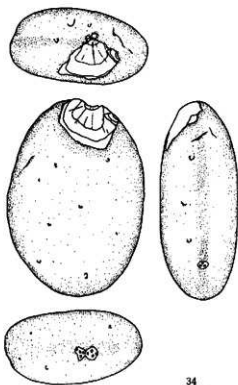
31
(30)



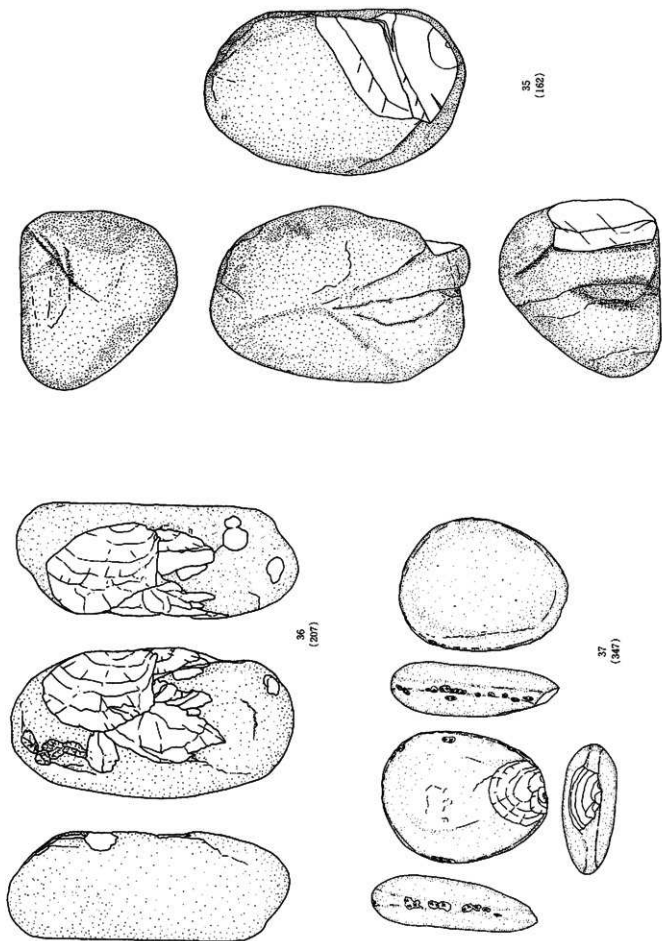
32
(232)



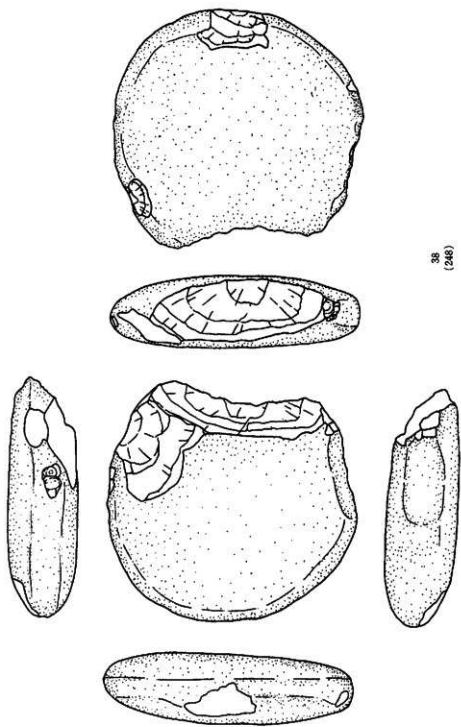
33
(15)



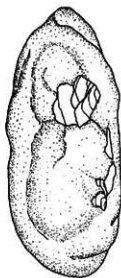
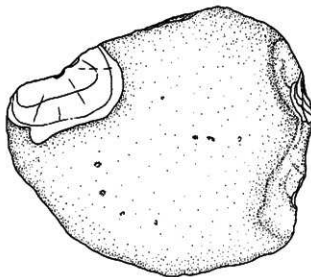
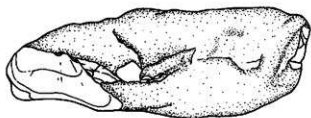
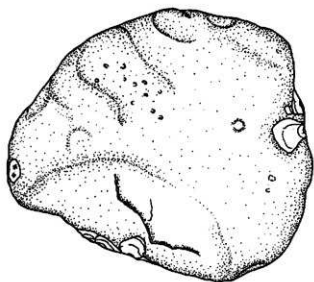
34
(381)



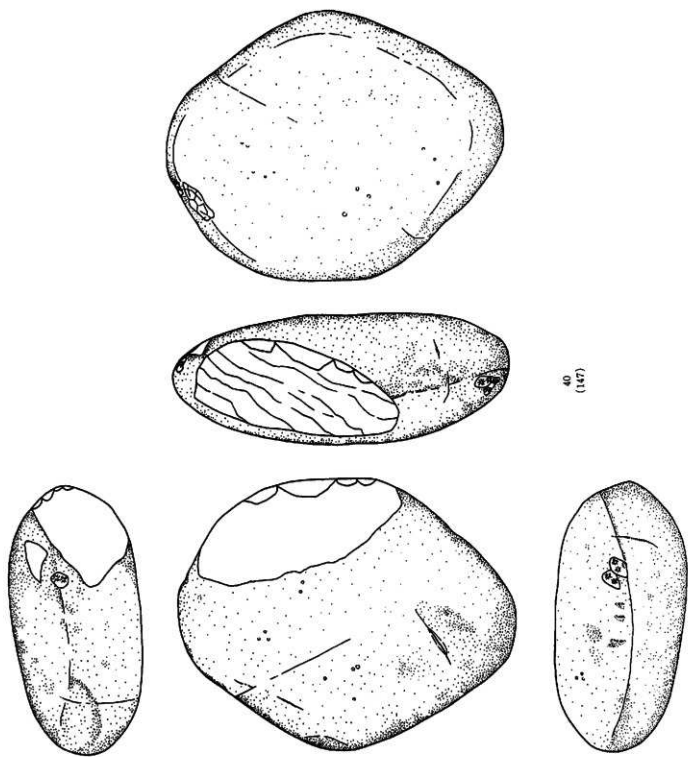
第43图 石製品(母岩)実測圖 S = 1/4



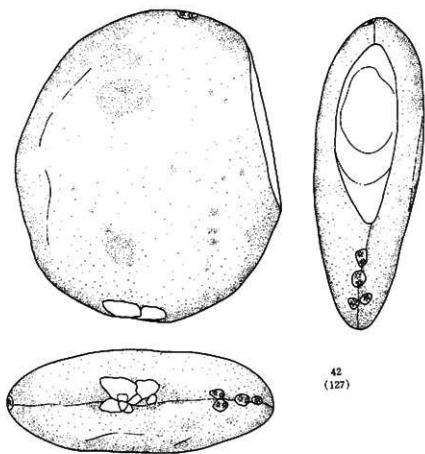
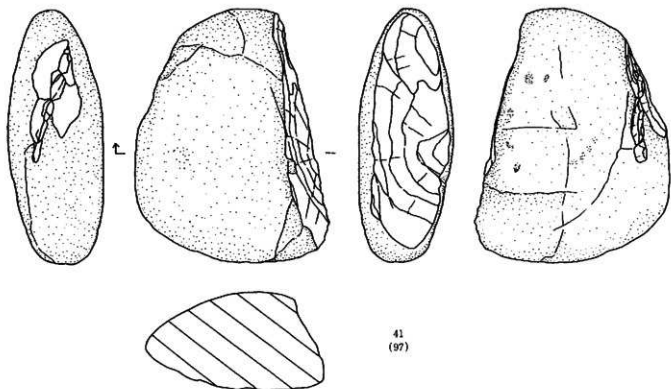
38
(246)



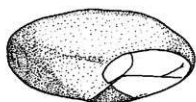
39
(1)



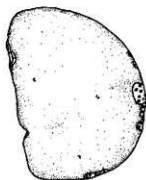
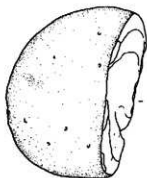
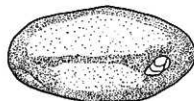
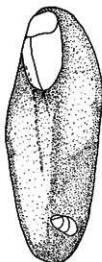
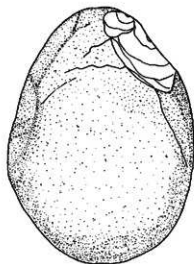
40
(147)



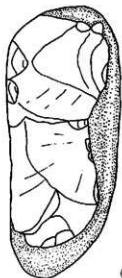
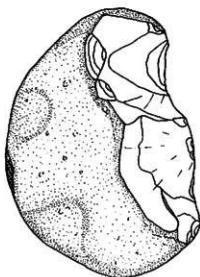
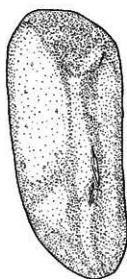
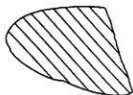
第47图 石製品(母岩)実測図 S=1/4



43
(145)

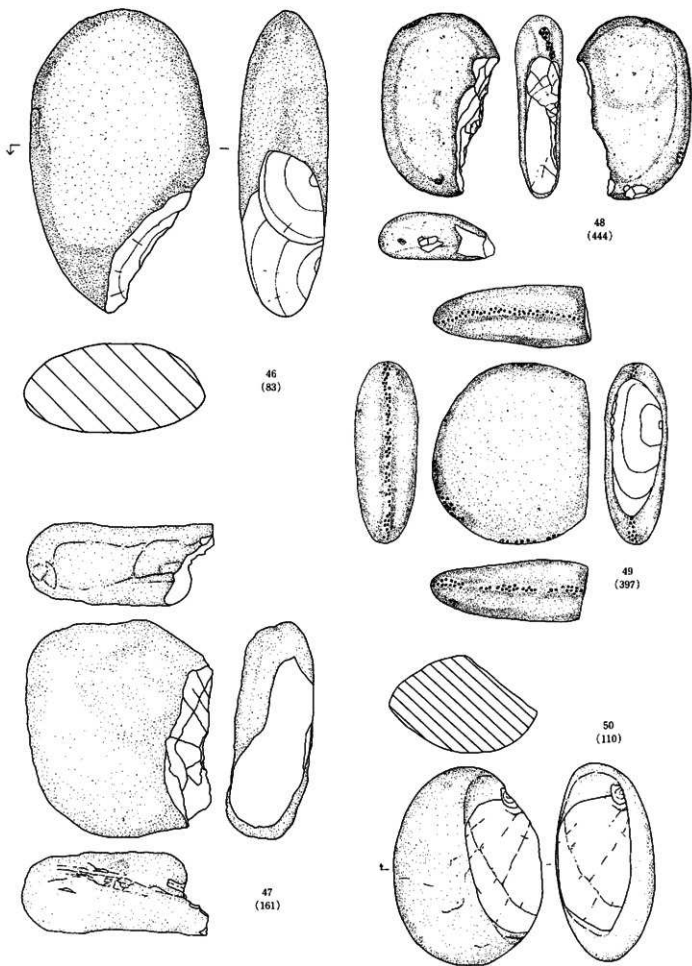


44
(186)

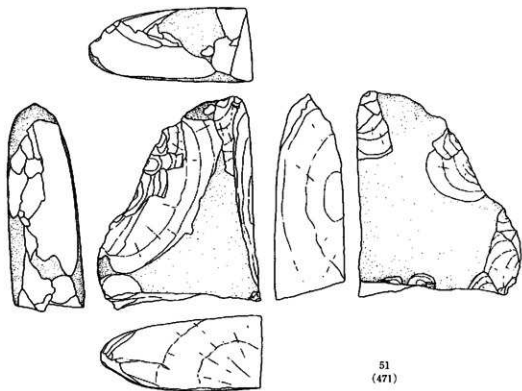


45
(173)

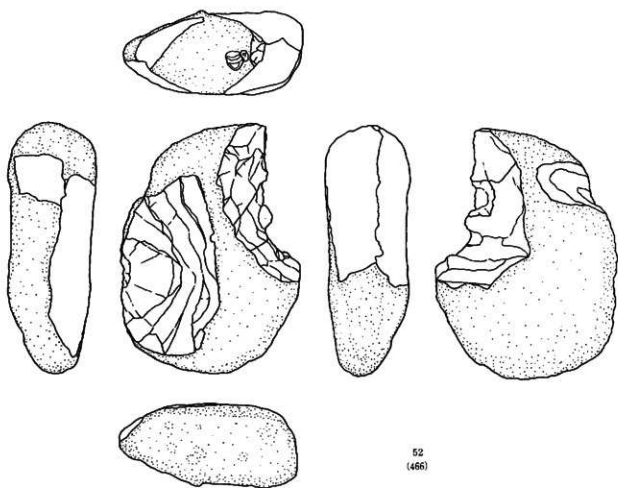
第48图 石製品(母岩)実測図 S=1/4



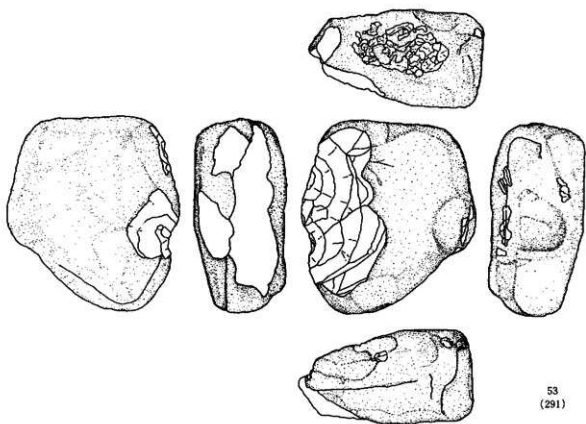
第49图 石製品(母岩)実測図 S=1/4



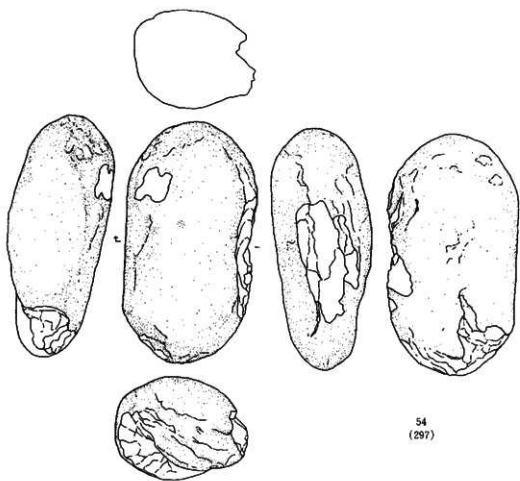
51
(471)



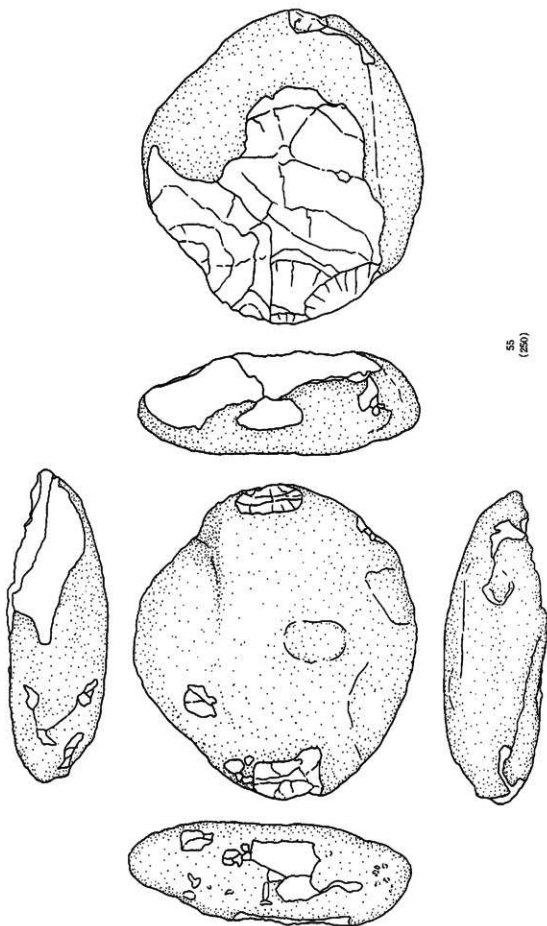
52
(466)



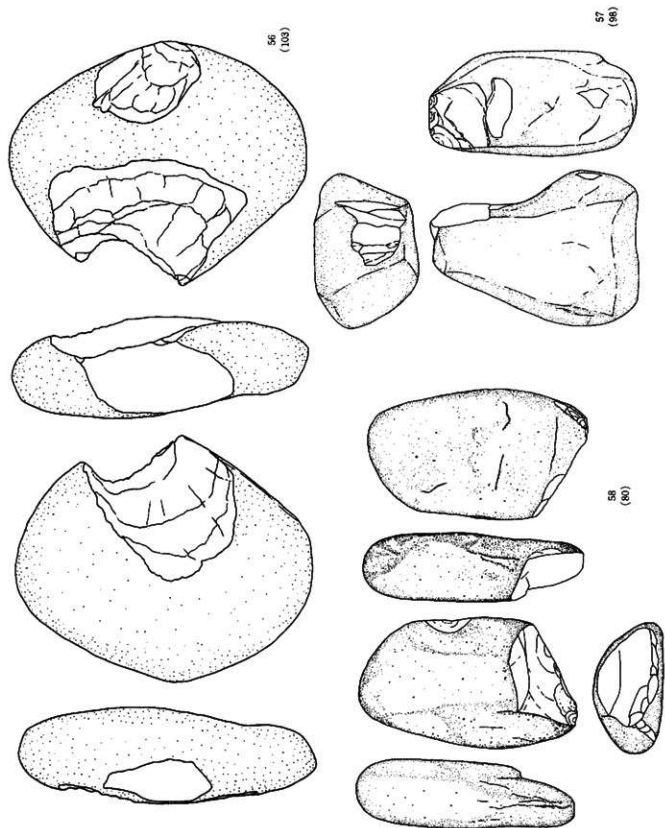
53
(291)



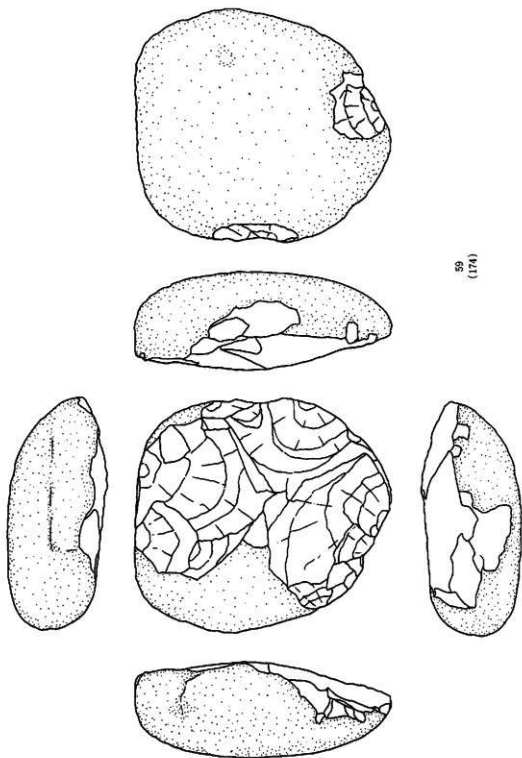
54
(297)



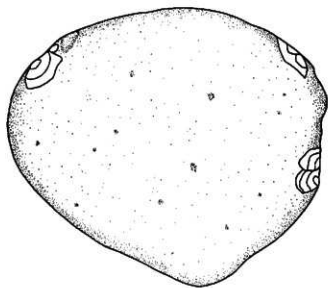
55
(250)



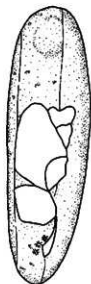
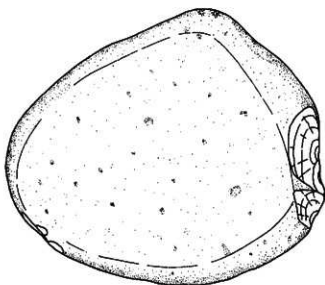
第53图 石製品(母岩)実測図 S=1/4



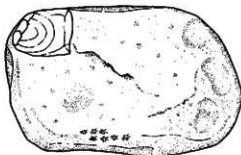
59
(174)

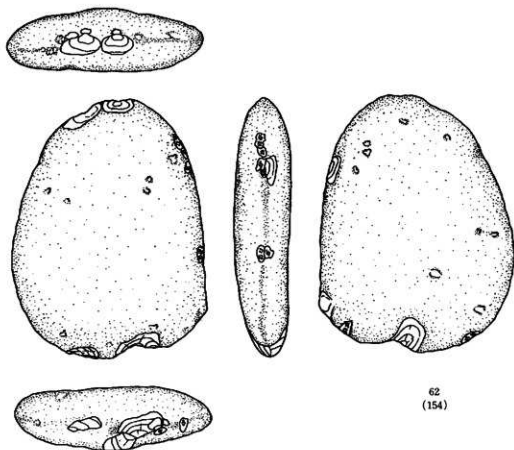


60
(36)

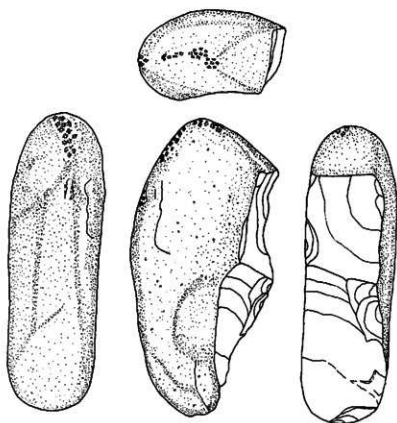


61
(230)

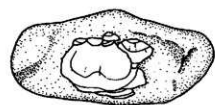




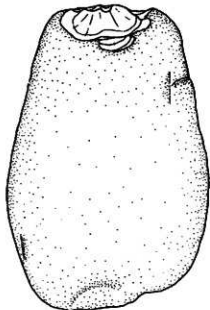
62
(154)



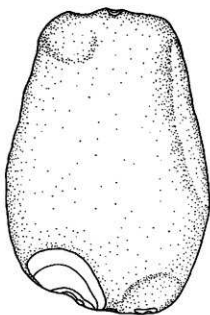
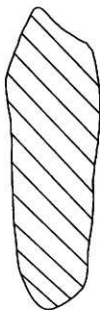
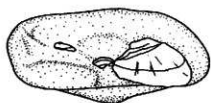
63
(247)



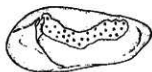
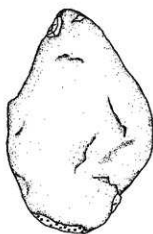
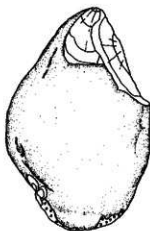
P



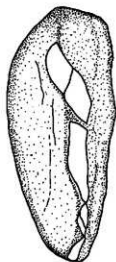
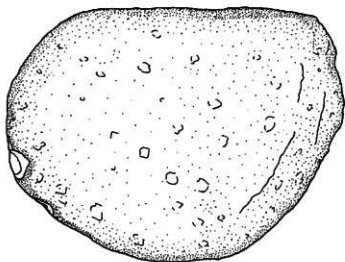
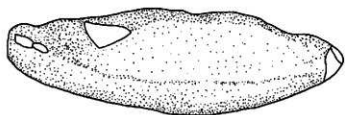
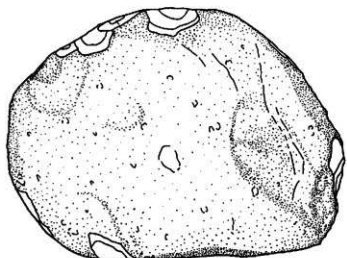
I



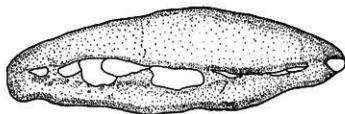
64
(4)

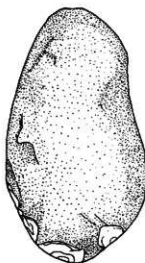
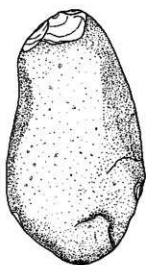


65
(96)

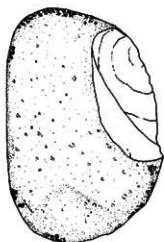


66
(144)

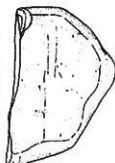




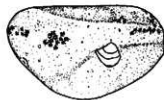
67
(140)

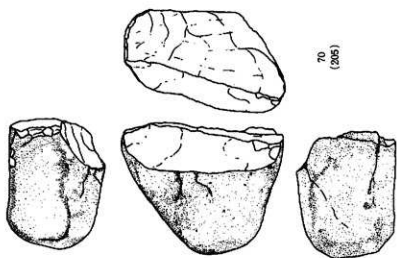


68
(84)

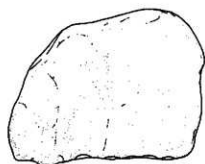


69
(389)

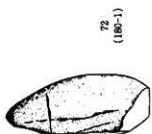
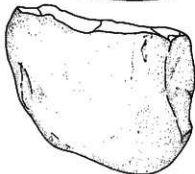




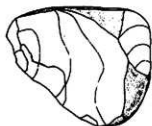
70
(205)

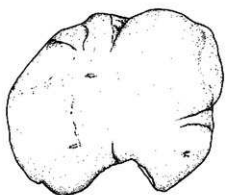


71
(400)

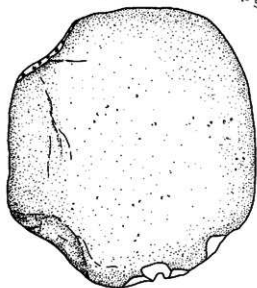
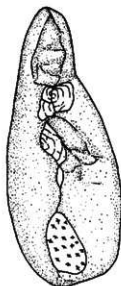
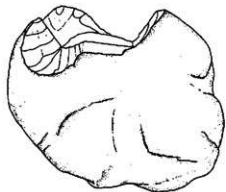
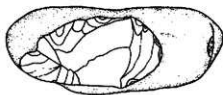


72
(180-1)

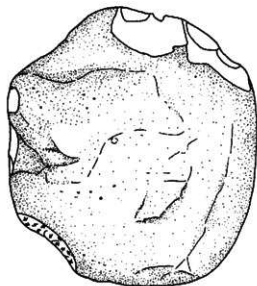
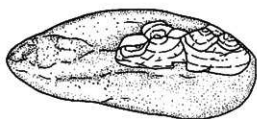


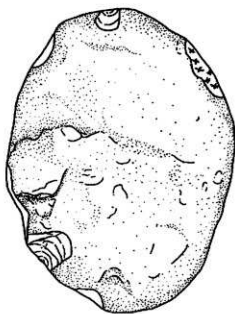
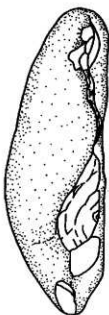
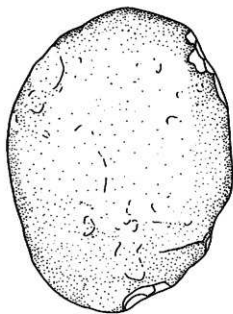
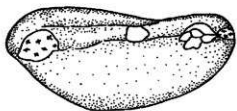


73
(25)

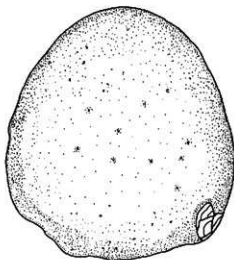
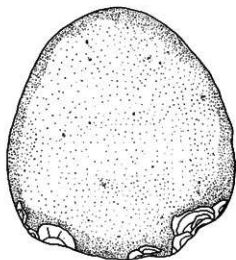
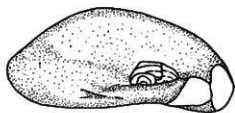


74
(219)

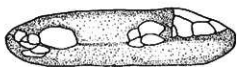


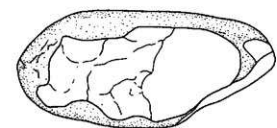


75
(192)

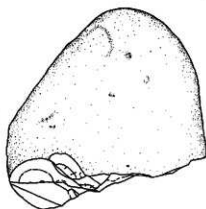
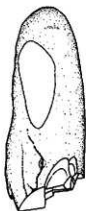
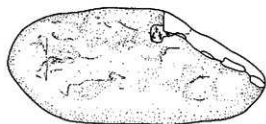
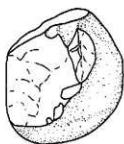
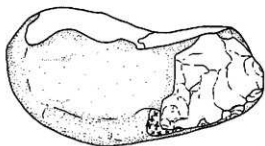


76
(130)

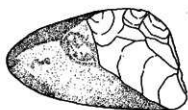




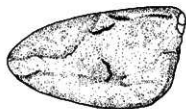
77
(39)

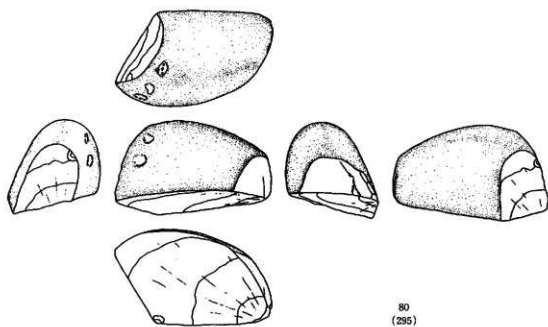


78
(435)

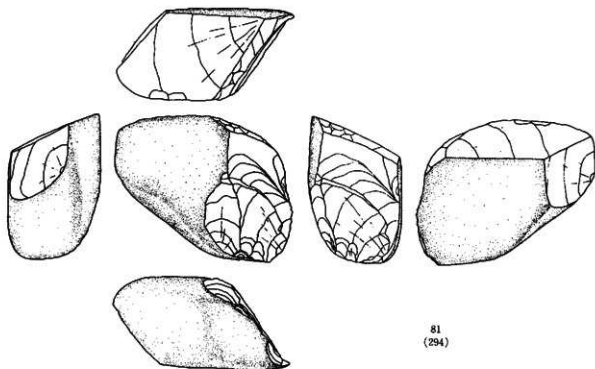


79
(70)

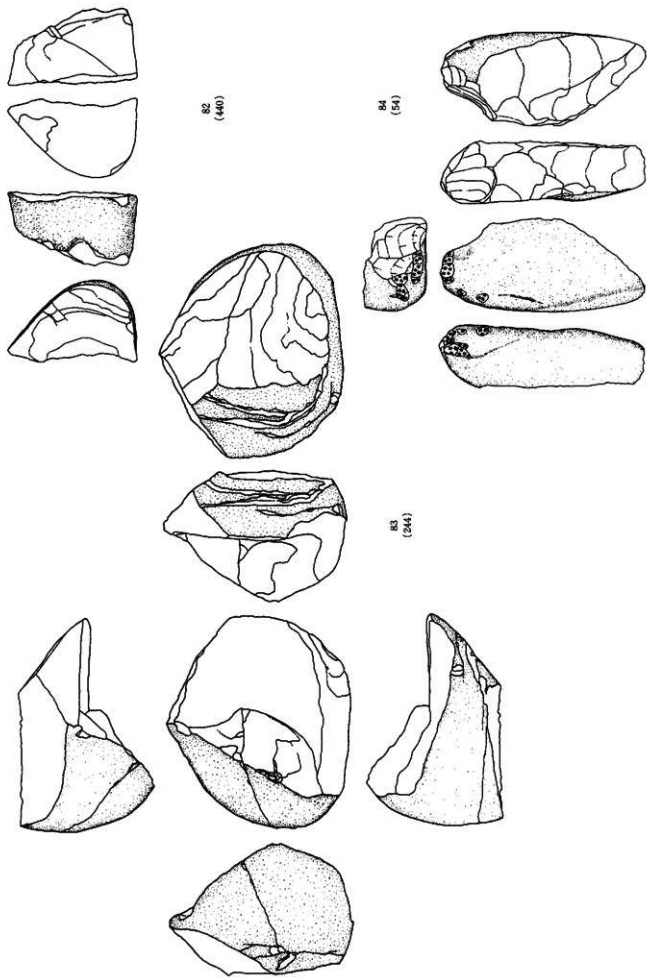




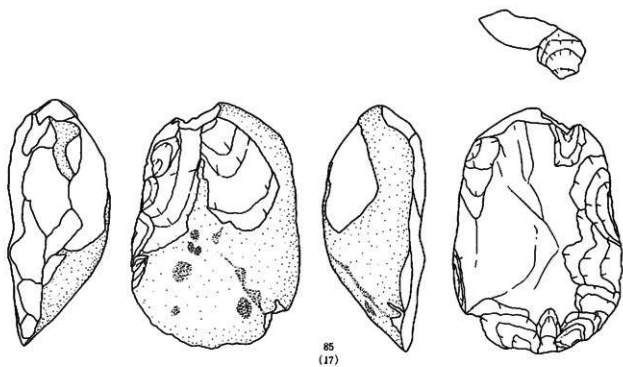
80
(295)



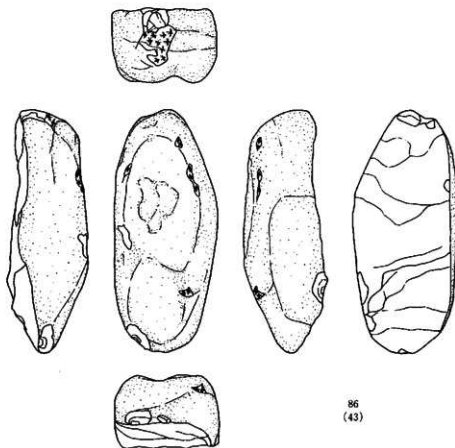
81
(294)



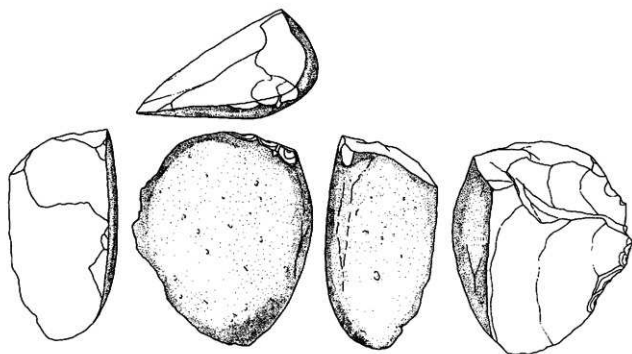
第 65 图 石製品(母岩种)実測图 S = 1/4



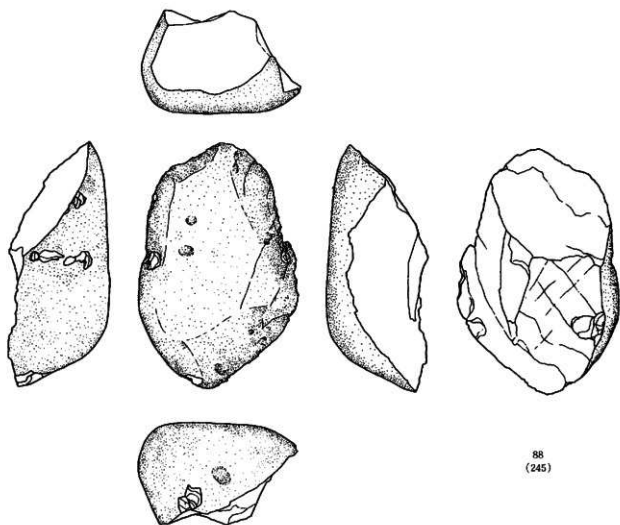
85
(17)



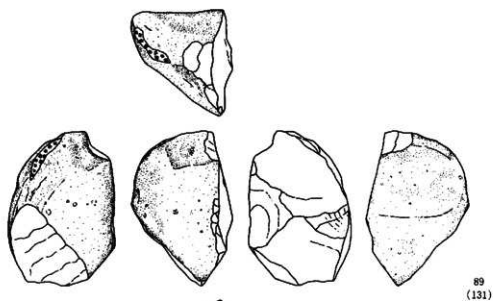
86
(43)



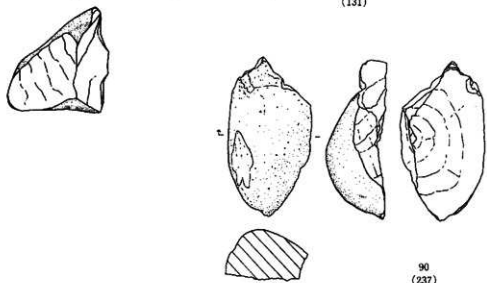
87
(179)



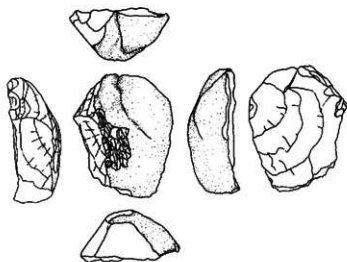
88
(245)



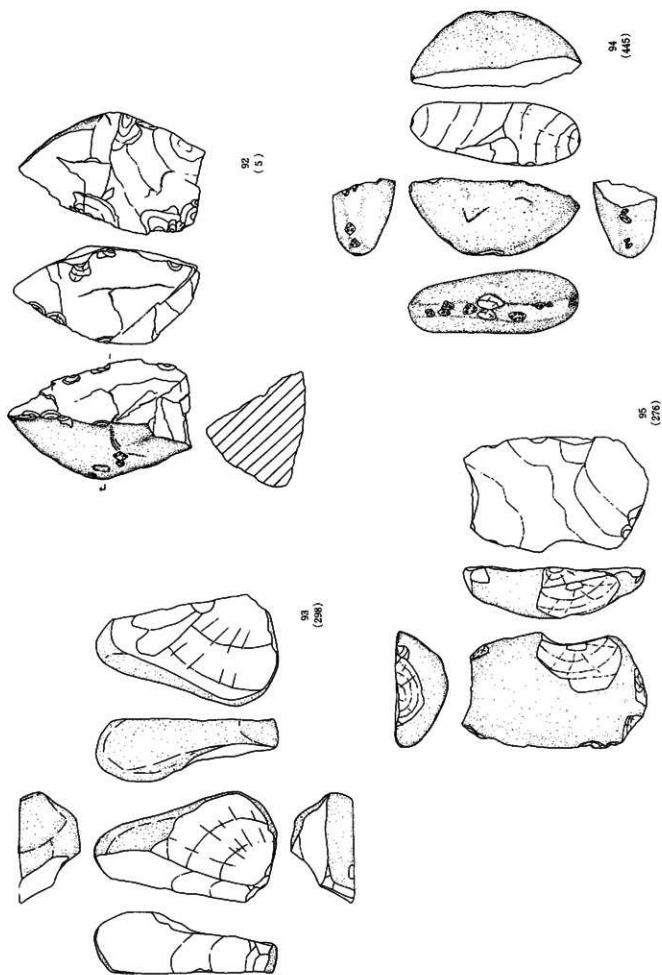
89
(131)



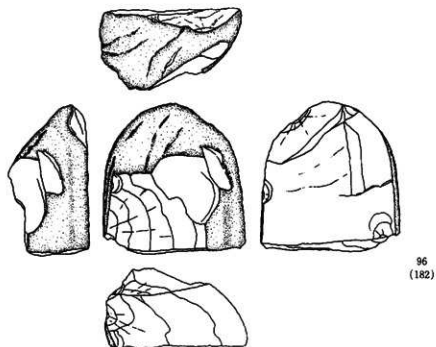
90
(237)



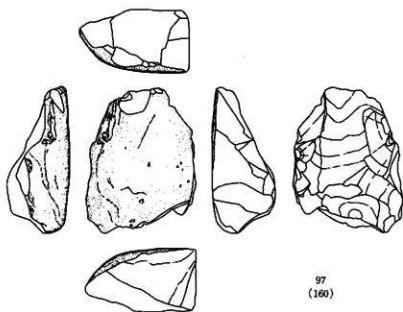
91
(362)



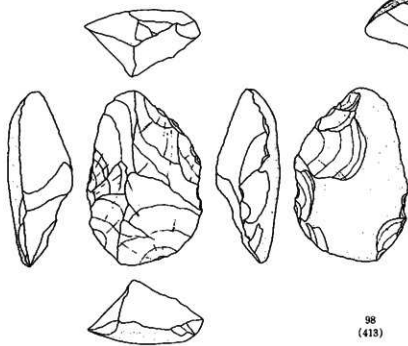
第 69 图 石製品(母岩种)実測图 S=1/4



96
(182)

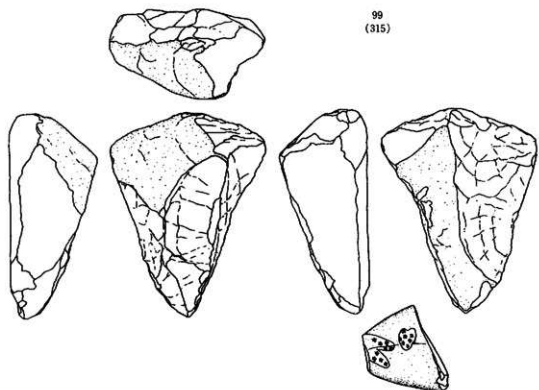


97
(160)

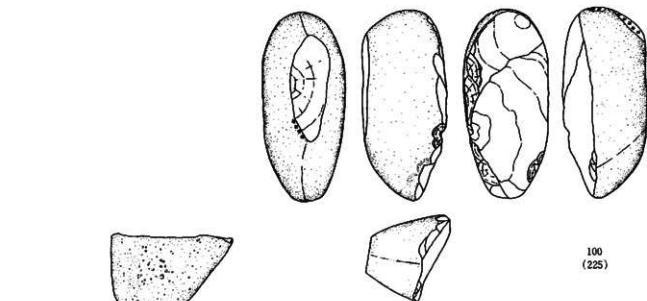


98
(413)

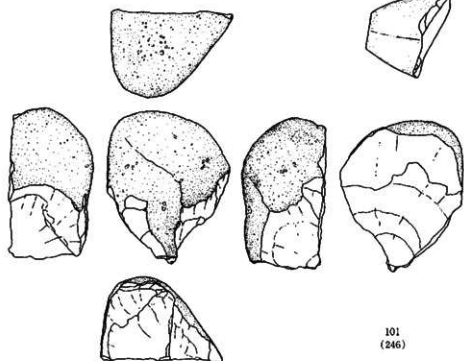
99
(315)

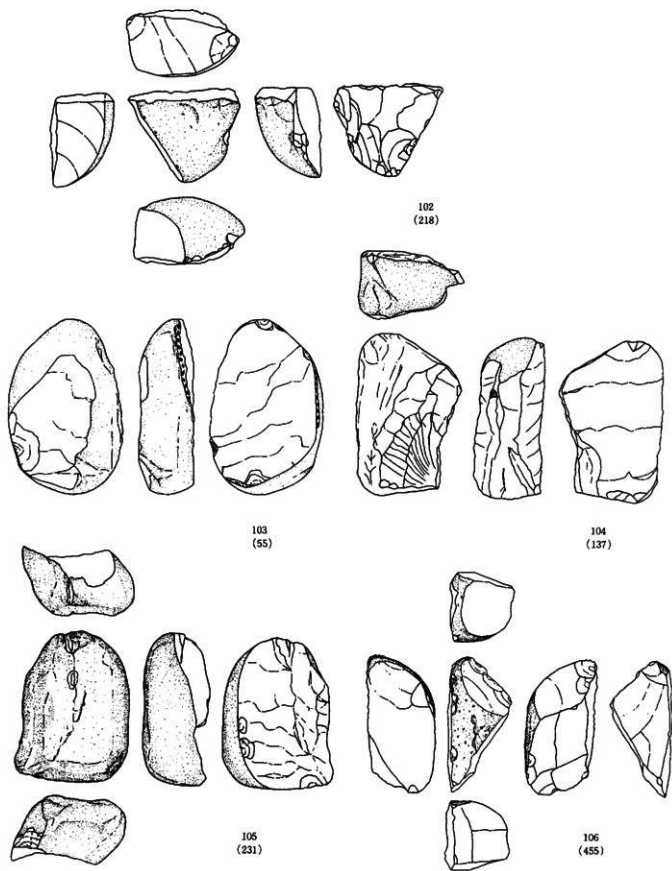


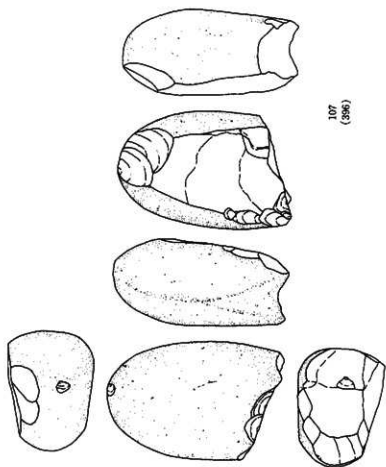
100
(225)



101
(246)

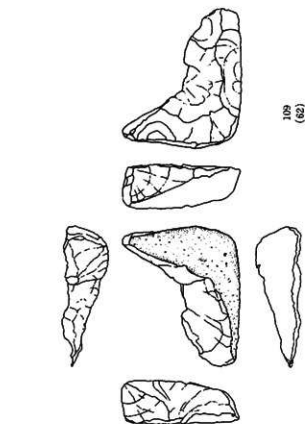






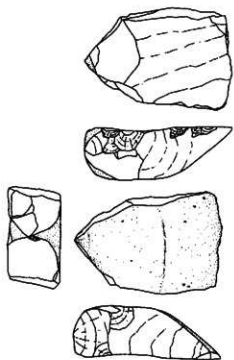
107
(396)

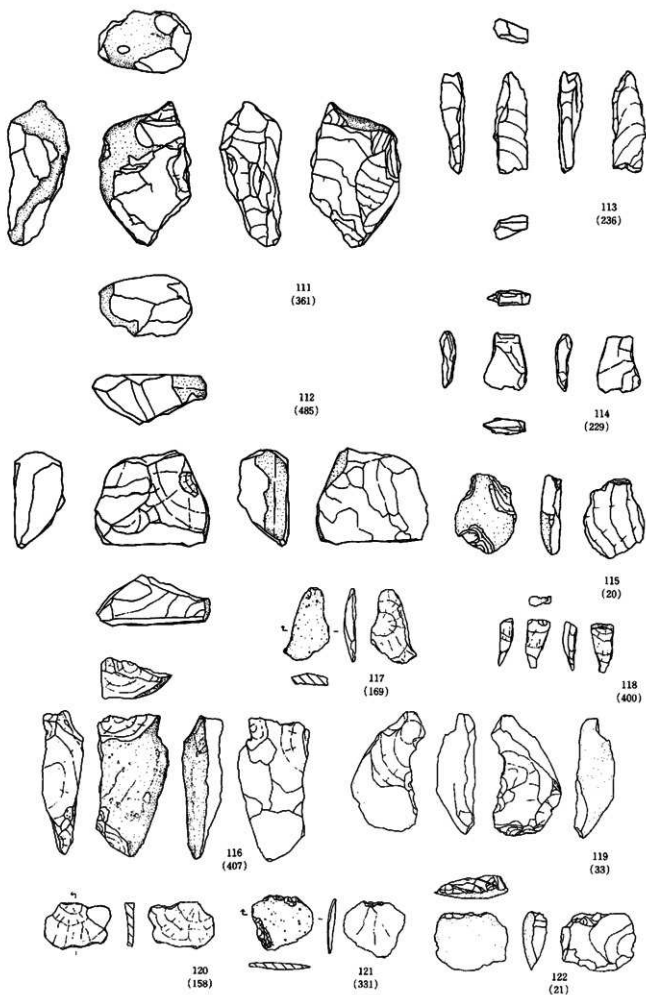
108
(12)



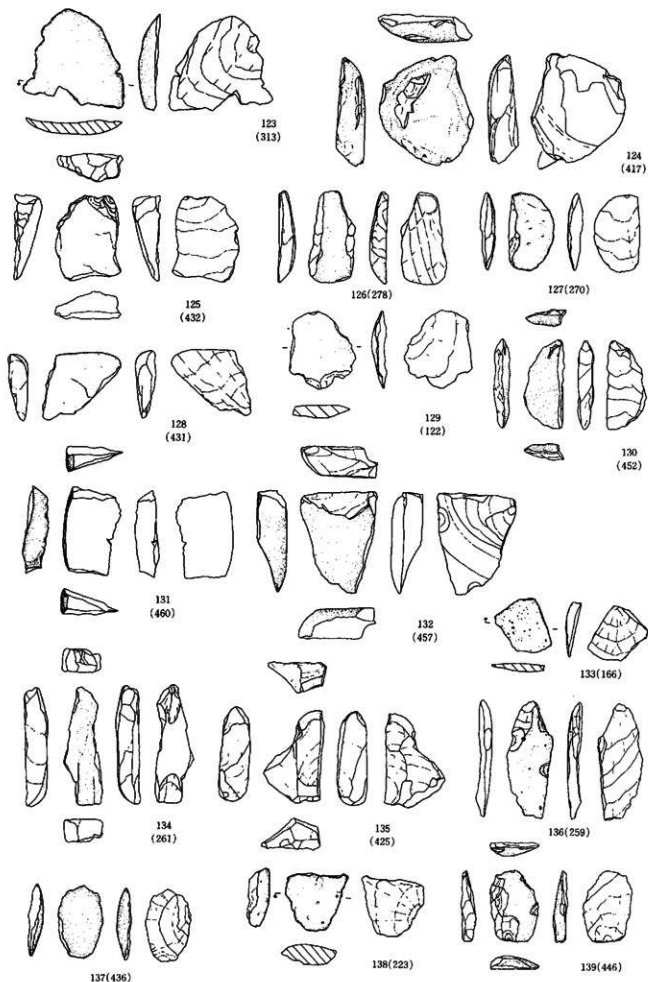
109
(62)

110
(272)

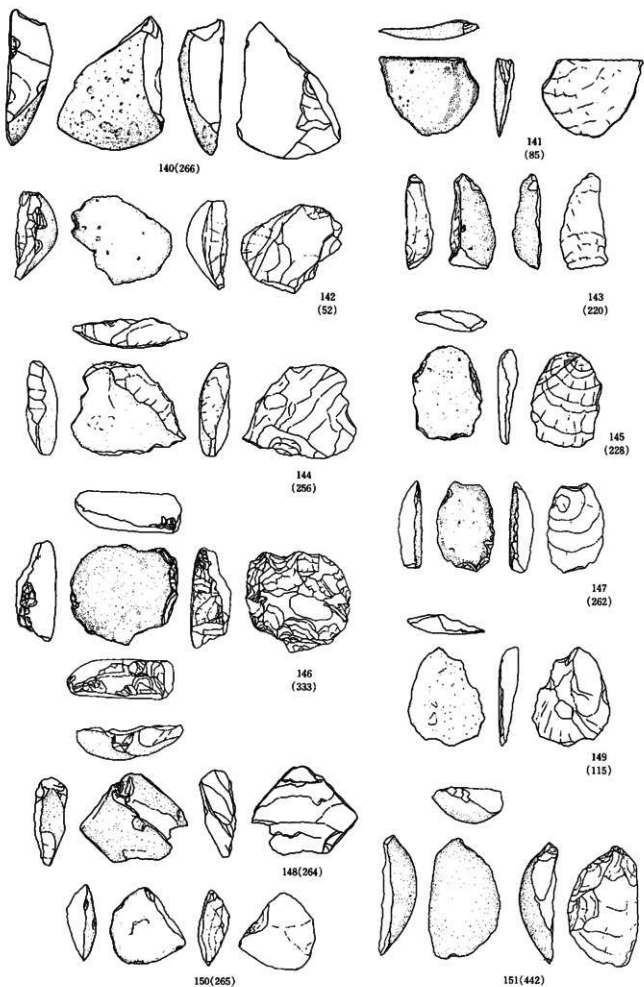




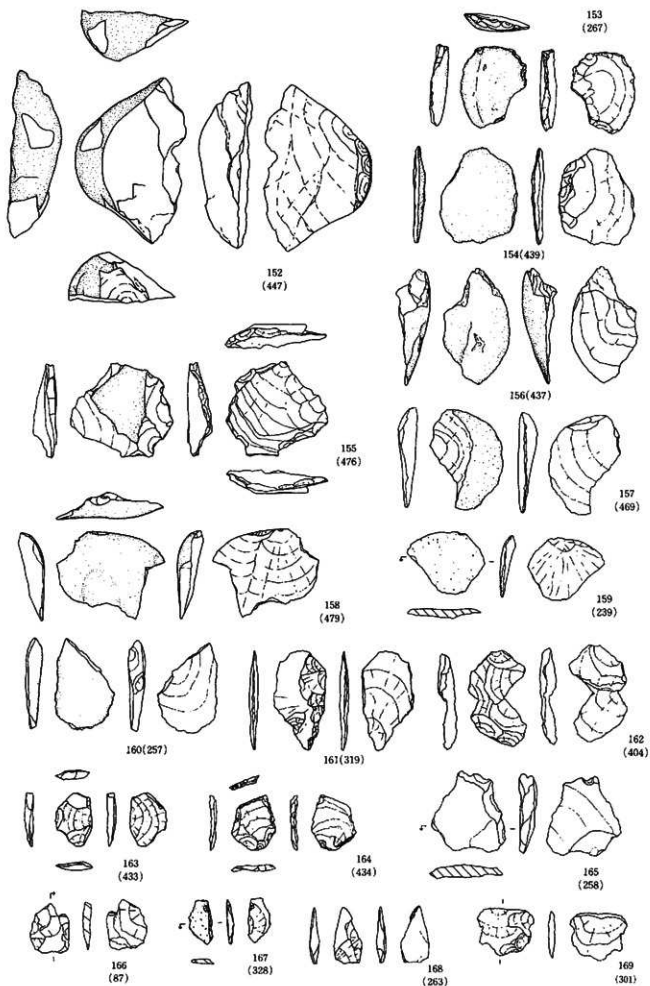
第74图 石製品(照片)実測図 S=1/4



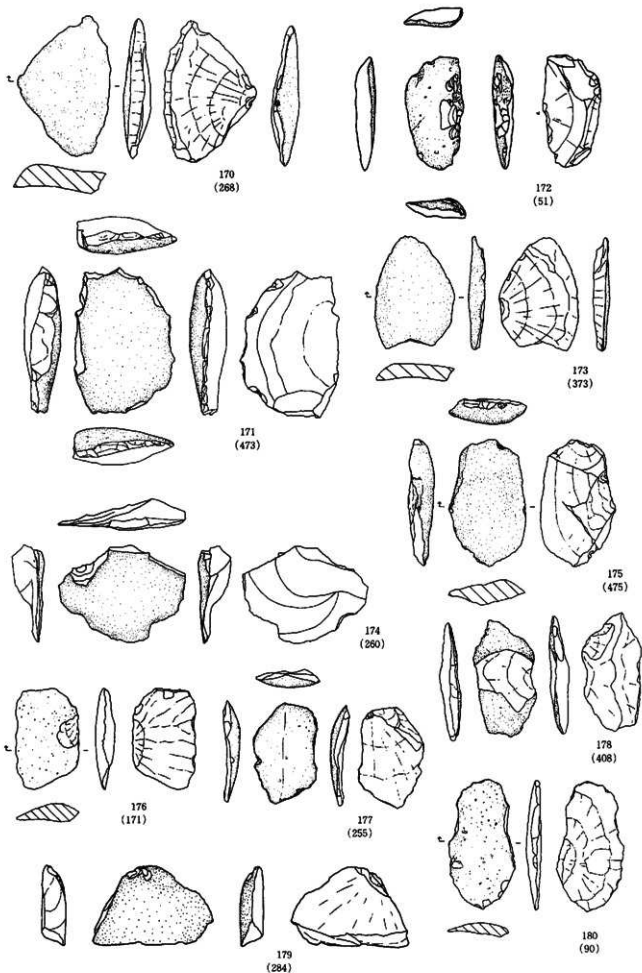
第 75 图 石制品(裂片)実測图 S = 1 / 4



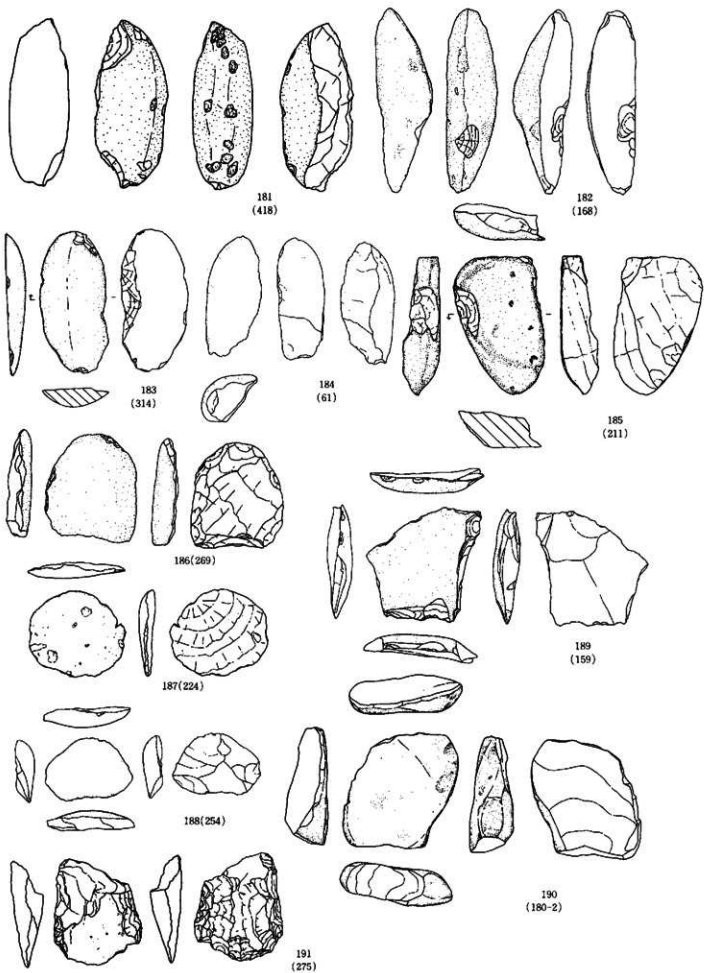
第76图 石製品(裂片)実測図 S=1/4



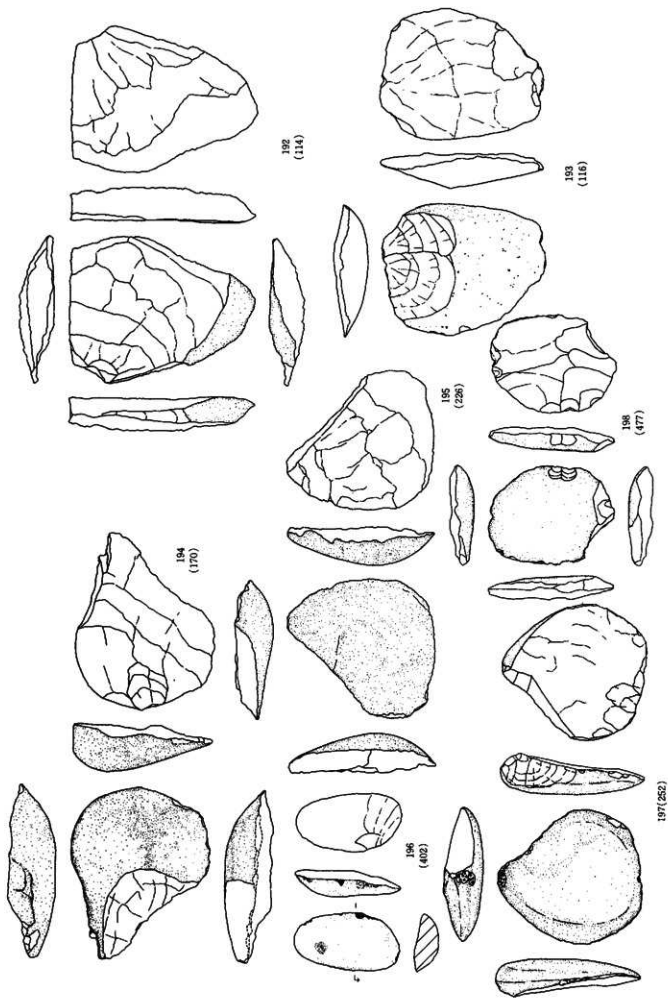
第77圖 石製品(製品、剝片)実測図 S = 1/4



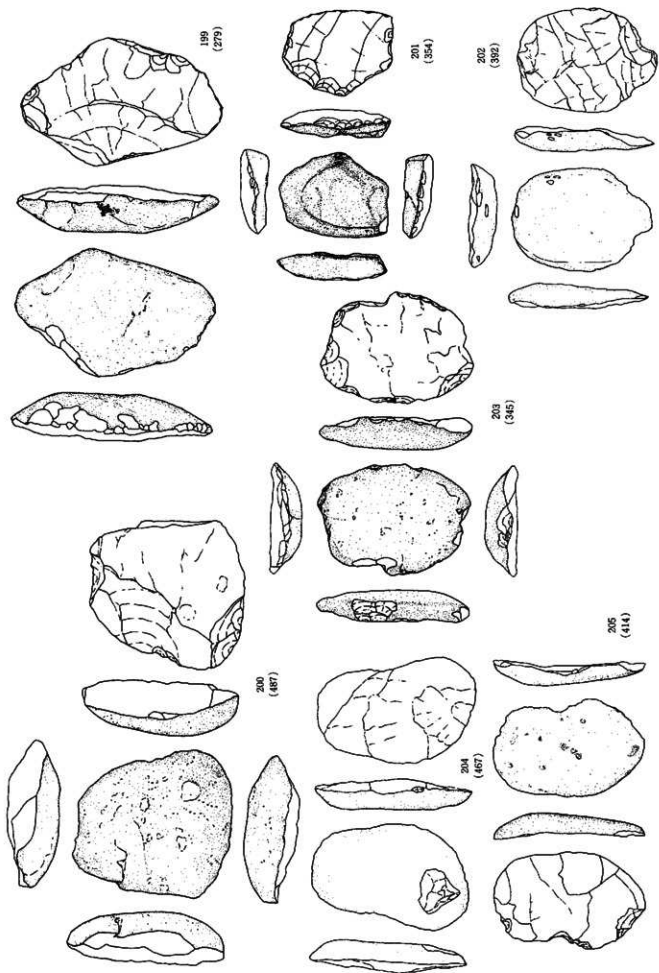
第78圖 石製品(銅片)實測圖 S-1/4



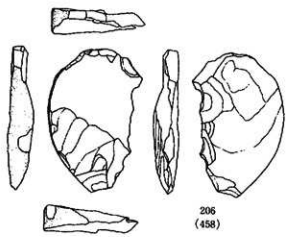
第 79 图 石製品(剥片)実測図 S = 1/4



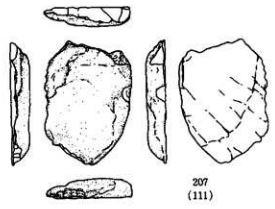
第80图 石制品(剥片)实例图 S=1/4



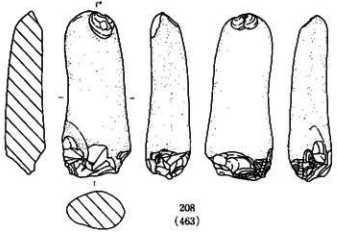
第 81 图 石製品(剥片)実測図 S-1/4



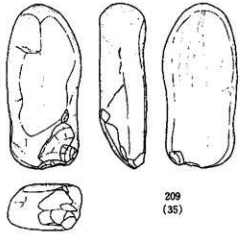
206
(458)



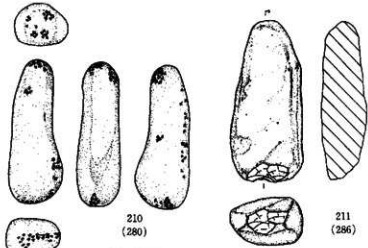
207
(111)



208
(463)

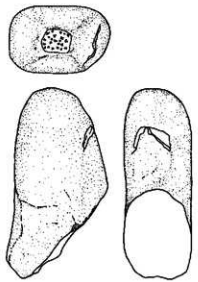


209
(35)

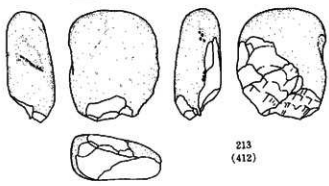


210
(280)

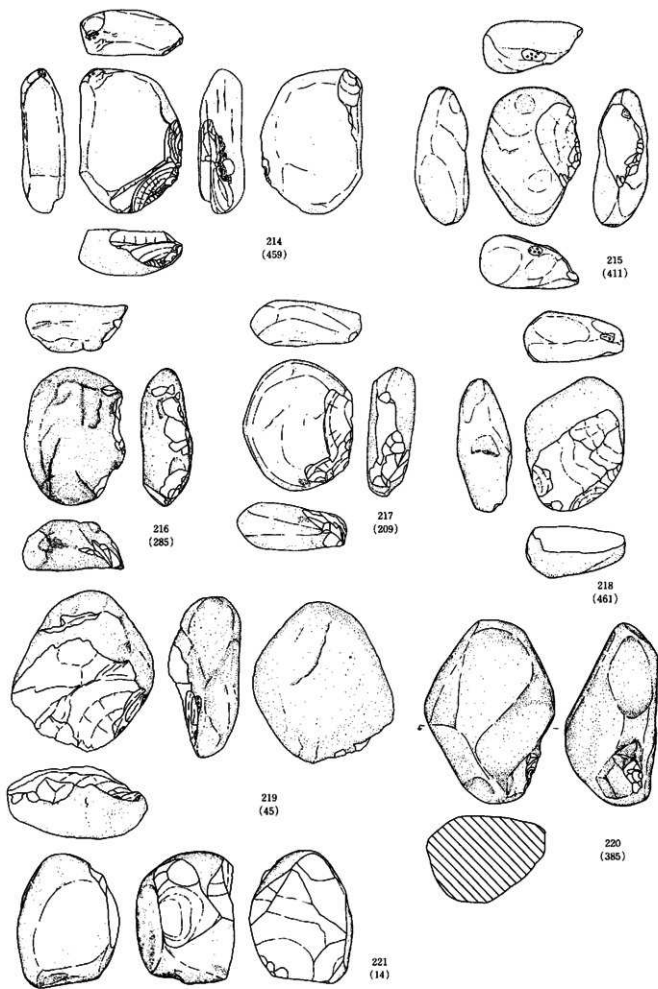
211
(286)

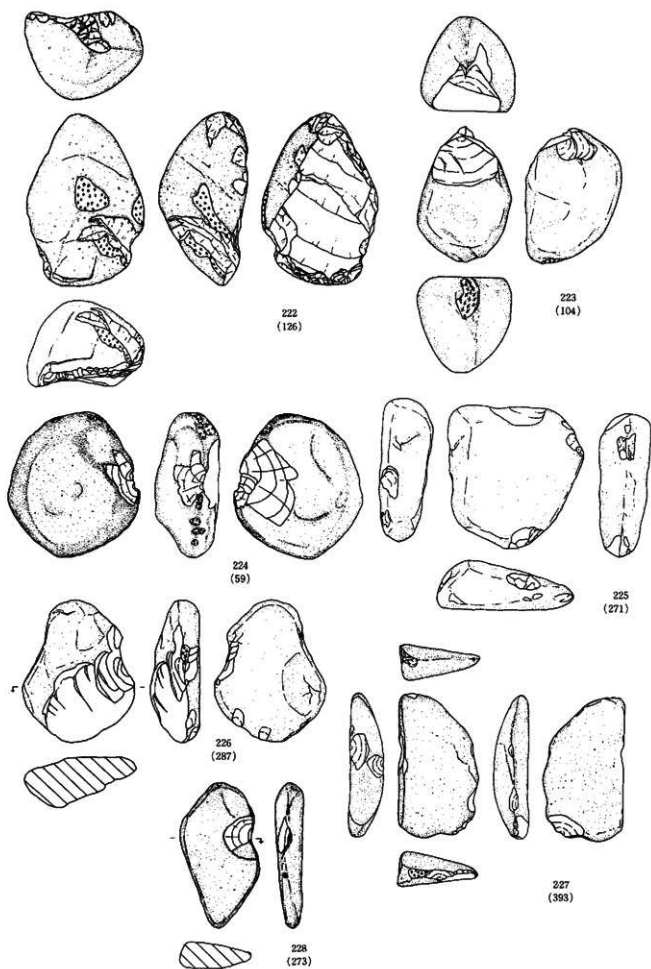


212
(82)

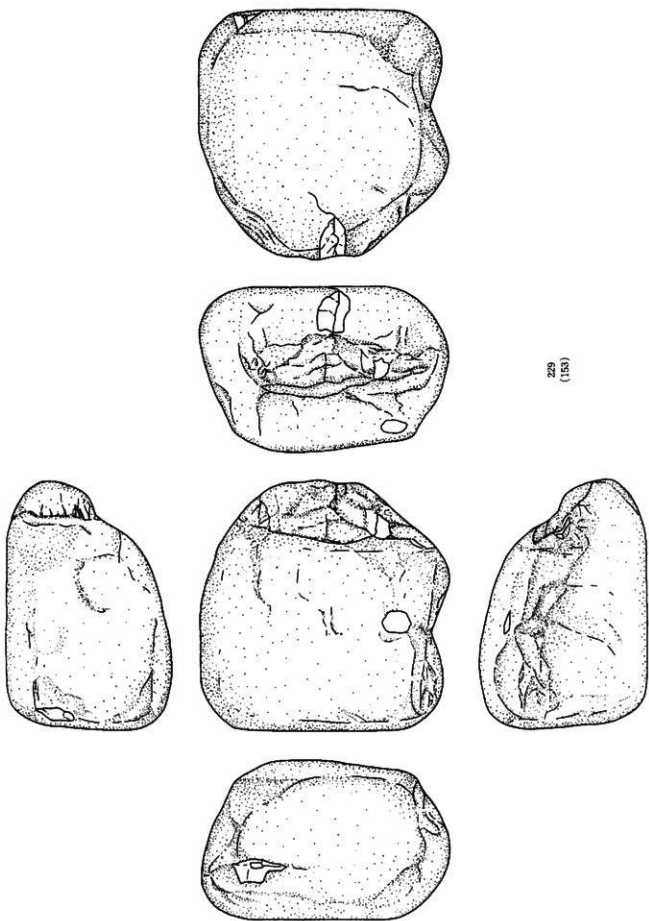


213
(412)

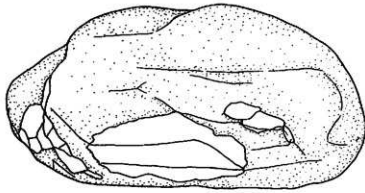




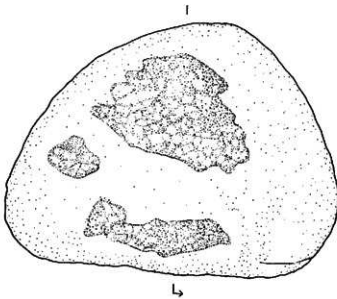
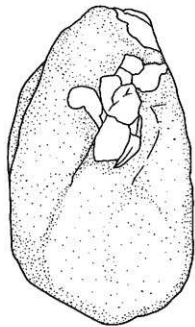
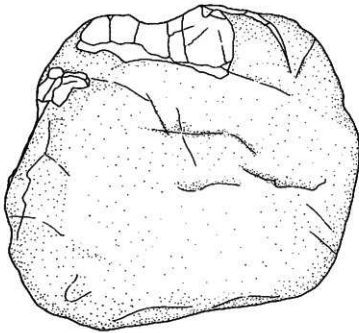
第 84 図 石製品(ハンマー)実測図 S=1/4



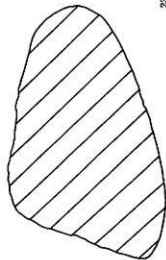
229
(153)

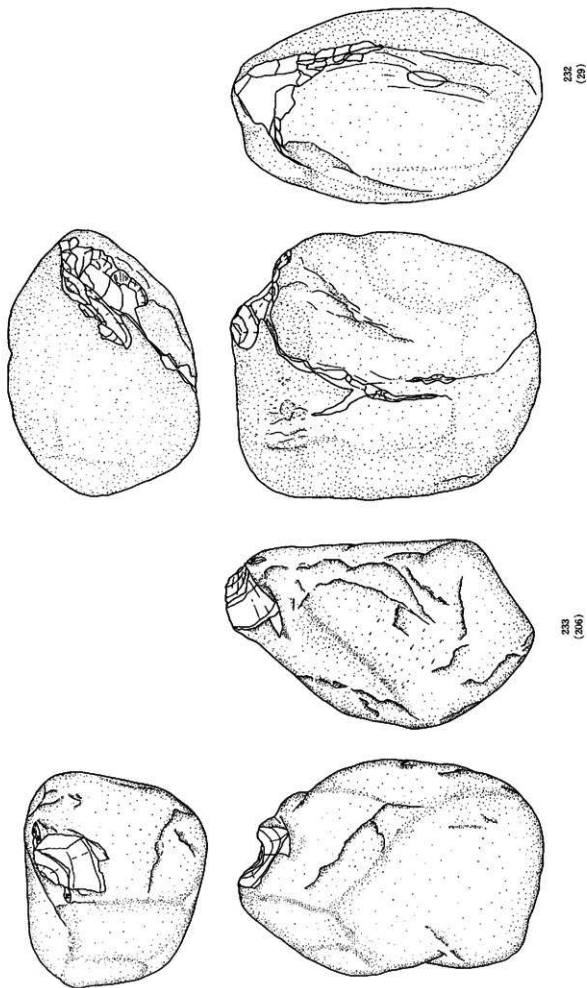


230
(65)



231
(49)

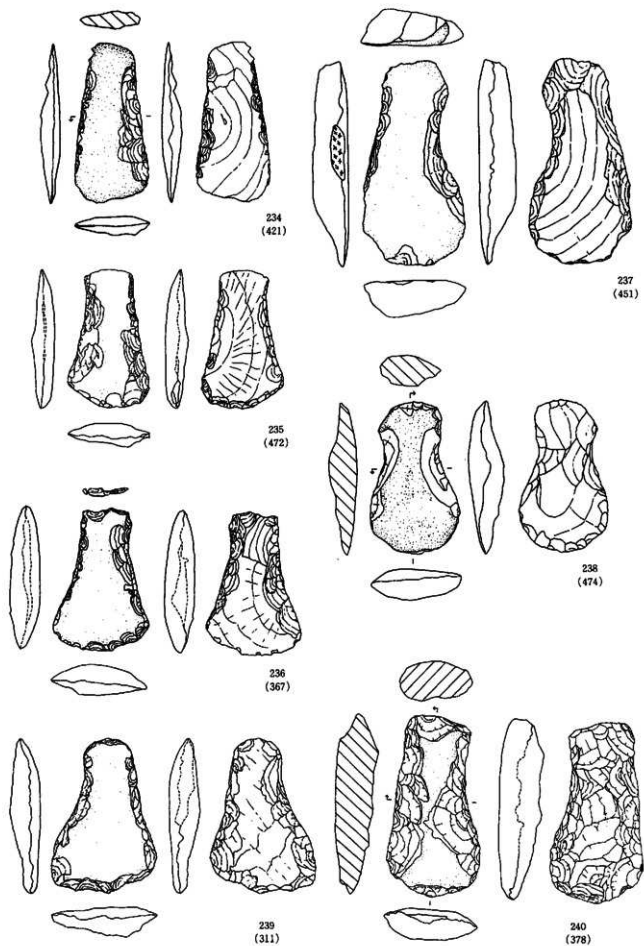




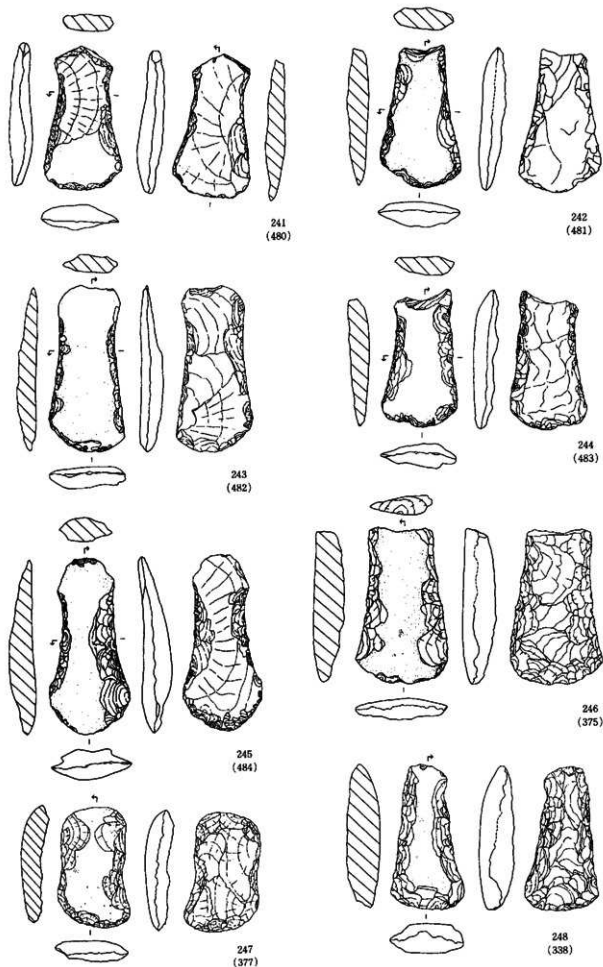
232
(29)

233
(306)

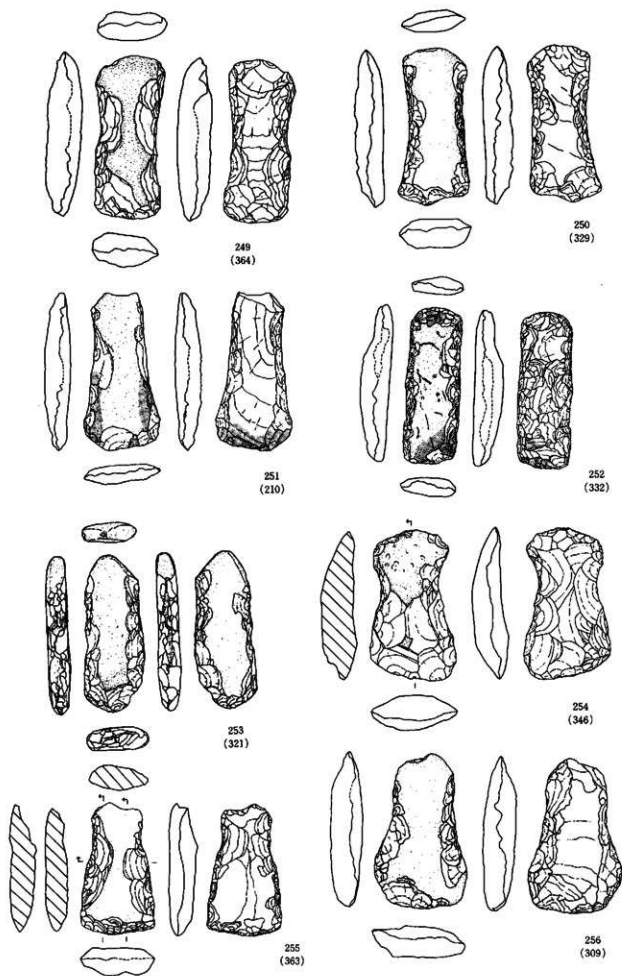
第 87 图 石製品(白石)素描圖 S = 1/4



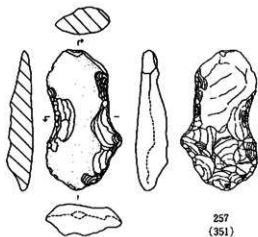
第 88 图 石製品(打製石片製品)実測図 S = 1 / 4



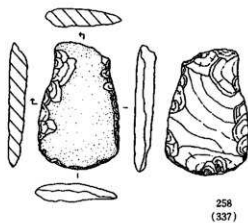
第 89 图 石製品(打製石片製品)実測図 S = 1 / 4



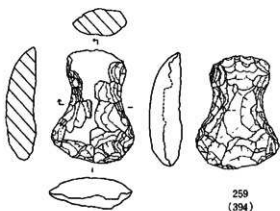
第90图 石製品(打製石片製品)実測図 S-1/4



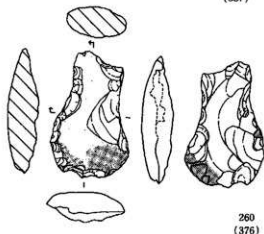
257
(351)



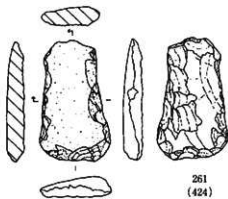
258
(337)



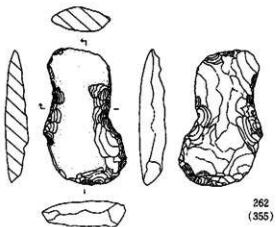
259
(394)



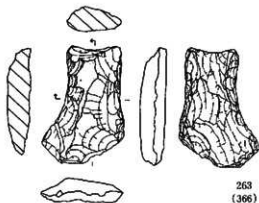
260
(376)



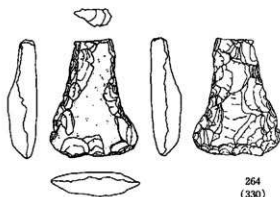
261
(424)



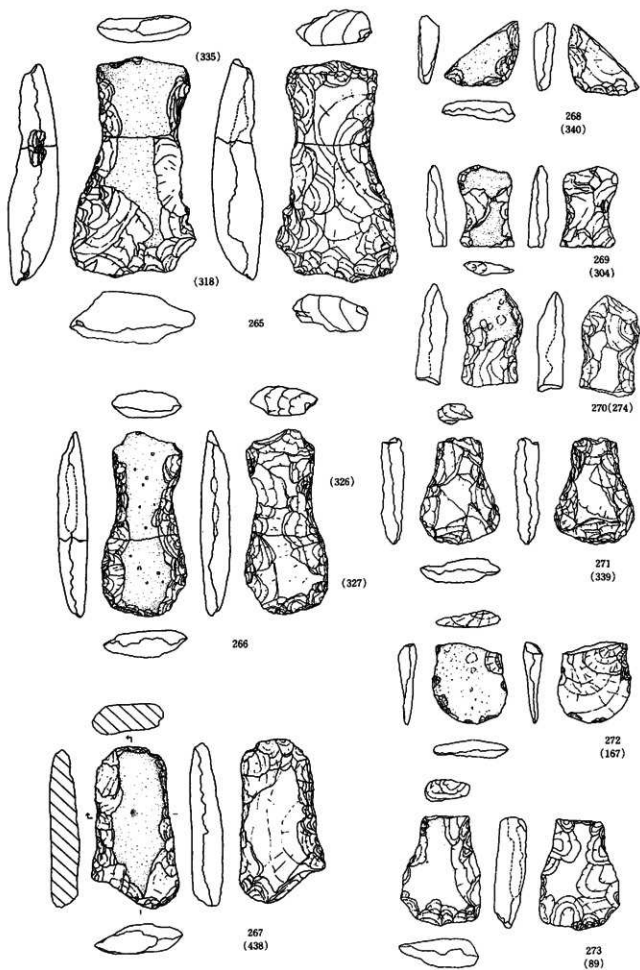
262
(355)



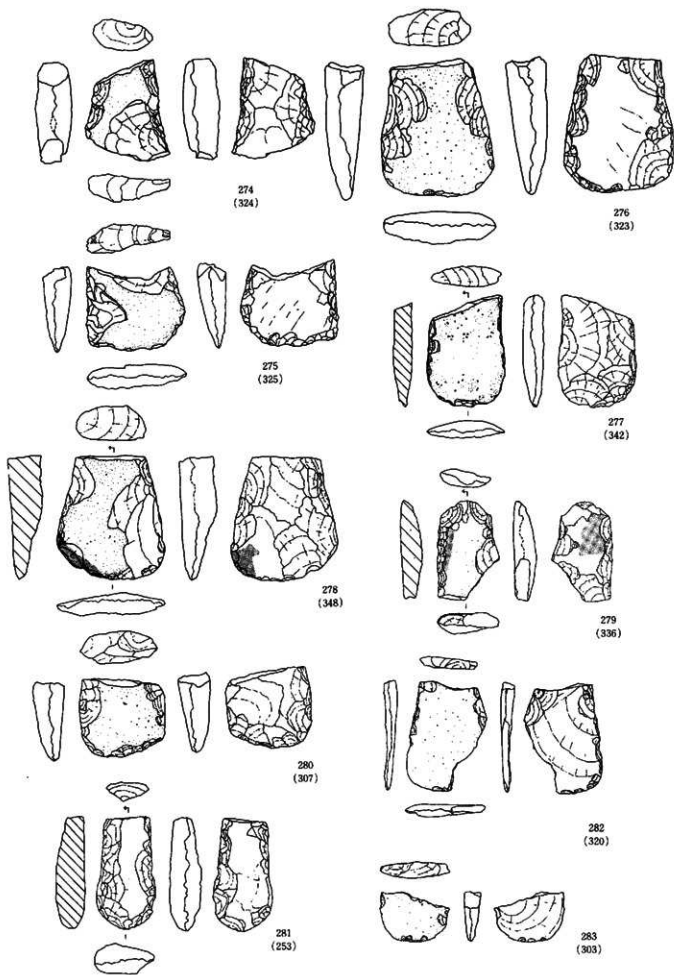
263
(366)



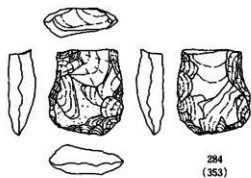
264
(330)



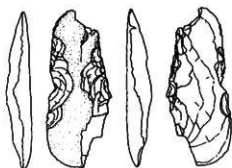
第 92 图 石製品(打製石片破損品)実測図 S = 1 / 4



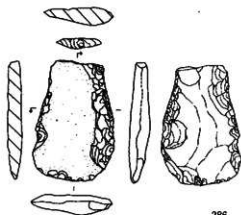
第 93 圖 石製品(打製石片破損品)実測圖 S-1/4



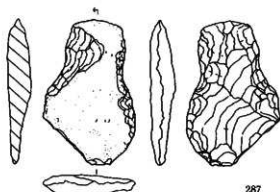
284
(353)



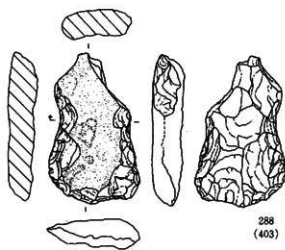
285
(292)



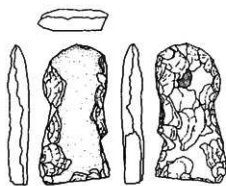
286
(369)



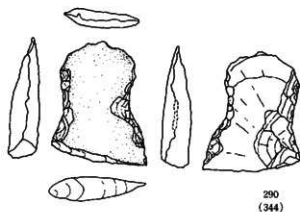
287
(379)



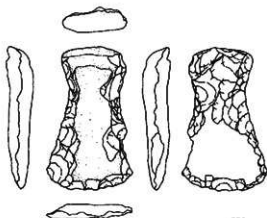
288
(403)



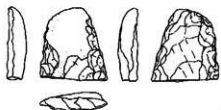
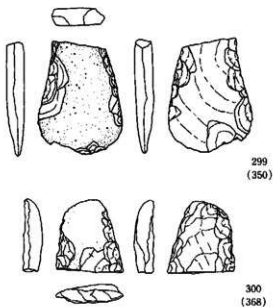
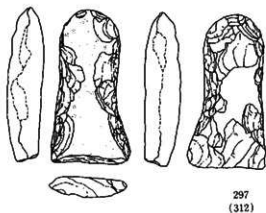
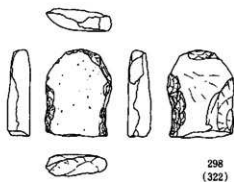
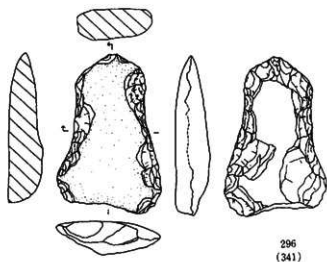
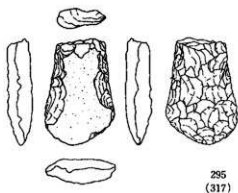
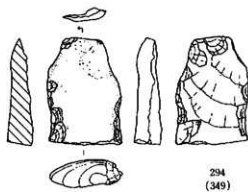
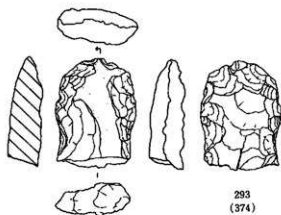
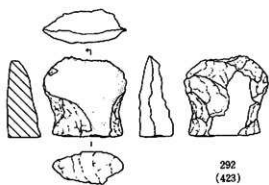
289
(308)

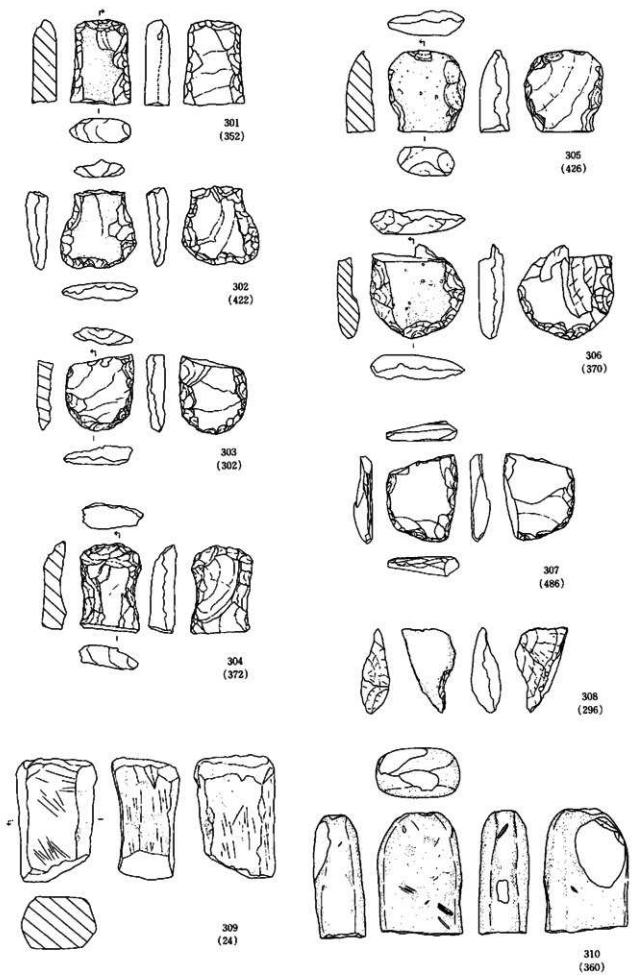


290
(344)

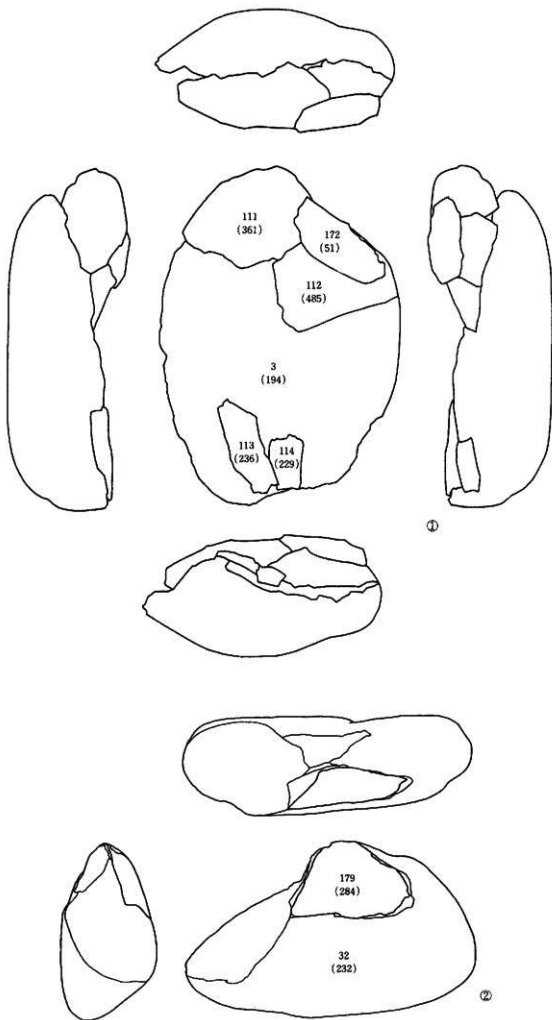


291
(334)

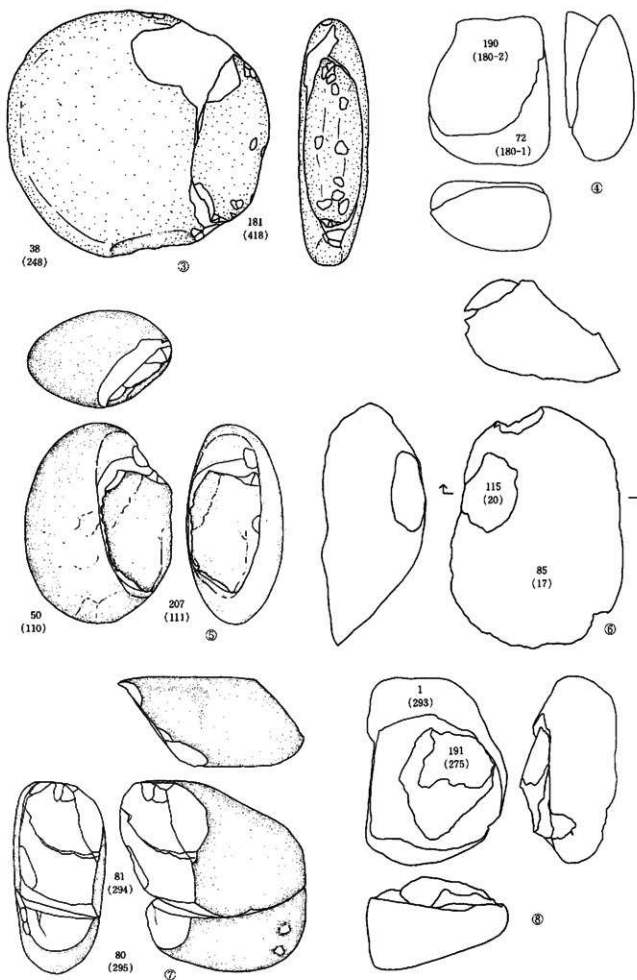




第96图 石製品(打製石片及破損品、砾石)実測圖 S = 1/4



第97圖 石製品標本圖 S = 1 / 4



栗田遺跡出土土製品一覧表 1

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
	7	F6	-49748.00	56713.10	母岩	39.5	30.4	9.8	17300	火山礫凝灰岩	2ヶ所に潰れ痕
	11	E6	-49772.40	56724.15	母岩	28.5	19.2	7.8	6950	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	16	F5	-49768.50	56682.55	母岩	22.1	16.8	12.2	5650	珪化火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	22	E6	-49780.65	56709.45	母岩	19.2	12.2	10.5	3100	覆輝石角閃石安山岩	切断された母岩
	23	F6	-49749.35	56724.20	母岩	26.7	13.2	7.3	3300	角礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	53	F7	-49765.45	56736.80	母岩	24.6	24.2	10.5	8250	石英粗面岩	目的剥片剥離できず
	68	E5	-49776.50	56692.35	母岩	33.0	16.5	12.2	8150	角礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	79	F7	-49758.75	56737.75	母岩	28.1	19.5	12.4	12350	石英安山岩質火山礫凝灰岩	切断された母岩
	99	E6	-49771.20	56715.35	母岩	30.5	19.5	9.2	9850	角礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	120	G4	-49728.40	56656.15	母岩	21.5	9.6	2.0	2550	石英安山岩	切断された母岩
	123	F6	-49745.00	56707.00	母岩	25.6	19.5	6.5	5350	角礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	135	F5	-49757.00	56694.50	母岩	31.5	19.0	21.5	11800	石英安山岩	半截された母岩か台石
	149	F6	-49749.25	56725.80	母岩	30.5	24.6	11.4	11850	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	150	F6	-49749.90	56725.50	母岩	26.8	26.5	8.1	9950	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	184	F6	-49747.65	56718.25	母岩	22.8	19.5	9.3	7100	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	202	F6	-49746.40	56703.20	母岩	36.1	14.2	10.6	8150	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	203	F6	-49752.30	56710.85	母岩	39.2	20.5	17.8	21350	石英粗面岩	半截された母岩
	215	F7	-49746.60	56731.75	母岩	33.2	30.5	10.5	17950	火山礫凝灰岩	台石の一部が目的剥片状に剥離した剥離痕を残すもの
	241	F7	-49759.35	56737.40	母岩	23.4	18.9	10.5	6450	緑色凝灰岩	目的剥片剥離できず
	243	F6	-49768.35	56727.10	母岩	23.6	19.1	6.8	5450	石英安山岩	切断された母岩
	251	F7	-49762.65	56733.65	母岩	28.8	17.5	9.4	7300	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	288	F, E6			母岩	16.5	18.5	5.7	3600	角礫凝灰岩	切断された母岩
	289	F, E6			母岩	26.8	14.2	8.2	4450	角閃石安山岩	目的剥片剥離できず
	290	F, E6			母岩	39.5	14.9	11.8	6550	角礫凝灰岩	半截された母岩
	358	F5	-49761.95	56682.90	母岩	19.8	15.7	6.2	2750	緑色凝灰岩	目的剥片剥離できず
	365	E2	-49792.45	56602.25	母岩	20.7	17.8	7.2	4050	熔結凝灰岩	目的剥片剥離できず
	391	F6	-49753.80	56713.45	母岩	20.1	10.5	7.2	1694	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	395	E6	-49781.00	56722.15	母岩	18.5	12.7	5.0	2000	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
	398	E7	-49772.50	56730.85	母岩	18.2	14.5	8.1	2650	石英粗面岩質火山礫凝灰岩	目的剥片1枚以上剥離
	32	E6	-49772.15	56721.40	母岩砕	13.5	9.8	8.8	1675	珪化凝灰岩(濃濁型)	目的剥片剥離できず
	58	E6	-49773.00	56718.95	母岩砕	15.6	10.5	11.4	2500	火山礫凝灰岩	切断された母岩
	71	G5	-49714.75	56681.15	母岩砕	25.0	10.8	15.5	4850	石英安山岩	切断された母岩
	299	F6, 7			母岩砕	17.2	11.0	5.5	1117	細粒砂岩(新第三紀)	目的剥片剥離できず
	300	A7	-49899.40	56740.90	母岩砕	5.1	6.2	3.6	98	白色凝灰岩	305, 306, 310, 316と同一石
	305	A7	-49899.40	56740.35	母岩砕	5.9	4.9	2.5	61	珪化白色凝灰岩	300, 306, 310, 316と同一石

栗田遺跡出土石製品一覧表 2

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さ	幅	厚さ	重量g	材質	備考
	306	A7	-49899.40	56740.20	母岩砕	8.5	4.7	4.0	96	白色凝灰岩	300, 305, 310, 316と同一石
	310	A7	-49899.30	56740.30	母岩砕	16.8	9.7	4.0	541	白色凝灰岩	300, 305, 306, 316と同一石、目的剥片の失敗品
	316	A7	-49899.65	56741.20	母岩砕	5.3	4.1	1.2	48	白色凝灰岩	300, 305, 306, 310と同一石
	357	F7	-49749.30	56731.55	母岩砕	11.0	10.2	8.1	815	石英粗面岩	
	387	E6	-49779.40	56714.35	母岩砕	16.5	12.5	9.5	2350	火山礫凝灰岩	ハンマーの砕けたものの可能性あり
	448	F7	-49761.35	56730.95	母岩砕	14.5	10.5	8.5	1207	石英粗面岩質凝灰岩	
	462	G4	-49732.00	56647.15	母岩砕	12.5	11.2	8.9	2022	珪化緑色凝灰岩	
	464	F7	-49755.65	56733.25	母岩砕	18.2	8.8	6.5	828	珪化粗粒砂岩(手取G.)	
	50	F6	-49763.45	56721.10	製片	7.2	5.8	0.8	46	珪化凝灰岩	
	75	E3	-49787.65	56634.10	製片	10.9	10.5	2.5	354	流紋岩質塔結凝灰岩	467と同一石?
	119	F4	-49767.00	56650.55	製片	8.7	5.8	2.0	152	塔結凝灰岩	
	401	F5	-49750.45	56685.20	製片	5.9	3.7	0.8	26	石英粗面岩質凝灰岩	
	405	F6	-49747.65	56720.30	製片	7.2	5.3	1.2	96	火山礫凝灰岩	
	409	F6	-49768.00	56703.35	製片	13.7	6.8	2.2	293	角礫凝灰岩	
	410	C区			製片	11.2	7.6	2.3	240	珪化白色凝灰岩	
	221	F6	-49746.80	56725.35	剥片	17.8	13.1	3.3	1111	変質安山岩	目的剥片の失敗品
	343	G4			剥片	13.9	9.5	2.2	360	珪化白色凝灰岩	
	28	E6	-49781.15	56715.95	ハンマー	21.8	12.1	6.5	2450	石英粗面岩	剥離できなかった母岩の可能性が高い
	37	F6	-49746.95	56709.35	ハンマー	11.6	8.5	7.6	1500	火山礫凝灰岩	
	63	C区			ハンマー	11.8	11.2	6.5	1225	珪化粗粒凝灰岩	
	69	F7	-49759.20	56735.60	ハンマー	12.1	10.5	6.8	1450	粗粒凝灰岩	
	73	F6	-49767.45	56728.45	ハンマー	17.5	12.5	5.2	1750	火山礫凝灰岩	
	91	E7	-49770.80	56735.65	ハンマー	16.3	8.5	5.5	847	輝石安山岩	
	156	F6	-49769.40	56724.15	ハンマー	15.2	10.5	5.8	1618	石英粗面岩	
	163	F7	-49753.10	56730.25	ハンマー	16.3	8.5	7.5	1708	石英粗面岩質火山礫凝灰岩	
	201	F6	-49749.00	56712.70	ハンマー	19.3	12.1	8.0	2400	石英安山岩質角礫凝灰岩	
	406	F6	-49764.90	56711.85	ハンマー	12.8	6.8	5.8	852	小円礫岩	ハンマーの砕けたもの
	419	E6	-49772.80	56726.55	ハンマー	17.8	10.9	6.5	1637	石英粗面岩質火山礫凝灰岩	
	132	F6	-49749.85	56729.30	台石	35.2	16.5	17.8	14300	火山礫凝灰岩	剥離痕あり
	152	F5	-49759.40	56682.50	台石	25.2	24.5	17.8	15400	粗粒砂岩(手取G.赤岩t.)	台石の一部が目的剥片状に剥離した剥離痕を残すもの
	188	E6	-49782.25	56712.65	台石	36.5	23.5	15.0	21250	火山礫凝灰岩質小円礫岩	一部に剥離痕
	216	F6	-49767.05	56728.70	台石	30.5	28.9	12.5	16800	輝石角閃石安山岩	
	465				ドリル	1.5	0.7	0.6	1	瑪瑙	破損品、基部を欠失
1	293	F6			母岩	24.2	17.5	10.5	5450	石英安山岩	目的剥片剥離できず、275と接合、最大厚12.0cm
2	249	F7	-49768.05	56739.15	母岩	22.4	21.4	8.9	4900	緑色凝灰岩	目的剥片1枚剥離
3	194	F6	-49747.70	56720.65	母岩	33.0	24.5	10.5	8200	安山岩	目的剥片1枚以上剥離、接合状

(このレコードは次ページに続きます。)

粟田遺跡出土石製品一覧表 3

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さcm	幅cm	厚さ	重量g	石質	備考
											態では長さ35.7、厚さ12.5cm、160.361.458.229、.236.51と同一石
4	283	F6			母岩	18.9	11.0	5.0	1174	ヒン岩	目的剥片1枚剥離
5	277	F6			母岩	17.9	13.8	7.8	2500	熔結凝灰岩(濃飛型)	目的剥片剥離できず、ハンマーの可能性もある
6	213	F7	-49759.10	56738.95	母岩	18.1	16.3	6.7	2950	石英粗面岩	目的剥片剥離できず
7	235	F6	-49750.20	56725.20	母岩	30.3	14.1	11.9	6800	火山礫凝灰岩	目的剥片1枚剥離?
8	217	F6	-49757.05	56726.00	母岩	20.9	15.4	8.9	3750	珪化火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
9	2	E4	-49791.90	56646.60	母岩	19.6	15.3	6.2	2400	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
10	18	F6	-49748.00	56719.25	母岩	29.4	21.0	7.7	5000	角礫凝灰岩	目的剥片1枚以上剥離、図片に剥片、製片などが出土
11	128	E4	-49793.50	56656.10	母岩	31.3	19.0	10.1	8600	石英安山岩	半載された母岩、目的剥片1枚以上剥離
12	139	F7	-49764.50	56731.15	母岩	23.8	13.2	11.6	3990	石英粗面岩	ハンマーの可能性もある
13	41	F5	-49750.30	56696.75	母岩	19.0	21.2	10.5	6050	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
14	117	F6	-49768.50	56706.10	母岩	23.1	15.5	10.6	5000	粗粒砂岩(手取G.赤岩t.)	目的剥片1枚剥離
15	195	F7	-49760.25	56734.75	母岩	18.5	14.7	5.9	2250	粗粒凝灰岩	目的剥片剥離できず、ハンマーの可能性もある
16	193	E6	-49772.90	56714.60	母岩	23.5	24.7	13.5	19050	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
17	3	C区			母岩	24.0	9.5	8.2	4450	角閃石英安山岩	目的剥片1枚剥離
18	181	F5	-49752.65	56686.55	母岩	24.6	22.6	9.6	8700	輝輝石角閃石英安山岩	目的剥片剥離できず
19	105	F4	-49755.60	56669.35	母岩	22.0	15.6	11.2	3900	安山岩	目的剥片剥離できず
20	100	E6	-49779.15	56707.95	母岩	22.5	23.4	9.4	5350	緑色凝灰岩	截断された母岩、目的剥片の剥離の有無は不明
21	64	C区			母岩	32.1	25.7	9.0	10700	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
22	78	F6	-49765.85	56728.65	母岩	29.9	20.3	12.0	9350	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
23	10	F5	-49758.35	56689.30	母岩	29.0	19.8	6.9	5150	粗粒砂岩(手取G.赤岩t.)	目的剥片剥離できず
24	148	F6	-49748.85	56712.15	母岩	23.4	18.6	8.8	4950	珪化凝灰岩	目的剥片剥離できず
25	189	F5	-49754.40	56699.20	母岩	23.3	21.5	10.8	7400	石英安山岩質凝灰岩	目的剥片剥離できず
26	93	F4	-49752.75	56664.10	母岩	21.5	15.2	7.2	2800	輝石安山岩	目的剥片剥離できず、ハンマーの可能性もある
27	155	F3	-49754.70	56610.60	母岩	17.2	17.1	5.6	2650	熔結凝灰岩	目的剥片剥離できず、ハンマーの可能性もある
28	77	C区			母岩	23.5	13.8	11.1	4500	石英粗面岩質凝灰岩	目的剥片剥離できず
29	281	F6			母岩	16.8	17.0	7.2	2500	石英安山岩質粗	截断された母岩

《このレコードは次ページに続きます。》

粟田遺跡出土石製品一覽表 4

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さ	幅cm	厚さ	重量g	石質	備考
30	143	F7	-49765.25	56741.80	母岩	19.3	19.1	9.5	4800	粒凝灰岩 石英安山岩質凝灰岩	1、目的剥片の剥離の有無は不明 目的剥片1枚剥離
31	30	F6	-49750.40	56712.95	母岩	18.4	14.0	12.5	3405	安山岩	目的剥片1枚剥離
32	232	E6	-49771.05	56725.75	母岩	30.4	18.3	10.2	5800	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず、284と接合 目的剥片1枚剥離
33	15	G5	-49724.90	56681.65	母岩	28.0	21.4	9.9	6750	火山礫凝灰岩	目的剥片1枚剥離
34	381	F6	-49759.00	56722.25	母岩	20.8	14.7	7.9	3100	角礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
35	162	E4	-49793.00	56648.40	母岩	27.8	17.9	15.5	10550	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
36	207	F7	-49761.00	56740.60	母岩	29.2	15.7	11.6	6900	火山礫凝灰岩	目的剥片1枚剥離?
37	347	C区			母岩	17.3	13.7	5.4	1761	火山礫凝灰岩 (濃灰型)	目的剥片剥離できず
38	248	F6	-49767.40	56728.15	母岩	25.5	24.9	7.4	6600	石英安山岩	目的剥片剥離できず、418と接合
39	1	F6	-49761.70	56721.25	母岩	31.4	28.4	11.3	12100	凝灰岩	目的剥片剥離できず
40	147	F5	-49756.60	56698.35	母岩	34.3	28.0	13.4	15600	珪化緑色凝灰岩	目的剥片1枚剥離
41	97	F7	-49765.55	56737.25	母岩	25.7	20.3	10.0	6400	中粒砂岩(手取G、赤岩t.)	目的剥片1枚剥離
42	127	F6	-49750.10	56720.50	母岩	32.8	27.5	11.0	12850	粗粒砂岩(手取G、赤岩t.)	目的剥片1枚剥離
43	145	F7	-49750.90	56734.40	母岩	27.1	19.2	9.7	6450	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
44	186	G5	-49715.70	56687.40	母岩	18.0	15.0	8.9	2750	粗粒砂岩(中生代)	目的剥片1枚剥離
45	190	F6	-49745.35	56706.60	母岩	28.2	20.5	12.1	14250	安山岩質粗粒凝灰岩	目的剥片1枚以上剥離?
46	83	F6	-49749.85	56719.60	母岩	32.2	18.6	9.3	6700	角閃石安山岩	目的剥片1枚剥離?
47	161	F5	-49767.80	56685.65	母岩	22.7	19.6	8.7	5200	火山礫凝灰岩	目的剥片1枚剥離?
48	444	F6	-49756.30	56713.10	母岩	19.0	12.1	4.9	1334	珪化白色凝灰岩	目的剥片剥離できず
49	397	F5	-49762.60	56688.35	母岩	19.1	15.9	6.5	3000	石英粗面岩	目的剥片1枚剥離
50	110	F6	-49768.00	56728.75	母岩	20.9	15.2	10.2	3650	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず、111と接合
51	471	F5	-49745.55	56686.90	母岩	21.6	17.1	7.5	3400	ヒン岩	截断された母岩、目的剥片1枚以上剥離
52	466	C区			母岩	25.6	13.8	9.7	4550	火山礫凝灰岩	目的剥片3枚剥離
53	291	F6			母岩	19.9	18.0	9.8	4650	石英粗面岩	目的剥片1枚剥離?
54	297	F6			母岩	24.9	13.6	10.8	4800	角閃石安山岩(白山)	目的剥片剥離できず
55	250	F4	-49751.55	56658.20	母岩	29.4	32.5	10.5	11150	火山礫凝灰岩	目的剥片2枚剥離
56	103	F5	-49750.50	56696.80	母岩	30.7	25.6	10.3	8250	火山礫凝灰岩	目的剥片2枚剥離
57	98	F7	-49753.65	56736.85	母岩	21.5	16.0	10.9	4900	焙結凝灰岩	目的剥片剥離できず
58	80	C区			母岩	22.8	13.7	7.2	2950	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず

栗田遺跡出土石製品一覧表 5

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質	備考
59	174	C区			母岩	26.2	24.4	10.2	8400	角礫凝灰岩	目的剥片3枚剥離
60	36	F6	-49745.60	56715.25	母岩	31.5	29.0	8.5	10950	角閃石安山岩	目的剥片剥離できず
61	230	F7	-49761.05	56740.85	母岩	25.1	15.4	9.8	5750	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
62	154	F7	-49764.70	56732.00	母岩	26.0	20.1	5.1	5700	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
63	247	C区			母岩	31.5	16.2	9.5	6050	小円礫岩	目的剥片1枚以上剥離?
64	4	F6	-49743.80	56717.80	母岩	31.5	21.1	9.7	9000	火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
65	96	F5	-49769.50	56682.00	母岩	23.0	15.2	6.8	2650	流紋岩質凝灰岩	目的剥片剥離できず
66	144	F5	-49745.60	56694.55	母岩	34.8	26.2	10.8	12700	角礫凝灰岩	目的剥片剥離できず
67	140	F7	-49767.10	56737.90	母岩	26.8	14.3	5.8	2850	変形安山岩	目的剥片剥離できず
68	84	E4	-49775.90	56666.00	母岩	24.7	16.1	9.8	4550	凝灰岩	目的剥片剥離できず
69	389	F7	-49754.90	56739.60	母岩	19.1	12.1	9.2	3100	火山礫凝灰岩	截断された母岩、目的剥片の剥離の有無は不明
70	205	C区			母岩	13.4	17.1	10.3	3150	石英安山岩質凝灰岩	截断された母岩、目的剥片の剥離の有無は不明
71	430	F2	-49756.65	56581.85	母岩	19.4	15.1	8.2	3850	緑色凝灰岩	截断された母岩、目的剥片の剥離の有無は不明
72	180.1	E6	-49775.65	56722.40	母岩	15.0	12.8	6.5	1400	石英粗面岩質火山礫凝灰岩	目的剥片剥離できず、180-2と接合。接合状態で長さ15.5cm幅12.7厚さ7.1cm
73	25	F7	-49754.66	56735.75	母岩	22.3	19.7	9.1	5350	珪化安山岩質凝灰岩	目的剥片剥離できず
74	219	F6	-49749.85	56727.05	母岩	25.0	29.6	10.9	10350	石英安山岩	目的剥片剥離できず
75	192	F6	-49762.45	56723.75	母岩	31.4	23.6	10.2	9050	凝灰角礫岩	目的剥片剥離できず
76	130	F7	-49760.20	56732.95	母岩	26.2	28.8	5.1	5050	緑色凝灰岩	目的剥片剥離できず
77	39	E5	-49779.70	56696.50	母岩	26.7	14.3	12.2	5750	角閃石安山岩	目的剥片剥離できず
78	435	F6	-49765.95	56706.05	母岩	21.3	20.5	8.2	4300	凝灰岩質細粒砂岩	截断された母岩、目的剥片の剥離の有無は不明
79	70	C区			母岩	18.8	10.5	5.2	1550	輝石安山岩	目的剥片剥離できず
80	295	F6			母岩砕	9.5	16.2	9.3	1600	中粒砂岩(手取G.)	294と接合状態で、全長20.5cm
81	294	F6			母岩砕	14.3	18.6	9.8	2950	中粒砂岩(手取G.)	295と同一個体
82	440	F2	-49745.00	56584.60	母岩砕	13.2	7.7	8.5	770	火山礫凝灰岩	
83	244	F7	-49762.10	56735.80	母岩砕	18.8	22.4	13.6	4550	安山岩	245、246と同一個体
84	54	E2	-49792.45	56602.80	母岩砕	20.9	9.8	6.6	1560	流紋岩質凝灰岩(濃飛型)	截断片か?
85	17	F6	-49747.30	56721.85	母岩砕	25.1	17.8	10.5	4750	安山岩	194と直接接合しないが同一石、20と接合
86	43	F6	-49748.15	56721.25	母岩砕	25.0	11.2	6.8	2850	白色凝灰岩	截断された母岩
87	179	F4	-49752.40	56661.25	母岩砕	22.1	18.7	10.3	3950	火山礫凝灰岩	大型の剥片の可能性もある

粟田遺跡出土石製品一覽表 6

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さmm	幅mm	重量g	石質	備考
88	245	F7	-49762.10	56736.05	母岩砕	25.0	17.3	10.4	4400 安山岩	大型の剥片の可能性もある
89	131	C区			母岩砕	16.0	10.7	10.9	1750 珪化流紋岩質火山礫凝灰岩	加撃痕多数
90	237	F7	-49752.40	56733.10	母岩砕	16.6	8.8	5.5	875 石英粗面岩	
91	362	F7	-49748.20	56732.85	母岩砕	13.0	10.2	4.9	679 火山礫凝灰岩	ハンマーの破損品の可能性もある
92	5	C区			母岩砕	19.3	12.8	10.1	2050 熔結凝灰岩	
93	298	F6			母岩砕	19.0	11.7	5.5	1390 安山岩質凝灰岩	
94	445	E5	-49786.90	56673.35	母岩砕	17.3	8.2	6.6	853 白色凝灰岩	ハンマーの破損品の可能性もある
95	276	F6			母岩砕	18.9	12.1	5.3	1245 緑色凝灰岩	大型の剥片の可能性もある
96	182	C区			母岩砕	15.7	14.8	8.4	2350 安山岩	
97	160	F6	-49748.10	56721.25	母岩砕	15.3	11.7	6.6	1169 安山岩	194と接合しないが同一石
98	413	F7	-49762.10	56740.70	母岩砕	18.3	12.1	6.8	1323 珪化緑色凝灰岩	
99	315	B区			母岩砕	21.1	16.4	9.3	2750 安山岩	截断された母岩? 目的剥片を剥離できたような剥離痕を残す
100	225	F7	-49748.85	56736.15	母岩砕	19.5	8.9	8.8	1750 粗粒砂岩(中生代)	截断された母岩?
101	246	F7	-49762.20	56735.65	母岩砕	16.0	13.2	9.1	2110 安山岩	
102	218	F6	-49748.50	56661.25	母岩砕	9.5	11.7	6.6	820 石英安山岩	
103	55	E3	-49788.40	56629.35	母岩砕	13.0	12.0	6.7	1750 石英安山岩質粗粒凝灰岩	截断された母岩?
104	137	G5	-49715.00	56682.35	母岩砕	16.7	10.8	7.2	1610 角礫凝灰岩	截断された母岩? 目的剥片を剥離できたような剥離痕を残す
105	231	F7	-49761.60	56738.45	母岩砕	15.6	11.8	6.7	1400 流紋岩質火山礫凝灰岩	
106	455	F4	-49752.15	56662.05	母岩砕	14.1	6.6	6.4	655 珪質岩	
107	396	E2	-49774.50	56589.85	母岩砕	18.2	12.2	8.9	2850 凝灰岩質粗粒砂岩	
108	12	C区			母岩砕	20.8	10.4	6.7	1335 流紋岩質凝灰岩	
109	62	F6	-49748.10	56719.80	母岩砕	12.1	14.8	4.7	505 火山礫凝灰岩	目的剥片の截断片の可能性有り、18と同一石
110	272	F7			母岩砕	15.2	10.8	5.5	1190 石英安山岩	衝片に截断の痕跡あり
111	361	F6	-49747.65	56721.00	裂片	15.1	9.5	6.3	890 安山岩	194と接合
112	485	F6	-49747.45	56720.35	裂片	10.0	11.7	5.2	630 安山岩	194, 361, 51と接合
113	236	F6	-49747.10	56721.35	裂片	10.5	3.5	1.9	75 安山岩	194と接合
114	229	F6	-49747.40	56721.35	裂片	6.0	4.5	1.5	37 安山岩	194と接合
115	20	F6	-49747.05	56719.45	裂片	8.1	6.3	2.0	110 安山岩	17と接合
116	407	F7	-49767.85	56739.15	裂片	14.9	7.5	4.2	414 緑色凝灰岩	目的剥片か剥片截断時の失敗品?
117	169	F6	-49747.70	56720.30	裂片	7.7	4.9	1.3	38 粗粒凝灰岩	
118	400	F6	-49747.05	56719.55	裂片	5.1	2.3	1.4	15 粗粒凝灰岩	
119	33	E6	-49772.15	56721.38	裂片	12.6	7.5	3.9	261 安山岩質凝灰岩	
120	158	F6	-49749.15	56719.45	裂片	5.1	6.9	0.9	34 粗粒凝灰岩	調整剥片の可能性あり
121	331	A4	-49902.90	56645.25	裂片	5.9	6.5	0.7	24 緑色凝灰岩	調整剥片の可能性あり
122	21	E4	-49775.60	56664.65	裂片	6.2	7.7	2.4	95 流紋岩質凝灰岩	
123	313	F, E6			裂片	9.2	10.8	2.0	178 片麻岩 優白部	
124	417	F7	-49765.40	56736.45	裂片	11.3	9.8	3.0	336 粗粒砂岩(中生代)	
125	432	F6	-49749.13	56719.45	裂片	8.9	6.9	2.8	163 火山礫凝灰岩	
126	278	F6			裂片	9.6	4.4	1.7	105 安山岩	

栗田遺跡出土石製品一覽表 7

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考
127	270	F7			裂片	8.1	4.8	1.5	55	中粒砂岩	
128	431	F7	-49749.40	56730.90	裂片	7.0	8.3	2.1	120	石英粗面岩	
129	122	F6	-49749.20	56720.30	裂片	8.1	7.0	1.5	73	凝灰質粗粒砂岩	
130	452	F6.7			裂片	9.5	4.2	1.6	56	火山礫凝灰岩	
131	460	F5	-49750.90	56684.95	裂片	9.2	6.0	2.2	122	石英粗面岩	
132	457	F7	-49757.25	56734.65	裂片	10.6	8.2	3.2	261	火山礫凝灰岩	目的剥片か剥片 截断時の失敗品?
133	166	F5	-49760.65	56692.10	裂片	5.7	6.1	1.2	34	火山礫凝灰岩	
134	261	F6.7			裂片	12.4	4.6	2.4	144	石英安山岩	
135	425	G5	-49717.05	56674.55	裂片	9.7	6.3	3.2	168	緑色凝灰岩	
136	259	F6.7			裂片	12.2	4.7	1.4	83	火山礫凝灰岩	
137	436	F6	-49749.15	56720.40	裂片	7.6	4.7	1.5	49	凝灰質粗粒砂岩	
138	223	F6	-49747.60	56722.00	裂片	6.2	6.5	2.3	88	雑礫石角閃石安山岩	
139	446	F6	-49749.25	56720.40	裂片	7.6	4.8	1.3	51	凝灰質粗粒砂岩	調整剥片の可能性あり
140	266	F7			裂片	14.1	11.1	4.6	589	粗粒緑色凝灰岩	目的剥片か剥片 截断時の失敗品?
141	85	F6	-49762.00	56715.45	裂片	8.2	10.5	1.9	150	粗粒砂岩(中生代)	
142	52	C区			裂片	9.4	10.6	4.4	350	珪化火山礫凝灰岩	
143	220	F7	-49747.35	56730.70	裂片	10.1	4.9	2.8	116	流紋岩岩質粗粒砂岩	
144	256	F6.7			裂片	9.7	12.2	3.2	378	石英安山岩質凝灰岩	
145	228	F7	-49747.50	56732.65	裂片	9.9	7.4	2.1	136	粗粒凝灰岩	
146	333	A7	-49897.50	56739.35	裂片	10.4	11.1	4.1	593	凝灰岩	目的剥片か剥片 截断時の失敗品
147	262	F7			裂片	9.4	6.0	2.5	150	緑色凝灰岩	
148	264	F7			裂片	9.2	11.3	3.2	338	石英安山岩	
149	115	F6	-49747.15	56718.50	裂片	10.3	8.1	2.0	132	火山礫凝灰岩	18と同一石
150	265	F7			裂片	8.2	8.0	2.0	149	緑色凝灰岩	
151	442	F7	-49749.15	56730.40	裂片	12.7	7.3	3.6	296	火山礫凝灰岩	
152	447	F7	-49762.05	56738.65	裂片	17.1	11.5	5.1	850	石英安山岩質粗粒凝灰岩	
153	267	F7			裂片	8.5	6.7	1.7	95	珪化白色凝灰岩	
154	439	F6	-49747.85	56719.05	裂片	9.9	7.9	1.3	81	火山礫凝灰岩	
155	476	C区			裂片	9.8	10.7	2.5	200	凝灰岩(濃飛型)	調整剥片の可能性あり
156	437	F7	-49749.45	56730.50	裂片	12.3	6.9	3.5	170	火山礫凝灰岩	
157	469	F7	-49754.30	56733.45	裂片	7.5	10.4	1.9	106	火山礫凝灰岩	
158	479	E2			裂片	9.1	11.2	2.2	170	石英安山岩質火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品?
159	239	F7	-49754.30	56733.90	裂片	8.0	6.6	1.2	52	石英粗面岩	
160	257	F6.7			裂片	9.6	6.1	1.8	92	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品?
161	319	A4	-49902.75	56645.25	剥片	10.4	5.5	0.9	38	緑色凝灰岩	調整剥片の可能性あり
162	404	F6	-49747.90	56722.45	剥片	10.1	5.9	1.7	70	火山礫凝灰岩	
163	433	F6	-49748.75	56709.50	剥片	5.6	3.9	0.9	18	粗粒凝灰岩	調整剥片の可能性あり
164	434	F4	-49752.45	56664.70	剥片	5.8	4.7	0.7	14	珪化白色凝灰岩	調整剥片の可能性あり
165	258	F6.7			剥片	8.4	7.7	1.9	94	火山礫凝灰岩	調整剥片の可能性あり
166	87	F6	-49749.20	56719.45	剥片	5.2	4.4	0.9	18	粗粒凝灰岩	調整剥片の可能性あり
167	328	A4	-49902.80	56645.70	剥片	4.8	7.5	0.7	6	緑色凝灰岩	調整剥片の可能性あり
168	263	F7			剥片	6.0	2.9	1.0	15	細粒砂岩	調整剥片の可能性あり

粟田遺跡出土石製品一覽表 8

※調査票の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
169	301	A4	-49903.55	56647.60	剥片	5.1	5.9	0.7	21	緑色凝灰岩	剥片の可能性がある
170	268	F7			剥片	14.7	9.7	3.0	364	火山礫凝灰岩	横長剥片
171	473	F6			剥片	15.4	10.5	3.9	670	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品、横長剥片
172	51	F6	-49747.60	56721.10	剥片	11.8	6.0	2.0	145	安山岩	194と接合、目的剥片の失敗品、194.160.229.236.361.458.と同一石
173	373	G5			剥片	9.8	8.2	1.7	192	石英安山岩質凝灰岩	横長剥片、目的剥片の失敗品
174	260	F6.7			剥片	10.0	13.3	3.1	256	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品
175	475	C区			剥片	13.2	8.0	2.7	254	流紋岩質角礫岩	目的剥片の失敗品
176	171	F7	-49747.60	56721.05	剥片	10.5	6.7	2.0	136	粗粒凝灰岩	目的剥片の失敗品
177	255	F6.7			剥片	10.6	6.8	1.6	112	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品?
178	408	F6	-49742.00	56713.25	剥片	12.3	6.3	1.9	138	角閃石安山岩	目的剥片の失敗品
179	284	F6			剥片	8.5	12.4	3.4	284	火山礫凝灰岩	232と接合、目的剥片の失敗品
180	90	F6	-49748.25	56719.85	剥片	13.6	6.9	1.6	125	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品
181	418	F6	-49767.25	56728.25	剥片	17.4	7.5	6.2	700	石英安山岩	248と接合、目的剥片の失敗品
182	168	F6	-49749.85	56719.35	剥片	19.2	5.2	5.7	451	中粒砂岩(中生代)	目的剥片の失敗品
183	314	B区			剥片	14.6	7.1	2.1	200	緑色凝灰岩	目的剥片の失敗品
184	61	E2	-49792.40	56602.25	剥片	12.7	5.7	4.9	310	熔結凝灰岩	目的剥片の失敗品
185	211	F7	-49752.45	56736.75	剥片	14.3	9.4	4.8	580	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品
186	269	F7			剥片	11.0	9.7	2.5	327	石英安山岩質火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品
187	224	F7	-49746.80	56732.45	剥片	8.9	10.3	1.7	143	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品
188	254	F6.7			剥片	9.2	13.2	2.9	344	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品
189	159	F5	-49756.30	56684.65	剥片	11.9	11.9	2.7	313	輝石安山岩	目的剥片か剥片截断時の失敗品
190	180.2	E6	-49775.65	56722.42	剥片	12.2	11.8	4.4	600	石英粗面岩質火山礫凝灰岩	180-1と接合、目的剥片の失敗品
191	275	F6			剥片	13.7	11.3	4.1	543	石英安山岩	293と接合、剥片截断調整の失敗品
192	114	F6	-49748.65	56721.05	剥片	18.8	15.4	4.6	970	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品、18と同一石
193	116	F6	-49749.15	56722.55	剥片	17.1	13.8	3.6	789	角礫凝灰岩	目的剥片の失敗品、18と同一石
194	170	F7	-49746.80	56720.10	剥片	13.4	18.5	4.9	1082	角礫凝灰岩	目的剥片か剥片截断時の失敗品、18と同一石
195	226	F7	-49752.10	56735.85	剥片	15.5	14.7	4.1	853	粗粒砂岩(中生代)	目的剥片か剥片截断時の失敗品
196	402	F7	-49750.20	56732.85	剥片	11.2	6.2	2.8	193	粗粒砂岩	目的剥片の失敗品
197	252	F6.7			剥片	14.9	14.2	4.2	858	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品
198	477	F5			剥片	13.0	10.3	1.5	365	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品、横長剥片

栗田遺跡出土石製品一覧表 9

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さ	幅cm	厚さ	重量g	石質	備考
199	279	F6			剥片	21.2	13.5	4.9	1400	流紋岩質火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品?
200	487	F, E6			剥片	16.2	15.5	5.1	1598	火山礫凝灰岩	目的剥片か剥片裁断時の失敗品
201	354	F4			剥片	11.4	8.8	2.9	290	凝灰岩	目的剥片か剥片裁断時の失敗品
202	392	C区			剥片	14.4	10.9	2.5	400	流紋岩質凝灰岩	目的剥片の失敗品、414と同一石
203	345	G5			剥片	15.9	11.7	3.3	700	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品
204	467	E3	-49788.20	56634.40	剥片	16.4	11.1	3.2	540	流紋岩質瑛結凝灰岩	目的剥片の失敗品、75と同一石?
205	414	G3	-49736.85	56635.50	剥片	15.6	10.3	2.2	318	流紋岩質凝灰岩	目的剥片の失敗品、392と同一石
206	458	F6	-49746.85	56719.25	剥片	14.8	9.1	2.6	330	緑色凝灰岩	目的剥片の失敗品
207	111	F6	-49767.95	56728.75	剥片	12.9	9.1	2.0	300	火山礫凝灰岩	目的剥片の失敗品、110と接合
208	463	F3	-49765.30	56625.10	ハンマー	17.3	6.1	4.0	781	細粒砂岩	
209	35	F6	-49746.70	56723.50	ハンマー	17.3	7.8	4.8	1060	石英安山岩	
210	280	F7			ハンマー	15.1	5.7	4.5	557	火山礫凝灰岩	上部と下部に加撃による潰れ痕
211	286	C区			ハンマー	16.9	7.6	2.0	918	火山礫凝灰岩	
212	82	E6	-49770.85	56712.45	ハンマー	19.9	10.4	8.1	2000	珪化粗粒砂岩	
213	412	F7	-49749.30	56733.10	ハンマー	11.6	9.5	5.8	618	緑色凝灰岩	
214	459	F6			ハンマー	15.0	10.8	4.7	1045	石英粗面岩	剥離できなかった母岩の可能性もある
215	411	F6	-49746.30	56724.75	ハンマー	14.4	10.2	5.5	967	石英粗面岩	
216	285	C区			ハンマー	14.4	10.4	5.2	1005	緑色凝灰岩	
217	209	F7	-49762.55	56734.30	ハンマー	13.6	11.6	4.7	1060	角礫凝灰岩	
218	461	F7	-49764.50	56731.65	ハンマー	14.0	10.2	5.4	873	角礫凝灰岩	
219	45	E3	-49791.40	56629.75	ハンマー	16.5	14.9	8.1	2063	火山礫凝灰岩	剥離できなかった母岩の可能性もある
220	385	F7	-49765.30	56741.55	ハンマー	19.3	13.4	9.2	2700	石英粗面岩質凝灰岩	剥離できなかった母岩の可能性もある
221	14	F4	-49768.50	56658.00	ハンマー	14.1	10.8	10.2	2200	石英安山岩	ハンマーの砕けたもの
222	126	F6	-49767.35	56728.35	ハンマー	18.1	12.2	9.0	2024	石英粗面岩質凝灰岩	母岩の可能性もあるが、全面に多数の加撃痕を残す
223	104	E6	-49775.00	56715.20	ハンマー	14.2	9.9	7.7	1530	角礫凝灰岩	
224	59	F6	-49768.80	56724.95	ハンマー	15.0	13.7	6.9	1560	火山礫凝灰岩	剥離できなかった母岩の可能性もある
225	271	F7			ハンマー	14.9	14.4	5.3	1370	粗粒緑色凝灰岩	剥離できなかった母岩の可能性もある
226	287	C区			ハンマー	13.9	11.8	5.3	1011	珪化凝灰岩	
227	393	F5	-49752.60	56697.20	ハンマー	14.9	8.4	4.7	550	粗粒緑色凝灰岩	
228	273	F7			ハンマー	15.4	7.3	3.0	440	火山礫凝灰岩	
229	153	E6	-49771.75	56724.00	台石	25.6	26.2	16.9	17600	珪化火山礫凝灰岩	
230	65	F6	-49749.00	56720.00	台石	37.7	27.7	18.9	32650	石英粗面岩	
231	49	F6	-49748.65	56721.50	台石	35.5	26.2	15.3	21200	片麻岩	
232	29	F6	-49751.10	56725.55	台石	32.4	27.4	19.9	24500	石英粗面岩	
233	206	F6	-49745.15	56702.70	台石	32.5	22.3	19.1	18100	火山礫凝灰岩	

栗田遺跡出土石製品一覧表 10

(※備考欄の番号は仮番号)

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
234	421	E4	-49789.25	56651.05	製品	16.9	7.7	2.0	233	緑色凝灰岩	横長剥片
235	472	C区			製品	14.5	8.6	2.4	328	細粒砂岩(手取G.赤岩 t.)	横長剥片
236	367	E3	-49784.95	56615.90	製品	15.0	10.1	3.2	409	細粒砂岩(手取G.赤岩 t.)	横長剥片、頭部に調整痕
237	451	E3	-49783.25	56625.10	製品	21.0	10.6	3.8	893	粗粒砂岩	横長剥片
238	474	G3	-49738.00	56631.45	製品	15.9	9.4	3.7	446	粗粒砂岩(手取G.)	横長剥片
239	311	A区			製品	16.3	11.2	3.2	529	火山礫凝灰岩	
240	378	G2	-49739.10	56585.60	製品	21.1	10.7	4.9	1185	角礫凝灰岩	
241	480	E2	-49796.60	56601.75	製品	15.0	8.1	2.6	280	安山岩	横長剥片
242	481	E2	-49796.60	56601.85	製品	15.0	8.4	2.6	319	石英安山岩質火山礫凝灰岩	頭部折取り
243	482	E2	-49796.60	56601.90	製品	17.4	8.0	2.7	369	粗粒緑色凝灰岩	横長剥片、頭部に僅かな調整痕
244	483	E2	-49796.58	56601.95	製品	14.4	7.8	2.6	259	輝石安山岩	頭部折取り
245	484	E2	-49796.58	56602.00	製品	18.4	8.3	3.1	408	安山岩	横長剥片、頭部に僅かな調整痕(潰れ痕)
246	375	G5	-49711.80	56686.50	製品	16.2	9.6	3.5	611	石英安山岩	頭部主剥離面からの折取り
247	377	E3	-49782.95	56624.60	製品	12.6	7.7	2.8	312	火山礫凝灰岩	
248	338	F2	-49770.10	56606.05	製品	15.1	7.5	3.6	428	凝灰岩	
249	364	F5	-49745.30	56683.15	製品	17.1	7.2	3.6	577	火山礫凝灰岩	
250	329	A4	-49902.90	56648.45	製品	16.5	7.5	3.1	490	緑色凝灰岩	刃部と側面に磨耗痕有り
251	210	F7	-49757.00	56733.80	製品	16.5	8.1	2.7	418	緑色凝灰岩	横長剥片、使用による磨耗痕あり
252	332	A6	-49898.90	56703.30	製品	16.4	5.7	2.9	351	緑色凝灰岩	刃部両面と両側面に磨耗痕
253	321	A6	-49897.35	56717.90	製品	16.5	6.5	2.4	382	粘板岩(中生代)	両面加工、使用痕あり
254	346	G3			製品	15.8	9.0	3.5	512	火山礫凝灰岩	
255	363	G5	-49712.60	56686.75	製品	14.9	7.8	3.0	356	石英安山岩質凝灰岩	頭部折取り、刃部の片側に潰れ痕
256	309	A区			製品	16.6	9.8	3.3	594	火山礫凝灰岩	
257	351	E3	-49788.20	56636.25	製品	14.8	8.0	3.3	378	火山礫凝灰岩	刃部欠損後再調整
258	337	E2	-49794.20	56589.60	製品	13.1	8.7	1.9	242	火山礫凝灰岩	横長剥片、頭部欠損後再調整、主剥離面に使用痕
259	394	F7	-49767.65	56740.70	製品	11.8	8.7	3.3	357	ヒン岩	
260	376	F3	-49758.40	56616.40	製品	13.2	8.1	3.2	329	緑色凝灰岩	横長剥片、刃部の内外面に磨耗痕、頭部の内外面に磨耗痕
261	424	G3	-49736.15	56618.80	製品	12.7	7.6	2.0	238	石英安山岩	横長剥片
262	355	E3	-49791.25	56634.00	製品	14.2	8.7	2.7	314	火山礫凝灰岩	刃部欠損後再調整
263	366	G4	-49737.65	56663.55	製品	12.3	8.6	2.2	256	緑色凝灰岩	刃部欠損後再調整、端一部に自然面を残す
264	330	B区			製品	12.4	9.1	3.1	311	凝灰質細粒砂岩	頭部横方向からの折取り
265	318	A6	-49901.25	56716.05	破損品	15.5	13.2	5.2	1018	角礫凝灰岩	335と接合、全長23.1cm、胴部で縦折れ
265	335	A6	-49901.15	56715.45	破損品	8.6	9.9	4.8	363	珪化凝灰岩	318と接合、全長23.1cm、胴部で縦折れ
266	326	A4	-49903.05	56645.50	破損品	11.4	7.2	3.1	321	火山礫凝灰岩	327と接合、全

(このレコードは次ページに続きます。)

栗田遺跡出土石製品一覧表 11

※備考欄の番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さ	幅	厚さ	重量g	石質	備考
266	327	A4	-49903.40	56645.25	破損品	8.0	8.8	3.1	268	凝灰岩	長19.4cm、胴部中央下で縦折れ 326と接合、全長19.4cm、胴部中央下で縦折れ 横長剥片、刃部と側辺の一部欠失
267	438	F2	-49744.85	56584.65	破損品	17.1	9.3	3.2	613	火山礫凝灰岩	刃部片 胴部中央より下半欠失、縦折れ 胴部より下半欠失、横折れ
268	340	C区			破損品	7.1	7.7	2.1	97	粗粒凝灰岩	刃部片
269	304	A2			破損品	8.5	5.5	2.0	97	凝灰岩	胴部中央より下半欠失、縦折れ 胴部より下半欠失、横折れ
270	274	F6			破損品	10.3	6.2	2.7	206	火山礫凝灰岩	頭部欠失、横折れ
271	339	C区			破損品	10.0	8.4	2.4	248	細粒凝灰岩	頭部欠失、横折れ、両面加工
272	167	G6	-49739.95	56712.35	破損品	8.4	7.8	1.9	110	火山礫凝灰岩	横長剥片? 胴部より上半欠失、横折れ 頭部欠失、横折れ
273	89	F6	-49748.10	56713.20	破損品	11.7	8.4	3.1	347	火山礫凝灰岩	頭部欠失、横折れ
274	324	A4	-49902.50	56646.95	破損品	10.1	8.8	3.8	385	火山礫凝灰岩	頭部欠失、横折れ、刃部欠失、縦折れ、325と接合
275	325	A4	-49903.35	56647.55	破損品	8.3	10.0	3.0	275	火山礫凝灰岩	胴部下半より上部欠失、縦折れ、324と接合
276	323	A4	-49903.45	56647.40	破損品	14.5	11.6	4.2	835	火山礫凝灰岩	横長剥片、胴部上半欠失、縦折れ
277	342	G3			破損品	11.8	8.1	2.2	255	中粒砂岩(手取G.赤岩t.)	胴部より上半欠失、縦折れ
278	348	F2			破損品	12.9	11.5	3.6	607	粗粒緑色凝灰岩	胴部より上半欠失、縦折れ
279	336	C区			破損品	10.4	6.4	2.4	190	ヒン岩	胴部より下半欠失、側辺に新しい傷、両面に使用痕
280	307	A6	-49900.70	56725.05	破損品	8.3	8.9	3.3	274	石英安山岩質火山礫凝灰岩	胴部上半欠失、異方向(多方向)からの折れ
281	253	F6.7			破損品	6.2	11.9	3.3	302	粗粒砂岩(手取G.赤岩t.)	頭部欠失、縦折れ、自然面少なく両面加工に近い
282	320	A7			破損品	11.4	8.3	1.4	135	粗粒凝灰岩	横長剥片、横折れ
283	303	A3			破損品	5.3	7.3	1.7	60	火山礫凝灰岩	横長剥片、胴部下半より上部欠失、横折れ
284	353	E3	-49795.25	56636.60	破損品	8.9	7.7	2.8	228	緑色凝灰岩	胴部より上部欠失、横折れ、自然面種・部両面加工に近い
285	292	F.E6			破損品	16.4	6.5	2.6	255	ヒン岩	横長剥片、頭部と刃部、側辺の一部欠失(新しい傷)
286	369	G4	-49727.40	56643.75	破損品	12.7	8.5	2.1	258	火山礫凝灰岩	横長剥片、頭部欠失後再調整の可能性あり、折れの方向不明
287	379	F3	-49755.25	56612.65	破損品	15.2	9.8	2.5	340	角礫凝灰岩	横長剥片、刃部と側辺の一部欠失

栗田遺跡出土石製品一覧表 12

※調査番号は仮番号

図番号	仮番号	地区	Y	X	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質	備考
288	403	F5	-49765.60	56675.55	破損品	15.6	9.7	3.2	545	変質緑色凝灰岩	胴部と側辺の一部欠失
289	308	A7	-49900.80	56749.30	破損品	14.6	7.5	2.3	325	緑色凝灰岩	刃部と側辺の一部欠失、折れの方向不明
290	344	E3	-49785.60	56615.10	破損品	12.6	9.9	3.0	409	火山礫凝灰岩	横長割片、胴部より下半欠失、縦折れ
291	334	A7	-49897.20	56752.50	破損品	14.7	8.9	2.9	381	安山岩質火山礫凝灰岩	側辺の一部欠失
292	423	F2	-49742.35	56604.15	破損品	8.5	8.8	3.5	251	火山礫凝灰岩	胴部より下半を欠失、縦折れ
293	374	F3	-49755.05	56635.15	破損品	11.3	8.4	3.5	403	火山礫凝灰岩	胴部中央で縦折れ、刃部の可能性もある
294	349	E3	-49791.80	56634.45	破損品	11.2	7.8	2.9	273	火山礫凝灰岩	胴部より下半欠失、横折れ
295	317	A7	-49899.35	56741.45	破損品	11.1	7.3	2.6	240	火山礫凝灰岩	胴部より上半欠失、横折れ、折れ部に再調整を施す
296	341	C区			破損品	16.7	10.9	3.6	685	火山礫凝灰岩	刃部欠失
297	312	B区			破損品	15.9	8.3	3.8	601	凝灰岩	刃部欠失、折れの方向不明
298	322	A区			破損品	9.1	6.9	2.3	212	安山岩	胴部下半より下半欠失、横折れ
299	350	E3	-49780.30	56632.50	破損品	11.8	8.7	1.8	237	ヒン岩	横長割片、胴部より上半欠失、折れの方向不明
300	368	E3	-49786.10	56624.45	破損品	7.7	6.9	2.0	120	珪化緑色凝灰岩	胴部上半欠失、折れの方向不明
301	352	E3	-49781.00	56631.95	破損品	8.9	6.3	2.5	218	中粒砂岩(手取G.赤岩t.)	胴部より下半欠失、縦折れ
302	422	F3	-49763.00	56625.55	破損品	8.1	7.9	2.3	166	輝石安山岩	胴部より上半を欠失、折れの方向不明
303	302	A5	-49899.55	56695.35	破損品	7.1	8.0	1.9	124	凝灰質粗粒砂岩	胴部上半欠失、横折れ、両面加工状
304	372	E3	-49780.80	56631.05	破損品	9.4	6.4	2.7	187	緑色凝灰岩	胴部下半欠失、縦折れ、自然面少なく両面加工状
305	426	E3	-49780.00	56625.70	破損品	8.5	8.2	3.0	282	火山礫凝灰岩	胴部より下半欠失、折れの方向不明
306	370	E3	-49795.00	56636.85	破損品	9.8	9.9	2.5	274	石英安山岩質火山礫凝灰岩	胴部より上半欠失、折れの方向不明
307	486	C区			破損品	9.2	7.4	2.0	139	輝石安山岩	胴部より上半欠失、両面加工状、割片に自然面を残し胴部の可能性もある、折れの方向不明
308	296	F, E6			破損品	8.9	5.5	2.9	111	粗粒砂岩(中生代)	頭部片
309	24	E2			砥石	13.1	8.5	6.9	1036	粗粒砂岩(中生代)	破損品
310	360	C区			砥石	12.7	8.6	5.1	1011	細粒砂岩(中世代)	破損品

第七章 古代以後の遺構と遺物

第1節 竪穴式建物

A調査区

1号竪穴式建物(図99・100・101)

遺構 調査区北部の、A-7区で検出した。床面の標高は、約34.3mである。竪穴は東側の一部が遺存しているだけで、大部分が金武土川の護岸工事で掘削されている。南北の長さは、2.9mを測る。竪穴の主軸は、ほぼ真北に向いている(約N-0'-W)。現存する壁高は約20cmである。竪穴の覆土は暗褐色系粘質土で、不定形な土坑を切っている。カマドを竪穴の北東隅で検出している。カマドの崩土から、赤色塗彩した土師器鉢が出土している。

遺物 黒褐色土の包含層から検出した遺物である。1~4の土師甕のうち、3が縦方向のハケ調整を施した非クロコ整形で、他はクロコ整形である。5は底部中央に径約4.5cmの穴と、周囲に径約5mmの穴を二個配した瓶。6・7の土師碗は、6が内黒・外面塗彩で7が内外面塗彩である。

2号竪穴式建物(図99・100・101)

遺構 調査区北部の、A-7区で検出した。B-1号竪穴の東側で、約90cm離れて検出した。床面の標高は、約34.2mである。竪穴は南北約3.6m、東西約4.11mを測り、東西にやや長い方形を呈している。床面積は、約13.3㎡を測る。現存する壁高は、約20cmである。竪穴の主軸は、東に約8'振っている(N-8'-E)。カマドは検出できなかった。しかし、竪穴の西南隅に黄褐色粘土が見られ、土器も比較的集中していたので、西南隅にカマドがあった可能性がある。竪穴の北側壁上で、二個の柱穴を検出している。南側壁で柱穴を検出のため確定できないが、竪穴の壁柱になる可能性がある。竪穴の覆土は灰褐色系粘質土で、掘り上がった床面の起伏が激しいことから貼床を想定して念査したが確認できなかった。

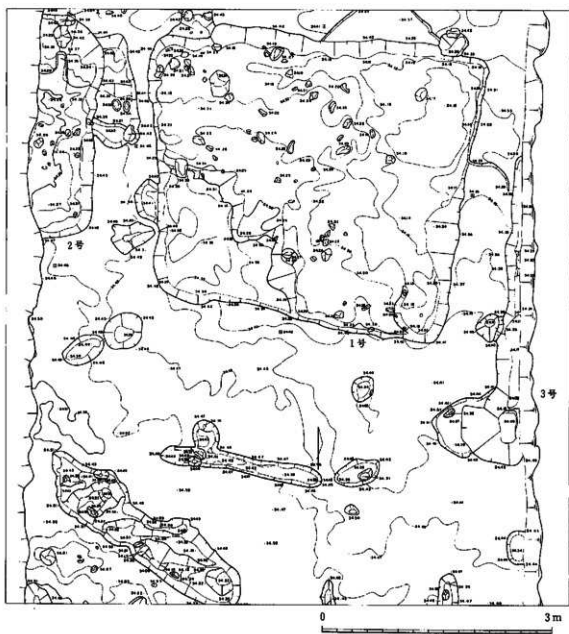
遺物 第 図1・2は、この竪穴のカマドから検出した資料である。1の塀は、外面上半をクロコハケ調整し、下半を斜ハケ調整している。内面はクロコハケ調整である。2は、内外面を塗彩した土師鉢である。

3号竪穴式建物(図99・100・103)

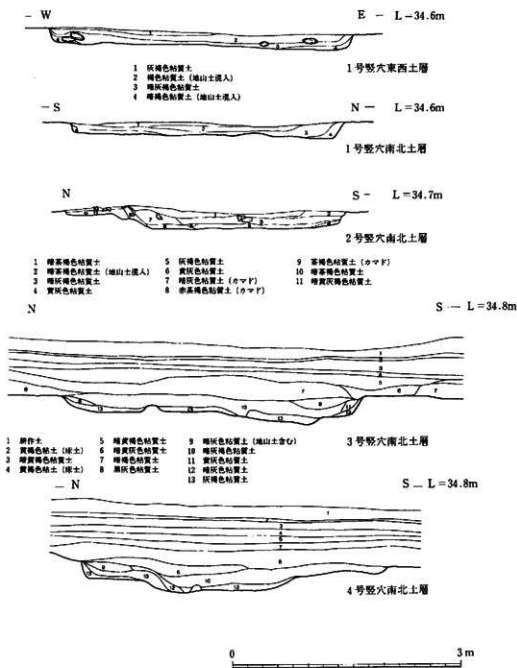
遺構 調査区北部の、A-7区東側で検出した。西側のB-2号竪穴とは70cm離れている。床面の標高は、約34.2mである。竪穴は西側の一部が遺存しているだけで、大部分が未調査区域に延びている。南北の長さは、3.9mを測る。竪穴の主軸は、ほぼ真北に向いている(約N-0'-W)。現存する壁高は約30cmである。竪穴の覆土は、暗灰褐色系粘質土である。カマドは未検出である。

4号竪穴式建物(図100)

遺構 調査区北部の、A-7区東側で検出した。B-1~3号竪穴の北側に位置し、竪穴の西



第99图 B区1、2、3号整穴实测图



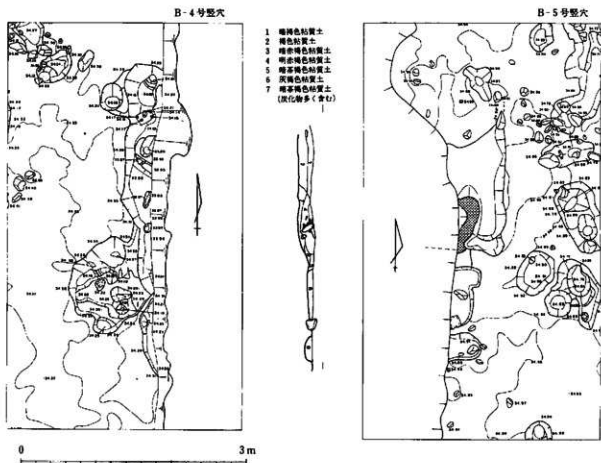
第100図 B区整穴の土層実測図

側がわずかに調査区に入り、大部分は調査区外に延びている。床面の標高は、約34mである。南北の長さは、約3mを測る。竪穴の主軸は、ほぼ真北に向いている(約N-0°-W)。現存する壁高は約35cmである。竪穴の覆土は、暗褐色系粘質土である。カマドは未検出である。

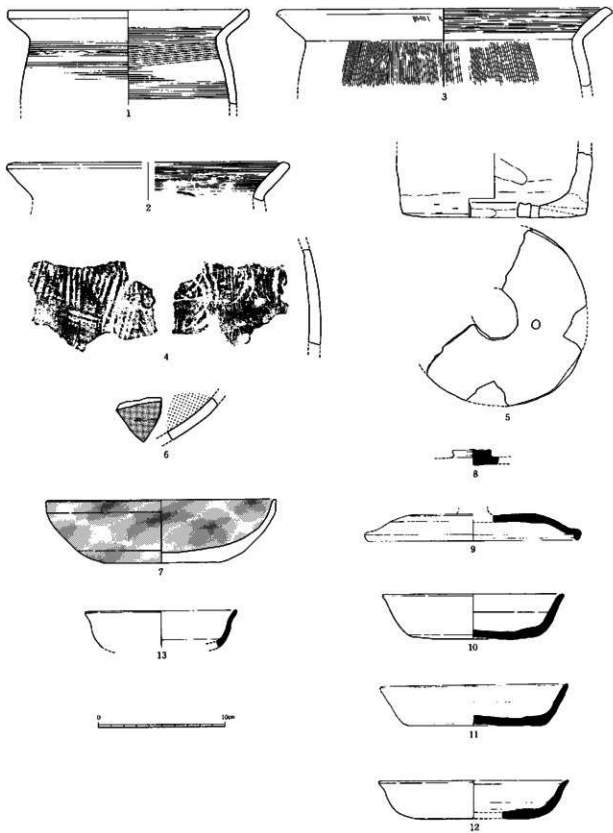
5号竪穴式建物(図100・102)

遺構 調査区南部の、A-4区西側で検出した。竪穴の東側がわずかに調査区に入り、大部分は調査区外に延びている。床面の標高は、約34.9mである。遺構の残り具合は大変悪く、全体の形状をつかめないが、南北の長さは、約1.8m以上を測る。竪穴の主軸は、ほぼ真北に向いている(約N-0°-W)。現存する壁高は約10cmである。竪穴の覆土は、暗褐色系粘質土である。竪穴の南東隅から、カマドと思われる焼土を検出している。

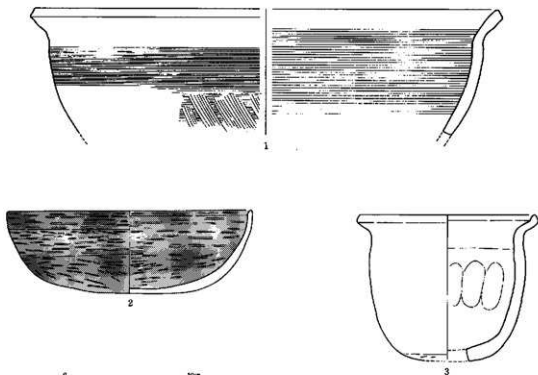
遺物 第 3 図の上師小甕は、この竪穴のカマド跡と思われる粘土塊の中から検出した。内外面をナデ調整し、底部付近は削っている。



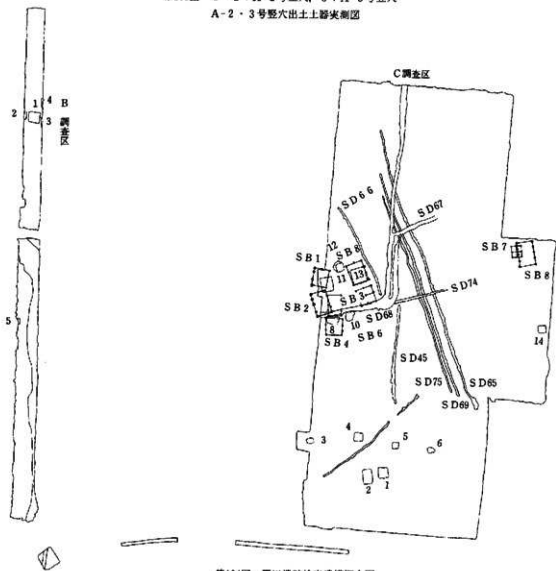
第101図 B区4・5号竪穴実測図



第102图 A-1号整穴实例图



第103图 1~2: A-2号整穴, 3: A-5号整穴
A-2·3号整穴出土土器実测图



第104图 栗田遺跡検出設備概略図

C区調査区

1号竪穴式建物（図105・118）

遺構 調査区南部の、区で検出した。床面の標高は、約34.9mである。竪穴は、南北3.65m・東西3.25mの南北にやや長い方形を呈し、床面積は約11.8㎡を測る。竪穴長軸は真北から西に振っており、約N-6°-Wを測る。現存する壁高は約15cmである。竪穴の覆土は黄褐色砂質土で、黒褐色系の上を伴う畝溝が埋没後に掘り込まれ、竪穴の形状が東側ではつかみにくなっている。床面の小穴は、竪穴以前の木根などの痕跡の可能性が強く、竪穴にともなう建物柱穴は確認できなかった。竪穴中央部で検出した人頭大の石は、覆土を掘り込んだ地山ブロックを多く含んだ淡茶褐色土に含まれており、竪穴埋没後に入り込んだものと思われる。床面の東南隅で径約90cmの範囲に焼土を含んだ粘土が堆積しており、土師器の長巻などを検出した。カマドが崩壊した跡と思われる。また、西壁際の床面から刀子1点を検出した。

刀子

遺物 大多数の土器は覆土から検出しているが、3・4の土師長胴甕はカマドの崩土から検出した。実測できた資料は土師長胴甕3点、土師小甕1点、須恵器甕2点、須恵器壺口縁1点、須恵器坏蓋1点、須恵器容器1点で、全体の遺物出土量は少ない。土師長胴甕は、体部上半をロクロハケ調整し、体部中央から下を縦方向のへら削りで調整している1・3。内面は、縦方向のハケ調整を施している。底部は丸底である2。須恵器甕は、外面は平行叩きで内面は同心円叩きである6・7。土師小甕は口縁端部が若干立上がり、外面器壁が剥落して体部調整の観察ができないが、内面は横ナデ調整をしている。

第108図に掲載した刀子は柄の長さ約6cmが遺存し、木質が良く残っている。また、鉄洋が2点出土している。

鉄洋

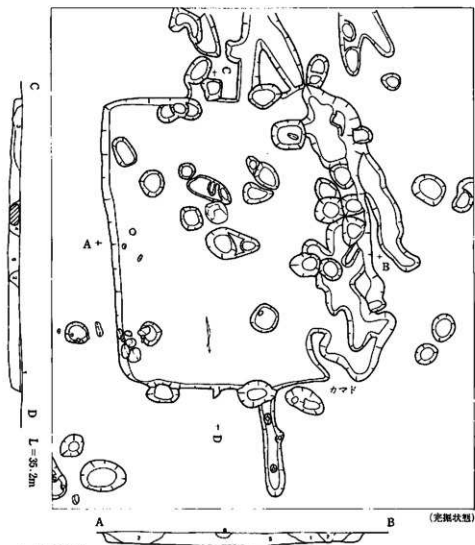
2号竪穴式建物（図106・119）

遺構 調査区南部の、区で検出した。床面の標高は、約34.9mである。竪穴は、南北5.4m・東西3.4mの南北に長い方形を呈する。畝溝や小穴と重複が激しいため、竪穴南部の輪郭が不整形になっている。西側の張り出し部には竪穴床面から炭化材が延びており、二個の大きな土坑が重複している可能性は少ない。竪穴の長辺は、張り出し部の南端を測った。床面積は、約18㎡を測る。竪穴長軸は真北から西に振っており、約N-10°-Wを測る。現存する壁高は約20cmである。竪穴の覆土は灰褐色土で、黒褐色系の上を伴う畝溝が埋没後に掘り込まれ、竪穴の形状が南側ではつかみにくなっている。床面の小穴は、竪穴以前の木根などの痕跡の可能性が高い。西側壁上に約90cm間隔で小穴が4個並び、また対面の東側壁上でも2個の小穴が約90cmの間隔で並んでいる。いずれも直径30cm前後で、深さは25～40cmを測る。竪穴の外壁に柱が立つ構造の建物であったと思われる。

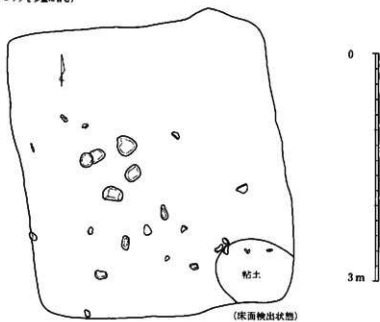
竪穴の北東部隅で完形の平瓶を二点検出し、また、床面南東部ではかたまって出土した三個の石の下から平瓶一個体を破砕された状態で検出した。床面全体が薄く焼けており、炭化材を所々検出したので、この竪穴は焼失によって廃棄されたものと思われる。また、床面から検出した石が平瓶を破砕している事は、焼失時に消火のために建物に石が投込まれた事を示唆している。竪穴南東隅に焼土を含む粘土を検出したが、カマドの崩土の可能性もある。

焼失竪穴

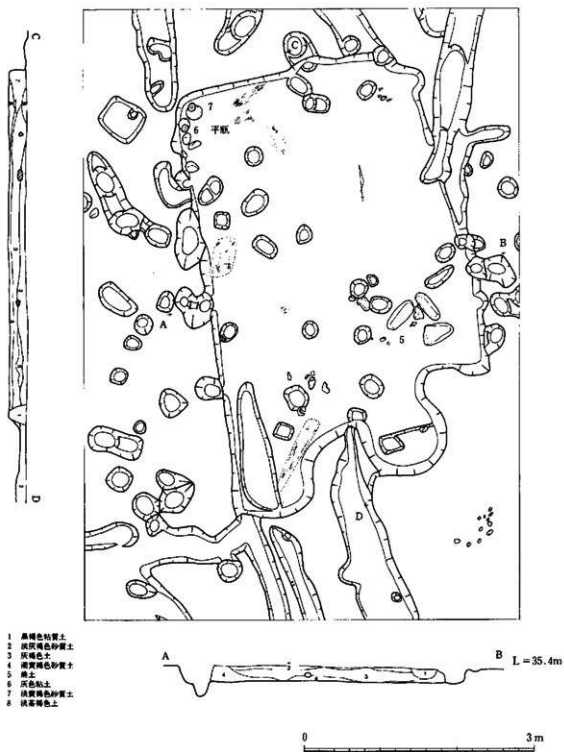
遺物 3点の平瓶を竪穴床面から検出した他は、ごくわずかの土器を検出したにすぎない。カマド崩土から土師長胴甕1、長頸甕と思われる須恵器壺の体部2が出土している。土師甕1は、



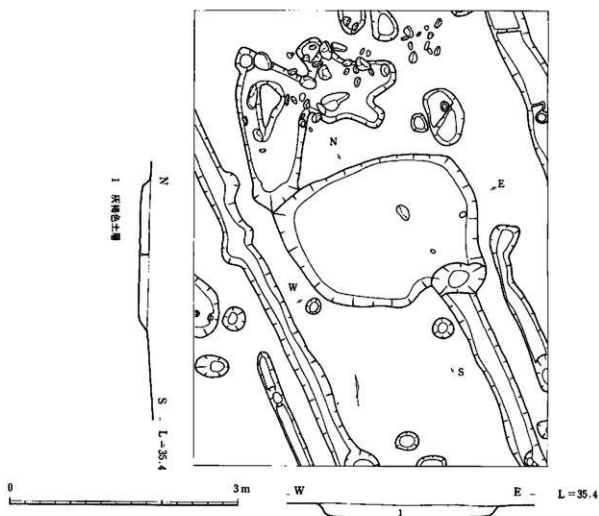
- 1 黄褐色粘質土
- 2 黄褐色砂質土 (鉄屑)
- 3 黄褐色砂質土
- 4 黄褐色土 (城山ブロックを多数に含む)
- 5 黄褐色砂質土
- 6 茶褐色砂質土



第105図 C区1号竪穴実測図



第106图 C区2号整穴案剖图



第107図 C区3号竪穴実測図

体部外面を縦ハケ調整の後に横ハケをほどこし、内面は右斜上がりのハケ調整をした非ロクロ調整である。須恵器壺2は球形の体部を持ち、肩部に沈線を持つ。

3点の平瓶は、形状がそれぞれ異なっている。平瓶5はラッパ状に開く頸部を持ち、体部が偏平になって肩の稜が強く外に出て、頸部がやや体部中央に穿ってつけられている。底部周辺はヘラ削りを施し、底面もヘラ切り後に削っている。器表には径1cm前後の剥落が多く、ほとんど傷の無い他の二点の平瓶とは対象的である。この平瓶は、第104図の竪穴平面図に示すように、竪穴に投棄された大きな石の下になって検出しており、そのためにこの個体だけが破砕された状態で出土している。器表の多数の剥落痕は、破砕時の衝撃とで生じた可能性もあるが、遺構の項でも述べたように火災にあった際に熱で生じた可能性もある。

平瓶の6と7は、竪穴の西北隅の床面から揃って出土している。平瓶6は天井部に丸みを持ち、外方に斜に延びる頸部を持つ。底部周辺には粗い目を持った布の圧痕が認められる。底部調整にあたって、布で底部を包んだものと思われる。布目はさらにヘラで部分的に削られており、仕上げにヘラ削りを行ったようである。平瓶7は、やや膨らんだ天井部から直立してラッパ状にひろがる頸部をもち、頸部の中位には沈線が一条走る。体部の肩の稜は鋭く屈曲し、薄い沈線が稜に平行して走っている。底部周辺は、ヘラ削りを行っている。

3号竪穴式建物(図107・120)

遺構 調査区西部の、区で検出した。床面の標高は、約35.12mである。竪穴は、南北1.95m・東西2.5mの東西に長い方形を呈し、床面積は約3.6㎡を測る。真北からの竪穴軸は西に振っており、約N-20°-Wを測る。現存する壁高は約20cmである。竪穴にともなう建物柱穴は確認できなかった。

遺物 第 図 1～3が、3号竪穴式建物から検出した土器である。いずれも、覆土からの検出である。1はロクロ甕で、外面はナデ、内面はハケ調整を行っている。2は中甕の底部で、底部付近を削り、底面には回転糸切り痕を残している。3は、口縁端部が外反する須恵器の坏。

4号竪穴式建物(図109・120)

遺構 調査区南部の、区で検出した。床面の標高は、約34.8mである。竪穴は、南北3.15m・東西3.15mの正方形を呈し、床面積は約9㎡を測る。真北からの竪穴軸は西に若干振っており、約N-2°-Wを測る。現存する壁高は約20cmである。竪穴の覆土は暗褐色粘質土で、覆土を切る溝や小穴は黒褐色粘質土を覆土にしている。カマドの周辺から、土器が比較的多量に出土している。竪穴にともなう建物柱穴は確認できなかった。

遺物 第 図の4～13が、出土した土品である。いずれも覆土からの出土である。4はロクロ整形の小甕で、底部はへら起こしをしている。体部はロクロハケ調整を全面に施し、底部付近を手持ちで削っている。内面も、ロクロハケ調整を全面に施している。5は長胴甕の底部である。6～8は、須恵器甕の体部片で、外面は平行叩き・内面を同心円叩きで調整している。9は肩の張った肩衝甕である。

第108図は、この竪穴のカマドそばから検出した鉄滓である。底面の一部に炉壁が残り、フィゴロは図の右側にあった。いわゆる楕形滓である。

鉄滓

5号竪穴式建物(図110・121)

遺構 調査区南部の、区で検出した。床面の標高は、約34.8mである。竪穴は、南北2.25m・東西2.3mの略正方形を呈し、床面積は約4.5㎡を測る。竪穴主軸は、ほぼ真北に向いている。現存する壁高は約10cmである。竪穴の覆土は茶褐色土で、覆土を切る溝や小穴は黒茶褐色土を覆土にしている。竪穴にともなう建物柱穴は確認できなかった。

遺物 第 図 1～3が、この竪穴から検出した土器で、いずれもカマドから出土している。1の土師小甕は、外面をロクロハケ調整の後下半を手持ち削りし、内面は全体にロクロハケ調整を施している。底面は、削っている。2と3は、ロクロ調整の場である。

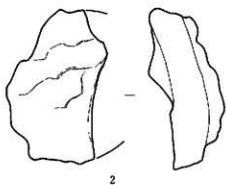
6号竪穴式建物(図111・121)

遺構 調査区南部の、区で検出した。床面の標高は、約34.6mである。竪穴は東側を溝で切られているが、南北1.9m・東西約2mの略正方形を呈し、床面積は約3.4㎡を測る。真北からの竪穴軸は西に振っており、約N-16°-Wを測る。現存する壁高は約10cmである。竪穴の覆土は茶褐色土で、覆土を切る溝や小穴は黒茶褐色を覆土にしている。竪穴にともなう建物柱穴は確認できなかった。床面で検出した小穴は竪穴築造以前のもので、暗茶褐色土を覆土としている。

遺物 第 図4の土師長胴甕が、この竪穴から出土した資料である。体部外面はロクロハケの



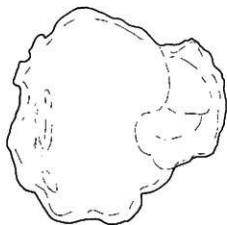
1



2



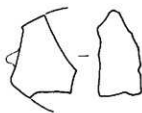
3



4



4



5

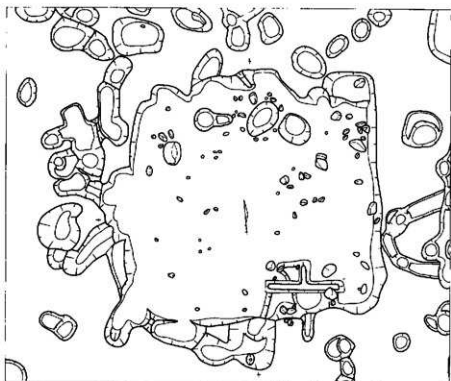


1-3: 1号整穴

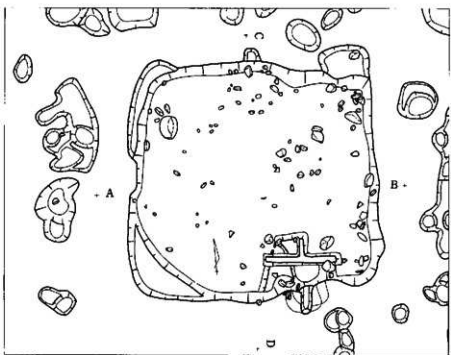
4: 4号整穴

5: E 5 Pit 100

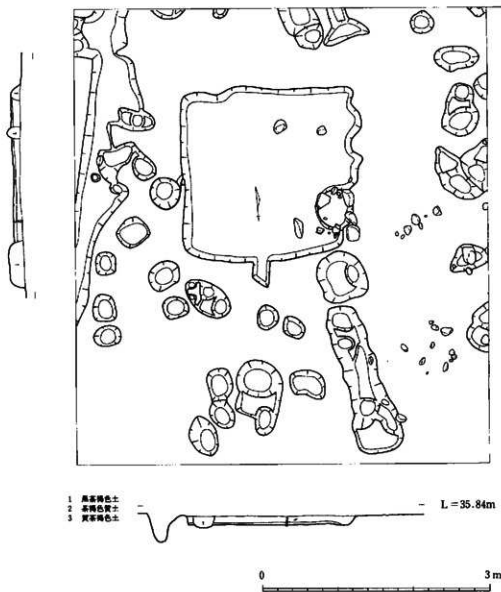
第108图 刀子·铁棒类测图



- 4号整穴穴基结构
1. 黄灰色砂质土
 2. 黄褐色砂质土
 3. 黄褐色砂质土 (内铺卵石)
 4. 黄褐色砂质土
 5. 黄褐色砂质土
 6. 黄褐色砂质土
 7. 黄褐色砂质土



第109图 C区4号整穴基剖面

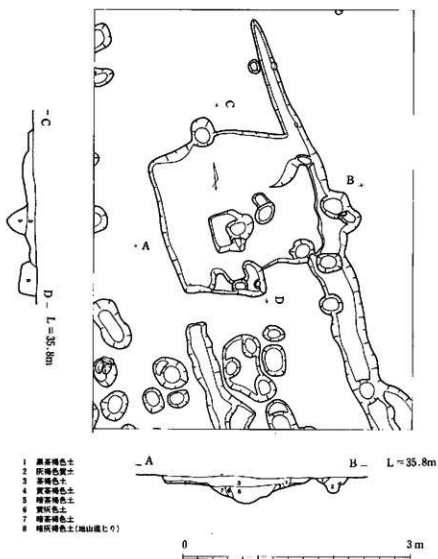


第110区 C区5号竪穴実測図

上を平行叩きし、内面はロクロハケの上を同心円叩きしている。

8号竪穴式建物（図112・122）

遺構 調査区中央部西側の、区で検出した。南北2.4m・東西4.5mで、床面の標高は約34.5mである。東西に長い不整形な長方形を呈し、竪穴式建物という確証を得ることができなかった。南西隅にカマドになるかと思われる茶褐色粘土を検出しているが、確証を得ていない。覆土は灰褐色土をベースとし、土器を多く包含していた。



第111図 C区6号竪穴実測図

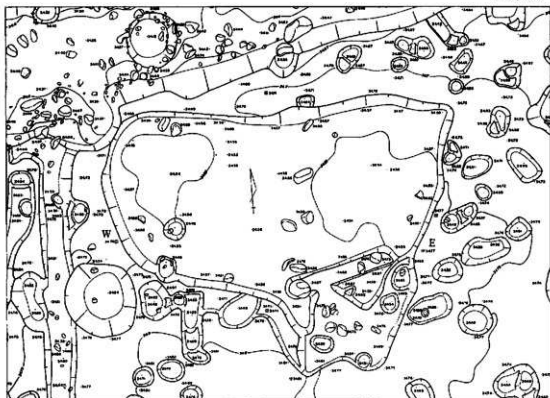
遺物 第120図8の須恵器坏蓋が床面で出土した他は、覆土からの検出である。2の長胴甕は、外面のロクロハケの上を縦方向に削り、内面はロクロハケの上を斜ハケ調整している。3～5は土師小甕で、いずれもロクロ整形である。6はロクロ整形の埴。須恵器の坏蓋は端部断面が三角形を呈し、8にはやや扁平な鈕がついている。

10号竪穴式建物 (図112・123)

遺構 8号竪穴の東側に位置し、南北に長い不整形な長方形を呈する。長辺3m・短辺2.5mで、床面の標高は約34.4mを測る。覆土は灰褐色系の粘質土で、土器を比較的多く包含している。

遺物 この遺構からは、比較的まとまって土器が出土している。1～4は中型甕で、いずれも

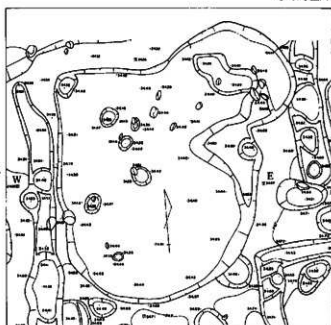
C-8号整穴



— W — E — L = 34.91m

- 8号整穴层土
 1 褐色层土
 2 暗褐色土
 3 深褐色土
 4 灰褐色土(地山黄土中含G)
 5 绿灰黄褐色土

C-10号整穴



— W — E — L = 34.99m

- 10号整穴层土
 1 灰褐色土
 2 灰褐色粘质土
 3 黄褐色粘质土
 4 暗褐色粘质土
 5 黄灰褐色粘质土



第112图 C区8、10号整穴夷测图

ロクロ整形。3の底面には回転糸切り痕が残っている。5・6は長胴甕で、6の底部周辺は手持ちで削っている。7は、ロクロ整形の埴。8は、内外面に赤色に塗彩した土師盤。9の須恵器有台坏は、径の小さな高台や直立する器壁など、比較的新しい様相を持っている。

11号竪穴式建物（図113・124）

遺構 調査区南部の、区で検出した。床面の標高は、約34.4mである。竪穴は南北5.15m・東西約4.3mの長方形を呈し、床面積は約20.7㎡を測る。真北からの竪穴軸は西に振っており、約N-17°-Wを測る。現存する壁高は約15cmである。竪穴の覆土は茶褐色土で、覆土を切る溝や小穴は黒茶褐色土を覆土にしている。竪穴にともなう建物柱穴は確認できなかった。床面で検出した柱穴は、竪穴廃棄後に建造された掘立柱建物に伴うもので、内部には根がためのために10cm前後の小礫が詰込まれていた。竪穴の南東隅にカマドがあり、崩壊したカマド粘土の周囲に須恵器の甕の破片が散乱していた。また、竪穴の床面は南東隅のカマド周辺を除いて非常に固くたたきめられていた。

遺物 1はカマドと東壁の間で出土した土師中甕。底面はへら起こして、体部の内外面はロクロハケで調整している。3～9の須恵器坏蓋は、器高が低い偏平な形状を呈している。12～14は、カマドの北側の床面に散乱していた須恵器甕である。図示したのは検出した土器の一部で、完形には復元できなかったが、大甕がカマド付近に振えてあったものと思われる。

12号竪穴式建物（図114・125）

遺構 調査区南部の、区で検出した。12号竪穴は、不整形な竪穴状の遺構を掘り込んで作られている。この不整形な遺構の長軸は北西ないし北に主軸を持つ竪穴式建物とは異なって、東北東（約N-25°-E）に振っている。覆土は、暗褐色粘質土である。この遺構の壁高は約10cmで、長軸は3.5m前後の長さを測る。この遺構の床面の標高は、約34.55mである。

12号竪穴は、床面で約34.48mの標高を測る。12号竪穴は南北2.85m・東西約2.8mの略正方形を呈し、床面積は約6.7㎡を測る。真北からの竪穴軸は西に振っており、約N-23°-Wを測る。現存する壁高は遺構検出面から約20cmである。竪穴の覆土は褐色粘質土で、覆土を切る溝や小穴は黒灰色粘質土を覆土にしている。竪穴にともなう建物柱穴は確認できなかった。

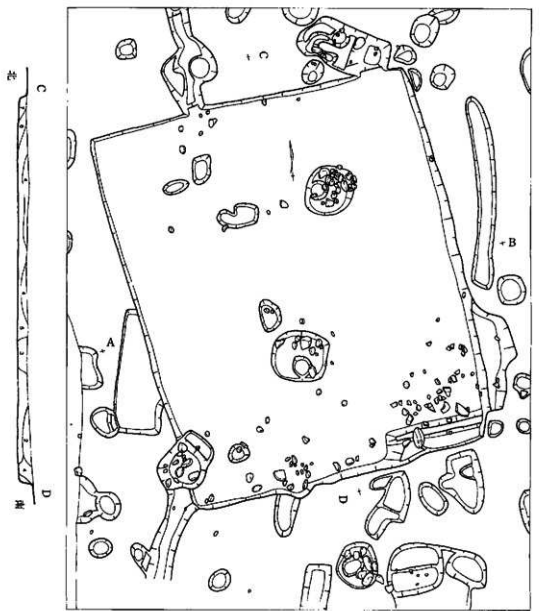
遺物 第123図の1～6が、この竪穴から出土した土器である。1～3は同一個体と思われるが、内外面に黒色処理した土師鉄鉢である。5・6は、器高約3cmで口径約13.5cm前後の法量を持つ無台坏である。

両黒土師

13号竪穴式建物（図115・125）

遺構 調査区北部の、区で検出した。13号竪穴の覆土は、茶灰色系土である。13号竪穴は、床面で約34.5mの標高を測る。南北5.5m・東西約5mの略正方形を呈し、床面積は約26㎡を測る。真北からの竪穴軸は西に振っており、約N-20°-Wを測る。現在する壁高は遺構検出面から約10cmである。竪穴の覆土は褐色粘質土で、覆土を切る溝や小穴は黒灰色粘質土を覆土にしている。竪穴にともなう建物柱穴は確認できなかった。カマドを竪穴の東南隅で検出している。幅135cm・奥行90cmで、焚口の幅が35cmを測る。焚口では厚さ5cmの焼土が堆積し、その下から長さ30～20cm・厚さ10cm前後の偏平な石を12個使用して炉床を構築していた。7個の偏平な石

石敷カマド



A B L = 34.8m

- 1 灰面坑
- 2 灰褐色土
- 3 暗茶褐色土
- 4 黄茶褐色土(随山土中流入)
- 5 暗茶褐色土
- 6 黄茶褐色土
- 7 暗茶褐色土
- 8 黄茶褐色土(随山径上)

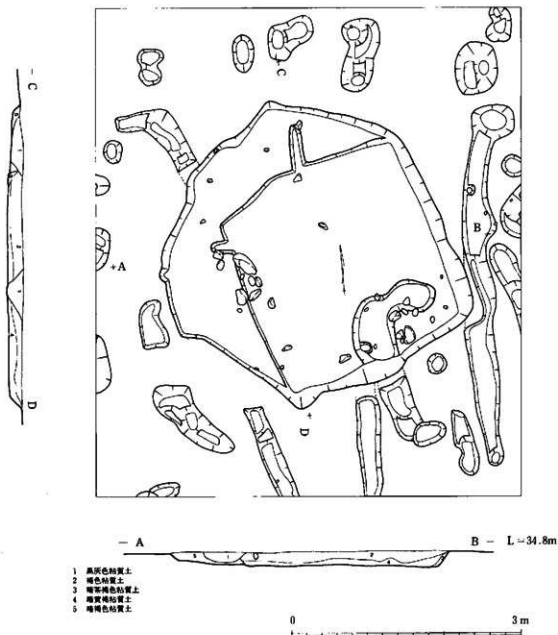
0 3m

第113图 C区111号整穴实测图

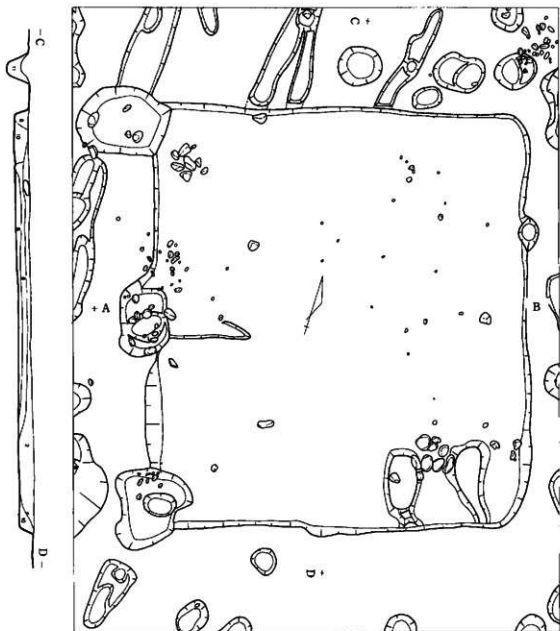
の上面を揃えて炉床とし、西側に大きめの石を2個、東側に3個の石を5cm高くして置いて袖としていた。袖石は、カマドの粘土袖の下になっている。カマド粘土の崩土から土器を多数検出している。

カマド構築の手順は以下の通りである。

- 1 カマド設置場所を整穴床面から更に約10cm掘り込む。
- 2 長さ30~20cm・厚さ10cm前後の偏平な石を12個使用して炉床を構築していた。7個の偏平



第114図 C区12号整穴実測図



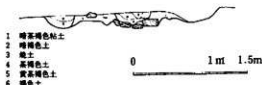
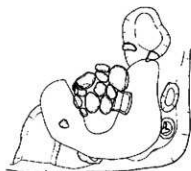
-A

B-L-34.8m

- 1 緑黄褐色土(SB様式)
- 2 緑灰褐色土
- 3 緑褐色土
- 4 緑灰色土
- 5 緑赤灰色土(燧山ブロックを多く含む)
- 6 灰褐色土
- 7 赤褐色土
- 8 赤灰褐色土
- 9 赤褐色土(燧山ブロックを多く含む)
- 10 黄赤灰色土
- 11 暗褐色土

0 3m

第115図 C区13号竪穴実測図



- 1 暗茶褐色粘土
- 2 暗褐色土
- 3 黄土
- 4 高褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 褐色土

第116図 C区13号竪穴カマド実測図

遺構 調査区東部の、区で検出した。床面の標高は、約33.95mである。竪穴は南北2.6m・東西約2.9mの略方形を呈し、床面積は約6.8㎡を測る。竪穴の主軸は、ほぼ真北に向いている(約N-0°-W)。現存する壁高は約10cmである。竪穴の覆土は暗褐色粘質土で、覆土を切る溝や小穴は黒茶褐色土を覆土にしている。床面の四隅に竪穴にともなうと思われる深さ40cm前後の柱穴を検出した。床面から土器片を若干検出している。カマドは検出しなかった。

遺物 第126図1~7がこの竪穴から出土した土器で、8~10は竪穴の周囲で検出した土器である。1・2は口縁端部を三角形に引出し、体部外面下半は削りの上を平行叩きで整形した場。3・8は土師中甕の底部で、回転糸切りの痕跡が明瞭に残っている。底部周辺には、削りは認められない。4は外面赤彩・内面黒色の土師碗、5は内面黒色の土師碗である。

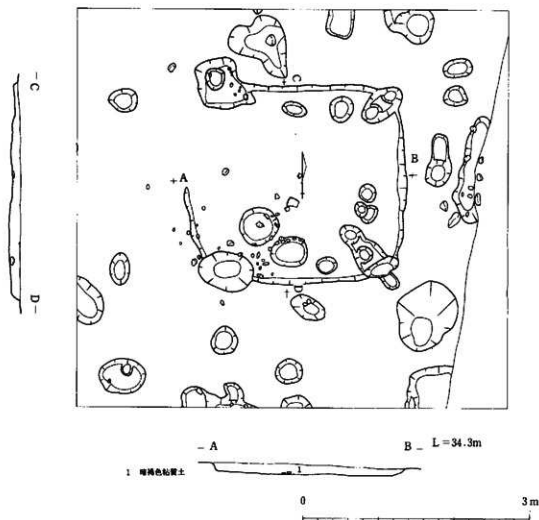
な石の上面を揃えて炉床とし、西側に大きめの石を2個、東側に3個の石を5cm高くして置いて袖としていた。

3 袖石の上に粘土でカマドを構築する。

遺物 第 図7~16の土器が、この竪穴から出土した。8・9・12・16が、カマド崩上から出土している。土師甕はいずれもロクロ甕である。11は内外面を赤彩した土師碗。坏蓋は偏平な鈕をもち12、天井からなだらかな傾斜で口縁端部にいたる。坏14~16は、器壁の外傾度が70度前後と大きい。

14号竪穴式建物(図117・126)

遺構 調査区東部の、区で検出した。床面の標



第117図 C区14号竪穴実測図

第2節 掘立柱式建物

1号掘立柱式建物（E5区）(図127)

主軸をN-9°-Wに持つ三×二間の建物。建物の西半分は、1990年度に野々市町が実施した調査で確認している。柱の掘り形は南北に長い方形で、東西が約70cm・南北約80cmで深さは約40cmである。梁間は540cmで、柱間が270cm。桁行は630cmで、柱間は210cm。柱で囲まれた部分の面積は34.02㎡で、桁行と梁間の指数は85である。11号竪穴の覆土に柱穴が掘り込まれており、竪穴より後出であることがわかる。竪穴床面で検出した二個の柱穴には、根がためと思われる小石が多数入っていた。

2号掘立柱式建物（E4区）(図127)

主軸をN-14°-Wに持つ建物。北梁間二間・南梁間一間で、桁行四間の建物。建物の西半分は、1990年度に野々市町が実施した調査で確認している。柱の掘り形は東西が約80cm・南北約80cmの方形で、深さは約40～50cmである。梁間は540cmで、北梁間の柱間が180cm・南梁間の柱

間は270cm、桁行は800cmで、柱間は200cm、柱で囲まれた部分の面積は43.2㎡で、桁行と梁間の指数は67である。3号掘立柱式建物と重複し、68溝に南辺の柱穴が切られている。

3号掘立柱式建物（E4区）（図128）

主軸を、真北に近いN-2'-Wに持つ二×四間の建物。柱の掘り形は南北に長い方で、東西が約60cm・南北約80cm、深さは約40～60cmである。梁間は480cmで、梁間の柱間は240cm、桁行は720cmで、柱間は180cm。柱で囲まれた部分の面積は34.56㎡で、桁行と梁間の指数は66である。2号掘立柱式建物と重複し、68溝に南方の柱穴が切られている。

4号掘立柱式建物（E4区）（図128）

主軸を、真北に近いN-3'-Eに持つ二×三間の建物。柱の掘り形は80×80cm前後の方形で、深さは約50cmである。梁間は600cmで、梁間の柱間は300cm、桁行は600cmで、柱間は200cm。柱で囲まれた部分の面積は36㎡である。桁行と梁間の指数が、100の正方形の建物である。8号竪穴に重複し、68溝に北辺の柱穴が切られている。

5号掘立柱式建物（E5区）（図129）

主軸を、N-21'-Wに持つ二×三間の建物。柱の掘り形は100×100cm前後の方形で、深さは約40cmである。梁間は600cmで、梁間の柱間は300cm、桁行は750cmで、柱間は250cm。柱で囲まれた部分の面積は45㎡である。桁行と梁間の指数が、80の長方形の建物である。13号竪穴の南辺に建物の南梁を揃えて建てており、西側柱列は13号竪穴を切って掘り込まれている。

6号掘立柱式建物（E4・5区）（図129）

主軸を、N-21'-Wに持つ二×三間の総柱建物。柱の掘り形は80×80cm前後の方形で、深さは約60cmである。梁間は600cmで、梁間の柱間は300cm、桁行も600cmで、柱間は300cm。柱で囲まれた部分の面積は36㎡である。桁行と梁間の指数が、100の正方形の建物である。5号建物と梁間を揃え、また、桁軸を共通している。両者の建物の間隔は120cmである。

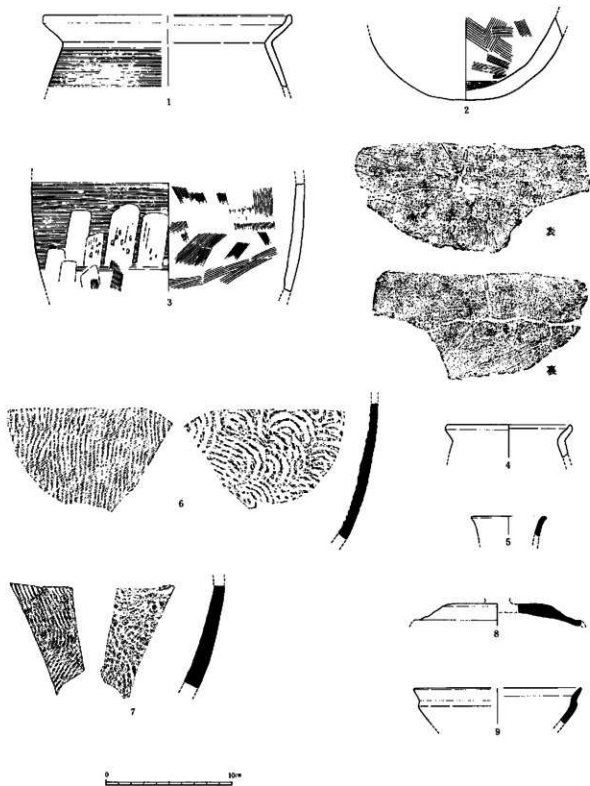
総柱建物

7号掘立柱式建物（G5区）（図130）

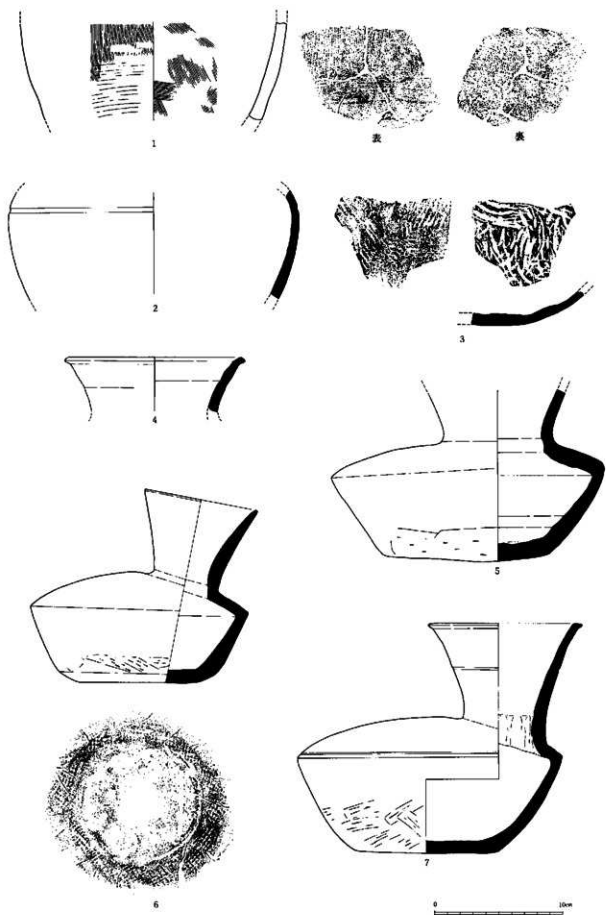
主軸を、真北に近いN-6'-Wに持つ二×三間の総柱建物。柱の掘り形は50×60cm前後の方形で、深さは約40cmである。梁間は360cmで、梁間の柱間は180cm、桁行も360cmで、柱間は180cm。柱で囲まれた部分の面積は12.96㎡である。桁行と梁間の指数が、100の正方形の建物である。

8号掘立柱式建物（G5区）（図130）

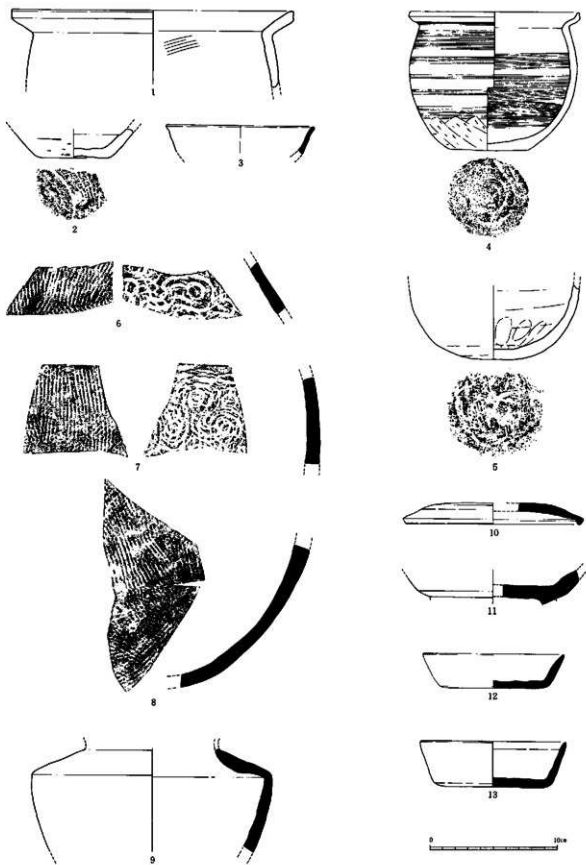
主軸を、N-10'-Wに持つ二×四間の建物。柱の掘り形は80×80cm前後の方形で、深さは約40cmである。梁間は580cmで、梁間の柱間は290cm、桁行は840cmで、柱間は210cm。柱で囲まれた部分の面積は48.72㎡である。桁行と梁間の指数が、69の長方形の建物である。



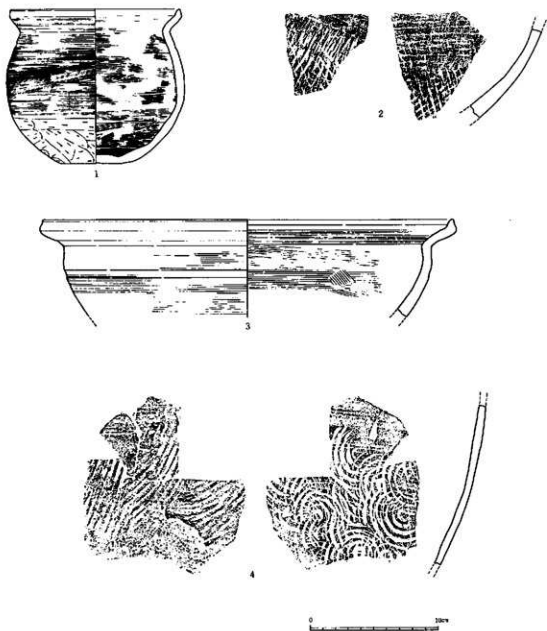
第118图 C-1号整穴出土土器实测图



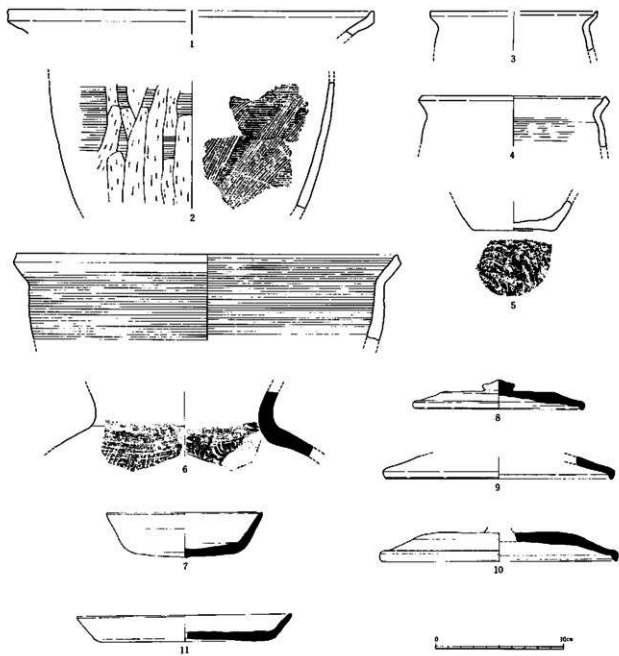
第119图 C-2号整穴出土器类剖面



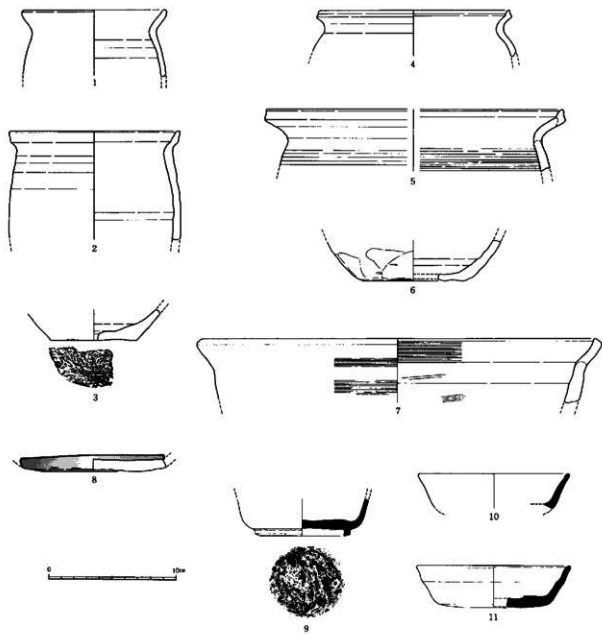
第120图 C-3、4号整穴出土上土器类测图



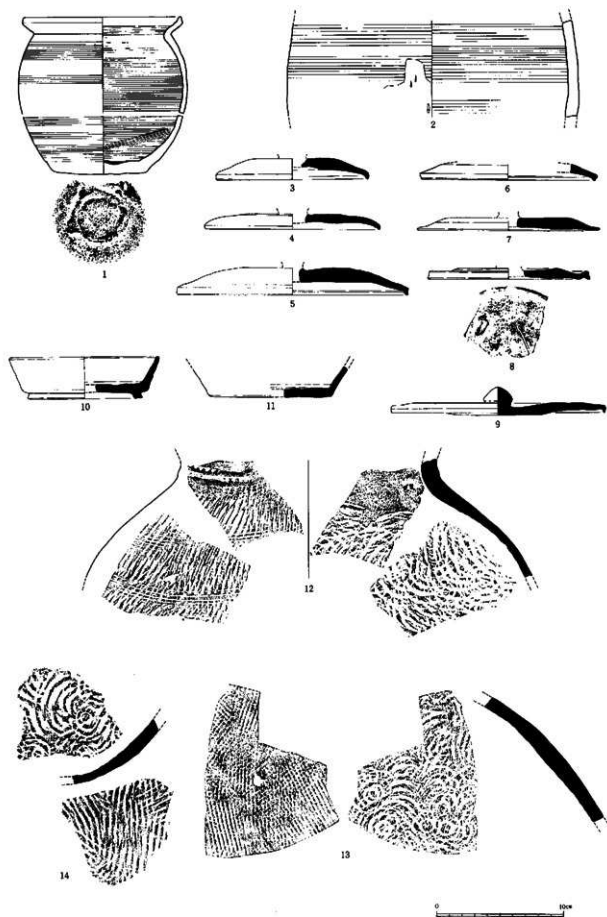
第121图 C-5、6号墓穴出土土器类测图



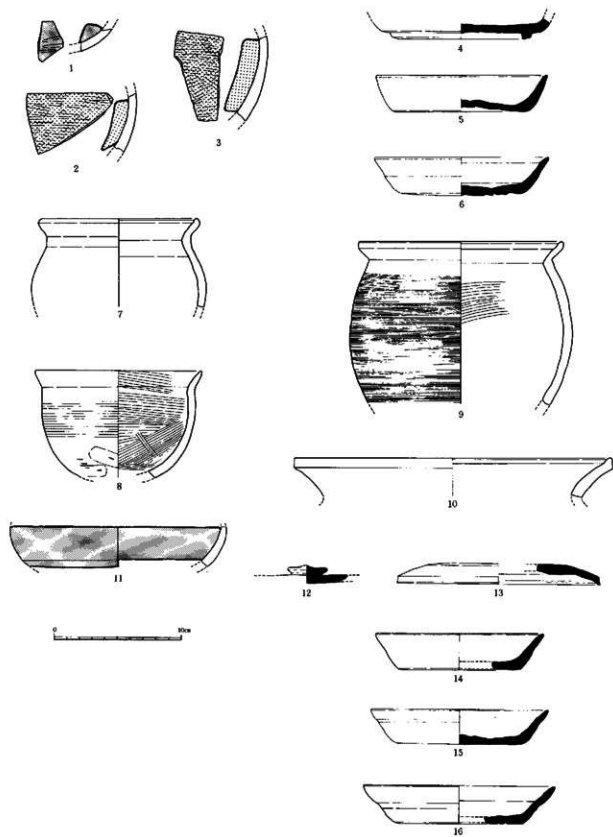
第122图 C-8号整穴出土土器实例图



第123图 C-10号整穴出土土器实例图

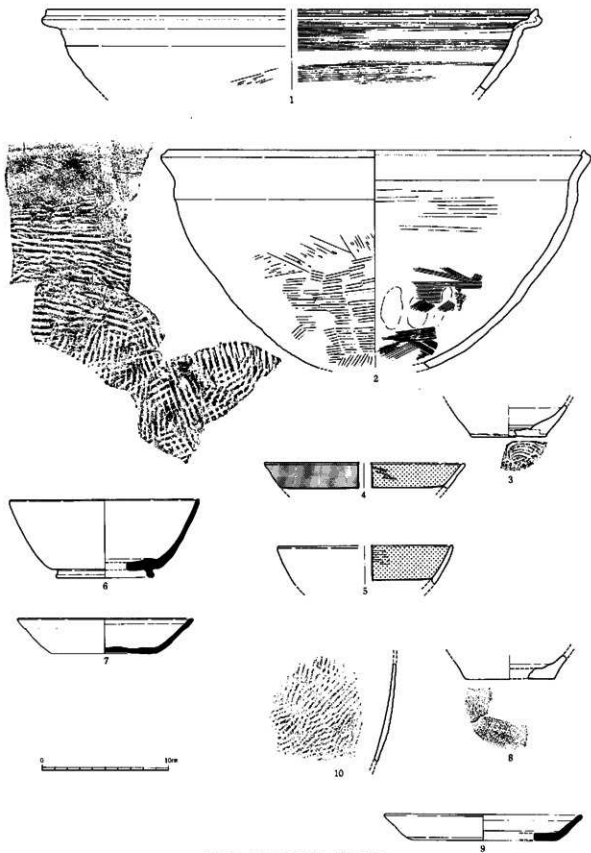


第124图 C-11号墓穴出土土器实物图

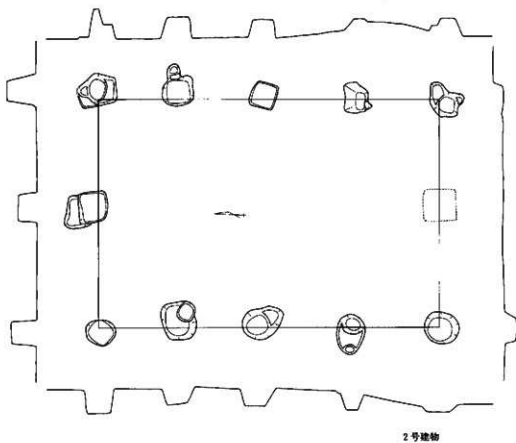
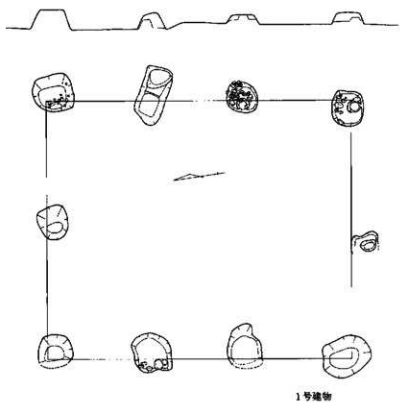


第125图 C-12·13号整穴出土石器实测图

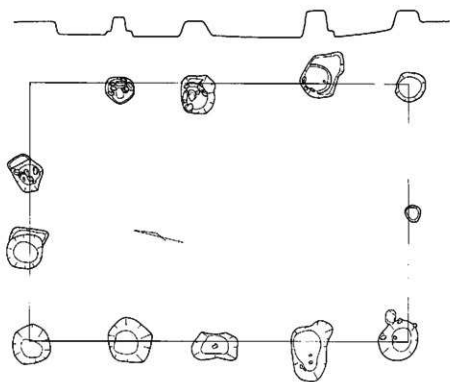
1~6:12号, 7~16:13号



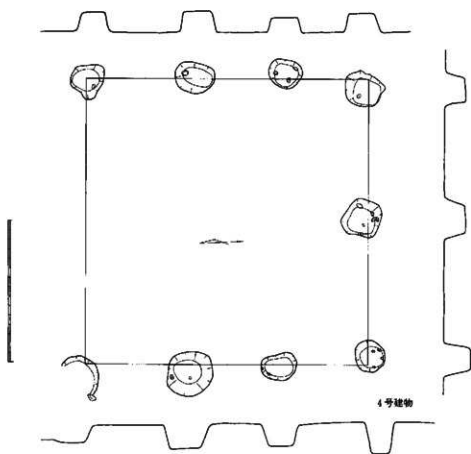
第126图 C-14号墓穴出土土器实测图



第127区 掘立柱式建物実測図

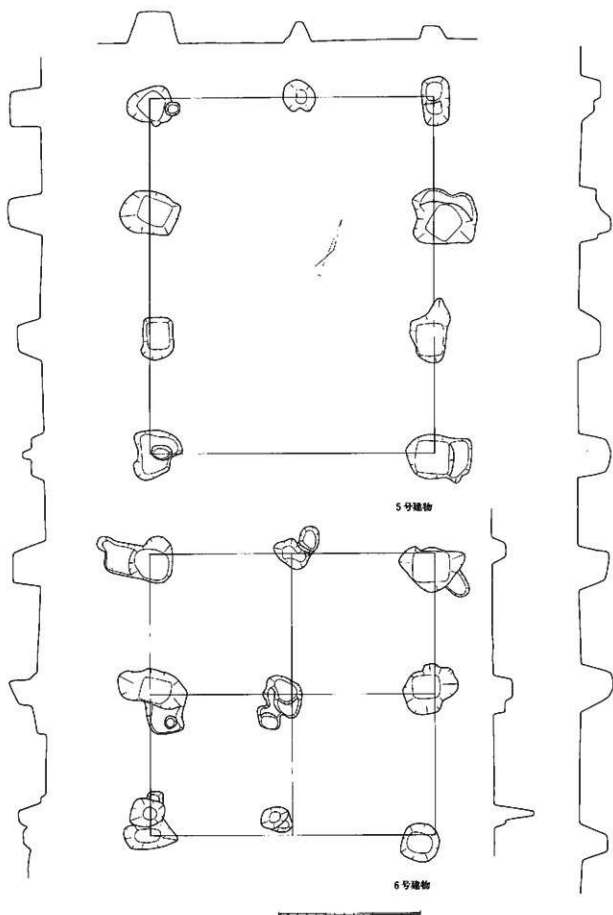


3号建物

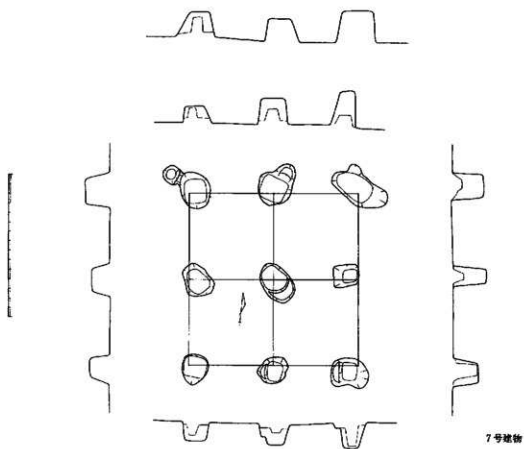


4号建物

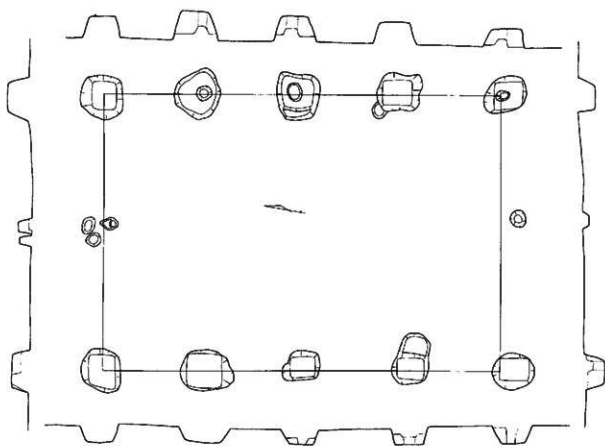
第128图 獨立柱式建物実測図



第129回 獨立柱式建物実測図



7号建物



8号建物

第130区 掘立柱式建物実測図

第3節 道路状遺構と溝状遺構

道路状遺構 [75・69・65号溝] (図132~134)

遺溝 C調査区のF3区からE6区にかけて、北西方向のN-21'-Wに平行に伸びる三条の溝を検出して、路面の敷土などは検出していないが、平行に直線的な溝が走ることから道路状遺構と判断した。西から75号溝・69号溝・65号溝と番号をつけている。75号溝は、幅約50cm・深さ約25cmで、覆土は黄茶褐色土が入っていた。この溝から検出した土器を第130図に掲載したが、8世紀第II-III四半期に比定できる。69号溝は、幅約70cm・深さ約35cmで、覆土は暗茶褐色土である。65号溝は、幅約70cm・深さ約40cmで、69号溝と65号溝の内側幅は約280cmである。75号溝の覆土が地山土に近似した黄茶褐色土であることや、溝内から検出した土器が69・65号溝から検出した土器に比べて一型式古いことから、当初は75号溝と65号溝が対になって、幅約420cmの路面幅を持っていたが、8世紀第IV四半期になって75号溝を埋めて69号溝を新たに掘削して、路面幅を約280cmの道路に改修したと思われる。溝の延長は、65号溝が約107m・69号溝が約86m・65号溝が約75mを各々検出している。

道路の改修

遺物 (図130) 1~8は、75号溝で検出した資料。環1~4の無台杯の内、1と4は、器壁を大きく外反する1と斜にまっすぐ伸びる4の違いはあるが、器高3cm前後で高径指数が24前後、底径指数が72と近似した法量を持っている。2と3は器高が3cmを越え、やや大型の法量を持つ環である。4は器高4cm・口径16.2cmで高径指数22、底径指数86の低平な法量で、直立気味の器壁を持つ有台杯である。6は、深い体高を持つ有台杯。8は偏平な鈕を持つ杯蓋で、天井部は削れている。8世紀第II四半期にはこの溝が開口していたことを物語っている。10は、65号溝で検出した杯蓋。口径16.2cm・天井高2.9cmで、天井面を良く削っている。11・12は69号溝から検出した杯である。11は7lと直立気味に立上がる厚めの器壁を持ち、器高3.9cm・口径14cm・高径指数27・底径指数85を測る。12は薄い器壁を持ち、11に比べると器高が深い印象があるが、法量は近似した杯である。底部の器壁の厚みの差が、内部の法量差になっていると思われる。8世紀第IV四半期に比定できる。

13~15は、周辺のpitで検出した資料である。16~27は、現地で土器状遺構としていた溝から検出した資料である。19は、体部下半に弱い稜がはいる稜碗風の杯。20は、端部を器壁からつまみあげるように引出した特徴的な口縁を持つ杯。22・23は盤。24~26の有台杯は低平な器高を持った型で、26は大型の有台杯。27は肩衝壺の体部。8世紀第II四半期に比定できる。

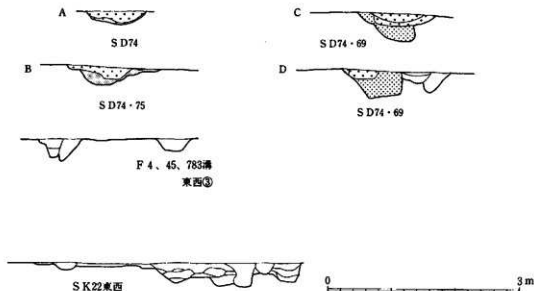
74号溝 (図129)

遺構 E4からF4にかけて、東西方向に走る溝。道路状遺構の75・69・65号溝を切り、E6区では68号溝に切られている。覆土から第1図に掲載した須恵器有台杯を検出しているが、9世紀第I四半期に比定できる資料である。この溝が掘削された段階では、道路状遺構は機能を失っていたと思われる。68号溝は、74号溝と重複する地点で北に直角に向きを変えており、68号溝の東西方向の部分は74号溝を利用していただ可能性が高い。74号溝の幅は約80cmで、深さは約30cmを測る。溝底の標高は西端が34.5mで東端は34.3mを測り、その差は20cmである。溝の東端は、調査区の東側を南北に走る鞍部に至ってとぎれており、あたかも鞍部に流れ込むような状態を示している。鞍部の対岸のG5区では溝の続きを検出していないので、74号溝は鞍

道路の廃止

部で終了して、排水か区画の機能を持っていたものと思われる。

遺物(図130) 9は、74号溝で検出した有台坏。器高4cm・口径10.8cmで高径指数33、底径指数75の法量を持つ小型有台坏。9世紀第Ⅰ四半期に比定できる。



第131図 74号溝の土層実測図

68号溝(図133)

遺構 E 4からF 4区の西端で北に直角に曲り、調査区北端のF 7まで続いている。溝幅は平均150cmで、深さは約30cmである。溝底の標高は、東端が34.34mで北に曲る部分の周辺では34.5m、北端では33.95mで、緩い傾斜を持って北に流れる水路であったことが分る。74号溝と重複する周辺では溝幅が広くなり、礫を多量に検出している。また、この周辺では人頭大の礫を二段以上積んで護岸をしている。この礫群を挟んで、68号溝から派生するようにして68号溝の東側1mのところにて67-1号溝が北に走っている。67-1号溝はF 5区の北部で更に東に曲って鞍部に至っている。溝幅は、約150cmで、溝底の標高は、南端が34.41mで北端が34.3m・東端は34.13mである。67-1号溝が東に曲る地点では、さらに68号溝から幅約1mの溝が東に派生して67-1号溝に合流している。これらの溝からは、古代・中世・近世の資料を検出している。

遺物(図15・16) 古代・中世・近世・近代と、雑多な資料を検出している。1は青磁の小皿。内面の胎下に沈線が走る。4はガラス質の白色の胎土の磁器で、外面には蝶文風の染め付け文が描かれている。5は唐津の皿で、内外面に透明感のある茶白色の釉がかかり、外面の底部付近は露胎となって削り調整され、内面底部は器壁たち上がり部分が1.2cmの幅で輪状に露胎となっている。6は、外面底部周辺に幾何学的に連弁を染め付けて描いた磁器碗である。7は赤色釉で草木を描いた磁器碗。8は青磁碗の底部。透明感の無い緑灰色の釉がかかり、高台の内側は露胎になっている。9は、不透明な灰白色の釉がかかった碗。外面底部周辺は露胎で、削り出し高台の内側は、工具がはずんで土を挟った痕跡が残る。10は、灰オリーブ色の釉がかかった唐津の皿。断面三角形の削り出し高台を持ち、周辺が露胎。内面底部は器壁たち上がり部分が輪状に露胎となっている。11は、凹み底の唐津碗。内外面に灰オリーブ色の釉がかかり、底面が露胎。また、内面底部は器壁たち上がり部分が輪状に露胎となっている。12は、灰茶色の

釉がかかった唐津皿。外面底部付近は露胎で、高台は断面箱形。内面には、砂目がある。底部から、段を持って器壁が立上がる。13も唐津皿で、内外面には薄い緑が入る灰色の釉がかかっている。外側に踏ん張る削り出し高台から内側は、露胎になっている。内面には、砂目がある。14は黄灰色の釉がかかる大型の唐津碗。底部付近は露胎で、内面には砂目がある。15は、透明感のある灰緑色の釉がかかった唐津の皿。口縁端部を上におりまげて直立し、体部下半には段がある溝縁の皿である。16は唐津の甕。内外面に暗茶褐色の鉄釉がかかり、外側に屈曲する口縁の上面が露胎になっている。本例のように口縁が外側に引出された甕は、大徳康二によれば唐津編年第一期に比定されている。口縁の17は、口縁部が幅2cmの面を持って直立する唐津の鉢。18は吉岡編年第五期の珠洲焼甕。19は、第五期と思われる珠洲の播り鉢。22は陶胎磁器と呼ばれる肥前系磁器の碗。灰色の釉がかかり、高台端面が露胎になっている。23は、透明感のあるオリブ色の釉がかかった唐津の皿。高台端面が露胎になっている。24は、不透明な薄緑色の釉がかかり、外面底部一帯が露胎で内面に砂目がある。25は、馬爪型の高台を持ち緑灰色の釉が厚くかかった青磁碗。電泉窯系の製品と思われる。26は珠洲の播り鉢で、卸し目が混んでいることから吉岡編年第一期に比定できる。27は緑がかかったオリブ色の釉がかかった唐津の皿。28は瀬戸の平碗で、口径16cmを測る。内面全体と外面上半部に、緑灰色の釉がかかる。33は口縁端部が内側に屈曲し、端面に幅1.2cmの面を持った唐津の鉢。口縁付近は内外面に鉄釉がかかるが、下半は露胎である。

34は67-1号溝の資料で、口径7cmの上師小皿。35は、珠洲のこね鉢底部。38は67号溝の資料で、唐津の播り鉢の口縁部。

66号溝

E5区で検出した溝で道路状遺構に併行して走り、走向はN-25°-Wを測る。幅約50cm・深さ約15cmで、68号溝の屈曲部付近から始って、延長約35mの長さをもつ。

102号溝

E5区の66号溝の東側で検出し、南端では66号溝を切っている。N-2°-Eとほぼ真北に走り、延長約12mを測る。溝幅は約40cm・深さは約25cmで、断面が箱形を呈するしっかりした掘り込みのある溝。

45号溝

F3の北部からF4にかけて、N-4°-Wとほぼ真北に走る溝。幅約60cmで、深さは25-40cm・延長は約36mを測る。溝底の標高は南端が34.42mで、北端が34.26mを測る。断面がV字状にちかく、鋭く掘り込まれている。

80号溝

F2北部からF4中部にかけて、平均N-5°-Wと真北に近い方向に走る溝。幅約40cm・深さ約25cmで、ゆるくS字に蛇行して延長50mを測る。南部では1号堅穴を切っている。溝底の標高は、南端が34.98mで北端が34.53mを測る。

26号溝

E 2区からF 3区にいたる、延長46mの溝。南端では、17号土坑に切られている。溝底の標高は、南端が35.12m・北端が34.86mで、溝の延長は45mを測る。

溝の変遷を以下に整理する。

9世紀第I四半期：74号溝が東西方向に掘削される。

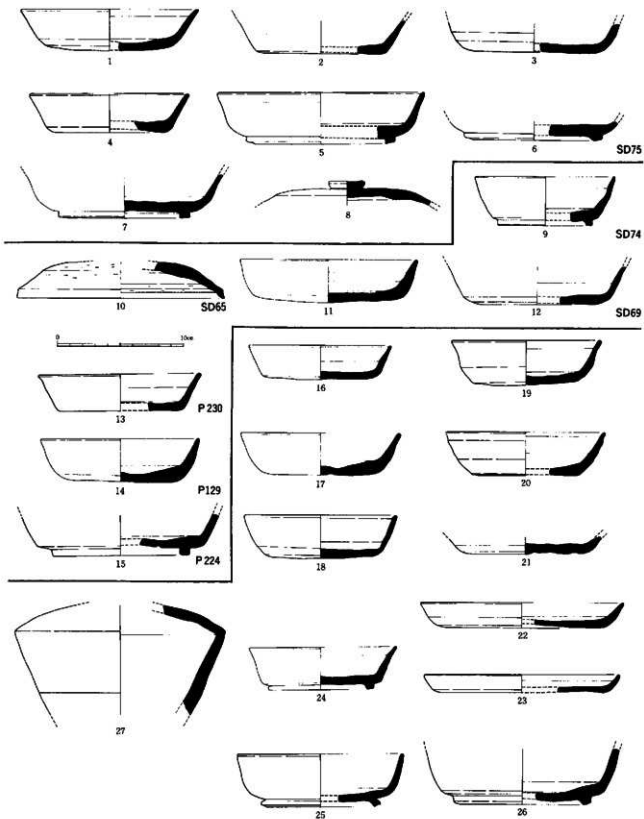
溝の変遷 古代末期から中世：74号溝を利用して68号溝の東西部分がつくられ、67-1号溝につながっている。

近世(17世紀?)：68号溝と67-1号溝の北流部分の屈曲点を礫で埋む、68号溝を北に新たに北流させ67-2号溝で東に屈曲させて67-1号溝につないである。

近代(19世紀～1960年代前半)：67-1・67-2号溝を廃棄し、68号溝を北にまっすぐ延す。

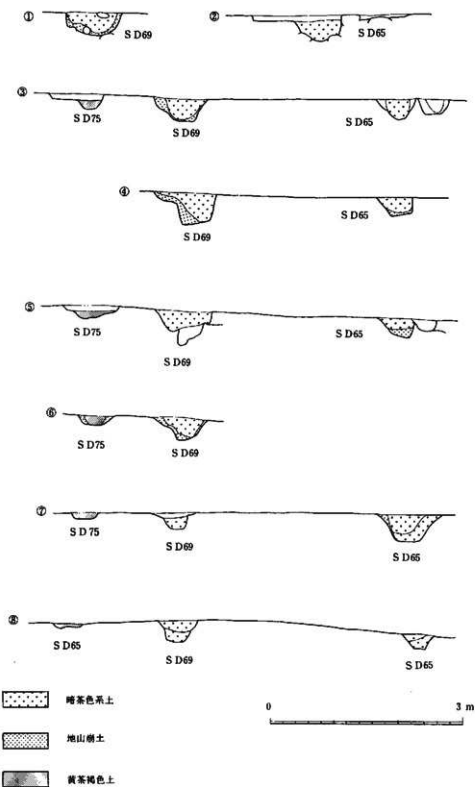


第 131 図 溝と道路状遺構 (記号はアセ位置を示す)

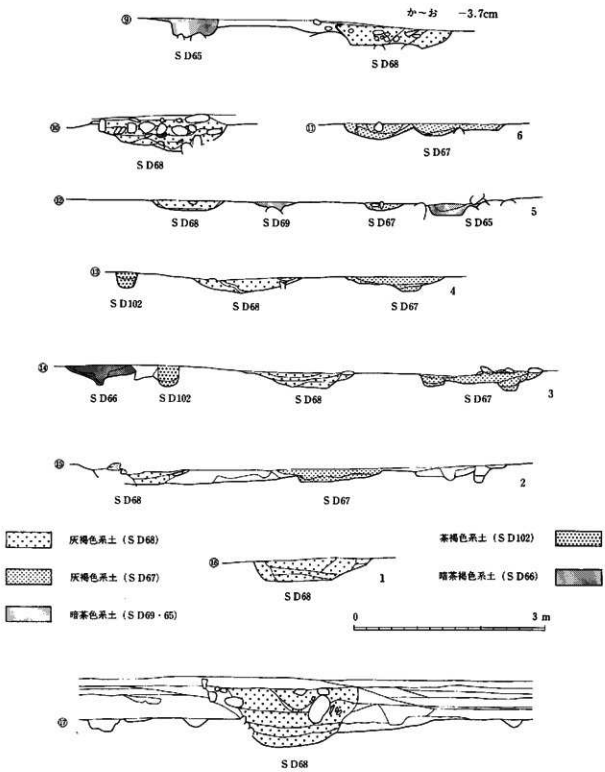


第132图 C地区清等出土土器实例图

16—27：S75周边出土



第134図 道路状遺構の横断面



第135図 66・67・68・65・69・102号溝土層実測図

F.	No.	種別	種名	アサ	産卵	母	孵化	体高	体長	尾高	口幅	産卵	孵化	尾長	尾高	外長	内長	産卵	孵化	体色	産卵	孵化			
17	11	産卵	産卵	GS	土	20	1.7	11.8	0	0	6.4	20	11	32	ナズ	ナズ	ナズ	ナズ	ヘラ寄り →寄り	黒	黒	1m前後の卵殻			
17	12	産卵	産卵	FS	F	100		0							ナズ	ナズ						産卵時			
17	13	産卵	産卵					0							ナズ	ナズ						1m前後の卵殻			
17	14	産卵	産卵					0							産卵下ホ:	ナズ						寄り	産卵時		
17	15	産卵	産卵	GS			3.4	3.4	13.7	9.2	6.5	50	27	87	ナズ	ナズ						ヘラ寄り →ナズ	産卵時		
17	16	産卵	産卵	GS				0	4.4	6.9					ナズ	ナズ						ヘラ寄り →ナズ	1m前後の卵殻		
17	17	産卵	産卵	GS	F	100		0	4	6.6					ナズ	ナズ						ヘラ寄り →ナズ	1m前後の卵殻		
17	18	産卵	産卵	GS				0	18.9						0ナズ	ナズ							寄り	産卵時	
17	19	産卵	産卵	GS	F	145		0							ロクロハナ	ロクロハナ							1号独立式産物		
18	1	産卵	産卵	FS	F	70	2.0	2.0	11.3	7.5	6.4	53	25	80	ナズ	ナズ						ヘラ寄り →ナズ	1m前後の卵殻		
18	2	土卵	産卵	FS	土	11		0	19.4						0ナズ	産卵							内	産卵時	
18	3	産卵	産卵	GS	F	80	1.4		0	18					0ナズ	ナズ							1m前後の卵殻		
18	4	産卵	産卵	GS	F	80	1.4		1.0	12.7	8.5	6.5	28	16	80	ナズ	ナズ							産卵時	
18	5	産卵	産卵	GS	土	6	2.7	0.7	3.4	10.3	11.5	1	34	30	70	ナズ	ナズ						ヘラ寄り →寄り	産卵時	
18	6	産卵	産卵	GS	土	17	2.4		2.4	11.8	4	6.4	50	21	80	ナズ	ナズ							寄り	産卵時
18	7	土卵	産卵	GS	土	12		0	14						0ナズ									産卵時	
18	8	土卵	産卵	GS	土	12		0	12.4						0ナズ	?								1m前後の卵殻 (ナズ含む)	
18	9	土卵	産卵	GS	土	12		0	12.2						0ナズ	ロコナズ								1m前後の卵殻	
18	10	土卵	産卵	GS	土	12		0							0ナズ	産卵								産卵時	
18	11	土卵	産卵	FS				0		5.6	3.7				産卵付足:	ナズ								産卵時	
18	12	産卵	産卵	FS			0.7	0.7		4.9	1				産卵付足:	産卵								産卵時	
18	13	産卵	産卵	GS	産卵			0	14.1		0.6	0	8	70	ナズ	ナズ								産卵時	
18	14	産卵	産卵					0							産卵付足:	ナズ								産卵時	
18	15	産卵	産卵					0							産卵付足:	産卵								産卵時	
18	16	産卵	産卵					0							産卵付足:	ナズ								1m前後の卵殻 加工	
18	17	産卵	産卵					0							産卵付足:	ナズ								1m前後の卵殻	

F.	No.	種別	種名	アサ	産卵	母	孵化	体高	体長	尾高	口幅	産卵	孵化	尾長	尾高	外長	内長	産卵	孵化	体色	産卵	孵化			
18	1	土卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土				0	19			0	0	ロクロナズ	ロクロナズ						1m前後の卵殻	
18	2	土卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土				0					ナズ	ナズ								1m前後の卵殻 多い
18	3	土卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土				0.20.4				0	0	産卵付足: ナズ/産卵 土層ハナ	産卵付足: ナズ/産卵 土層ハナ							1m前後の卵殻 多い
18	4	土卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土				0					0ナズ	ナズ								1m前後の卵殻
18	5	土卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土				0	14.4	1.1			産卵付足: 寄り/産卵	ナズ								2m前後の卵殻 少量
18	6	土卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土				0					寄り	産卵								産卵時・肉色
18	7	土卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土	0.5	0.5		0	16	9	5.8	47	57	10	産卵付足: 寄り	産卵						1m前後の卵殻 少量
18	8	産卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土				0.3	0.5													1m前後の卵殻 少量
18	9	産卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土	2			2.14.3	10	6.6	32	13	80	ナズ	ナズ							産卵時多い
18	10	産卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土	3.8			3.0	13.8	10.7	6.4	50	30	70	ナズ	ナズ						産卵時多い
18	11	産卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土	3.3			3.3	14.5	11	6.6	82	22	75	ナズ	ナズ						産卵時多い
18	12	産卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土	3.05			3.05	14.8	10	6.5	80	20	87	ナズ	ナズ						1m前後の卵殻
18	13	産卵	産卵	A1	産穴	1	黒褐色 土				0	13.8				0ナズ	ナズ								産卵時多い
18	14	土卵	産卵	A1	産穴	2	ホヤマド 土				0					ロクロハナ	ロクロハナ								産卵時多い
18	15	土卵	産卵	A1	産穴	2	ホヤマド	8.5			8.5	10	5.4	34	0	産卵	産卵								1m前後の卵殻 少量
18	16	土卵	産卵	A	産穴	5	ホヤマド	11.5			11.5	14	6.6	6.8	82	47	ナズ?	ナズ							1m前後の卵殻 多い

第十章 栗田遺跡の諸問題

第1節 建物の年代観

・ 竪穴式建物 栗田遺跡で検出した竪穴式建物は、重複も含めて16棟である。竪穴から検出した土器から年代観を考えると以下の様になる。

第一期（8世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期）

〔B1～5号竪穴・C1、2、4、12、11、13号竪穴・道路状遺構〕

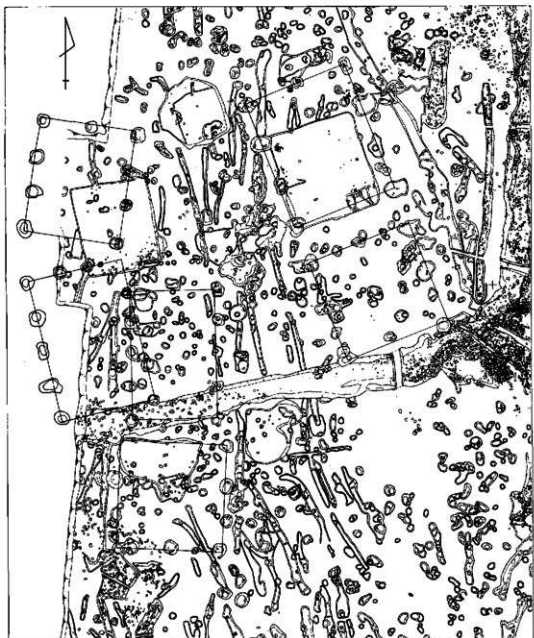
小型型はロクロ成形になっているが、大型型には非ロクロ成形のものが見られる。また内外面を赤彩した椀（B2号竪穴）、平瓶（C2号竪穴）や天井部に張りがある環蓋などを根拠にして該期の年代を比定した。

第二期（8世紀第Ⅳ四半期）〔C3、5、6号竪穴・道路状遺構〕

土器資料の出土が少ないので判断が難しいが、ロクロハケ甕が一般的になり、埴口縁の引出しが高くなっていることから、該期に比定した。

表1 竪穴式建物、堀立柱式建物 計測表

種別	地区	Na	区	方	位	桁間	桁行	桁長	梁間	梁	行	梁長	面積	桁梁
竪穴	A	1	A7	N-0°-W				290					0	0
竪穴	A	2	A7	N-8°-E				411				360	14	87
竪穴	A	3	A7	N-0°-W				390					0	0
竪穴	A	4	A7	N-0°-W				300					0	0
竪穴	A	5	A5	N-0°-W									0	
竪穴	C	1	E2	N-6°-W				365				325	11	89
竪穴	C	2	E2	N-10°-W				540				340	18	62
竪穴	C	3	E3	N-20°-W				250				195	4	78
竪穴	C	4	E3	N-2°-W				315				315	9	100
竪穴	C	5	F3	N-0°-W				230				225	5	97
竪穴	C	6	F3	N-16°-W				200				190	3	95
竪穴	C	8	E4					450				240	10	53
竪穴	C	10	E4					300				250	7	83
竪穴	C	11	E5	N-17°-W				515				430	22	83
竪穴	C	12	E5	N-23°-E				285				280	7	98
竪穴	C	13	E5	N-20°-W				550				500	27	90
竪穴	C	14	G4	N-0°-W				290				260	7	89
掘立	C	1	E5	N-9°-E	3	210	630	2		270	540	34	85	
掘立	C	2	E5	N-14°-W	4	200	800	3/2	180/270	540	43	67		
掘立	C	3	E5	N-2°-W	4	180	720	2		240	480	34	66	
掘立	C	3	E5	N-2°-W	4	180	720	2		240	480	34	66	
掘立	C	4	E4	N-3°-E	3	200	600	2		300	600	36	100	
掘立	C	5	E5	N-21°-W	3	250	750	2		300	600	45	80	
掘立	C	6	E5	N-21°-W	2	300	600	2		300	600	36	100	
掘立	C	7	G5	N-6°-W	2	180	360	2		180	360	12	100	
掘立	C	9	G4	N-10°-W	4	210	840	2		290	580	48	69	



第136図 C区11~12号発穴周辺の遺物群

第三期（9世紀第I四半期）〔C14号竪穴・12号土坑〕

8・10号竪穴とした土坑や12号土坑から、天井頂部を強く削り肩に段がつく坏蓋が出土し、また、壺の出土かどから該期に比定した。14号竪穴からは体部下半に粗いたたき調整をし、口縁が内屈する場が出土しているが、この資料は9世紀第IIIからIV四半期のもので、この竪穴は該当期よりも新しくなる可能性を持っている。

第2節 遺構の変遷

第一期（8世紀第II～III四半期）

B区やC区に、竪穴が数棟の単位で散在している。B区の竪穴群が比較的古い土器を伴出し、C区の11～13号竪穴は若干新しい様相を呈する。B区の竪穴はN-0°-Wの真北に向いているが、C区のこの時期の竪穴はN-20°-W前後の主軸方位を取っている。B区の竪穴群はC区の当該期の竪穴群よりも先行する可能性が高い。C区の竪穴群に併行して、幅4.2mの道路状遺構が北西から東南方向(N-21°-W)に走っている。11号の床面積は20.7m²で、13号竪穴は30.5m²を測り、今回調査した竪穴式建物の中では大型に属する。野々市町教委が調査した旧農業試験場の駐車場での調査で、この時期の後半に併行する掘立柱建物群が検出されている。

道路状遺構

第二期（8世紀第IV四半期）

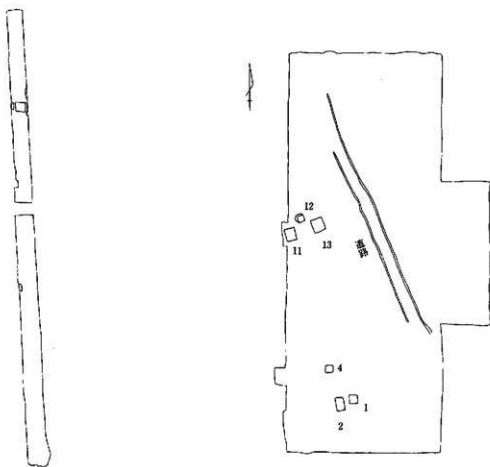
この時期以降は、B区では建物を検出できなくなる。C区の3・5・6号の三棟の竪穴式建物と、1・3・4・7号掘立柱式建物が、この時期に比定できる。竪穴の主軸は、5号がN-0°-Wで3・6号がN-20°-W前後である。掘立柱式建物の主軸は、1号がN-9°-Wで3・4号がN-2°-W前後、倉の7号はN-6°-Wである。これらの建物群に併行して、N-21°-Wに走る道路状遺構が第一期に引続き設けられている。しかし、道路幅は2.8mに縮小されている。C調査区内の建物は、倉を伴う掘立柱式建物が二群で竪穴式建物を一群検出している。この時期の建物群の主軸は、道路遺構の方位とは異なっている。

第三期（9世紀第I四半期）

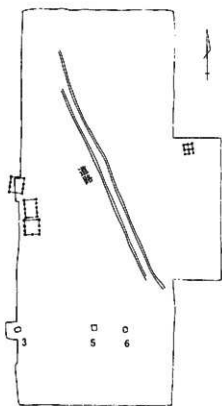
道路状遺構が74号溝に横断されて、廃絶していることが窺われる。建物は2・5・6・8号の掘立柱式建物がある。第二期の二つの建物群を継承して、建っている。2・5・6号は、N-21°-W前後で8号はN-10°-Wである。2・5・6号の主軸は、道路状遺構の方位と併行している。遺構の報告で8号と10号竪穴とした遺構は実際は12号土坑と同様な不整形な土坑で、各建物群に付随したゴミ穴的な遺構と考えられる。また、14号竪穴からは9世紀後半に比定できる場が出土しており、この時期ないしは掘立柱式建物群が廃絶してから造営された建物の可能性がある。

中世から現代の溝の変遷

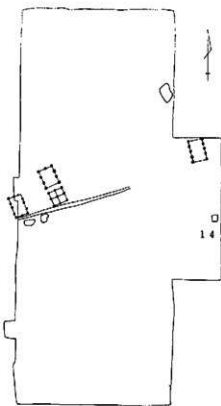
C調査区を南北に流れる68号溝を中心とする溝の変遷を、以下に整理する。
9世紀第I四半期：74号溝が東西方向に掘削される。
古代末期～中世：74号溝を利用して68号溝の東西部分がつくられ、67-1号溝につながっている。



第一期（8世紀第II～IV四半期）

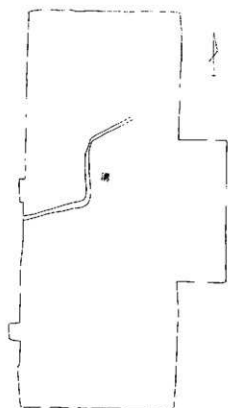


第二期（8世紀第IV四半期）

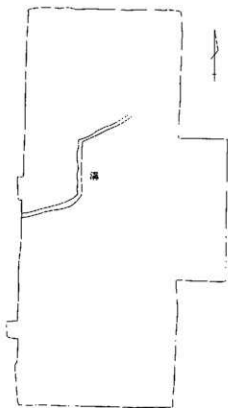


第三期（9世紀第I四半期）

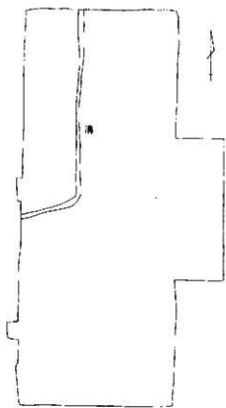
第137図 栗田遺跡の遺構変遷図(1)



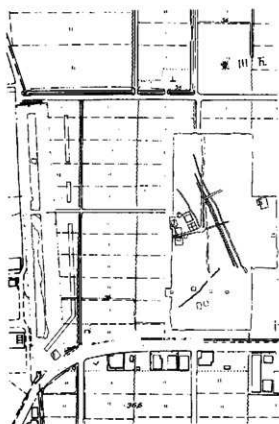
古代末期～中世



近世



近代～現代



現代

第138図 栗田道路の遺構変遷図(2)

近世(17世紀?) : 68号溝と67-1号溝の北流部分の屈曲点を礎で埋め、68号溝を北に新たに北流させ67-2号溝で東に屈曲させて67-1号溝につないでいる。

近代～現代(19世紀～1960年代前半) : 67-1・67-2号溝を廃棄し、68号溝を北にまっすぐ延ばしている。

第3節 古代以降の粟田遺跡の評価

集落 今回の調査区に隣接して、野々市町教育委員会が調査を行っている。この調査を見ると、B区の西側に8世紀前半の竪穴式建物が11棟検出されている。この調査区の南の旧農業試験場前では、8世紀前半の竪穴式建物が2棟と8世紀後半の掘立柱式建物が9棟検出されている。周辺の調査状況を総合すると、8世紀前半には竪穴式建物が旧農業試験場周辺に分散して営まれ、今回の調査のB区で検出した竪穴群もこれらの竪穴群の一角に含まれると思われる。竪穴群は8世紀後半に掘立柱式建物に替るが、C区の様子では8世紀後半までは竪穴だけの建物群が残っている。また、掘立柱式建物群も二・三棟の単位で構成されているが、各単位には二間四方の倉が伴っており、建物群が生産と貯蔵の単位を構成していたことが窺われる。また、C区の14号竪穴は出土した9世紀後半の土器が出土しており、また、竪穴の四隅に柱穴を持つなど、他の竪穴とは時期も構造も異なっている。ちなみに、この時期には周囲の掘立柱式建物が廃絶している可能性もある。

古地形と遺跡 粟田遺跡は、手取扇状地の扇尖部からやや北西に位置している。今回の調査では、幅60mのC調査区の東西両側に谷状の地形が走り、建物や溝は谷に挟まれた微高地に乗っていることが明らかになった。この微高地は南北に延び、扇状地周辺では南北に延びる谷と微高地が交互に並んでいることが推測できる。末松廃寺をはじめ野々市町新庄から粟田遺跡の周辺では、7世紀から10世紀の遺跡が多く検出されている。これらの遺跡の分布を地図上で観察すると南北に帯状に並んでいることが見え、扇状地の微高地に遺跡が乗っているものと思われる。粟田遺跡では、8～9世紀の建物が二・三棟単位で約50m間隔で分散して検出している。この傾向は、末松廃寺に隣接する末松遺跡の7世紀中頃の集落でも確認されており、古代の手取扇状地の集落形態が散居村であったことが窺われる。

道路 C調査区で検出した道路状遺構は、8世紀の前半に西側の側溝が埋められて幅が縮小され、8世紀の後半に廃絶している。N-21-Wに走る方向は、現在の鶴來町から金沢市金石に向かっており、浅香年木が指摘している山と海を結ぶ道であった可能性が高い。B調査区の北西部には同じ方位をとる現代の道路があるが、この道路の方位が古代の道路や建物群の主軸を規制した地割りを伝えている可能性がある。

溝 C区の68号溝は、9世紀前半の74号溝をベースにして作られており、先に述べた変遷を経て、現在の南北に延びる水路にその名残を伝えている。

第十一章 まとめ

1 石製品

石製品の項目のまとめに代えて、C調査区礫原発掘時とその出土遺物整理期間中に気付いたことを列記しておきたい。

1 礫原を覆っていた土は淡黒褐色の砂質土であったが、礫原を離れるにしたがい次第に色が薄くなり、淡黄褐色の砂質土となるが、土層としての明確な区別がつかず土壌化の状態の差と考えている。

2 この礫原で打製石斧の素材が採集されていたことは確実である。しかし、後世の擾乱により削平された箇所もあり、礫原の一部に素材を集め加工を行っていた可能性は残る。また、今回の調査区外に延びる礫原上にその場があったかも知れず、どこまでの工程が行われていたかは、推測の域をでない。

3 母岩としての選択の形状による基準は、最小の大きさの打製石斧を作出できる以外は不明確であり、手当たり次第に選んでいる様である。また、石質についての基準も同様であり、この礫原に含まれる原石の種類比率と同じと考えられる。

4 打製石斧の素材を作出する技法を三類型に分けたが、手で持ったまま加撃を行ったか、投石を行ったかは不明確である。基本的には手で持って手近な石（台石と分類したもの）に振下ろしたものと考えている。

5 打製石斧の形態は、その素材となる剥片の形状に大きく左右される。また、使用時の破損に伴う再加工もあるため、あまり細かな形態分類は不要であると考えている。

6 打製石斧は、基本的に礫原では使用されなかったと考えられるが、礫原では木製の掘棒の方が有効であったためなのか、打製石斧を用いた作業の対象物が存在しなかったのかは不明である。

7 今後の調査においては、集落址以外の礫原にも眼を向ける必要があろう。また、集落内においてもそのベースを構成している礫層や礫自体にも注意するべきであろう。

8 当遺跡周辺では、縄文時代晩期の集落址が発見されておらず、今後この辺りの調査が進むにつれて、この遺跡で打製石斧の素材を得ていた人々の集落址が見つかることも考えられる。

2 古代以降の栗田遺跡

栗田遺跡の1989年度の調査で確認できたことを箇条書きに記す。

1 この集落は、N-20°-W前後に伸びる微高地の上に立地している。

2 今回の調査区では、8世紀前半から9世紀後半の集落を検出した。

3 古代の集落は、三棟前後の建物か約50mの間隔で分布する散居村の形態をとっていた。

4 古代の道路が微高地を走っている。

5 古代から中世の溝や道路の方位に示される地割りの名残が、現代の道路・水路の方位に残っている。

- 6 この地域の分布調査では、微高地と谷筋を確認する必要がある。微高地の上には、散漫ではあるが遺跡が所在する可能性が高い。

あとがき

今回は、1万m²を越す面積を短時間に調査しなければならず、当初は事前の調整案通りに調査が進められるのか不安な状態であった。特に、1989年度は建設省関係の調査を実施するために石川県埋蔵文化財保存協会が突然設立され、栗田遺跡の調査もこの法人で実施することになり、我々三人と野々市町の田村氏が調査を担当することに決まったのは3月も末の事であった。幸い、作業員は野々市町教育委員会で募集の作業が進んでおり、調査開始時には約100名が登録し、なんとか調査を進めることができた。この年の天候は雨が多く、広大なC調査区に水がたまって杲然とすることが何度かあった。つらい排水作業を繰り返し行っていたいただいた作業員の皆さんに、心から感謝の意を表したい。

今回の調査では、いままで扇状地の礫原と思われていた所が弥生時代初頭の打製石器の製作地であった事が明らかになり、これまで栗田周辺で打製石斧だけが点々と出土していた理由を解明する事ができた。岡本が中心となって進めた、打製石器製作跡の調査は従来の北陸の弥生時代の石器研究に大きく寄与するものと確信している。また、8世紀から9世紀の古代集落が散居村の形態を取っていた事が明らかになり、この現象が手取扇状地に限定されるのか、北陸に普遍的なものか、問題を提起する事になった。

栗田遺跡の調査で検出した遺構は、多数の小穴以外は比較的少ない。石器を製作した石原や散発的な竪穴の分布など、分布調査や試掘調査でこの地域の遺跡の範囲を確定する事はきわめて難しい。今回の調査が、周辺の遺跡の保護や調査の指針になれば幸いである。

B区 $\frac{1}{100}$ 全体図分割一覧表

1
2
3
4
5
6
7
8



凡 例

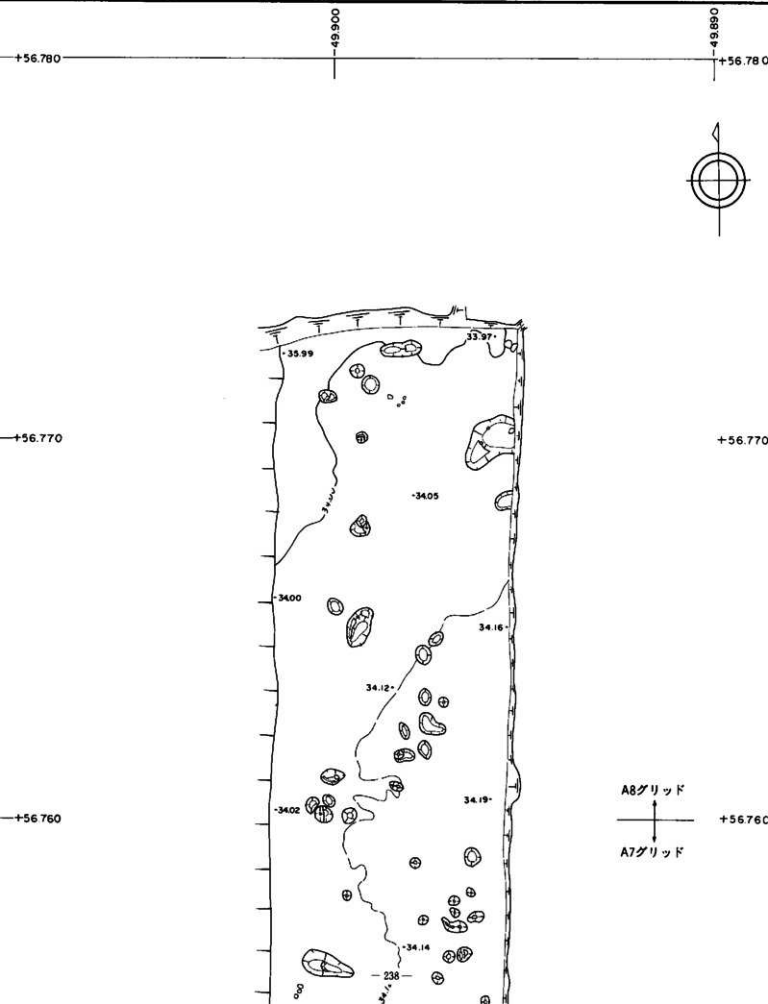
SB.....建 物

SK.....上 址

SD.....溝

P.....ピット

石製品の番号は仮番号



+56.750

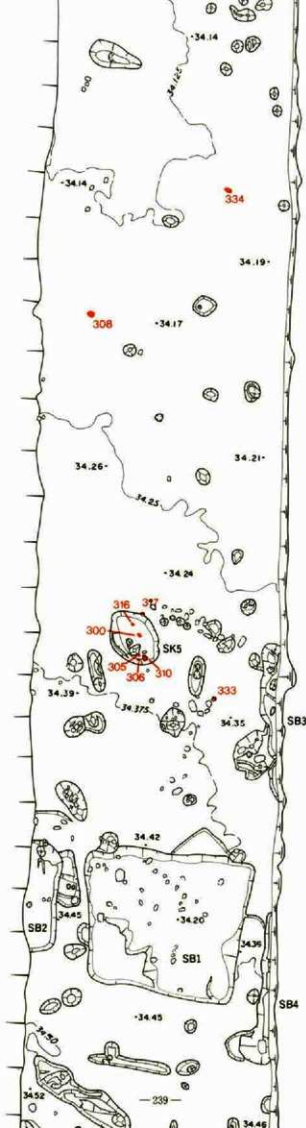
+56.750

+56.740

+56.740

+56.730

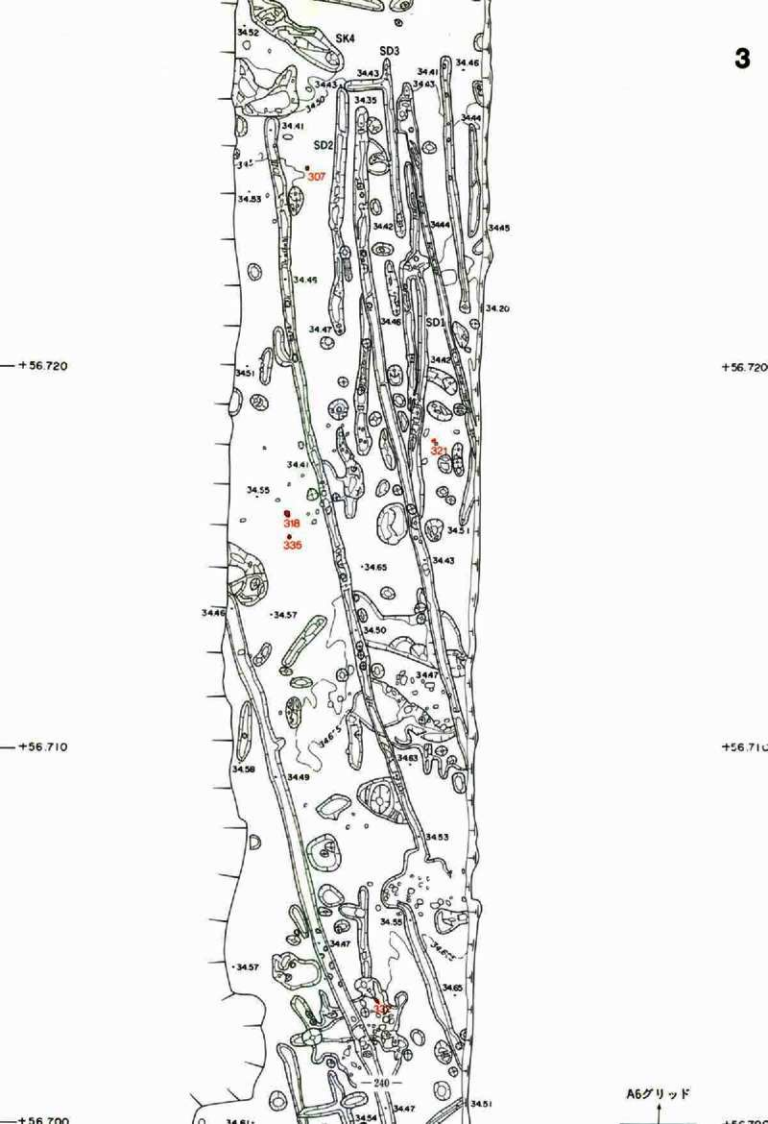
+56.730



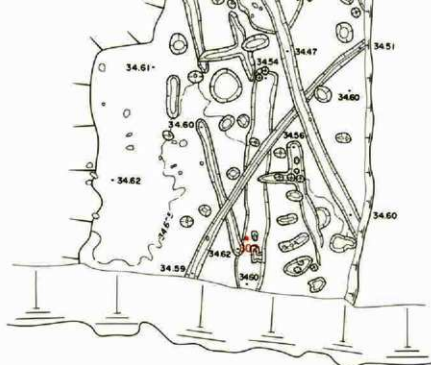
A7グリッド



A6グリッド



+56.700



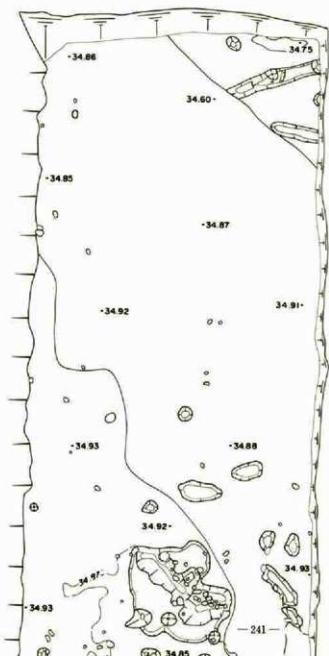
A6グリッド

4

+56.700

A5グリッド

+56.690



+56.690

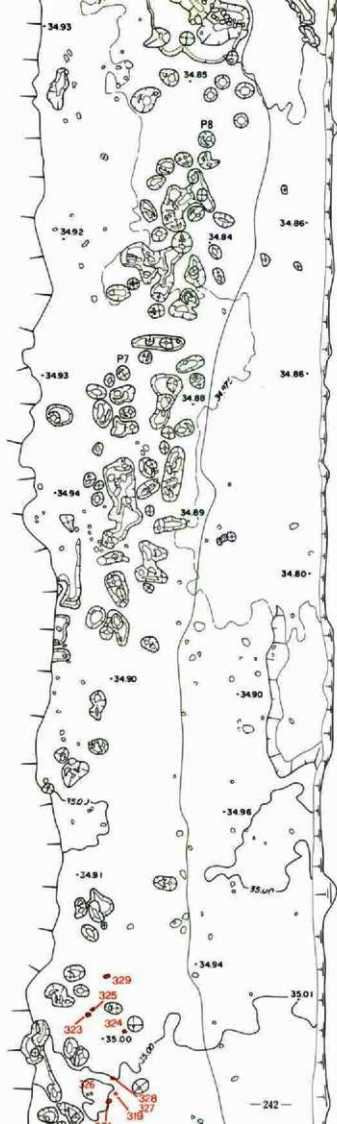
+56.680

+56.680

+56.670

+56.660

+56.650



A5グリッド

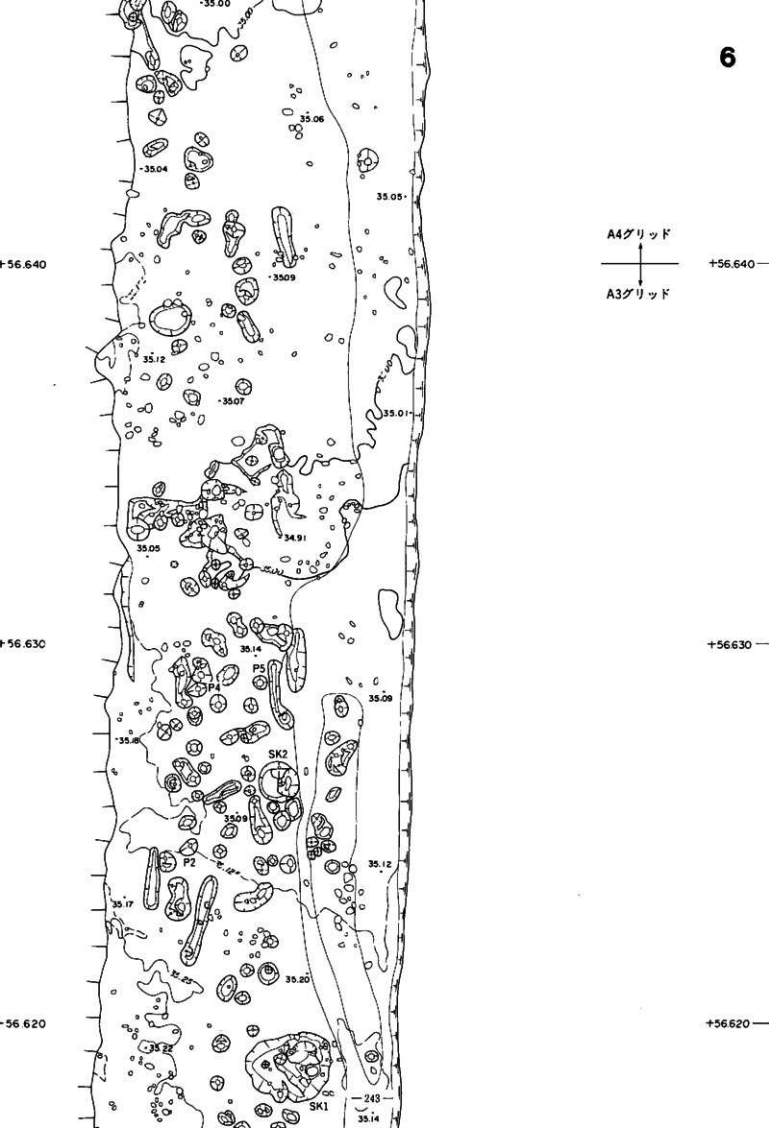


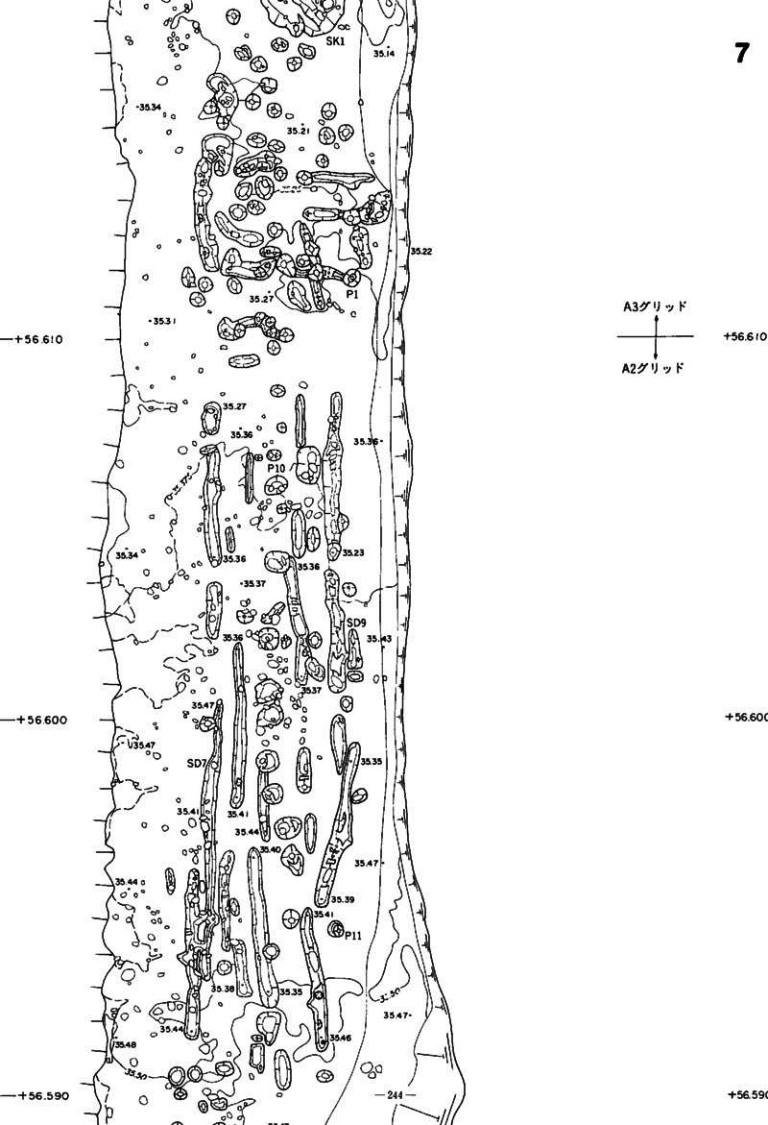
A4グリッド

+56.670

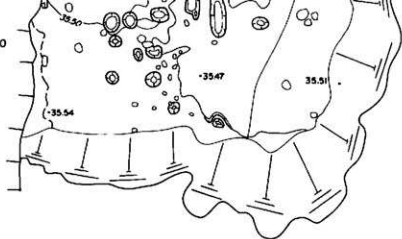
+56.660

+56.650





+56.590



+56.590

8

+56.580

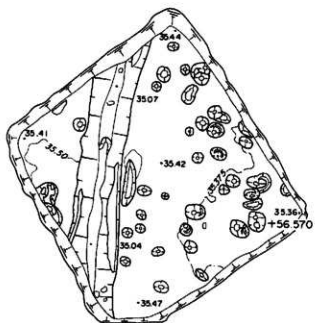
A2グリッド



A1グリッド

+56.580

+56.570



C区 $\frac{1}{100}$ 全体図分割一覧表

1	2	3	4	
5	6	7	8	
9	10	11	12	13
14	15	16	17	18
19	20	21	22	
23	24	25	26	



凡

SB…………建物

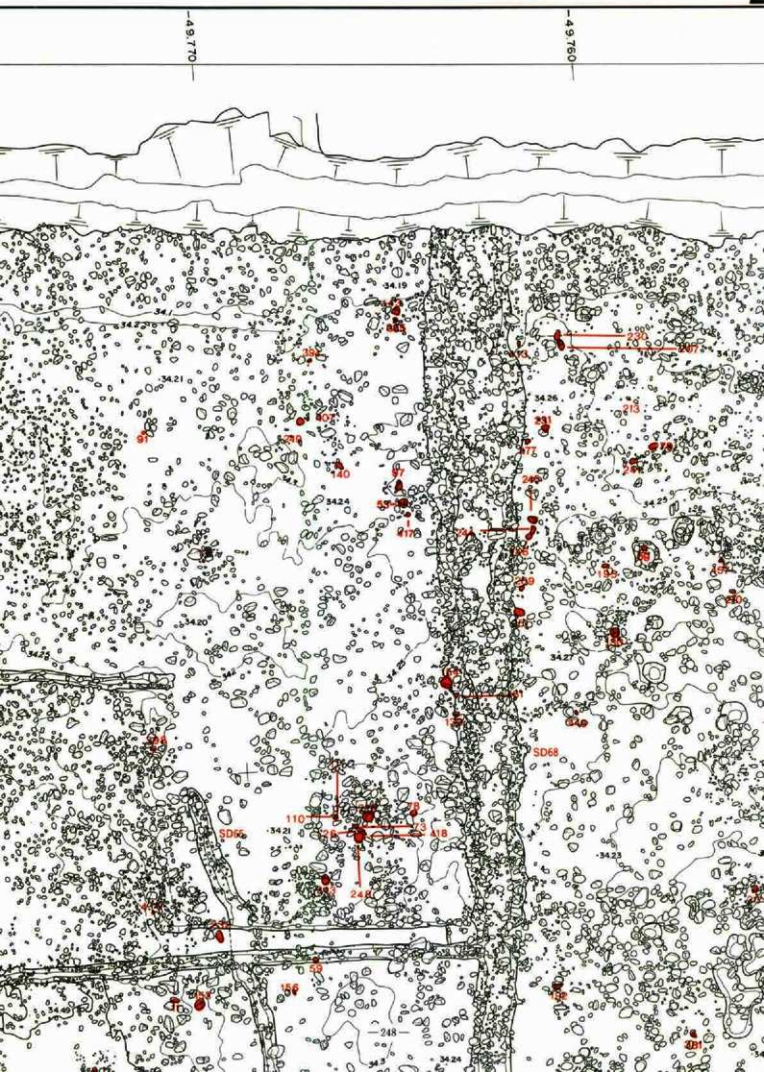
SD…………溝

石製品の番号は仮番号

例

SK…………土 壇

P…………ビット



-49,730

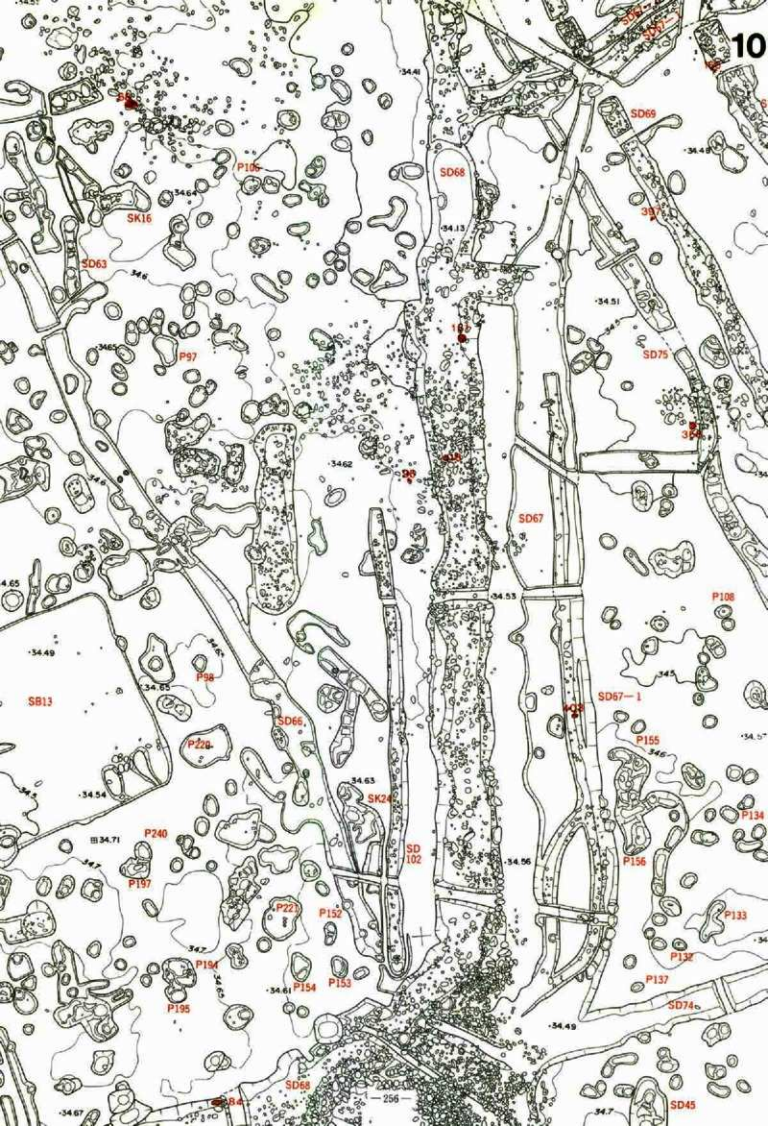
-49,720

No. 1
No. 75

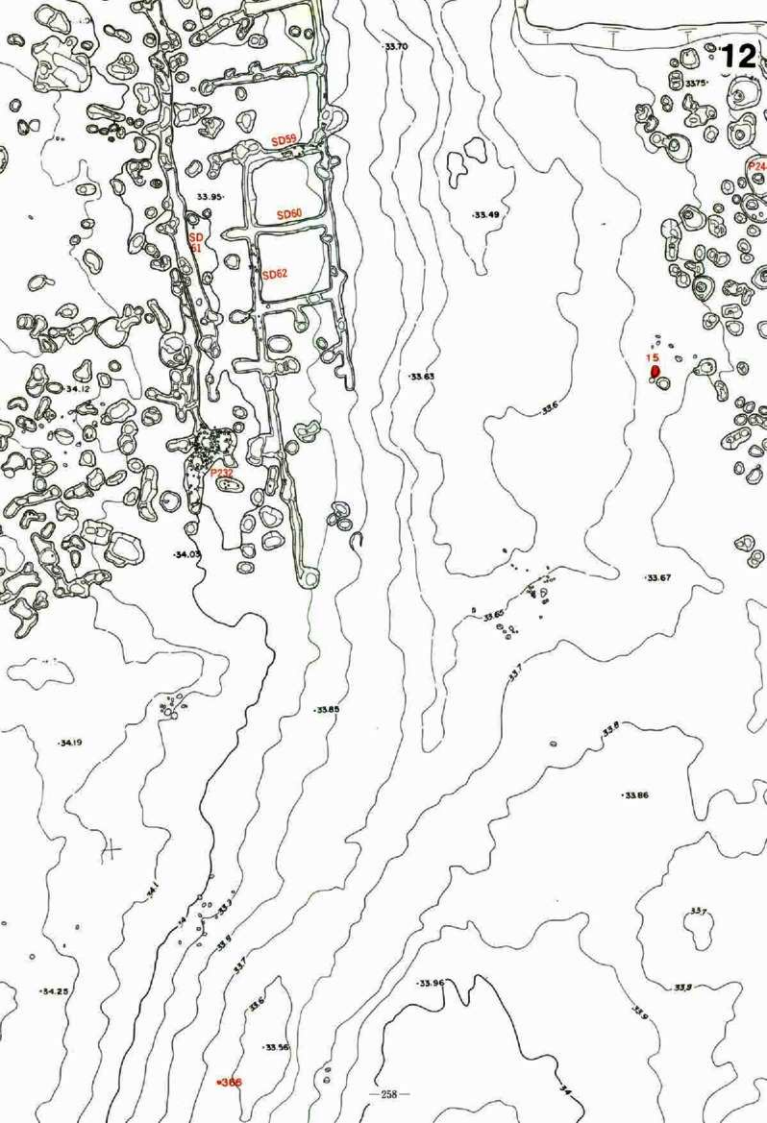
No. 77-No. 82

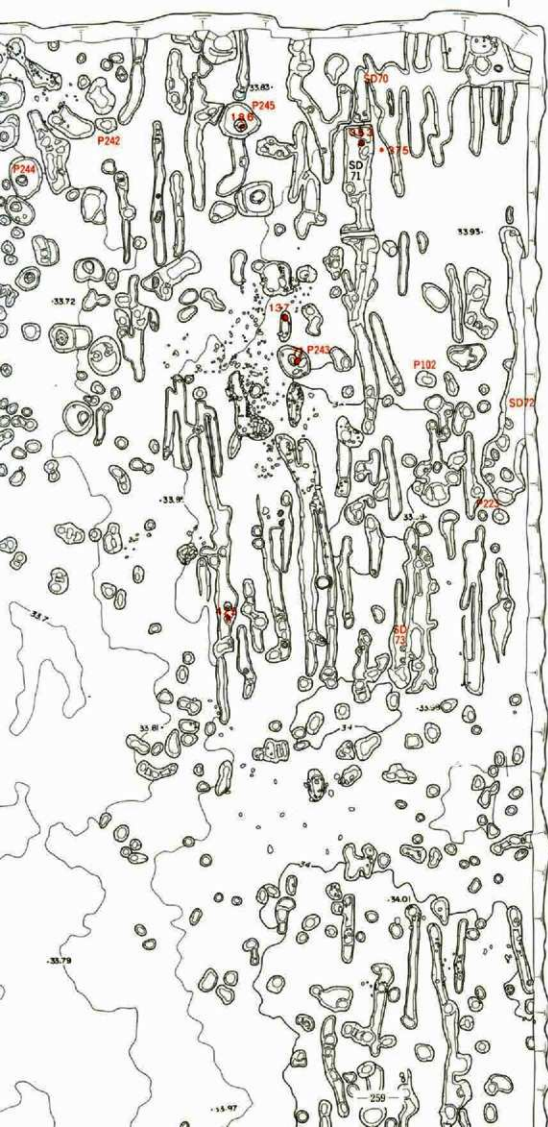


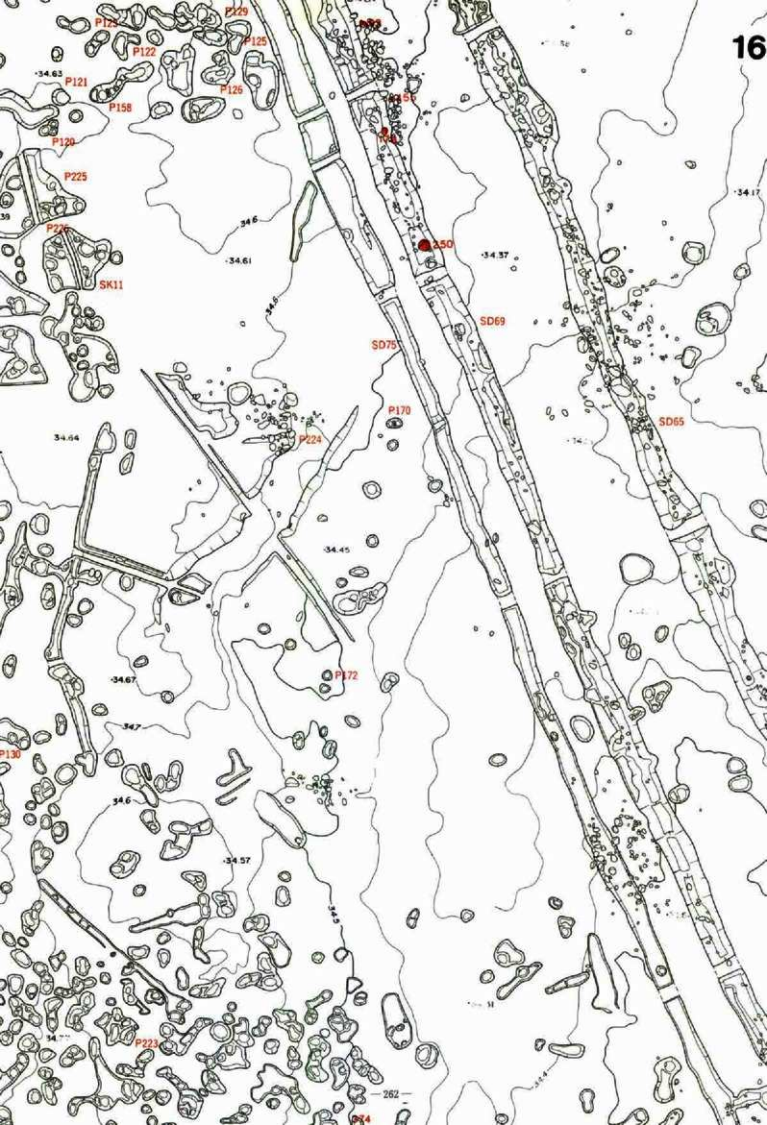


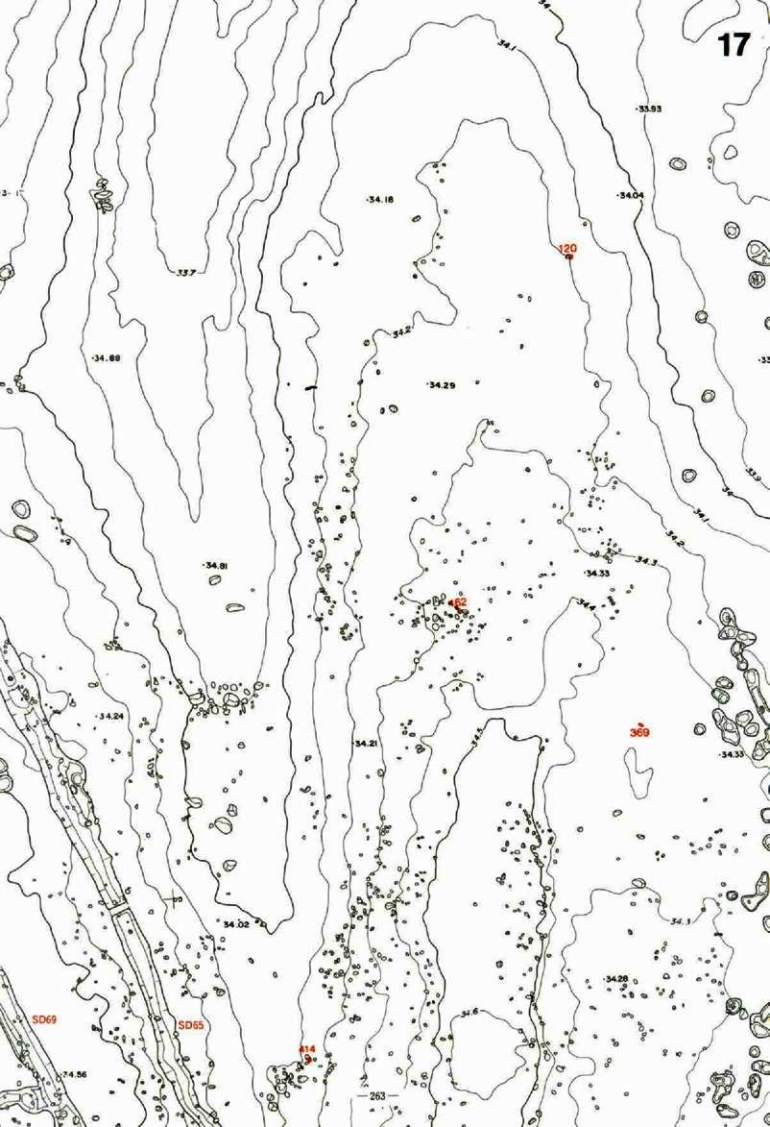


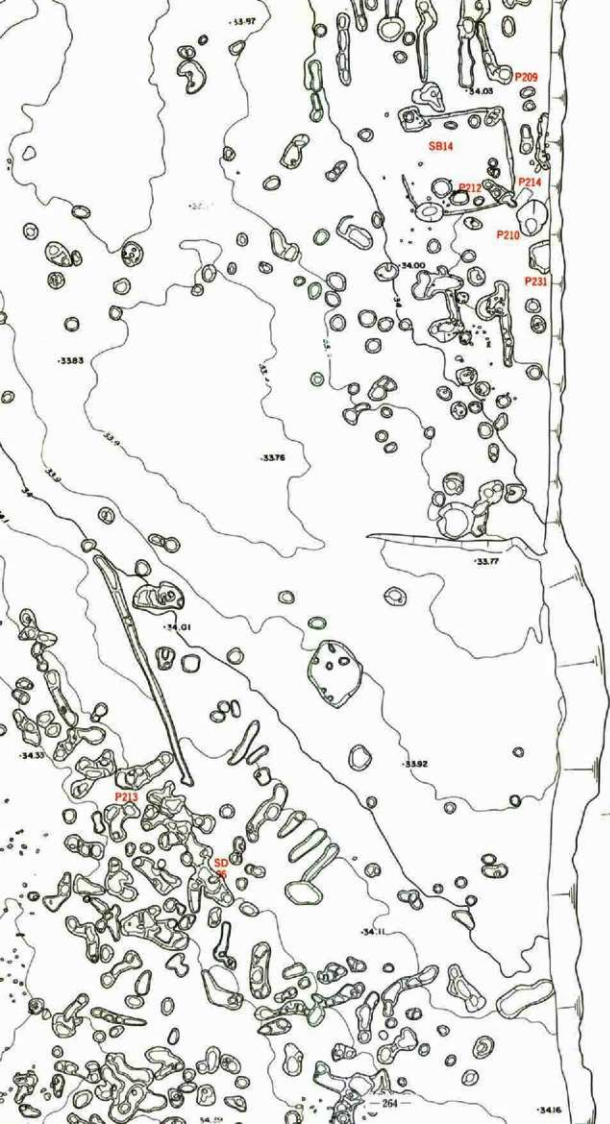










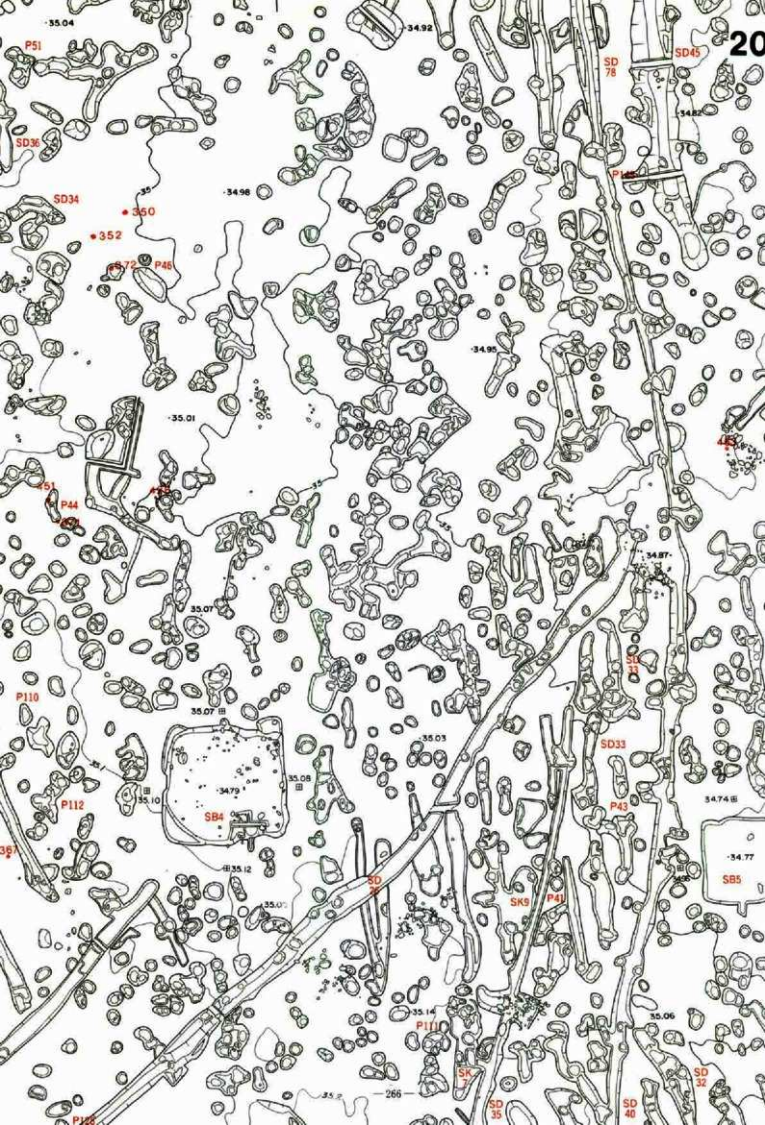




+56.630

+56.620

+56.610



+56.610

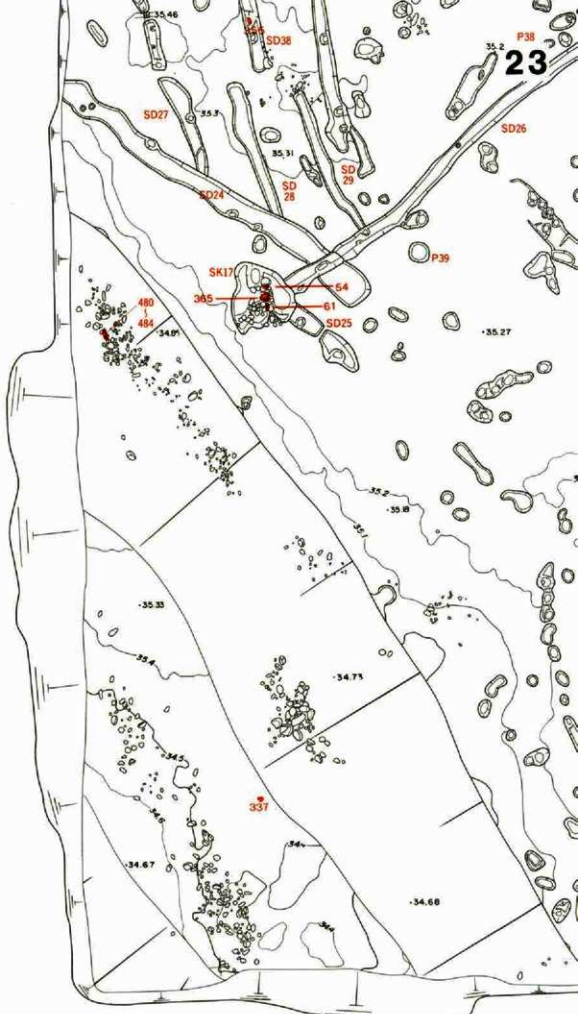
+56.600

+56.590

49.800

-269-

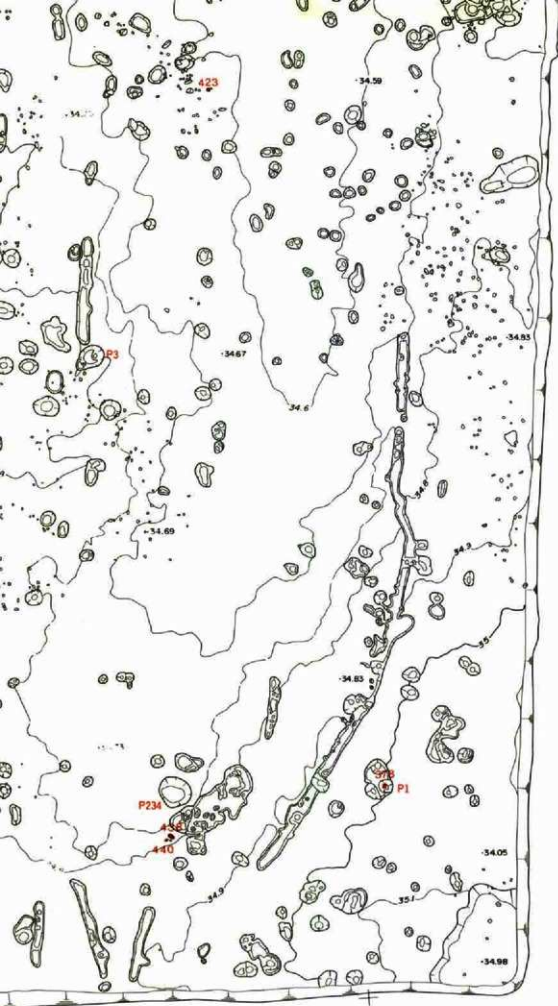
49.790





49.780

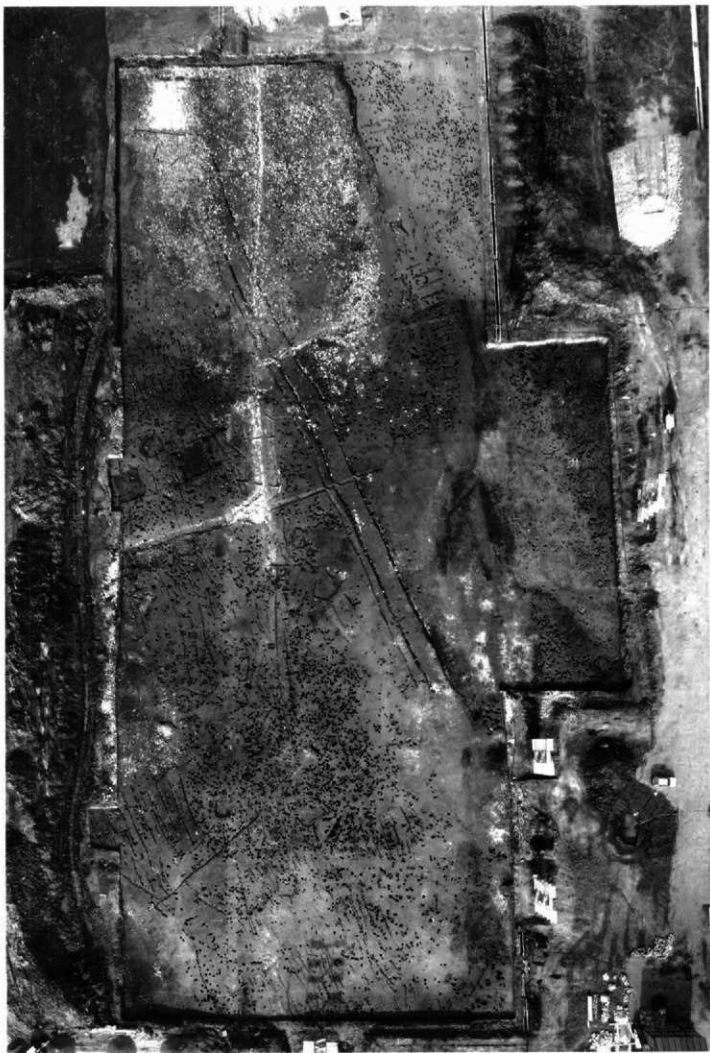
49.770







栗田遺跡調査区全景



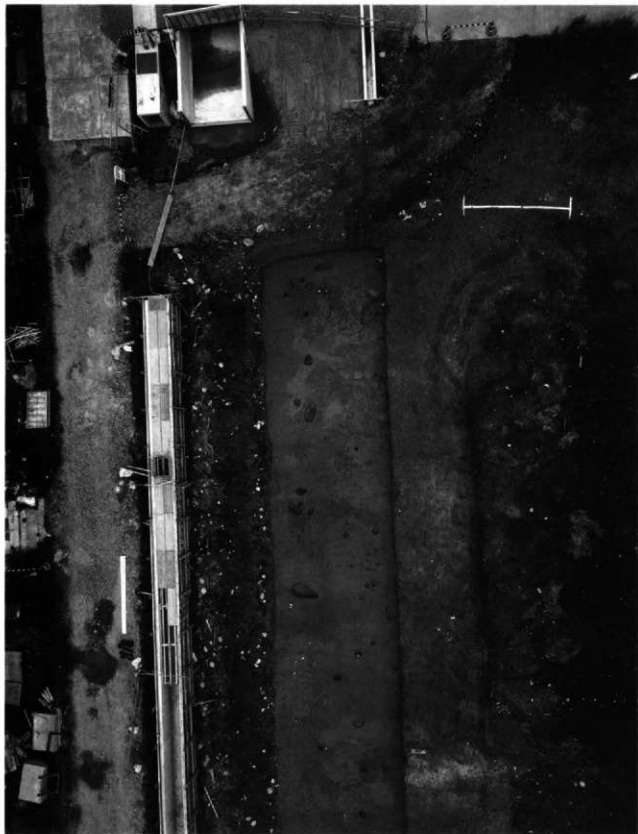
C 測农区全景



C調査区南側部分（北から）



C調査区北側部分（北から）



日調査区空中写真 5.8区
37段



B調査区空中写真 $\frac{A}{115}$
 $\frac{A}{174}$



B調査区空中写真 全図
A337



B 調查區空中写真 $\frac{A \cdot 116}{A \cdot 174}$



B调查区空中写真 $\frac{A_{116}}{A_{312}}$



B 調査区空中写真 5-315
A-2区



B 调查区空中写真 全图
A112



C 調査区空中写真 5116.11M
5631.11M



C調査区空中写真 F1961K
F1961D



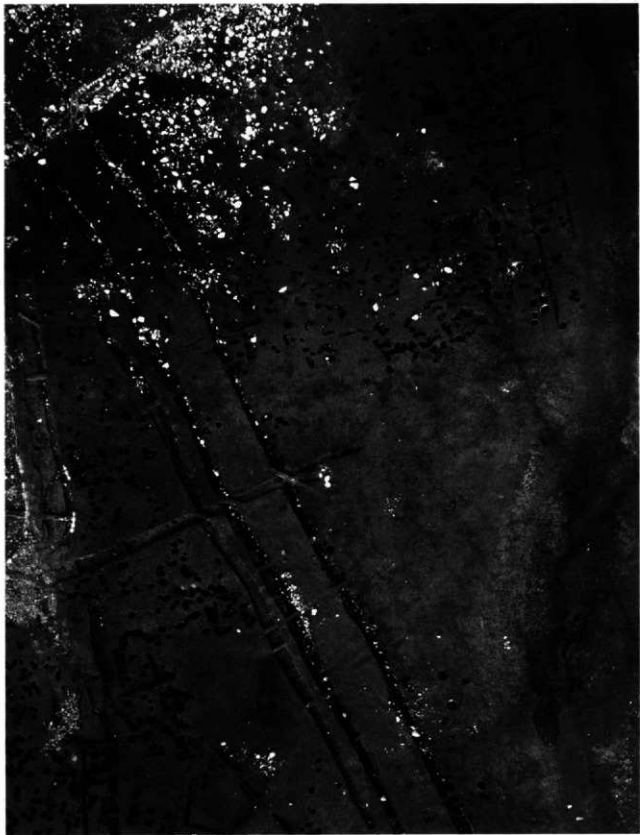
C调查区空中写真 5411F41K
5312F31P



C 調査区空中写真 昭和24年
航空写真部



C 调查区空中写真 K330F 216
E730F 312



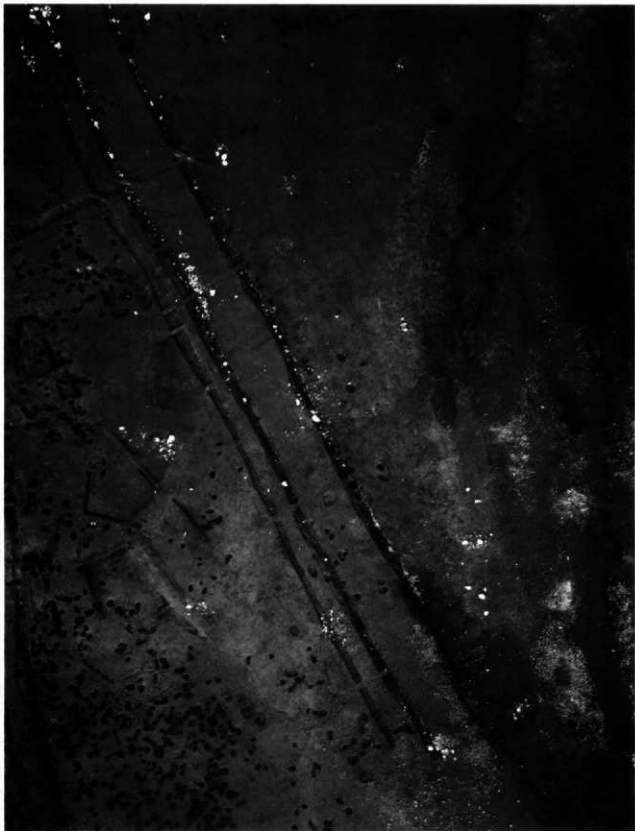
C 调查区空中写真 F3361312
F3361312



C 调查区空中写真 F 5110.55
F 1016.712



C 調查區空中写真 1:10,000
1951年11月



C 調査区空中写真 F4110415
F3110312



C調査区空中写真 1954年11月



C调查区空中写真 5.10.31
5.12.31



C 湖南洞庭湖中鸟具 F 11161316
P 11161317



C 调查区空中写真 1953.11.11



C調査区空中写真 F38 G38
F28 G28



C調査区調査前状況（東から）



C調査区調査前状況（南東から）



B調査区・A調査区調査前状況（南から）



B調査区表土除去作業状況



A調査区表土除去作業状況



A・B調査区作業状況



A調査区北部完掘状況（北から）



同上（南から）



A 調査区南部定掘状況（北から）



A 調査区南部完掘状況（南から）



B調査区A 8・A 7区遺構検出状況(南西から)



B調査区A 5～A 8区遺構検出状況(南から)



B調査区A 4・A 5区道構検出状況（南から）



B調査区A 4～A 2区道構検出状況（北から）



B調査区A8～A5区完備状況（北から）



B調査区A5～A8区完備状況（南から）



B調査区A3・A2区完掘状況（北から）



B調査区A4・A5区完掘状況（南から）



B調査区A1区完掘状況（南から）



B調査区A1区完掘状況（西から）



B調査区A 7区1号竪穴調査状況（東から）



同上（南から）



B調査区A7区1号壑穴完掘状況（東から）



同上（西から） 手前は2号壑穴



B調査区A7区1号壺穴遺物出土状況



B調査区A7区2号壺穴遺物出土状況



B調査区A7区3号整穴等完掘状況（西から）



B調査区A4区打製石器、副片等 出土状況



C調査区表土除去作業状況（東から）



C調査区G2・F2区遺構検出状況（東から）



C調査区調査状況（南東より）



C調査区調査状況（南から）



C調査区遺構検出状況（南から）



C調査区F2区調査状況（東から）



C調査区F3区調査状況（南東から）



C調査区F3・F4区調査状況（南東から）



C調査区E5区調査状況（西から）



C調査区F2区土層実測状況（北から）



C調査区E4区調査状況 (北西より)



C調査区G7区調査状況 (北西より)



C調査区E・F区調査状況（北西より）



C調査区F区遺構横断調査状況（北西より）



C調査区北側部分完備状況(北より)



C調査区E・G・F区完備状況(北東より)



C調査区F 3・4・5区道状遺構完掘状況（南東より）



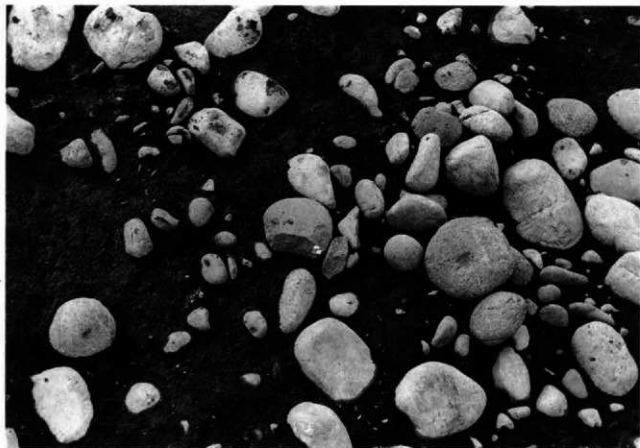
C調査区E 6・F 6区道状遺構完掘状況（北西より）



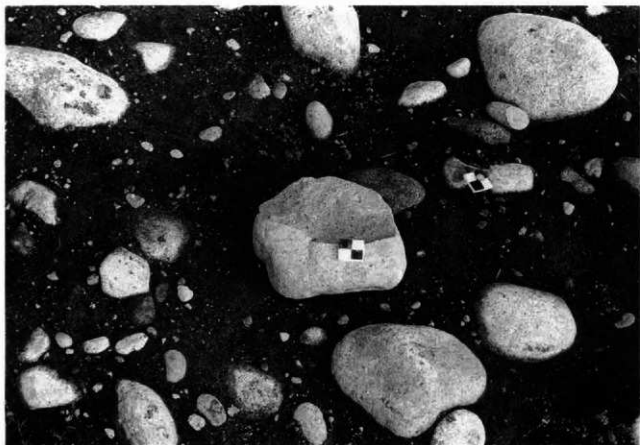
C調査区F6区母岩・剥片等出土状況



C調査区F6区母岩・剥片等出土状況



C调查区F6区母岩·卵石等出土状况



C调查区F7区母岩出土状况



C調査区E3区谷状の落ち込み(南東より)



同上 堰部(南より)



C調査区E3区打製石岸出土状況（谷状落ち込小貯部・東から）



同上（西から）



C調査区E4区68号溝（東から）



C調査区E4区68号溝（西から）



C調査区F5区07-1・68号溝（南より）



C調査区F5区07-1・68号溝（北より）



C調査区F 6・7区68号溝完掘状況



C調査区E 4区68号溝堆積状況



C調査区E5区74号溝と畦状遺構（東から）



C調査区F4区土の表遺構調査状況（南東から）



C調査区G 6区12号土坑調査状況 (西から)



同 上 (南から)



C調査区G⑥区12号土坑完掘状況（西から）



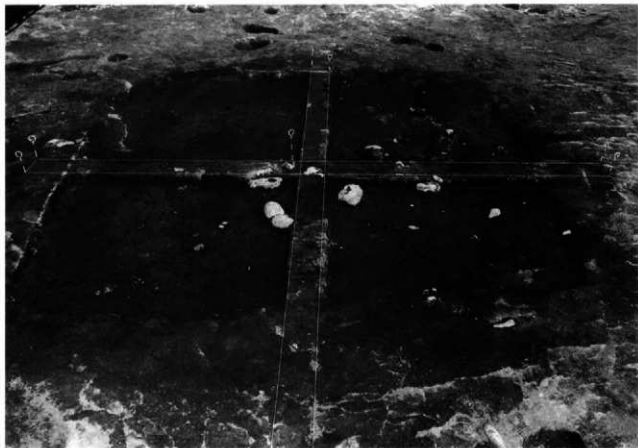
同上。遺物出土状況



C调查区E3区P1r42遗物出土状况



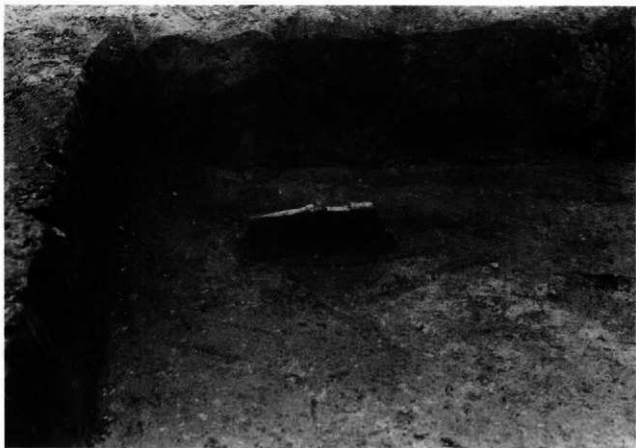
C调查区F3区10号土坑遗物出土状况



C調査区E2・F2区1号整穴調査状況（西から）



同 上 床面上土壌サンプリング状況



C 调查区 E 2 · F 2 区 1 号整穴刀子出土状况



图 上 调查状况



C調査区E2・F2区1号罅穴調査状況(南から)



同上 完掘状況(西から)



C調査区E2区2号壙穴検出状況（南から）



同上調査状況



C調査区 E2区2号整穴調査状況



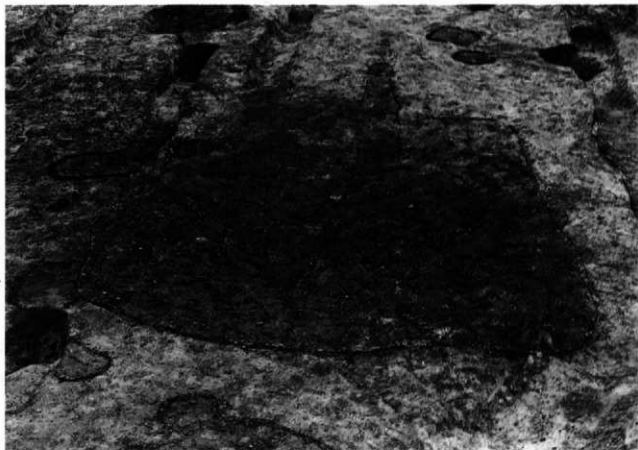
同上 遺物出土状況



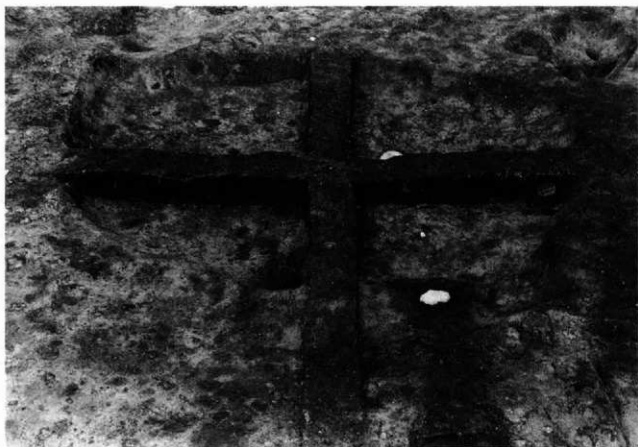
C調査区F2区壘穴調査状況(南から)



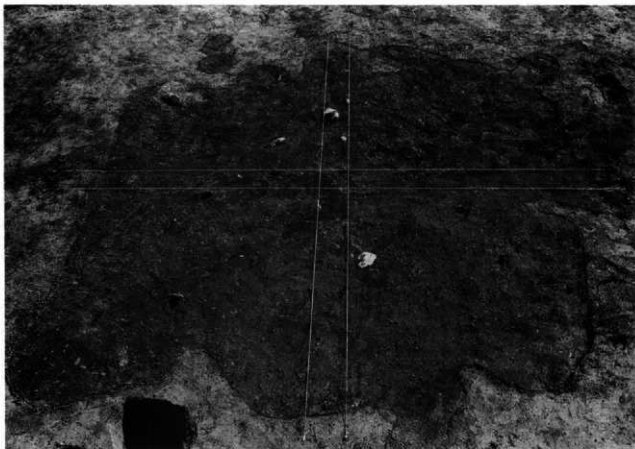
同 上 完形状況(南から)



C調査区E-3区3号壜穴検出状況（北から）



同上調査状況（南から）



C調査区B3区4号竪穴掘出状況(南から)



同上 調査状況(東から)



C調査区E-3区4号埴穴遺物出土状況



同上 カマ下部分調査状況



C調査区E3区2号壙穴調査状況(北から)



同上 完掘状況(北から)



C調査区F3区5号竪穴調査状況(南から)



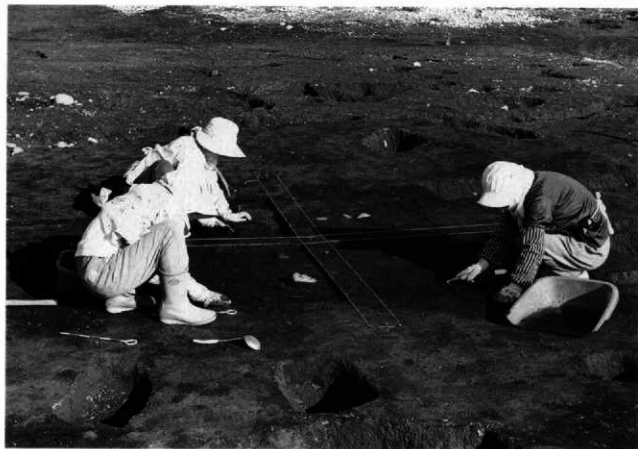
同上 カマド部分



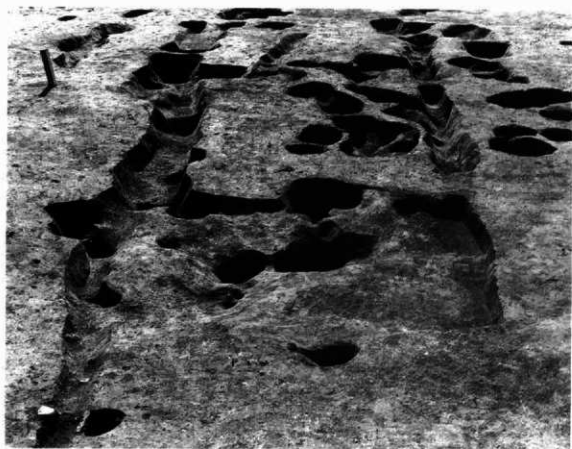
C調査区F3区5号竪穴完備状況(南から)



同上(西から)



C調査区E3区6号壁穴調査状況(西から)



同上 完掘状況(北から)



C調査区E 4・5区住居址群検出状況(南から)



C調査区E 4区8・10号壙穴検出状況(東から)



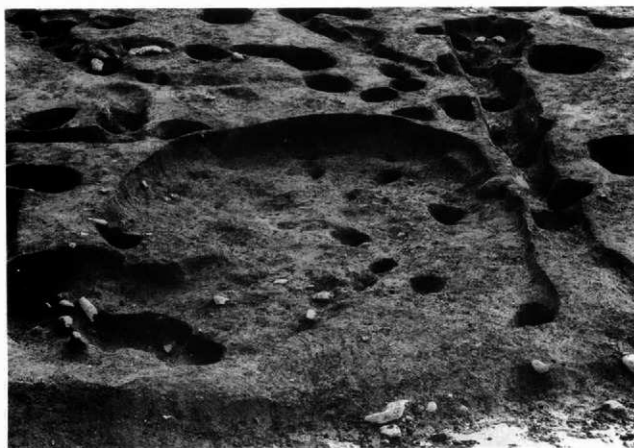
C調査区E4区8号罫穴調査状況(南から)



同上 完形状況(北から)



C調査区E 4区10号罅穴調査状況 (西から)



同上 罅穴状況 (北から)



C 調査区E 5区11号壁穴検出状況（東から）



同 E 調査状況（東から）



C調査区E5区11号竪穴調査状況（北から）



同 上 カマド部分



C調査区E-5区11号罫穴完備状況（北から）



同上（東から）



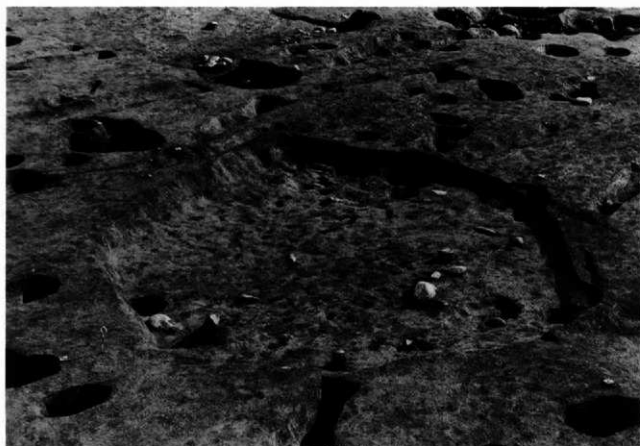
C調査区E-5区12号整穴検出状況（東から）



同上 調査状況（北から）



C調査区E5区12号竪穴調査状況（東から）



同上 完掘状況（北西から）



C調査区E5区13号整穴調査状況(北から)



同上(西から)



C調査区E 5区13号竪穴カマド部分調査状況



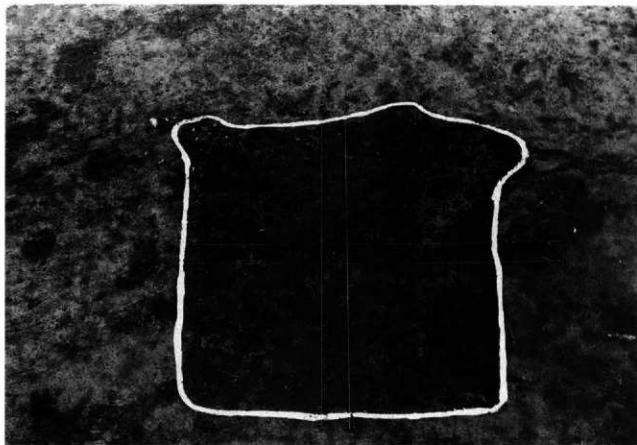
同上



C調査区F 6区13号整穴完掘状況（東から）



同上（北から）



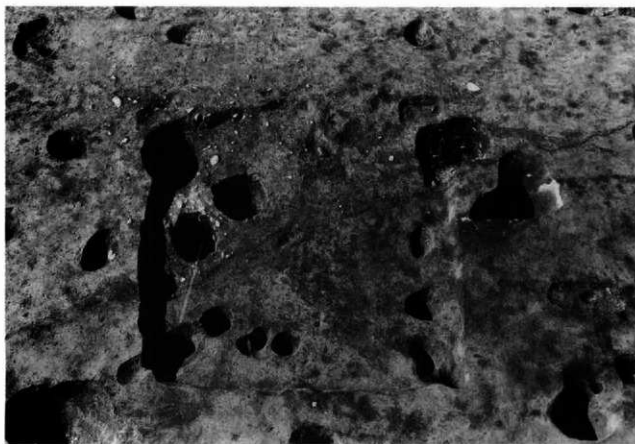
C調査区G 4区14号整穴抽出状況 (東から)



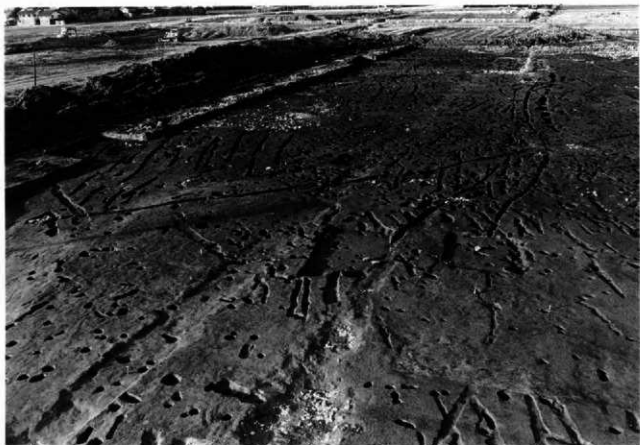
同上 調査状況



C調査区G4区11号整穴調査状況（東から）



同上 完掘状況



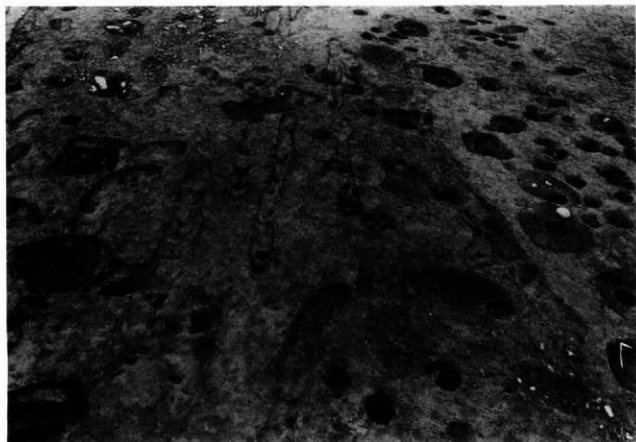
C調査区E 2～5、F 2～5区完掘状況(南から)



C調査区E 2・3 F 2・3区完掘状況(東から)



C調査区G5区7号建物調査状況(南から)



同上(北から)



C調査区G・5区完掘状況（南東から）



C調査区G 4・5区完掘状況（南から）



C調査区D2・E2区道横検出状況(西から)



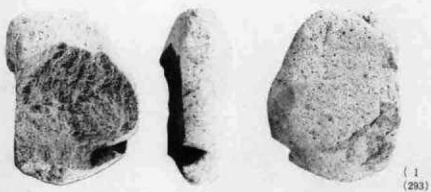
同上 完掘状況(西から)



現地説明会状況



土壌水洗選別作業状況



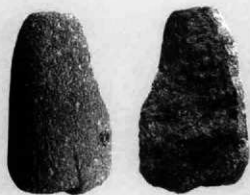
1
(293)



2
(249)



3
(194)



4
(283)



5
(277)



6
(213)



8
(217)



7
(235)



9
(2)



10
(18)



11
(128)



12
(139)



13
(41)



14
(117)

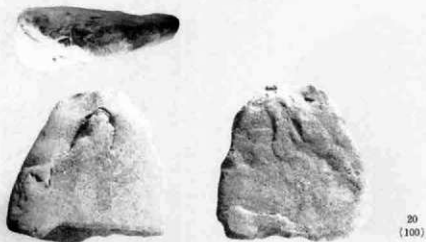
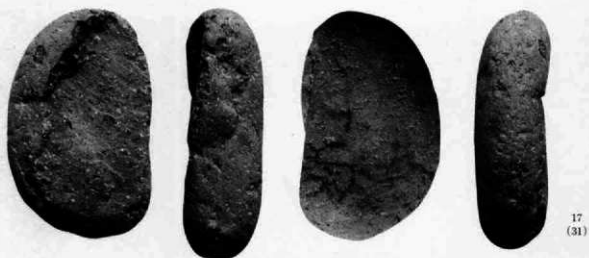


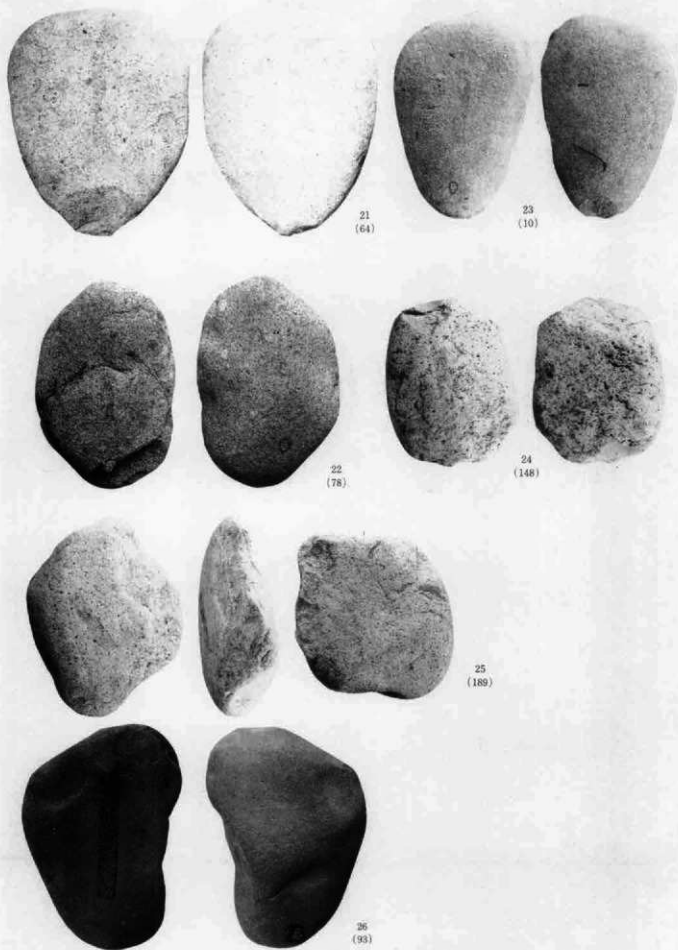
15
(195)

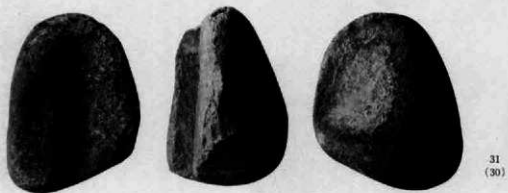
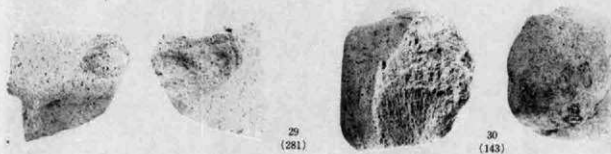
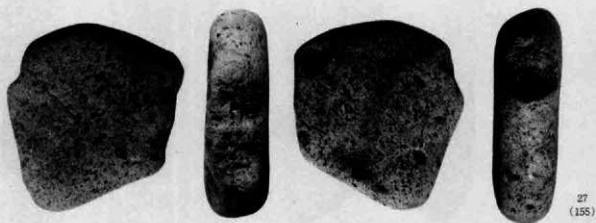


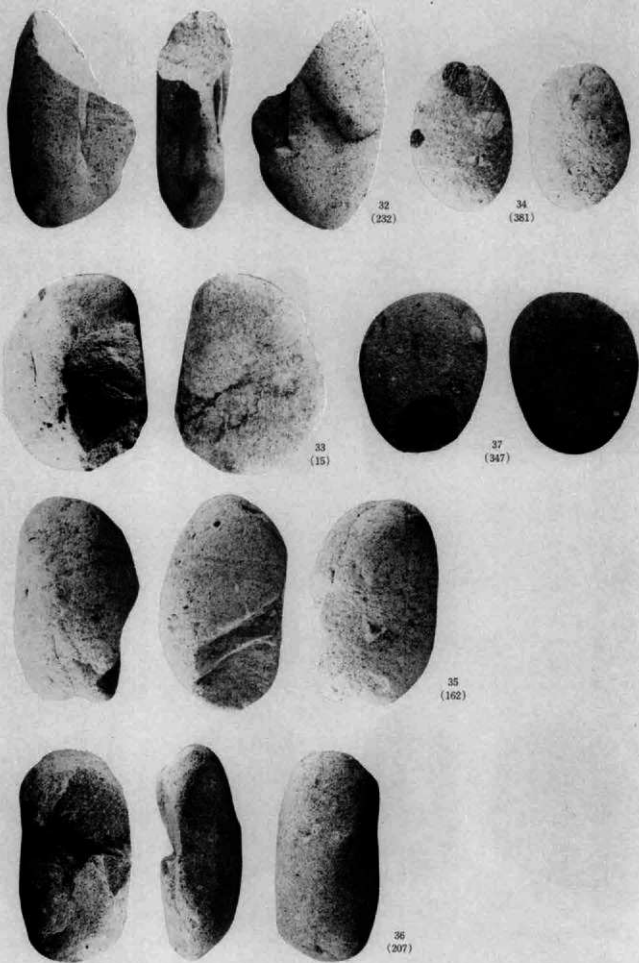
16
(193)

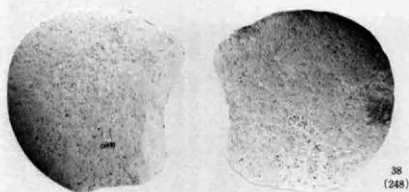




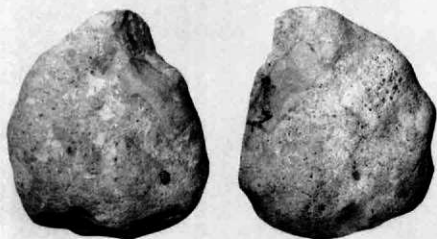








38
(248)



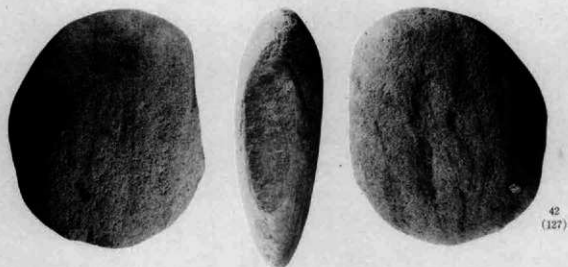
39
(1)



40
(147)



41
(97)



42
(127)

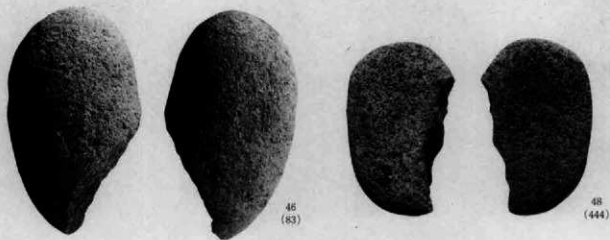


43
(145)

45
(173)

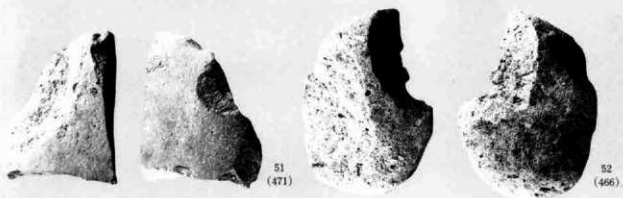


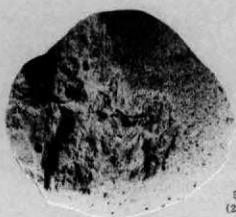
44
(186)



46
(83)

48
(444)





55
(250)



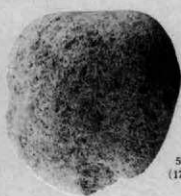
56
(103)



58
(80)



57
(98)



59
(174)



60
(36)



61
(230)



62
(154)



63
(247)



64
(4)



65
(96)



66
(144)



67
(140)



68
(84)



69
(389)



70
(205)



71
(430)



72
(180-1)



73
(25)



74
(219)



75
(192)



76
(130)



77
(39)



78
(435)



79
(70)



80
(295)



81
(294)

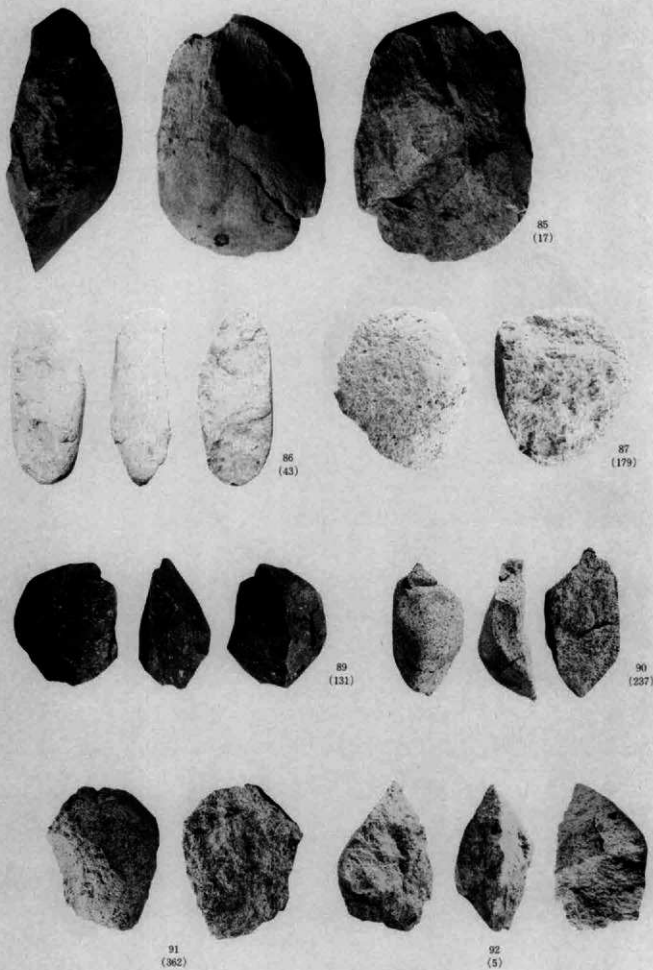


82
(440)



84
(54)

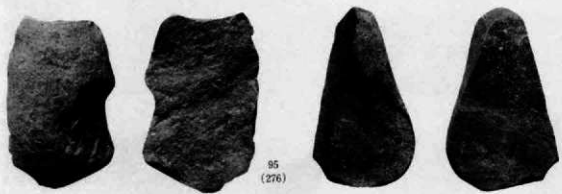




石製品 (母岩種)



94
(445)



95
(276)

93
(298)



96
(182)



97
(160)



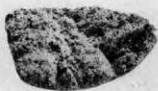
98
(413)



99
(315)



100
(225)



102
(218)



103
(55)



104
(137)



105
(231)



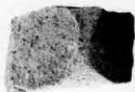
106
(455)



107
(396)



108
(12)



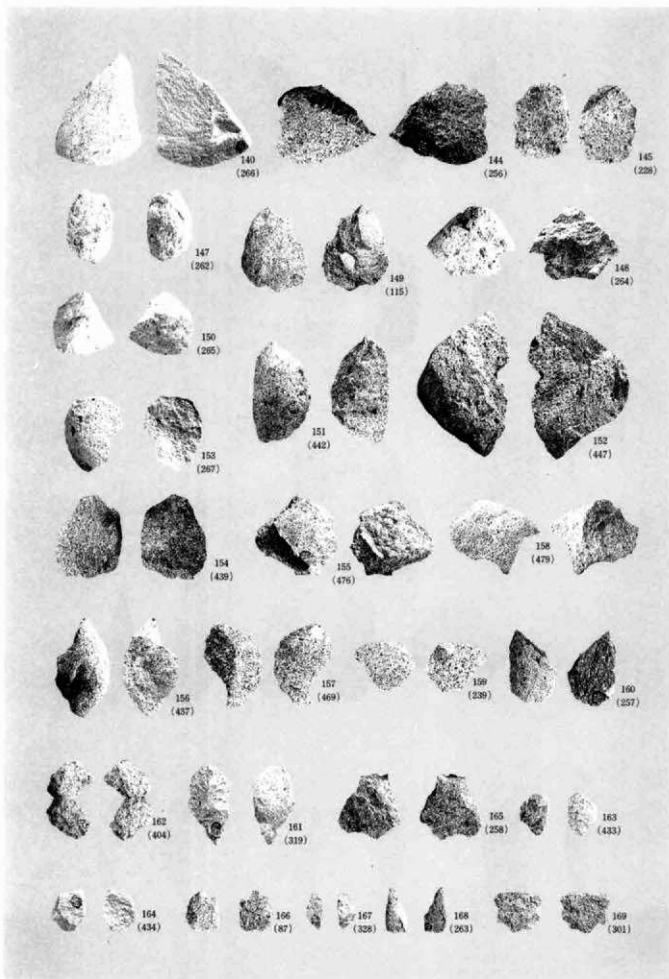
109
(62)



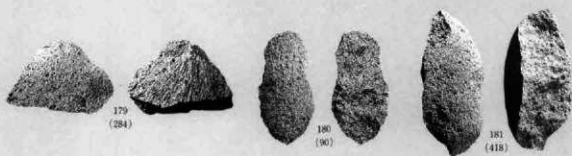
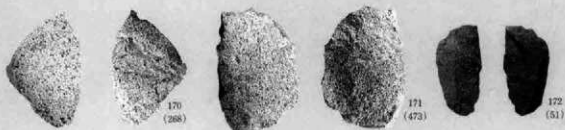
110
(272)

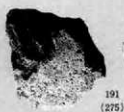
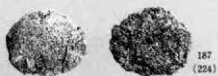
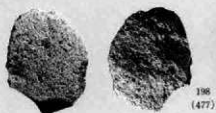


石製品 (製片・剥片)



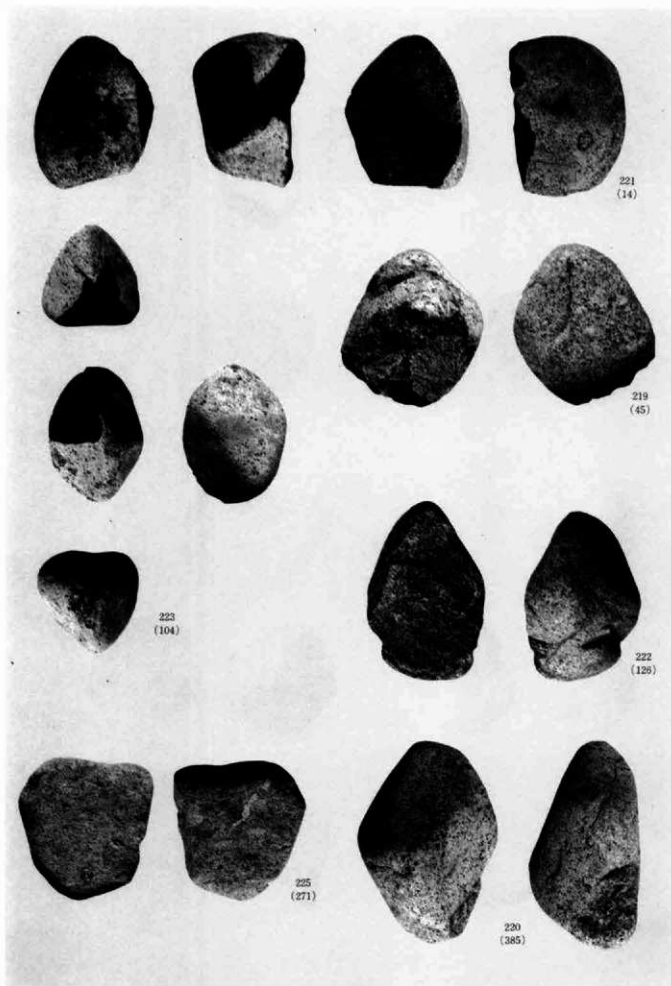
石製品 (製片・剥片)



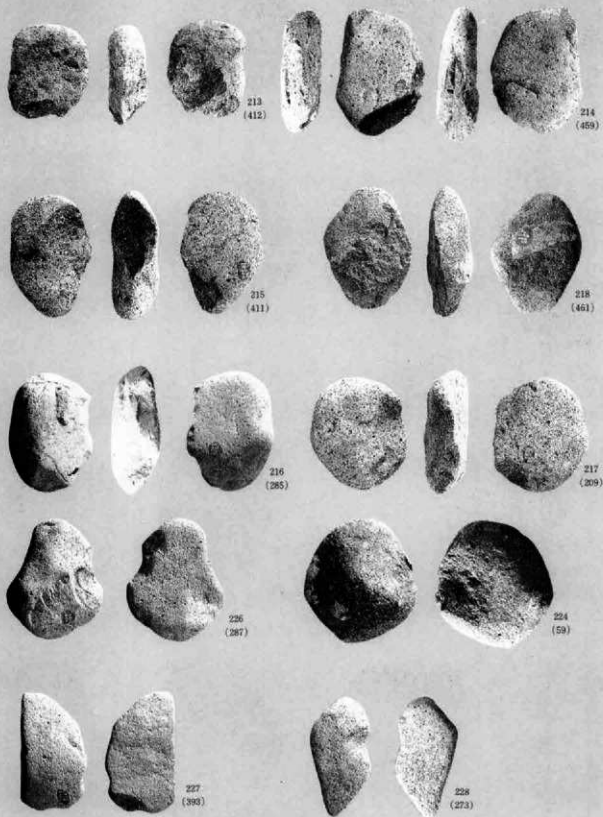




石製品 (削片・ハンマー)



石製品 (ハンマー)



石製品 (ハンマー)



229
(153)



230
(65)



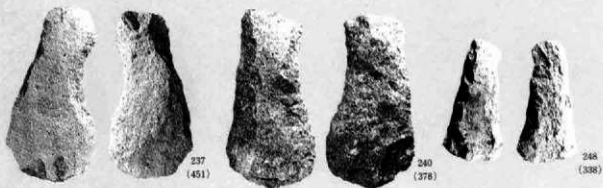
231
(49)



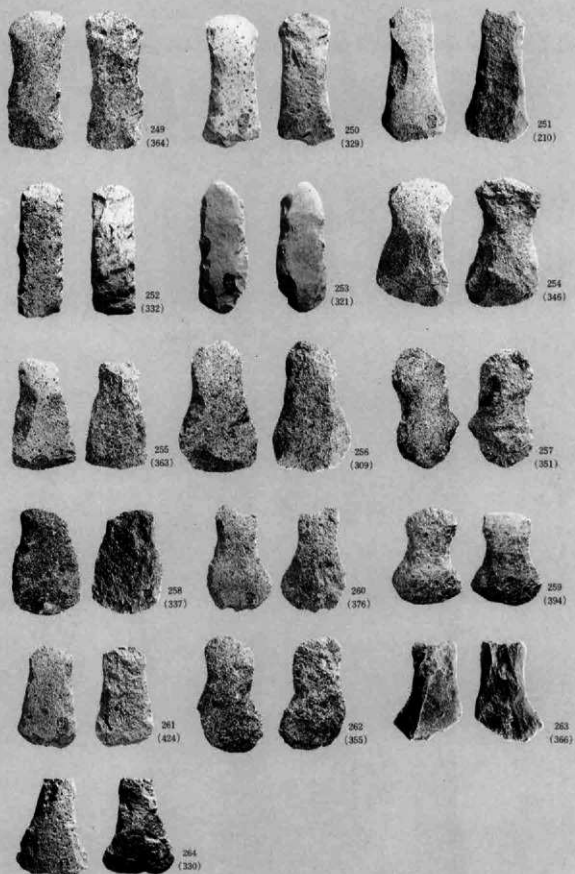
232
(29)



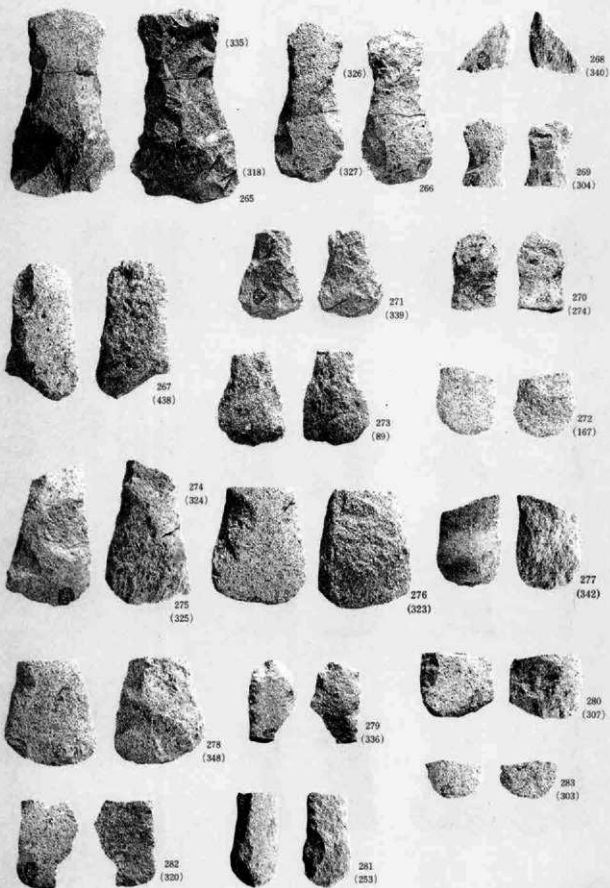
233
(206)



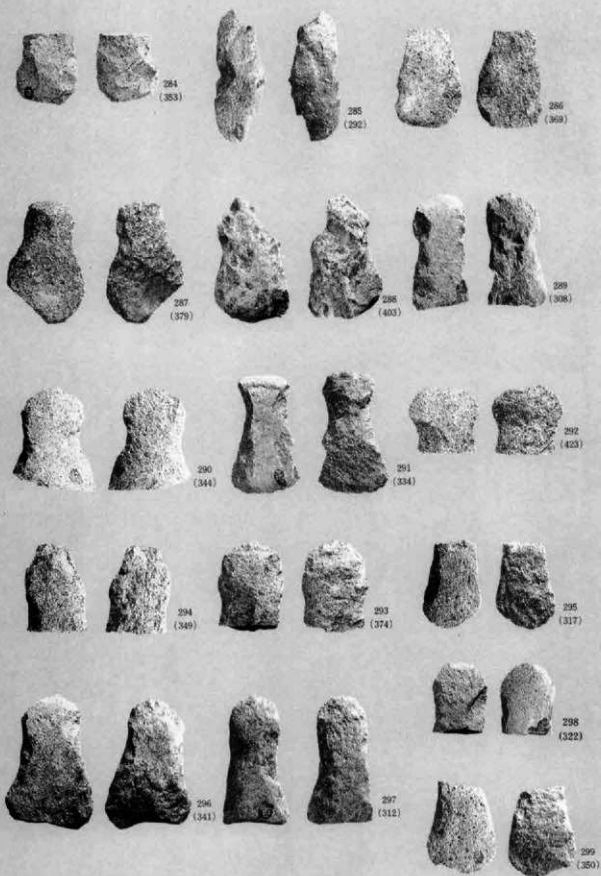
石製品 (打製石片製品)



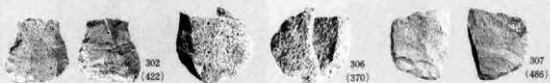
石製品 (打製石斧製品)



石製品 (打製石斧破損品)



石製品 (打製石斧破損品)



石製品 (打製石片破損品・砥石)



3
(194)



172
(51)



111 (361)



112
(485)



115
(20)



85
(17)



113
(236)



114
(229)



石製品接合状態



表

1



裏



3



4裏



表

5



裏



7



7のモミ仕肌



表

6



裏



底部



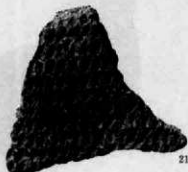
9



10



12





A-1号壜穴5側面



A-1号壜穴9



A-5号壜穴3



C-4号壜穴13



C-8号壜穴10



C-11号壜穴



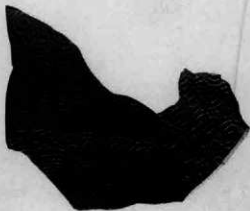
内面



外面
A-1号壜穴5



C-11号壜穴9





A-2号整穴2



C-2号整穴6



C-2号整穴5



C-2号整穴7



C-3号整穴4



C-5号整穴1



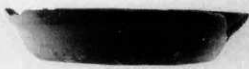
C-11号整穴1



図17-14



C-13号整穴16



C-13号整穴15



C-14号整穴2



SD75-4



SK6



SK17



P 41



C-1号整穴



C-12号整穴 2



C-12号整穴 3



B-1



S D68-9



A-7



S D68-8



S D68-6



S D68-23

粟田遺跡発掘調査報告書

発行 1991年3月
編集・発行 社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会
〒923 石川県小松市島田町485-1
電話 0761 (21) 5150
印刷 橋本確文堂
